

ブーケトスの魔法

Pond e Ring

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、彼と同級生で同じ時間を過ごせたなら――
そう、彼女が願った時、奇跡は起きた。

※5／20（木） 完結いたしました。長きに渡って応援して頂き誠にありがとうございました。

目次

Prologue: Receive a Bouquet	1
一東: the Beginning of the Dream	6
二東: Melting	16
三東: Sports Festival!!!	29
四東: Someday in the Rainy Sky	67
五東一輪: Before Milky Way Rhapsody	89
五東: Milky Way Rhapsody	93
六東: This is Teeny Counter Punch	133
!!	
七東: for This Day	166
八東: Just Friends	197
九東: Has Completely Melted	223
十東: the Blooming of the Dreams	260
Epilogue: Toss a Bouquet	279

Prologue · Receive a Bouquet

花束が宙を舞う。

高く高くあがったそれを、周りの人はみな見ている。

透き通るほどの綺麗な青色を背にした赤色はやけに映える。

そして、その綺麗な放物線は、確かに静のいる場所へと迫ってきていた。



これで何回目だろう、と静は思った。

周りの人々は穏やかな顔で、彼らを見つめる。

その彼らは、純白のタキシードとドレスに身を包んでいる。

そしてとても幸せそうに見つめ合い、微笑んでいる。

「おーっす、静ー！」

静を呼ぶ声があった。その声の方を向くと、高校時代に同じクラスになった背が高めのボーイッシュな同級生がいた。

「久しぶり。静」

「ああ、久しぶり」

テーブルの上のグラスを手に取り少し口の中へと注ぐ。

静は苦味の中にある甘味をいまいち感じられなかった。

不味いという訳では無いが、甘味は無かった。

「すっごい、幸せそうだね、ヒロコ。高校時代からずっとだね、あの二人」

同級生はウエディングドレスを羨むような目で見つめながらそう言う。

静は、ただ「ああ、そうだな」と返事を返す。

「私もそろそろ結婚しようかなあ、彼とももう足掛け五年だし」

そう呟いた同級生は、静にこう尋ねる。

「そういや、静は良い人いないの？」

「うん、まだいないかな」

その答えを聞いて、その同級生は、寝耳に水とでもいった表情でいつものセリフを吐く。

「ええ！ 静、絶対モテるでしょ」

「いや、全然モテないんだな、これが」

「うっそー！ 選り好みしてるだけなんじゃないの？ 高校の時、モテモテで付き合ったりもしてたじゃん！ 実はその中に私の——」

思い出話が出た時、また静はおもむろにグラスの中のワインを口に注いだ。先程よりも多く——

——やはり苦い。

合コンに行っても失敗続きだった。

決して寄り付かれなかった訳では無い。

ただ、二回、三回と会うと、自然に会わなくなり、連絡が途絶えることが多々あった。

そして、その都度静は思った。

——私を愛し、私が愛せる人は本当にこの世にいるのだろうか、と。

だが、そんな静にも、たった一人。たった一人だけ、もしかしたら、と思う人がいた。

その人は、私のことをよく分かってくれていた、と静は思う。趣味も合うし、何より優しさが痛いほど伝わってきた。

そして、ある冬の日。とある橋の上で、缶コーヒ―を飲みながら、その人の前でいつもの癖で自虐に走ってしまった。

「まあ、そういう私も計算違いばかりしてるから結婚できないんだろ

うけどなあ。この前も友達の結婚式があつてなあ……」

「いや、そりゃ相手に見る目ないんですよ」

その人の瞳は、真っ直ぐ私のことを貫いていた。

嘘はなく、濁りとは無縁の澄んだ瞳。

その瞬間、静の心の中の何かも貫かれた。

——鼓動が速い。

——頬が紅潮する。

その場では何とか誤魔化したのが、もう自分自身に嘘は付けなくなっていた。

一度伝えてしまったこともあった。静を頼る彼に不意打ちでもちろん本気ではなかった。一瞬赤面した彼も、すぐにそう受け取った。

だが、ほんの一握りだけ、あわよくばと思つてしまったのだ。ズルい女だと、静は自分を卑しめた。

決して抱いてはいけなかった。

だって彼は、

——私の生徒なのだから。

この甘酸っぱい感情は唾棄しなければならなかった。



放物線を描く赤色の花束は、間違いなく静の方へと飛んできている。

それを掴めたら何かが変わる？

——いや、きつと何も変わらない。

そんな諦めが、静を支配する。静はもう悟っていた。きつと永遠に受け取る側だ、と。

花束は飛んでくる。前方にいる女性達は必死に手を伸ばしているが、花束は捕まらない。

そして目前まで花束が近づいた時、ふと一つの叶わざる願いが頭を

よぎった。

——もし、その人と同級生で同じ時を過ごさせていたらそんなどうしようもない願いが慈悲深い神様の心を揺らしたか。ストーンと、赤色のブーケが手元に落ちる。

その瞬間。

ふと、視界が暗転した。



気付くと静は、何故かどこか建物の屋上にいた。

透き通るほどの青色の快晴の下。

妙に身体は軽い。

吸う空気もどこか清々しい。

そして、ちよつとだけズシツとした全身の重みは、先程着ていた服と明らかに違う。

これは、間違いなく、ブレザーだった。

屋上というのも、間違いなく学校の屋上だ。目の前のフェンス越しに、校庭が見えるのだから。

静は状況が飲み込めないでいると、背中側から古びれた扉が開く音が聞こえる。

「よお、平塚」

静を呼びかけるその声は、聞いたことがある声だ。

だからこそ、余計に分からなくなった。

——なぜ今あの人の声がする？

——なぜあの人は私を呼び捨てにする？

「缶コーヒー、お前の分買ってきたから、ほら投げ渡すから取ってく

れ」

静はそう言われるがまま、背中側を振り返った。

缶コーヒーが放物線を描く。それは彼の顔を綺麗に隠した。

そしてその缶コーヒーが、手元に辿り着く時、見えた彼の顔は、間違いない、あの人の顔だ。

「ナイスキャッチ。で、用事って何？」

彼——比企谷八幡は、静と同じブレザーに身を包み、壁に寄りかかって腰を下ろすと、そう尋ねてきた——。

一束： the Beginning of the
Dream

「――で、用事って何？」

比企谷八幡は扉のすぐ横の壁に背中を預けそのままそこに座り込んだ。

その光景を見て、静は至極当然だが、混乱していた。

第一に、静は先程まで式場にいたはずだ。それが、何で屋上に。さらに比企谷がいた。しかも呼び捨てで、タメ口だ。

「なあ、比企谷。何でここにいる」

「いや、平塚が呼んだからでしょ」

静が呼んだ、はずはない。それは、静はさつきまで結婚式に参加していたはずで、比企谷にメールを送るタイミングなど無いからだ。

だが、比企谷がポケットから二つ折りの携帯を取り出し、カパッと開けて画面を見せつける。

「ほら、お前がメール送ってるだろ」

画面のメールの送り主は確かに静のメールアドレスで、文面も静がメールする時に用いるものだった。

確かに昼休みに屋上に来い。と書かれている。

ただ腑に落ちないのが一点、その二つ折りと、片方にしかない小さな画面、片方は押ボタン式のキーパッド。

「比企谷ってガラケーだったっけ？」

「いや、結構前からガラケーだが。ていうかポケベルなんて今更使うやっぴないだろ」

「ポ、ポケベル……？ え、スマホは……」

「ス・マ・ホ……？ 何だそれ、ASIMO的な何か？」

静の記憶の中では比企谷は確かにスマホを所持していた。だが、この反応は明らかにスマホそのものを知らないような反応だった。嘘をついてるようにも見えない。

ここで静の中に、有り得ない可能性が思い浮かんできたのだ。

「なあ、比企谷。なんで今、私にタメ口きいてるんだ？」

その有り得ない可能性を消すための質問だったが、比企谷の答えは、その可能性を消すことなく、むしろ強めることになった。

「え、そりゃ、同級生だから……」

これまた比企谷が嘘をついてるように見えない。これで嘘をついているなら、静はきつと比企谷に俳優の道を真摯に勧めるだろう。

「なあ、何か平塚さつきから言ってることおかしくねえか？」

「いや、すまんすまん冗談だ。そりゃあ、タメ口は当たり前だろ？」

「めっちゃ、ビックリしたわ。何か怒らせるようなことしたかめっちゃ勘繰ったわ」

比企谷は、安堵した様子でプルタブを開け、缶のマックスコーヒを飲み始めた。

おかしい、絶対に何かがおかしい、と静の心のうちの不安はより高まっていく。

「で、結局用事って何？」

「いや、用事は何も無い。ほら、生存確認だ、生存確認」

適当な嘘をでっちあげると、比企谷は少し不貞腐れた顔をする。

「俺、お前と同じクラスなのに、生存確認って、俺どんだけ……」

すんと肩を落とし、比企谷は露骨にガッカリしているようだ。

「まあ、とにかく理由はない！ ただ呼んだだけだ」

「はあ……」

比企谷は聞こえるほどのため息を吐くが、静はそれにあははと、作り笑いを返すしかできなかった。

その時、左ポケットから明らかにバイブレーションの振動が感じられる。

おもむろに手をつっこみ、それを取り出すと、それはガラケー、しかもこの青色のガラケーは、静が一〇年以上前に愛用していたガラケーだった。

ガラケーを開くと、画面には日付には『5/18』と写っている。これは、先程までの結婚式の日付と全く変わらない。

ただ曜日が違う。結婚式の日は日曜日だったはず。だが、画面には『(火)』と写し出されているのだ。

久しぶりであるのと、不安に駆られ指先が少し震えるため、静は届いたメールを開くことすらも手こずった。

ぎこちない手つきで何とかメールの受信箱を開くと、このように書いてある。

『2004年度の総武高校体育祭に関する協議の日程調整 2年B組平塚静さんへ』

本文：5月の30日に決定致しました。時間帯は放課後で、関係者が集まり次第、会議を行います。よろしく願います』

二〇〇四年、もう一〇年以上前の年だ。そして、静が総武高校の生徒だった年。確かに二年の時はB組だった。

信じられない。そんなことが起こりうるはずはない。背筋がゾクと冷える。メニューボタンを押して携帯電話のアドレス帳を開くが、確かに中学・高校からの付き合いの人のアドレスしか登録されていなかった。

静はガラケーをブレザーのポケットにしまい、比企谷が腰を下ろしているすぐ横に腰を下ろす。

「え、平塚、き、急になんだ」

「今の総理は……？」

「……え、小泉純一郎だろ？」

静の突然の質問に、比企谷はきよとんとした顔で答える。

「千葉県知事って、森田健作……？」

「んなはずないだろ、そんなことあったら千葉県大激震だわ」

「小島よしおって知ってるでしょ。そんなの関係ねえの」

「いや、聞いたこともないんだけど、何それ相田みつを的なの？」

「ジブリの崖の上のポニョも、いい映画だったよな」

「崖の上のポニョ？ 初めて聞いた、そのタイトル。……ってかあつたっけ、そんな映画、ってかどうした？」

比企谷は突然の質問攻めに怪訝そうな表情をうかべるが、静はそれどころでは無かった。

比企谷は、静の今、つまり二〇一四年では当たり前前のことを何ひとつとして知らなかったのだ。

——本当に二〇〇四年？

だとしたら、静は一〇年以上前にタイムスリップして、しかもいなはずの比企谷がいるということになる。

そこで静はハツと思い出した。ブーケを受け取る直前に願った、絶対には叶うはずのない願い。

まさか、それが叶ったとでも言うのだろうか。

色々思案していると、隣の比企谷は、少し横にズレる。

「さっ、さすがに、パーソナルスペースに入ってきてすぎだ……」

「あ、ごめん……」

顔を少し逸らした比企谷の横顔は、赤く染っている。

静の胸はとくとんと弾んだ。

この仮説が本当だとするならば、静と比企谷は先生と生徒の関係ではない。

先生と生徒の関係である時、こんな風に近づくことも多々あったし、比企谷が特別このような反応をすることは別段なかった。やはり、どこか姉弟のような関係だった。

だが、同級生であると、近付いただけで、こんな反応を示してくれる。それが静にとっては無性に嬉しかった。

長い沈黙。ただ静にとっては、それがとても心地よく感じられた。手元の缶コーヒーの絶妙な熱さが、余計にそうせる。

比企谷の横顔は未だ染まったまま、思わず静の顔も綻んでしまう。そしてあまりに可愛らしくて、思わず比企谷の頭へと手を伸ばしていた。まるであの頃のように。

「ちよ、え、な、な、なんで撫でてくるの?!」

「あ、つい」

飛び立った雀のように慌てふためく比企谷に振り払われた手のひらには僅かな温かみと、ふわっとした感触が残っている。

静が総武高校を転出することになってからは感じることのなかったそれに、懐かしさと、愛しさが湧いてくる。

「——っ、本当になんなの。って、え、どうしてお前が泣くんだよ」「私——？」

静は比企谷に指摘されて気付いた。頬を真っ直ぐつたい落ちる涙に。

「俺に触るのそんなに嫌だった？ いや、でも勝手に触られただけだし……。え、何それ、普通に泣きたくなるんですけど……」

「違う。ちよつと色々なことを思い出しただけだ……」

そう、本当に色々なこと。不器用ながらもがき続けた少年と送った一年間のこと。

それは間違いなく、教師人生、いや静の人生の中でも特に濃い時間だった。もし一年だけでなく、彼のその先を見ることが出来ていたら、もつと特別な時間は長く続いたかもしれない。だが、異動で別れてしまったが最後、あの時間にはもう戻れないのだ。

そして、チャイムが鳴り響く。

「その、大丈夫か……？」

「うん、心配するな。別に大丈夫だ」

「そうか、まあ、何かぶちまけたいことあるなら言ってくれ。俺なら誰かにバラすとかいう心配はないだろ。自分で言うのもなんだな、シルクロードの日本みたいなものだ。千葉でいうなれば庁前駅」

「——比企谷は優しいんだな」

「……違う、辛気臭い雰囲気嫌なだけだ」

比企谷は「じゃ、先に行くわ」と言っ、立ち上がりそのまま扉の中へと消えてしまった。

相変わらず彼の背筋は、少し曲がっていた。

その後も静は座っていた。空は、嫌味なほど、青く澄んでいる。

静は横に置いておいた貰った缶コーヒーを開け、一口、口に含んだ。

「——甘っ……」

殺人的に甘い。だが、この甘味は嫌じゃない、それどころか静にとって心地よいものである事は違いなかった。

コーヒーを半分ぐらい飲み残しているが、時間が迫っている。

静も立ち上がり、手ではっぱと背中と臀しりを払った。そこで気付いた

のが、スカートを身につけていることだ。

自分には似合わないと思つて、久しく身につけていなかったその着心地は凄く爽快感があつた。

身体もやはり軽い気がする。

でも、本当にそんなことがあるのかと三度思つた時、意外なことで、確信に近づいていった。

「あれ、私、タバコ吸いたい衝動がなくなつてる……」

それに気づいた時、静はおもむろに駆け出した。

勢いよく扉を開け、階段を駆け降りる。コーヒ―は零さないように。

やはり軽い。身体が軽い。

廊下を通ると、様々な生徒とすれ違う。すれ違う生徒の中には、さきほどまで結婚式にいた人もいる。そして皆、肌がとても潤つていたり、逆に面砲にきびが残つてたりなど、やはり若い時の姿であるのだ。すれ違う教師も皆、思い出のあの時のままの姿だ。

静は、こう結論づけた。

ああ、これはきつと夢だ、と。

なら存分に楽しみ尽くしてやれ、と。

先程のメールにあつた、二年B組の教室のドアを開ける。

すると、一番廊下側の列の手前から三番目の席に、比企谷はいた。

机に突つ伏しているが、その特徴的すぎるアホ毛で一発で分かる。

静は、比企谷のもとに行き、肩をポンポンと二度ほど、優しく叩いた。

「ねえ、比企谷ー!」

「痛い、痛い! な、平塚か、なんだよ今度は……」

静が叩いた肩を手でさすり顔を歪めながら、面倒くさそうにする比企谷とは対照的に少し頬が緩んだ静は、こう尋ねた。

「私の席、どこだっけ……?!」

「……………」



平塚は、一番窓側の列の一番後ろの席に座った。

比企谷曰く、とても羨ましい場所に座りやがって、とのこと。確かに、学生の頃は一番後ろに座れるかどうかで一喜一憂していた、と静は懐かしむ。だが、教師の立場になった今では、一番後ろの生徒は態度が見えにくいので悩みの種の一つなのである。

よく「後ろの方が見やすい」とは言ったものの、それはやはり単なる脅しで、何かをしているのは分かるが、その何かが分からないことが多々あるのだ。

——私も、この頃から変わったんだな。

机の中を覗くと、教科書が何冊か入っている。そのうち一冊を取り出すと、確かに油性で二年B組平塚静と書かれていた。そして、机の脇のフックには懐かしのスクールバッグだ。ファスナーを開けると、懐かしさという感動が静の身におしよせた。これがおそらくタイムカプセルを開けた時の感動なのだと、静は思う。

確かに臍気に残っている一〇年前の記憶と一致している。

筆箱を開けると尚更だ。

「うわあ、このシャーペン懐かしいな……」

静が、ひたすらノスタルジーに浸っていると、

「ねえ、静」

と、肩を叩いて一人の女子が話しかけてきた。

話しかけてきたのは、先程までいた結婚式で、静に話しかけてきた長身のボーイッシュな女子だった。やはり、若返っており、言い方は酷だが、目の前の彼女の方が明らかに肌がツルツルしている。

それともう二人ほど、クラスメイトの女子がいる、背の並びは綺麗に大中小といった感じだ。

「ん、どうした？」

「聞きたいことがあるの、静に。静ってさ、最近あいつと仲良くない

？」

「あいつ、って誰のことだ？」

静がキョトンとした顔を見ると、ボーイッシュな女子は、一番廊下側の列の手前から三番目のアホ毛が目立つ男が突っ伏して座っている席を指さす。

「あいつだよ。名前すらわかんないや。え、と」

「比企谷、か？」

「ああ、そんな感じだった気がする」

「全然思い出せなかったよ」とボーイッシュの女子が笑うと、「それは流石に失礼じゃない？」と言いつつも横の二人も、笑っている。

静は薄々分かっていたが、この世界においても、比企谷はそういう扱いをされているのだ。

「それでなんでアイツなんかと仲良いの？」

静は困った。別にこの世界の平塚静の記憶があるわけじゃない。だから、なんで比企谷と話すような関係になったのかはよく分からないのだ。

しかし、理由は今の静にでも何となく分かる。

「……一緒にいて楽しいから、かな。話も合うし」

「ええ、静にはもつたいないよ！ もっと、面白いやつ居るって、このクラスにも例えば……、大船おおふなとかさ！」

そう言っつて、すぐ近くにいた中肉中背で金髪に染め、パーマをかけ、髪で遊んでいるような男子を指さす。指をさされると男子は照れくさそうに、パーマ頭を搔く。すると、セットしていたのか、分かりやすく髪が崩れた。

残りの二人もボーイッシュな女子に同調し、

「あんな根暗なやつ、私は無理だなあー。それに悪い噂もちらほら聞
くし……」

「いくら静がモテて女子に嫉妬されて面倒くさいからって、男除けに
してもねえ」

と、堰を切ったように陰口を叩き、三人して顔を見合わせると、ゲ

ラゲラと笑った。確実に嘲笑っている。

そして、ボーイツシユの女子は再び、静の肩を叩き、告げる。

「友達にするなら、絶対、静にはもっと良い人がいるよ」

「そうか、良い人か——」

——いるはずなら、とつくに結婚できたはずなんだけどな」と、一〇年前の少女たちに言っても伝わるはずがない。

確かにこの時代、つまり青春時代は、モテていたと、静も自惚れではなく感じていた。実際告白されることも多く、多少なりとも交際関係になることはあったのだ。だが、どれもこれも長続きしなかった。

だが静は異性と付き合う事には興味があったし、交際相手が嫌いになったという訳では無いのだ。むしろ、丁重に丁寧に腫れ物を触るように接してくれたのだから、嫌いになるはずもない。

だが、相手に興味を持てたことは、ほとんど無かった。いや、断言しよう。一度も無かった。

そして、それは大学に入っても、社会人になっても無かったのだ。静がよくネタにする彼氏に家財道具を持つてかれた原因の一つは間違いなくこれだ。だって、相手の人となりなぞ見ようともしなかったから。

確かに静はよく自虐にはしているが、静に運命の人が現れなかったのは、モテるモテないの話ではない、どこか根本的な原因があったのである。

だからこそ、現状、静の一番良い人は、

——私に初めての感覚を与えてくれた。

——生まれて初めて知りたいと思うことができた。

「今のところ、比企谷以上に良い人は見当たりそうにないから、当分はこのままでいいかな」

静は、優しい顔で微笑んだ。

その言葉を聞き、その顔を見た三人は、面食らった顔をする。

「……ま、まあ、静がそう言うんなら、いいと思うけど」

長身の女子がそう言うと、周りの二人も「私もそう思う」と首を縦に振った。

ちょうどその時、授業開始のチャイムが鳴る。周りの三人もそそくさと自分の席へと戻っていった。まもなくすると、教師が入ってきた。

「では、号令お願いします」

教師が教壇に立つてすぐ呼びかけるが、号令はかかる気配がなく、しーんと教室は静かになった。

すると、周りの目が一斉に静に向けられた。

静はここで思い出した。

「このクラスの号令は平塚さんですよね……?」

「あつ、すいません。ボーツとしてました!」

その瞬間、ドツと笑いが起こった。「平塚しつかりしろ」 「お前は名前と同じで教室を静かにするのか」と野次が飛んできたり、「静意外と抜けてるんだよね」と女子からも詰られる。

静も照れ笑いするが、ふと一番廊下側の列の前から三番目の席を見た。そこには先程と変わらずアホ毛がちよこんと立って、突っ伏しているだけの男がいた。

また静の顔が綻ぶ。

「起立——!」

脈絡もなく突然号令をかけた。

静の様子を見ていた周りの人々は難なく立ち上がるが、一人突っ伏していた男はタイミングを外されたのか、慌てた様子で、少し遅れて立ち上がる。

——ふふっ、今のは傑作だ!

「礼!」

こうして静の夢は、始まりを告げたのだ。

二束：Melting

「青春とは嘘であり悪である。」

これは、八幡が高校二年生時に提出した作文の仮題である。本人曰く、ノーベル文学賞並の名著となりえるものであつたらしいが、受け取った担任は読み始めてから数秒で顔色の雲行きが怪しくなり、読み終わる頃には眉間に数多の皺が寄り、見る人を怯えさせる般若ほんにやの顔になつていた。

当然のごとく本文の抜本的な改変を迫られたため、「青春とは真であり正である。」と改題したことで、呆れられながらも受理された。

「あの、一名様ですか」

「はい、一名でお願いします」

「ではあちらのせー」

だが、当然八幡の中の真理は依然として『青春とは嘘であり悪である』のだ。

「すみません、やっぱり二人でお願いします!」

——だが、近頃八幡はその真理を根底から覆すような危険性のある人物と関わるようになっていた。

「奇遇だな、比企谷」

その少女こそ、今、突如割り込んできた少女——目鼻立ちがはつきりした端正な顔立ち、胸元までかかる濡れ羽色の長髪はより麗しさを際立てている。一〇〇人すれ違えば一〇〇人振り向く様な美貌を持つ——二年B組で同じクラスの平塚静だ。

「あと店員さん、禁煙席でお願いします!」

平塚はしたり顔で言うが、禁煙席なのは高校生だからよほどなことがない限り当たり前前で、こんな平日の昼下がりの混んでいない時間帯ならば尚更だ。

「……ああ、ええ、承知致しました。お客様」

店員も当たり前前の注文に少し戸惑う様子を見せながらも、八幡と平塚を四人がけのソファアの席へと案内した。平日の夕方ということ

もあり、混んではおらず、疎らに人がいる感じだ。

「……で、なんでここにいるんだよ」

「いいじゃないかあ。たまたまだ、たまたま」

平塚は八幡を軽くないすと、ソファアに腰を下ろし、バッグを空いているソファアの上に置く。

八幡は反対側のソファアに腰を下ろした。

彼らが今いるこの場所は、高校生のお供、良心的な価格でチェーン展開に成功した千葉県発のファミリーレストランである。

この店は八幡にとって数少ないお気に入りの場所であり、恐らくこの店舗屈指のヘビューザーなのだ。もちろんおひとり様でだ。

「——それとも何だ、私というのがそんなに嫌か？」

平塚はこちらの瞳をじいっと見つめ、八幡の瞳を捉えてくる。八幡はその瞳を見つめ返すことはできず目線を反射的に反らしてしまう。

一言二言軽口を叩いてやりたいものであるのだが、そうされると弱いのは男の性だ。

「いや、別に嫌じゃねえけど……」

「なら良かった！」

平塚は嬉しそうにはにかむと、早速メニューを広げ、ご機嫌に八幡が聞いたことの無い鼻歌を歌いながら、食い入るようにそれを見ていた。

——可愛い。その笑顔を向けられた時にすぐ思い浮かんだ言葉だ。八幡の心には小さなさざ波が立っていた。

だが、すぐに冷静な自分が、これは自分だけに向けられているものではないと諭す。——営業スマイルだ、と。この時だけではない、平塚という時、八幡は必ずこのように自分を諭す。

平塚は間違いなく高嶺の花、それもエベレストの頂上レベルの高嶺のだ。

才色兼備容姿端麗文武両道、おまけに高校生離れしたグラマー。何から何まで完璧をそのまま具現化したような人なのである。

男子はその姿を見ればひとたび欲望を煽られ、女子は身近な憧れとして羨望する。

人望も厚く、誰からも好かれ、学年問わず学内に知らない人はいない。そんなフィクションの中にいるような人物だ。

——だから、八幡は平塚静を忌み嫌う『青春』の象徴たる人物として、勝手に敵意を向けていた。

高校に入学して平塚の存在を知った時から、八幡はスーパースター気取りの取り繕いの仮面に取り憑かれた女だと決めつけ、その他大勢の男子のように遠巻きにその姿を見ることもなく、無関心を決め込んで高校生活を過ごしていた。

のだが、事態が大きく変わったのは二年生に進級してからのことだ。

クラス替えの時、最初の五〇音順の席でちょうど前後になり、後ろの平塚から話しかけられた事で、会話をするような仲になった。

どうやら平塚にとっては中々他人と共有できなかつたアニメの趣味があったりと、何かと都合のいい人間にあつたようで、ちよくちよく話し相手として呼ばれ、休み時間を屋上などの人気のない場所で二人で過ごすことも多くなり、携帯のメールアドレスを交換するまでに至った。

だが八幡はそれで勘違いをすることは無い。それはもちろん都合のいい人間に過ぎないと気付いてるからだ。

平塚が自分以外の男子と仲良さげに喋っているところは、教室にいる中でもいくらでも見てきていた。

その上、メールアドレスだって、あのタイプの人間はクラス全員のアドレスを掌握していることを八幡は重々知っている。

しかもメールも、どこか他人行儀の堅苦しい文章だ。八幡は、メアドを交換した同級生の女子からフレンドリーなメールを寄越されて、女の子が自分に気があると勘違いした挙句、こっぴどく振られた過去があるのだから、この文章で気があるなど、毛頭思うはずもない。

それに、平塚が男女構わずボディータッチだって平気にしているのだって見てきた。

平塚にとって、男は百貨店の品物のように、選り取りみどりきみどりあおみどりで、自分の好きな物を選べるのだと、八幡は邪推してい

る。いや、百貨店なんて大層なものではない、百円ショップのように安くだ。

そんな平塚からしたら、自分はきつと異性でもなく、話を返してくれるロボットに過ぎないものだ。と八幡は考えていた。

だが、同情や優しさで話されるよりはよっぽど心地よかった。他人のためと大義名分のレッテルを貼って、優しさを振り撒く素振りを見せ、中身は、自尊心、自己肯定感、自己愛を高めるような青春の嘘・悪の根幹とも言える人々よりはよっぽど好感を持つことが出来たのだ。

それに話を共有できる相手と話すことは正直楽しいのは認めざるを得なかった。だから、平塚を拒絶することは無かった。

ただ一つ、勘違いしないための理性を常に抱いておけばいいのである。一本目に見える白線を引いて、その白線の内側へと踏み込まないようにすれば、間違いは起きないのだ。

「あ、これにしよう！ それと、サラダと——」

先程から平塚はまるで初めてファミレスに来た幼子のようにメニューに食い入っている。

——とここでだが、こうして学外で、二人きりで会うというのは初めての事だった。

くだいかもしれないが、だからといって何か期待をしている訳では無い。ただ、話が合うから、それだけの関係だと八幡は重々に痛いほど理解している。

「それと、バナラジェラートも頼んで。よし決めた！」

「よし、じゃあ決まりだな」

「比企谷は見なくていいのか？」

「毎度おなじの頼むからな」

「結構通ってるって言ってたな、そういえば」

「まあな。って、あれそんな話したっけ……？」

平塚の発言に首を傾げるが、まもなく店員が来て、八幡はお馴染みのドリアとコーンスープとドリンクバーを注文した。

「ええ、とじゃあ私は——」

カルボナーラとサラダとジェラートを順に注文すると、最後に、「あ、あとそれと、生ビールで!」

瞬間、店員と八幡の「え?」という声が重なり、場は凍りついた。八幡も粗雑なフオローを思いついたが、墓穴を掘る気がしてならず、口には出せなかった。

「あれ?」

当の平塚は何かおかしなこと言いましたかと訴えんばかりに、眉を顰^{しか}めている。その場の三人が全員クエスチョンマークを頭にうかべるといふ、何とも滑稽な光景だ。

「お客様、未成年ですよ。なので、酒類は……」

「……あ、そうでした! あはは、すみません、じゃあドリンクバーで」
店員は「ですよ」とでも言いたげな様子で、注文を繰り返すと、そのまま厨房へと戻って行った。

「なあ、比企谷……」

平塚は俯いて声と肩をぶるぶると震わせている。
確かにこんなのはさすがに恥ずかしいし、あらぬ疑いもかけられる。

八幡に求めるのは、——口止めか。しかし、求めなくてももともとから口止めされているようなものなのだ。

しかし、そんな八幡の心配も杞憂^{きゆう}だったようで、

「私、未成年に見えるのかア?!」
体を机の前に乗り出して嬉しそうに尋ねてきたのだ。

その平塚の予想外の反応に、八幡は当然豆鉄砲を食らったような顔になる。

「そりゃ、制服着てるし……」

それに口には出さなかったが、周り比べて確かに大人びてはいるかもしれないが、老けているようには見えない。

「そうか、そうかあ……、女子高生に見えるのかあ……」

もはや八幡にとっては訳が分からないが、目の前の平塚がとても満足気であるので、特にこれ以上言及することはしなかった。

暫くすると、店員が、先程注文した料理を次々と運んでくる。そし

てみるみるうちに席は皿で埋まった。

「うーん、美味しいな！」

サラツとして長い横髪を耳にかきあげ、届いたカルボナーラをさっそく口に運び、頬張る姿も見事に絵になるものだ。

「ん、どうした、ジロジロ見て」

「い、いや、それが美味しそうだなと思っただけだ」

「ふくん、そうかそうか」

平塚は何かを見透かしたような目でこちらを見てくる。

「何だよ」

「まさか、私に見惚れてたんじゃないのか？」

「な、んなわけないだろ。第一俺は、隣の女子がすごい体調悪そうな様子だったから、ちよつと顔を見て『大丈夫？』って心配して声をかけただけなのに、『そんな目で見ないで余計気持ち悪くなる……』って泣かれてから、もう見ないようにしてるんだ。うわあ、思い出しただけで涙でそう」

「……それは相手が酷いな」

「だよな。やっぱ俺の目は腐って、——って、へ？」

予想外の返答に八幡は足を掬われる。

「比企谷はまあ、綺麗とまではお世辞にも言えないが、良い目をしてると私は思うよ」

「そんなにおだてようたって、別に奢ったりはしねえからな」

「じゃあ、証明してやる。ほら」

静とバツチリ目が合う。すごいむず痒い。

「私は、むしろ嬉しいぞ」

平塚はまたこちらに向けて微笑む。今度はどこか赤子を慈しむような、母性的な笑顔のように八幡は感じた。

「……ッ！ 茶化すのもいい加減にしろ、そういう奴に限って後々陰で『気持ち悪かった』って叩いてるんだ。騙されないからな、俺は……」

「ああ、残念だ。ふふつ、その一筋縄じゃいかないめんどうくさいところ、やっぱり、比企谷だ」

本当に調子が狂わされてしまう。平塚は常に会話をリードし、何処か余裕を感じさせられるような立ち振る舞いをするのは前から変わらずあることだった。だが以前にも増して、自分について知られているような気がしてならないのだ。本当にお手玉のように自由自在に扱われて、愉悦を感じられている気がしてならない。

「ごっ、ごほん。まあ、いい。で、何が目的だ、平塚？」

「え、目的？」

「わざわざ相席してきたってことはなんかあるんだろ？ そりゃ、アニメのことぐらいしかねーだろうけど」

「あ、ああーん、そうだな。ええと、二〇〇四年……。ハッー！」

そこで平塚が話題に出したのはテレ朝日曜7時、そう今で言うスーパーヒーロータイムの話だった。そこからの八幡の先程までの気だるげさは吹き飛び、まるで別人格のように目を活き活きさせ始めた。

確かに二〇〇四年は最早伝説的であり、長年仮面ライダー最高傑作と評される仮面ライダー555が終わり、仮面ライダー剣が始まった年であり、更に現在でも根強い人気を誇る特捜戦隊デカレンジャーが放映された年でもある。このことを八幡は知る由もないが、

このいわゆるスーパーヒーロータイムについて熱く語り合った二人はこれだけでは飽きたりなかった。

何を隠そう今年はとてつもないビッグタイトルが二つの番組の後枠に放映が開始したのだ。その名は――

「プリキュアー！」

平塚は過去一番と言っているほどその大きくて円らかな目をぱつぱり開けて、キラキラ輝かせている。八幡もその名前を聞くと、アドレナリンが放出され、血肉が沸き立つほど昂るのを感じる。

「平塚も見てたのか。うん、あのアニメは良い。あれは絶対に名作になると確信してる。小さい女の子向けにフィーチャーしてるかもしれないが、大人も楽しめるようなバトルシーンとか、主人公コンビがいかにも信頼しあっていくか描き出されていて、成長物語としてとてもいいんだ、それにな――」

自虐の時以上の八幡の饒舌な語りにも、平塚は全幅の理解を示した様

子で大きく頭を降って頷いた。

「通り八幡が語ったあと、今度は平塚が口を開く。

「そう、そうなんだよ！ みんな可愛いけど、たくましくて、すっごいカッコイイんだ！ そうだ、比企谷はなぎさ派かほのか派か、どっち?!」

「うむ、とても、とても、悩ましい。ほんとは両方と言いたところなんだが、どちらか選べと言われたら、断腸の思いでなぎさ派だな」

「おお、その心は?」

「一見、普段の時はスポーティーで快活で、戦闘時には猪突猛進の戦闘スタイル、ほのかを引く張っていくリーダー気質のように見せて、その実とてもナイーブで女の子らしい一面がある。そのギャップがたまらないな。だからこそ、頑張られて応援したくなってしまうんだ」

八幡のなぎさへの思いに、感銘を受けたのだろうか、

「だよなあ、さすが比企谷だ!」

平塚はとても高ぶった様子で周りの目を忘れバンと机を叩き、立ち上がった。

「これから先もたくさん出てくるプリキュアシリーズの中でも——」

「プリキュアシリーズ……?」

八幡はプリキュアシリーズという言葉に当然即座に引つかかった。だってまだプリキュアは他にはいないのだから。八幡はなぎさとほのか以外に知らないのだ。

「はっ……!」

平塚は明らかに失言した様子で口を手で抑える。

「シリーズって——」

「いや、この人気だったら間違いなく一〇年後も続いていると君も思わないか?!」

平塚の言い草を訝しむが、そこを八幡は突っ込むほど野暮じやない。い。

「語り合えれば」それでいいのだ。

それにたとえ平塚が所謂メツカである大企業バン〇イのお偉いさんと何らかの繋がりがあってスーパーヒーローのようにプリキュア

にもプリキュアシリーズとして続きがあると知っていたとしても、むしろ八幡にとつてはそれがあると知れるだけで生きていける。コンテツ自体の最終回しげんこくがないならば、それに越したことはないのである。

だから八幡はこう答える。

「ああ、思う。それに、もし、プリキュアがなくなってしまう、あした未来が来るなら。そんな未来あしたなんか、俺はいらない」

「おおおおお、無限のリヴァイアスだああ!! サンライズの商品はなあ——」

このような訳で二人の会話は途切れることなく盛り上がり、店員が申し訳なさそうな顔をして「お静かにしていただけないでしょうか」と頼まれ、互いに熟した梅のように顔を真っ赤にするまでは、尽きることは無かった。

その言葉でクールダウンした八幡は食べ終わった皿を空いてる方に除けて、腰の横にあるスクールバッグの中から勉強道具一式を、探り出し机の上に置いた。

「ん、勉強するのか、偉いな、比企谷は」

「そりゃ、テストが近いからな。もう来週だぞ。まあ、優秀な平塚さんには必要なものじゃないかもしれませんが」

「ああ、そうか、テストだったな! 久しぶりだなあ……」

なんだか妙に嬉しそうかつ感慨深げな様子の平塚。

普通なら嫌がる、もしくは嫌がりはしなくても、喜びはしないだろうと八幡は思う。八幡は生存確認するただけに呼ばれた屋上の一件から平塚の反応が妙におかしいと感じていた。

——だが、八幡は無理に突っ込まない。

八幡は、これまでの人生で危ない橋は渡るなをととも思い知ってるのである。しかも、全ての道が危ない橋に通ずることはよく知っているのだ。だから、こちらからは基本話題も出さないし、基本喋らない。それが八幡のモットーなのだ。

そういう人となりであるので、八幡は嬉しそうにする平塚を横目に、ただ黙々とペンを走らせ始めた。

そうして、先程まですごぶる騒がしかった席から一切の話し声が消えてから三〇分程経った八幡は快調に進捗を産んでいたが、国語の試験範囲を解いてる時に、どうしても分からない問題にあたり、手が止まってしまった。

「比企谷、さつきから何を悩んでるんだ？」

「ああ、実はなあ、ここの先生の感情しかの解釈が。こうだと思っただが」

「ああ、そこはだな、ああ、先生の嫉妬のところか——」

八幡が指し示したところを見ると、平塚は悩むまもなく、すぐに解説を始めた。さすがなんでも出来る優等生と八幡は思わず感心している。

「うーん、ちよつと、ここからだ教えてもらいな……。よし、そつちに座らせてもらおうかな」

「え、——」

そう言つてすぐに、平塚は八幡の隣に座った。合わせて、ソファアの凹みがやや大きくなるのも感じる。

「よし続けるか。それで、ここはだな——」

突然のことに八幡の心臓の律動はどうしようもなく速くさせられる。

鼻腔をくすぐる甘い匂いがする。

もう少しで触れそうな肩。

下を見ようとすれば、暗がりとスカートの狭間から垣間見える腿。

とにかく近い。意識が飛びそうになる。

だが、平塚の横顔を見た時また冷静な自分が、諭した。

彼女の横顔は何一つ変わっていない。別に特別ではない、普通の表情だ。

男女分け隔てなく接し、誰とでもフランクに話す平塚にとって、普通のことなのだ。

スつと自分の中に理性は戻り、平塚が指し示すノートに書かれた文へと目線を移した。

そして、平塚は暫くノートを元に解説を続ける。

「——つまり、嫉妬だ。そこで先生は『Kの恋愛成就』を妨げることに躍起になったんだ」

「ほお、なるほどな」

「まあ、その嫉妬が、議論の余地があるんだけどな」

解説を聞いた八幡は思わず唸り、沁み沁みと納得する。

平塚の解説はとても分かりやすく、お世辞抜きで、学校の教員の説明よりも分かりやすいと感じた。

「すげえ、学校の先生よりも分かりやすかったわ」

「ふふつ、さすがに褒めすぎだ、比企谷。そんなこと言っても何も出てこないぞ。私から出てくるのは拳くらいか」

「こんな感じでな」と平塚は右腕を前に突き出し、一本ずつ人差し指から小指へと順に指を折り、最後に親指を添えて拳を握った。その後にかつと肘を曲げる。

これは間違いなく平塚の大好きな熱血アニメ『スクライド』の主人公が使う「衝撃のファーストブリット」の構えだ。既にその拳で殴られたことがある八幡の肝はその構えを見るだけで際限なく冷える。

「まあ、本当に平塚の説明は」

改めて八幡が褒めようとする、そんなよくある何気ない瞬間——

「分かりやすかつ——」

——言葉が詰まった。

八幡が何気なく平塚の横顔を覗こうとした時、頬をうつすら染めた平塚も八幡の顔を見ていたのだ。

——目を離せなかった。

十数センチの至近距離で、

身体も触れそうになる中で。

二重でくりつとした目、長いまつ毛、やわらかそうな唇、少しだけ感じる熱っぽい吐息。

それらが今八幡の目の前にあるのだ。

——言葉が出なかった。

平塚の頬は次第に紅く、紅くなっていく。

八幡も、じわりと顔が熱くなるのを感じていた。
二人は長いようで短い時間互いに見つめあっていた。
終わりを告げたのは突如平塚がサツと視線を下に向けた時だった。
触れ合いそうだった二人の距離も、その瞬間互いにいない方へとず
れて開いてしまう。

「……………そ、そのだから……………ありがとな……………」

「……………う、うん、……………どういたしまして……………」

交わす言葉もどこかぎこちなくなり、会話もこれ以上続かない。二
人して押し黙ってしまった。

——だが、

止まらない。止まらない。

鼓動がうるさい。そして止まらない。

酷く冷えきった自分が冷やして止めようとしても、今回は冷えてく
れない。

そんな顔を見てしまったら。

そんな表情が自分に向けられてしまったら。

——熱い。熱い。

——止めなければいけないと分かっているのに。

「……………ちよ、ちよっと、私、トイレ行ってくる……………」

「あ、ああ……………」

小走りで行ってしまったその後、平塚はだいぶ長い間戻ってこな
かったような気がする。

その間、八幡は気紛れにペンを持つ手を動かそうとしても禄ろくに動か
なかつた。それに、手元も妙に震えた。

時間が経つてもまだ、心臓の脈拍は速い。

いつもはクールに振る舞い、どちらかといえば男勝りで、誰にでも
変わらない様子で接する彼女が八幡に初めて見せた、あの女々しく、
酷く扇情的な表情が網膜にこべり着いて離れない。

「やべえ……………」

そして、八幡は思わずこの言葉を口に出してしまった。

「……かわいすぎるだろ」

その眩きは誰にも聞かれぬまま、角砂糖のような形をした氷だけ入ったグラスの中に吸い込まれていった。

そして、ここで初めて八幡の心覆った分厚く硬く、冷たい氷の壁が、
熱りにやられて溶けているのをうっすらと自覚したのだ。

三束： Sports Festival!!!

中間テストもすつかり終わり、若葉が顔を出し始める清々しい季節から、だんだんと鬱屈な雨降りの季節へと向かう頃。

この総武高校では、蔓延はびこっていた勉強ムードは完全に消え去り、次に訪れるイベントに向けて、着々と盛り上がりを見せている。

だが、その盛り上がりを楽しめるのはごく一部の生徒だけである。これを社会、いや、ここではあえて青春の闇だ、とでも言おう。

校舎の内と外を隔てるスチール扉の目の前。そこにある三段程度しかないコンクリートの階段に座り込み、テニスコートから聞こえるラケットの快音を聴き、海風にそよぐ通路脇の草花を眺めている比企谷八幡は、無論その盛況を享受出来ない側の人間だ。

「ああ、涼しい……」

八幡は、この海風が靡なびく、人目のつかないこの場所を好んで利用していた。

その名も——ベストプレイス。

八幡が命名した名前からわかるように、彼にとっての数少ない憩いの場のうちの一つである。

彼にとつての憩いの場はサイゼリヤと、ネットカフェ、それとこのベストプレイスぐらいである。

だが、この場所は、やはり格別である。美味しい飯が出るわけでも、娯楽がある訳でもない。ただ、わずらわしいものが何も無く、閉塞感もない。ただ独りでいる事が心地いいのだ。よく、「一人きりの世界になったことを想像すると怖い」と言うのを聞くが、むしろ八幡にはそちらの世界の方が性に合っていそうだ。

ともかくにも、人知れず肩の力を抜いて所在なさげにのんびりしている。することといえば、手元にあるアンパンを一口齧るだけ。そして、咀嚼してそれを飲み込む、ただそれだけ。

少し耳を澄ますと、風に乗って聞こえてくる人の声。目前にある校庭には人はいないが、バルコニーの方から聞こえているのであろう。

誰かは分からないが、何をしてる人の声なのかはすぐに検討がついた。しかし、八幡は耳の穴を少し抑えると、また、手元のアンパンを一口齧った。

平穏な時間、サイコーと心の中で呟く。

「あつ、比企谷みーつけー！」

——平穏な時間は壊れた。

その瞬間、撃滅のセカンドブリットなる拳が八幡の鳩尾みぞおちを寸分たがわず貫いた。メリメリという鈍く、はらわた腸を抉り取られるような不気味な音を立てて。

コハツという本来人間が出してはいけないような乾いた息まじりの声を漏らした八幡は、二段下のコンクリートの上へと衝撃で飛ばされたあとのたうち回り、あまりの激痛に鳩尾を抑えて、その場で蹲うずくまった。打ちどころが悪ければ確実に彼の魂は遥か彼方の空へ昇っていただろう。

「ほら、練習戻るぞ♪」

殴った張本人は屈託がなさすぎて逆に不気味な笑顔で、蹲っている八幡にわざとらしく鼻にかけた声で語り掛ける。

「い……や、動け……ない……」

「うっそー、どうして〜?」

その人はあからさまに作った不思議そうな顔で八幡の様子を覗き込む。

八幡は、今にも消え入りそうな声で振り絞って応えた。

「い……や、たった……今誰かさんに……思い切り……殴られたか……」

ちやうど言い終えたところで本当に魂が抜けたようにパタツと、八幡は力尽きた——。

——暫くして、意識を取り戻し、ようやく動けるようになった後、鳩尾には未だに拳の形が分かるようなじんわりとした痛みを抱えたまま、何とか這いずって、階段まで戻ってくる。その隣には、先程まで

の嘘で塗り固められたような笑顔が消え、呆れ顔の平塚がそこに座っていた。赤色のハチマキが額にまかれ、練習のために結われたであろうポニーテールが海風に煽られヒラヒラと揺れている。

「——全く比企谷は相変わらずのサボり癖だな。これで何度目だ」

「さ、さあ、どうだったかな……。お前が気づいてないだけで意外と練習行ってるんじゃないか。ほら、俺、影薄すぎて、割り勘の時払わなくて済むぐらいだし。いや、そもそも割り勘の機会がなかったわ」

こういう時のための自虐ネタだ。まさしく怪我の功名である。

ただ「ふうん」と適当にあしらった平塚は指をおり始めた。「昨日は来たが、一昨日は来なかったよな——」と、一本ずつ指を折る。しかも、正確に。

さすがにその指折りを見て身の毛もよだたない人間はいない。恐ろしい折檻だ。

「——なんだ、一回しか来てないじゃないか。サボってる回数の方がよっぽど多いんだが」

ちらと、目が合う。瞳孔は右往左往だ。日陰のコンクリートが尻づたいに余計身体を冷え上がらせる。

でなければ殺される。でも練習に出たくはない。わかりやすい葛藤が生まれ、そして勝手に口は動く。

「語弊があつたな。これはサボってるんじゃないくて、尊い犠牲だ。本番一人いない状況を鑑みての予行練習のための犠牲なんだよ。ほらきちんと体操着も来てるだろ？ ポツケには紅のハチマキ。ちゃんと心と心は繋がってるから。だから平塚さんも、もうわざわざここに来なくても——」

ピタリと口が止まった。なぜなら平塚の顔が三度殴られた仏が見せそうな無機質な笑顔に変貌していたからだ。その目は一切笑っているように見えない。平塚の右手の握り拳は、ぶるぶると小刻みに震えている。

「——また、変な言い訳つけて。そういう訳の分からん言い訳も相変わらず得意だな。体操着着て、サボってないことを装う魂胆も気に入らない。なあ、比企谷……？」

平塚はポキリと順番に指を鳴らす。

小指から順番に。人差し指を鳴らす音は一際大きく聞こえた。

「すいませんすいません。今から参加します。だからその抹殺のラストブリットを今にも放ちそうな拳は引っ込めてください」

「なら、よっ」

というわけで、八幡は不本意ながらも、その獅子の如き圧力に為す術もなく屈服し、参加することが決定した。

——遅ればせながらこの学校の体育祭について説明すると、この学校の体育祭は、クラスを半々に紅白に分かれ、全学年の総合得点で競う典型的な紅白戦だ。

八幡は灼熱豪華の紅組であり、そして、彼にとっては運の悪いことに平塚も紅組なのである。

本来であれば、誰からも咎められることもなく、悠々自適に日向ぼっこをすることができると。実際、去年の体育祭も同じように過ごしたのだ。

ともあれ練習に参加することが決まってしまった八幡は重い腰を上げようとしたわけだが、どうやら体育祭のクラスの担当が用事で遅れているため、練習開始の時間までにはまだ余裕があるとのことだった。

「やつぱ、出たくねえ……」

八幡はまた往生際悪く乗り気が無いことをアピールし始めた。

「まだ言うか」

「だって自主練だろ？ おかしくねえか、俺は自主性なんて欠片もないのに」

「ああ、あれは自主と書いて止むを得ぬ事情がない限り強制と読むんだ。つまり、理由が特にない君は強制参加だ」

「うげえ。なら最初からそうと」

「これがJAPANなんだ、諦めろ。そんなんじや、社会人とかになつた時、君は苦勞するぞ。大人の社会はこんなことのオンパレードだからな」

「いや、俺は専業主夫になるから、別にその心配はないな」

「ああ、そう言えば、そんな妄言吐いてたな君は」

平塚の顔は分かりやすく苦笑いの表情をした。

「なあ、比企谷。なんで君はそれほどまでに練習出たがらないんだ」

「コミュニケーションが必要になるからだな。腫れ物に触るように接してこられるのは、俺は御免だ。変な気とか使われたら、余計に気分が悪くなる」

「確かに一理あるな」と平塚は頷いた。

「でも、別に練習にでることぐらいだったら、苦じやないんじゃないか？ 君が苦手だと思っっているコミュニケーションだって、今日の練習の大縄なら行わなくて済む。というか君がコミュニケーションが苦手だなんて私はそもそも思わないけどな」

「まあ、それ以前に体動かすと、疲れるんだよ。それに尽きる」

「根幹はそこか。はあ、まったく。というか、君、体育祭の実行委員だろ。そんなのでは面目が立たないぞ？」

「別になりたくて、なった訳じやないからな。委員会決めサボってる間に何故か決まっただけだ」

「ほら、サボるからそんなことになるんじゃないか」

「疲れるからいやなんだよ。俺はたとえ社会的地位が低くなくても、疲れることは絶対しないと心に決めてるんだ。No, hard working」

「でも、体育祭の実行委員はきちんとしてるんだらう？」

「いや、サボってる。そもそも人数が五人って多いから、別に必要とされてないんだ」

「はあ、そうか……。すごいな君は……」

まさしく馬の耳に念仏である。八幡の天邪鬼さ、ある意味では一本筋が通ったその態度に、平塚はもうお手上げなようで、これ以降の説法は止まった。

いつもは平塚に踊らされる側である八幡は、なんだか平塚を手玉に取ったように思えて、したり顔になった。

一方、八幡には素朴な疑問が浮かび上がっていた。

「というか平塚はよく疲れないな。お前働けばなしだろ。もう、や

りたくねえな。つてなるだろ、普通」

この状況では、煽りに聞こえるかもしれない。だが、煽りでもなんでもなく八幡は純粹に分からなかった。

疲弊するまで、やる価値があるものとは到底思えなかったからだ。平塚の立場を鑑みると、行動の原理は巷で言われるノブレス・オブリージュ―貴族の義務、とかいう時代錯誤の精神なのかとさえ八幡は疑ってしまう。

「いや、私だってそりゃ疲れはするぞ。朝も昼も体育祭の練習。放課後も生徒会で体育祭の準備だからな。君と比べたら、天と地の差なんでもでもない表せないくらいの差はあるな」

「それで賃金ゼロだろ？ 最近流行りのブラック企業ってやつじゃねえか。無理だな、俺には」

「馬鹿言え、本物のブラックを知らないくせに。賃金を貰っても、精神が満たされない労働、これが真のブラックだ。まだこっちは精神が充実してるから幾分マシだ」

高校生の言葉であるはずなのに、平塚のその言葉には確かな重みと、説得力がある。口からのでまかせではなく、まるで経験してきたと言わんばかりの雰囲気だ。

「……お姉さん、人生何周目？」

「……親からの受け売りだ」

「はっ、すごいこと子供に教える親だな」

想定外の答えに思わず笑みが零れる。八幡は酷く現実的な平塚家の教育に一驚を喫するが、比企谷家も似たような節はあり、理解できない訳では無い、寧ろかなり共感している。

「まあでも、やはり身体的疲労は残るな。肩こりも以前よりはだいぶマシになったが、やはり凝るには凝るんだ」

「ん〜……」とか細く高い声を漏らし、平塚は腕を高く突き上げ伸びをする。すると、薄着の体操着のせいかな、ある所が押し出され、平塚のボディラインがくつきりと浮かび上がり、白の布地から下着が若干透けて見えるのだ。そして、一瞬見せる無防備な表情。

それを見てしまった八幡の鼻の下も思わず伸びてしまっていた。

肩凝りというのも、原因を察せてしまうのが、余計にそうさせる。

これはしようがないと、八幡は自分に精一杯言い聞かせる。

伸びをしきった平塚は気持ちよさげに「ふうく……」と息を漏らす。

「それでも、皆が楽しんでる顔を見ることは、やはり私としても嬉しい。達成感があるんだ。結局は、そう、自己満足なんだよ」

「だとしてもできた人間だな。俺とはまるつきり正反対だ」

「ふふっ、まあ、間違いないな。君は皆を笑顔にしたいというタイプではないからな」

平塚は、少し間を置いた。

サーと強めの海風が吹く。長い横髪の隙間から見える平塚の瞳は木陰の向こうの、だとしてもここではないどこか遙か遠くを見ているように見えた。そして、寂しそうに呟く。

「——正直それ以上に、たくさんの後悔があるんだ。ちっぽけなことから、取り返しのつかないようなことまで、本当にたくさん。私はそんな後悔をできるだけ残さないようにしたいんだ。手遅れになったら何も出来ないし、後で嘆いても、それこそ後の祭りだからな」

「ふうん、お前にも後悔とかあるんだな。てつきり——」

——無縁だと思ってたわ。そう言おうとしていた。だがその横顔を見て、ふと八幡は思い出した。平塚が同じようにどこか遠くを見て、いつかの屋上で突然涙を流し始めたことを。

随分前、八幡は平塚のことを青春の嘘で塗り固められた勝者であると思っていた。だからこそ、後悔とは無縁でいられると八幡は決めつけていた。

だが、最近は違う気がしている。あの涙の理由はまだ分からない。他人を見ることを避けてきた腐りまなこには見抜くことなど出来なかった。

八幡は口を噤んだ。おもむろに手でコンクリートの感触を撫でる。冷たくてザラついてて優しくくない。

そしてたった今、八幡は当たり前前のごとくに気付かされた。平塚のことをこれっぽっちも知らないのだということ。その事に気づいた

からといって、何かが変わる訳でもないが。

「これが私の理由だ」

ちよつと口角を上げてはにかんだ平塚は、だから、と続ける。

「君も楽しんでくれれば、私はもつと嬉しいんだがな……。練習に参加して欲しいのも、君に楽しんで欲しいからなんだよ……」

わざとらしく潤んだ瞳。見たことのないアヒルみたいな口。今、八幡は、求められている答えに気付かないほど鈍くはない。

最初から平塚はこれが目的だったかもしれないが、耳を傾けてしまった時点で八幡の負けだ。

億劫そうに瞼を落とし、右手でもみあげを二三回搔く。

「はあ、ああ、分かった分かった。ちゃんと行けばいいんだろ、これから練習に」

「そういうことだ!」

「ここで口ごたえしたら、言葉での返答の代わりに拳が返ってくるだろ」

「まあ、そうかもな、あははは!」

平塚は高らかに笑うが、拳を受ける八幡からしたら冗談の間かない笑えない話だ。

これで、八幡がこれから先も練習に参加することが決まった。結局、あつさり流されてしまっているのだが、不思議と悪い気分にはならず、むしろスウとなにか吹き抜けたような春風に似た清々しさがあつた。本当に不思議な話である。

「——あつ、そうだった!」

唐突に、平塚は何かを思い出したようで、体操着の短パンのポケットをまさぐり、「後で伝えようと思ってたんだが、せっかくだし」と一片の折りたたんだ紙を取り出した。

「なあ、比企谷!」

「今度は、何だ……」

「七月にはなるんだが、うーんと、この溜まりに溜まったストレスを発散しに行かないか——?!」

「……外に出かけるってことか?」

平塚はこくりと頷く。クリっとした目を真ん丸にしてすごい期待の眼差しを差し向けてくる。だが、残念ながらこれに関しては八幡は平塚の望む答えは出せそうにない。

「平塚、申し訳ない、外出するって行為が俺にとっては基本、最大のストレスなんだ。だからその日は家で寝っ転がって——」

「よし、言質は取ったからな！」

「……いや、今取れる言質なんて無かったでしょ」

「喜んでいきます。むしろ行かせてください！ お金払ってでも行かせてください！ つていう言質だ！」

八幡は、「はあ……」と諦め混じりのため息をつく。

「捏造すぎて清々しいな。どうせ最初から拒否権はないんだろ」

「おお、その通りだ。今日の君はやけに物分りがいいではないか」
「……で、何するんだ？」

八幡が気の無い素振りで見ると、待つてましたと言わんばかりに、平塚は「せーの！」と一人で掛け声をして、

「じゃじゃーん!! これだあ!!」

平塚は折りたたんだ紙をバツと四方に広げて、視界を覆うように八幡に見せつけた。八幡は少し身構えていたが、その紙に書かれていた予想外の内容に毒気を抜かれる。既に底をついてる八幡の中のやる気メーターが更に下がった。

「七夕祭り……。しかも、長生村……？ 茂原の近くじゃねえか、なんでまた……」

「……ここを見るんだ、ここを！」

そうして指さされた所を見ると、普段は感情の起伏が激しくない八幡が「ええ?!」と裏返り気味のやや掠れた声を出し、鉛でできたような腰を浮かすほど珍しく吃驚仰天してしまった。

『七夕大決戦く彦星と織姫は誰だ?! 最強カップルコンテスト』

確かに平塚が指を指したところにはそう書いてあるのだ。

「お、お前、カップルって」

「まあ、待ちたまえ！ それでは甲斐性のない君はどんなに説得しても参加しないことは重々わかってる。それに私も私なりにカップル

コンテストに参加する理由があるんだ。さあ、これを見たまえ！」
そう言つて平塚はさらに小さく書かれた大会の賞品。その中の二位の賞品を指し示した。

『2位：アニメコレクション詰め合わせ　〃スクライド〃　カズマ
劉鳳&　〃プリキュア〃　キュアホワイト&キュアブラック
フィギュア　ガンダムプラモデル』

なんだこれは。ピンポイントにもほどがある。金銀財宝——宝の山だ。

自らの目を疑い、何度も擦り、何度も確認する。

しかし、書かれている内容が変わることは無い。しかも、画像を見るからに安作りではなく、かなり上等なものだ。

八幡の意思はここで決した。現金な男と言われても上等である。

下振れていたはずのやる気メーターはMAXを振り切り、理論値を超えた。

「行く。絶対に行く」

鼻息が自然と荒げる。

「おお、行く気になったか！」

「当然だ。特に欲しいものが揃ってるんだから、これを逃すチャンスはないだろ」

「うむ、やる気満々なのは結構だが、ただし比企谷、この大会に参加するための条件を設けるぞ！」

「え、そっちから誘つてきたのになんか条件あるの」

「ああ、それはな——！」

その日から、体育祭当日まで、八幡は練習に参加し続けた。雨の日も、風の日も、眠くなるようないいお天気の日も。

平塚から突き出された条件とは「練習全てに参加し、体育祭に出場すること」だった。

口約束では信頼できないため、釘をさしてきたのだ。

確かに、平塚は男なんていくらでも用意出来るかもしれないが、八幡は無理だ。妹を彼女扱いさせる方法もなくはないが、小町は嫌がる

だろうし、バレた時のリスクが大きい。

何度か魔が差し、機を見計らって尊い犠牲という体のサボりをみたび敢行しようとしたが、当然平塚の目を誤魔化すなどの手は通じそうになく、律儀に全て参加したのだ。

そして、あつという間に時は経ち体育祭当日。

もう少しで梅雨が訪れるというのに、憎いほどに晴れ上がる空。

まだ生徒が集まるには少し陽の位置が低い時間。目の前のグラウンドには、白線で作り出されたトラックが浮かび、その奥には白屋根のテントが窮屈に横並びしている。

その中、八幡は、気だるそうにしながらも、赤いハチマキを手に握り、しつかりとグラウンドの地を踏んでいた。ただ、慣れない陽光には弱く、目を萎ませている。

「ひーきがやつ！」

呼ばれて、萎んだ目がギョロと開く。八幡を呼ぶ女の声がする方へと振り向く。だが、この学校で八幡を呼ぶ女子なんて、一人しかいない。

「おはようー！」

平塚は屈託のない笑顔を見せ、明朗快活な挨拶をかけてきた。八幡の重たげだった瞼も、少し軽くなる。

「ああ、おはよう」

八幡が挨拶を返すと、平塚は胸元に手を押し当てて、「よかった」と、安堵のため息を吐く。

「比企谷が本当に来てくれるか心配だったんだ」

「まあ。そりゃ、金銀財宝、宝の山がかかっているからな」

「よし、じゃあ七夕祭りに一緒に出場するぞー！」

とりあえず、これで第一段階はクリアということだ。そして、どこか靄がかついていたものが晴れ、胸がすいたような心地になった。

その時、「しずかー」と、平塚を呼ぶ女子の声が聞こえた。

「もうそろそろだよー。来てー」

呼ばれた平塚は元氣よく手を挙げて「はい」と、意気揚々と返事を返す。

「仕事か？」

「ああ、生徒会のな。他にも今日やることかてんこ盛りにある。競技も大縄、騎馬戦、部活対抗リレー、学年対抗リレー、選抜リレーと沢山でなきやならないし、競技の合間合間にも仕事が入ってるから、休む暇がないって感じだな」

「特にリレーがしんどいんだ」といやいやそうに平塚は愚痴をこぼす。その愚痴を聞いて、持つものの嬉しい悩みじゃないかと嫌味に思うのではなく、八幡は持つものじゃなくて良かったと少し幸福感さえも感じていた。

「まあ、頑張れよ。無理しないほどにな」

「うん、分かった！ 比企谷もな！」

「できるだけ頑張るわ」

「できるだけじゃなくて、絶対に、だ！ ちゃんと見てるからな。

「じゃ、私仕事行くから。また後でな、比企谷！」

「ああ」

そうして、平塚は運営席の方へと行ってしまった。その背姿を見送ると、濡れ羽色のポニーテールが跳ねるように揺れている。

「すごい楽しみにしてたしな、あいつ……」

——頑張るか。

と、浮かんだらしくない言葉は門番が睨みを利かせる声門に引つかり、結局、それを呑み込んで、言葉に出ることは無かった。

ところで、ここからの八幡は終日暇人なのかと言えば、そうではない。今回の体育祭では、クラスの体育祭実行委員に知らぬ間に任命されておられ、体育祭の実行委員までサボっていたら最終的には救護係という大層な役を担うことになってしまった。

あの西欧の怪物のように陽光に弱く、重役出勤の常連である八幡がわざわざ一般の生徒よりも早く学校に来ているのはそのためだ。

平塚の言う通り、きちんと出ておくべきだったが、これこそ後悔先に立たずだと、辛酸を嘗めて痛感する。

ただ、彼が担当する朝の仕事は既に終わっているため、今は手持ち無沙汰である。だから、こうしてただ意味もなく校庭に立ち、白線で

浮かび上がるトラックを眺めていたのだ。

少し時間が経つと、一般生徒も徐々に集まり、騒々しさと額の紅と白のコントラストが淡白な色の校庭の中で目立っていく。

そして、その喧騒を貫くアナウンスがかかり、まもなく体育祭が始まるという頃になった。

『——これから、第〇〇回総武高校体育祭開会式始めます』

開会のアナウンスが鳴り響くと、「うおおお！」という野郎共の野太い蛮声や指笛の鳥の鳴き声のような甲高い音が響き、会場の熱狂は高まっていく。

そして、そのままの勢いで、開会宣言を担当した生徒会長がマイクを天に掲げて、声高らかに、叫んだ。

「総武高校体育祭、開始でええええす!!!」

「「「いえええええ!!」」」

砂埃が空に舞い上がる。

——総武高校体育祭は幕を開けた。

次々と種目が行われていく。種目が終わる度にどつと動く人の大群に、せつせと会場を縦に横にと動く体育祭関係者。その様子を日除けの白テントの下で、談笑している大人たち。人それぞれ違う体育祭を送っている。

そして八幡は観戦——ではなく、ベストプレイスでのんびりしていた。

そんな八幡が出場した最初の種目は学年対抗の大縄だった。ここでは、八幡と平塚側の赤組は熱戦を繰り広げたものの、僅差で黒星となってしまった。

結局、最後の最後で引つかかってしまったのは、練習に参加していなかった、というよりもできなかった女子であり、表向きではチームメイトは「ドンマイ!!」と声をかけていた。しかし、大縄が終わったあと、八幡がベストプレイスへと意味もなくひそひそと盗人のような抜き足差し足で帰る途中に、バルコニーの日影の下でチームメイトの女子数人がたむろし、「マジ最悪。あいつのせいだ」という恐ろしい発言と、それに周りの女子が赤べこのように首を縦にふり同調する様子

を見てしまったのだ。

これが、青春の現実だと、教科書に載せたくないようなものであるが、火の元危険。君子危うきに近寄らず、という訳で飛び火しないように、ささつと足音を立てずに通り抜けた。

これで八幡の出場する種目はもう残り二つである。

それは男子対抗の棒倒しと、学年対抗全員リレーであるが、午前中にある棒倒しまでもだいたい時間があるため、友達のいない八幡には退屈なことこの上ないのだ。

救護係のシフトに入っていて競技をぼんやり観戦するか、入ってなければ喧騒を避けてベストプレイスでぼんやりすごすかのどちらかだった。

当分の間シフトが入らず、アスファルトの階段に腰を下ろして、イヤフォンを耳にはめながら流れゆく白い雲を見ていると、女子対抗の騎馬戦が始まろうとしている刻限になっていた。

校庭に戻ると、大縄の時よりも観覧席の親の数もいっそう増え、やはり目玉種目ということもあり、今までの種目より熱量が大きい。

八幡はこの時間ちょうど救護係のシフトが入り、救護テントの下から観戦することになった。

『それでは、騎馬戦に出場する生徒は、入場してください』

アナウンスと共に、いかにもハンドメイドの木製の入場口からは鉄の城門から出てきたようにわらわらと女子の大群が校庭内へと押し寄せる。普段なら嫌がるであろう裸足でグラウンドを駆けるその姿は、可愛く取り繕ったりしようなどという乙女心は消え去り、敵を薙ぎ倒すために、旧き野生の心を取り戻しているように見える。まるで俗に言う、アマゾネスの戦士のように。

そして、所定の位置に着くと、女子のそれとは思えない胴間声を上げ、激励の言葉が飛び交う校庭で、準備を促すアナウンスと共に、次第に騎馬が組み上がったいく。

——東側が、額に巻いた白のハチマキが蠶のように揺れ、白馬が如く優美さの中に、確かな熱意が感じられる、純白の白軍!!

その軍を率いる大将を務めるのは、バスケット部のキャプテンにして、清楚系という相反するステータスが見事に融合した熱血のご令嬢——麗しき白鳥・山王ヒロコだアアア!!

西側が、赤色のハチマキの如く真つ赤に燃え上がり、猪突猛進、直往邁進にただ相手の騎馬へと挑みかかる真紅の紅軍!!

そして、この紅軍を背負って立つのは、その人望と額に宿す熱さを持った天性のリーダー・生徒会の紅一点! —— 烈火の獅子・平塚静だアアア!!

両軍の騎馬の準備が整い、いよいよ土俵に立ったア!!

「両軍、位置につきまして、よーい——」

そして今ここに、紅白の雌雄を決する、戦いの火蓋が

「始め!!」

切つて落とされるウウウウ!!」

と、いつからか始まっていたとてつもなく熱い放送部の実況が伝えるように、開始の合図と共に、両軍の騎馬は、恐れおののくことなく、敵の騎馬へと突っ込んでいった。

あちらこちらで足踏みによる土煙が上がる中、かすかに崩れ落ちていく騎馬が見える。雄叫びを上げ、その手には敵の色のハチマキが握りしめられた騎馬も見える。

敵勢に囲まれ、行き場をなくし為す術なく散りゆくであろう騎馬も見える。

やはり女子のものとは思えない荒々しい叫び声が戦場に木霊し、周りの歓声と喝采が、より会場の興奮を捲し立てる。

「いけえ! 白軍!」

「負けんじゃねえぞ、紅ア!」

手に汗握る戦いは、実力伯仲のまま進み、白の優勢かと思えば、紅がすぐに取り返す。紅が二騎沈めれば、白が三騎沈める。一進一退の攻防が続いていた。

『ここで、紅組、騎馬を失ってしまったアア！ おおっと、それをすかさずカバーする紅組イ！ しかし、その猛攻を背中から羽が生えたようなステップで交わしていくウ、まさしく戦場を舞う白銀のペガサスだアア!!』

しかし着実に、それぞれの戦いに決着はつき、敗者は消え、終焉へと近付いていく。

崩れ去った騎馬の夢を抱き、勝敗を決す大一番に残ったのは、

——紅組、大将平塚静の騎馬、一騎。

——白組、大将山王ヒロコの騎馬一騎、さらに一騎、合わせ二騎。

一対二。紅組の完全な劣勢だ。このまま囲われてしまえば、為す術なく取られるであろう。まさしく背水の陣だ。

紅の雌馬は、二騎によってじりじりと戦場の端へ端へと後ずさっていく。

『このまま、白の勝ちになってしまうのか……………』

あれほど熱かった実況が冷めてしまうほどの目に見えた盤上の趨勢。しかし、八幡には平塚の騎馬の闘志は消えてないように見えた。なぜなら八幡には見えたのだ。平塚がこの状況にしてニタアと笑ったのを。

「——ッ!!!」

突如、何かを叫んだ平塚に呼応するように、平塚の騎馬は、この終盤の局面にて、動きを一段階いや、二段階加速させたのだ。

予想外の動き出しに、後手を踏んだ白組の二騎は、一瞬棒立ちとなり、隙が生まれる。

そこを紅組の平塚の騎馬は見逃さない。

平塚の騎馬は、大将騎馬ではない騎馬に、全速力で詰め寄り、その勢いに完全に気圧された騎馬は、立ち向かうことなく、翻して背を向けて逃げていく。

しかし、走力は、紅組の騎馬の方が高かった。

徐々に、徐々に距離を詰め、騎手の平塚が無理のある前傾姿勢になり、騎馬の背へと右手をぐんと伸ばす。

「よしッ——!!!」

確かに聞こえたその平塚の雄叫び、そしてその右手の中には白のハチマキが握りしめられていた。

『おおおおお!! なんとおお、ここで紅組ィ、起死回生の一手に成功したアア!!』

「おおおおお、行ける」

「このままだあ!!」

再び熱を盛り返した実況の絶叫が、会場を駆け抜け、興奮は瞬く間に伝播する。

「おお、すげえ……」

八幡も思わず感嘆の声を漏らし、戦場に立つ二つの騎馬一挙一動かから目が離せなくなっていた。

二つの騎馬は互いに睨み合い、距離を詰めては離してを繰り返す動きを牽制する。どちらかが動けば、確実に試合は動く。相手が油断する隙を互いに伺っているようだが、一向にその時は訪れない。

そして二つの騎馬は、八幡のいる救護テントのちょうど目の前で、向かい合い、一度歩を止めた。

そして、紅組の大將平塚は唐突に口を開いた。

「こうなるとはな」

「ええ、そうね。こうも綺麗に1対1になると思わなかったわ」

白組大將山王ヒロコと紅組大將平塚静、二人の少女は互いに笑う。

山王と平塚、この二人の少女は何かと引き合いに出されることが多いのは八幡すらも知っていることだった。

両者ともに容姿端麗かつ学業優秀かつ、強力なキャプテンシーをもつ人望の厚さを備えている。

しかし、容姿においては、秋桜コスモスのように可憐で愛らしい山王と胡蝶蘭のように美しく凛とした平塚。学業では、理系を得意とする山王に対し、文系を得意とする平塚。課外活動では、運動部に属する山王と生徒会に属する平塚。

このように対極的であるからこそ、引き合いに出されることも多かったのだ。

だからこのように対峙するのは運命なのかもしれない。

ここでどちらが優れているか決することが出来るのだから。

「あなたとこうして戦えるのを待ち望んでいたわ!」

「ああ、私もな! それに君にはだいたい借りがあからなあ!」

「借り、ねえ。そうね、私も色々あるから、ここできつちり返す!!」

言い終えた二人は、互いの目をじいつと見つめ、そして腕を身体の前へと構えた。

——張り詰める。

八幡だけでなく観客全員が息を飲んだ。

刹那、二騎がまったく同時に動き始めた。

二騎とも怯むことなく激しくぶつかる。大将の二人は、見事な身のこなしで騎馬を乗りこなし、山王が手を伸ばせば、平塚がすんでのところで避け、逆に平塚が腕を下からすくい上げるように振り上げ、白のハチマキを正確に捉えると、今度は山王がしなやかな動きで背筋を大きく反らし、その攻撃を華麗にかわ躲す。

騎馬の下の三人も、上の大将が行動しやすいように見事なほどの安定感を保ちながらも、相手の虚をつけるように、足先の動きを機敏に変更し、距離を離すなどして器用に位置を変えていく。

暫くの間二人の大将による高次元な組み手が続き、大衆は眼前の騎馬戦にまさしく釘付けになっていた。

しかし、互角の勝負が長く続くと、下の騎馬の疲弊が目に見えて明らかになる。足元の動きが鈍くなり、騎馬がよろけはじめているのを、何とか大将が咄嗟の体重移動で安定させているという状態になっていた。

そして、互いにもうほとんど攻撃の猶予しかないだろうということ。は第三者からも分かるようにほどに、両者の馬の疲弊が見えた頃、大将ふたりが騎馬に激励の声を飛ばす。馬は膝が折れそうになりながらも、何とか大将を支え、その言葉に応えている。

いよいよ勝負の行方は、上の二人に委ねられたという訳だ。

「ラストお!!」

「最後だアア!!」

大将の掛け声と共に、両の騎馬が最後の力を振り絞り、全身全霊で相手へと突っ込んでいく。

「——おりゃあああつっツ!!!」

「——はあああああつっツ!!!」

互いにめいめいっばい手を伸ばし、相手のハチマキ目掛けて手を伸ばす。なるたけめいっばい手を伸ばす。

そして、互いの手が相手の額に届くか否かの、その瞬間——

——互いの騎馬は、力尽き、崩れ落ちていった。

崩れた衝撃で土埃が高く高く舞う。

その刹那、時が止まる。

観客の歓声は止んだ——。

八幡も思わぬ最期に開いた口が塞がらない。

だが、ここで気が付いた。

「——ひ、平塚ッ——」

観客も徐々に夢想から解き放たれ、現実を理解する。

「やばくねえか?!」

「おいおい、大丈夫なのかよ、今の!」

観客が放つ言葉は、もはや歓声ではなく、阿鼻叫喚。

状況を理解したものの悲鳴が、他人へと伝播し、誰もが最悪の事態を案じて手を覆う。

騎馬は間違いないく崩れ落ちたのだ。重大な事故につながっているかもしれない。

誰もが固唾を飲んで、土埃の中へと視線を向ける。

八幡も、周りにあった救急箱を急いで手元に手繰り寄せる。

——だが、その不安は土埃と共に晴れていく。

土埃が次第に晴れていくと、まず目に入ってきたのは、その場で毅然と立ち上がっている人影とその人影から空へ向かって突き出された一本の拳だった。

そして、その拳には白の布地のハチマキがしっかりと握りしめられていた。

そう、そこに立っていたのは。

ニイツと少年のように無邪気に笑い、少し砂で汚れた深紅のハチマキを額に巻いた平塚静だったのだ。

『……………し、勝者、紅組イイイイイイ!!!!! この歴史に残る大接戦を制したのは、紅組だアアアア!!!』

実況が伝えると、会場中に怒号のような歓声が響き渡る。この大熱戦を制したのは平塚率いる紅組だった。

尋常ではない疲労により崩れ落ちた騎馬の面々も、幸いにも大きな怪我はなく、かすり傷程度で済んだようだ。

そして、結果発表の後、白組大将と紅組大将が歩み寄り、互いの健闘を称える握手をすると、

『——魂が震える大激戦を演じてくれた、この両軍に惜しみない拍手を!!!』

その実況の呼び掛けに応じ、観客席から拍手と、選手に向けた労いの声が飛び交った。八幡の手も自然と動いていた。



その白熱した騎馬戦が終わると、次の目玉はいよいよ男子対抗の棒倒しなのだが、今年の棒倒しは例年と比べて異質だった。

結果から言おう。全く盛り上がらなかったのだ。

総武高校の体育祭では競技は基本的に一本勝負。一回で勝敗が決するため、先程の騎馬戦のように尋常じゃないほどの盛り上がりを見せるのだが、今年は誰も気づかない内に、棒が倒れてしまったのだ。倒した側も、倒された側も、何が起きたかを把握出来ずに、棒立ちになって呆然としているだけ。

『……………、これにて、棒倒しは終了です。紅組の勝利となります』
腑に落ちないような様子で実況が宣言すると、観客も先程の騎馬戦と比べたのか、

「全然面白くねえじゃねえかよお！」

「何やってんだよ、白組！ 棒が勝手に倒れてったじゃねえか！」

と、ありとあらゆるところから非難轟々、バツシングの嵐が巻き起こる。

そして、『棒倒しに出場とした選手は退場してください。部活対抗リレーに出場する選手は指定場所に——』と、退場のアナウンスがかげられ、不完全燃焼の男子たちはあつさりど撤収して行くことになった。健闘を称える拍手はなく閑古鳥が鳴くような物寂しい退場だ。

そんな中、八幡も素知らぬ顔で、退場口をくぐり抜けようとしたが、「比企谷」と退場口のゲートを背もたれに寄りかかっていた平塚に呼び止められる。

「なんだよ」

「ちよつと見せてみろ」

「え、ちよつ——」

そう言つて平塚は比企谷の唐突に前髪をかきあげて額を覗き込むと、途端に吹き出し、八幡の肩を強く叩き始めた。

「あははっ！ 馬鹿だ、君は馬鹿だ、本当に馬鹿だ。あははは！」

女子に触れられたことのない前髪をかきあげられて照れくさい八幡をよそに、平塚は笑いが止まらず、目には涙を浮かべている。

笑いが止まらない理由は、八幡の額にあった。

それは、八幡が額に巻き付けたやけに網目が目立つ白いハチマキだ。

「紅組で入場した出場者が、退場の時は白組と一緒に出てくることなんてあるかあ！」

平塚が涙を拭いながら言うように、確かに、八幡は紅組として入場した。しかし、試合途中に白組へと鞍替えしたのだ。救護係の時に、こっそり救急箱から調達した白色のガーゼを使って。

そして、屈強な男子があちらこちらでぶつかり合う中、端の方で誰にもバレずに白組へと変貌した八幡は、そのまま誰にも気づかれることなく白組の陣地へと近づき、太くでかい木の棒を倒してしまったのだ。

「職権乱用と同士討ち。誰もなんで倒れたか分かってなかったのは、滑稽だった！ まるでコントを見てるみたいだ。一緒に見てた中学

の同級生とずうっと笑いっぱなしだったよ」

「自分でもここまであっさりと上手くいくなんて思ってた。影の薄いのがこんなに役立つ日が来るとはな。まあ、勝てば官軍だから八幡は額にある急造の白ハチマキの包帯止めを外し、少し巻いてからポケットにしまう。そして、額の下にはやはり、網目のない紅い色のハチマキが結ばれている。」

「ふふっ、憎たらしいが、その通りだ。いやあ、確かにあの子達に聞いてはいたが、ここまで滑稽だったとはなあ〜」

「あの子達に聞いてた、ってどういう事だ……?」

「えっ、あっ、い、いたらしいんだよ。私の中学の友達の子達に君みたいな戦い方をする人がな」

「へえ……、そんなやついるのか」

世界は広しと言えども、こんなキテレツというよりも、おそらく根本的なルールを無視した卑怯極まりない戦法を遂行してるやつが他にもいるということに、素直に感心する。そして、同時にその人の身の丈の狭さについても身に染みて同情せざるを得ず、胸が苦しくなった。

ここで、平塚は「そうだ」と何かを思い出したように声を上げた。

「比企谷、私の騎馬戦観ててくれたか?! 結構凄かったと思うぞ!」

「……いや、見てないな。仕事で席を外してたからな」

「格好よかった」と一言いえばいいのだが、素直に言うことが何だか気恥ずかしくて、誤魔化しの空言を吐いてしまった。それを真に受けた平塚は吊り上がり気味だった眉も下がり「ええ」としよけてしまった。「ちゃんと見ててくれよ。私結構活躍したんだぞ」

ぺったりした頬をむくうと膨らまして、「このほか」と文句を呟きながら、ちよんちよんと人差し指で八幡の肩を小突く。

——いや、何この可愛い生物。愛でたい

露骨に不貞腐れる姿なんて初めて見るものだから、つい頬が緩んでしまう八幡だが、ふとアウンスで平塚が出場する部活対抗リレーの召集がかかっていたことを思い出した。

「ていうか、そろそろ部対抗のリレーじゃねえのか? もう、呼びかけ

始まつてるだろ」

「ああ、まだ生徒会の仕事があつてな、その後すぐに向かうんだ」
すると朝、話した時と同じように、「大変すぎる」と愚痴をこぼし、朝と違って、駄々をこねる子供のように、この場を離れようとせず、愚痴を次から次へと八幡にぶつけてきた。

「第一、体育祭実行委員会に生徒会に仕事を回しすぎなんだ！　なあ、比企谷もそう思うだろ?!」

訴えかけるような目で問うてくる平塚に、八幡は一言、返した。

「おう、頑張れ」

「ふんっ、言われなくとも、頑張るもん！　べえー、だ」

余計拗ねてしまった平塚は言葉通り、べえと舌を出す。

これまた可愛らしい。

疲れると幼児退行するタイプがいるというのは、よく聞く話ではあるが、平塚もどうやらそのタイプらしい。

「今度はちゃんと見ておくんだぞ」

「……ああ、善処する」

「むう、善処じゃなくて——」

平塚は、最後に八幡の眉間を人差し指で一突きする。

「——絶対だからな」

——可愛い。

八幡は、平塚のお嬢ちゃんが安心できるよう「分かった」と言葉にして答えた。

その後、八幡は青春の喧騒というただのバカ騒ぎにあてられて、ベストプレイスに引きこもりたい気持ちだが沸騰寸前になるが、どうしてもあのいじらしかった平塚との約束は無碍にできず、律儀にクラスの観覧席の後ろに邪魔にならない程度に、座り込んだ。

昼休み前最後の競技『男子・女子部活動対抗リレー』は、その名の通り男女に別れて、部活動の選抜メンバーで対決するリレーであり。紅白戦の結果には関係ない余興の競技である。そして、この競技には平塚の所属する生徒会も参加するため、平塚は女子生徒会の方で参加することになっている。

そして、『まもなく、女子部活動対抗リレーが始まります。選手の方々は入場してください』と、アナウンスがかかると、八幡のいる観覧席には、雲散霧消していた男子が一斉に集まり、観覧席の前を独占してしまった。

「うおおお、バスケット部のユニフォームやべえ、山王なんか特に。俺どうにかなっちまうよ」

「やっぱ、水泳部は最高だ……。一枚羽織ってはいるが、中身はスク水なんで。想像するだけでグハツ」

「陸上部の太もも、えろすぎるだろお……」

普段見ない部活着姿の女生徒達を見て、発情した猿の如く鼻息を荒らげ、リビドーを爆発させている男子たちに視界を遮られる。このままだとよく見えないのだが、だからと言って、この群れを掻き分けてまで、観ようとするほどの気力は生まれなかった。

「おっ、あそこ、平塚が来た！ やっぱ、可愛いなあ」

一人の男が発した言葉に、思わず目は動き、その男が指さす方を、群れの間を縫って、目をこらす。確かにそこに平塚はいた。

「やっぱ、平塚いいよなあ。彼女にしてえなあ。そしてあのおっ、ゴホン。あの山脈を踏破したいなあ」

「無理無理、お前みたいに変態ポンコツ相手にしないだろ」

「何？?! この間だつてなく、——」

ざわつく中から、平塚の話をする男たちの話し声はやけにクリアに聞こえる。そして、少し胸焼けとときのように胸が少しヒリツとする。この慣れない痛みは最近感じ始めていた。休み時間、教室にいて机に臥せる時、他人の話し声が聞こえてきってしまうことはよくあったが、最近では平塚の話ばかりよく聞こえるようになった。そして、やはり胸がヒリツとする。それが嫌で、教室から抜け出すこともしばしばあった。

「肩を叩いてくれたなんて、そんなの平塚は誰にでもするだろ。それなら平塚は俺の話よく笑ってくれるし、なんならこの前、大野が俺の事平塚に勧めてたしな！」

「なっ?!」

「ずりいぞ、それ！」

——ヒリヒリが続く。正体は分からない。

「……とは言ったものの、平塚は別になんとも思っていないんだろうな」
「確かに、フラットだよなあ。男に興味あんのかなあ」

——ヒリヒリが続く。正体は分からない。

だが、フラットと耳にして、ふと目に浮かぶ。屋上にいる時、涙を浮かべていたあの顔。あの時向けられた、1度限りの平塚の上気した顔。あれ以来、一切見ていないそれぞれの顔を思い出すと、ヒリつきとは別の得体の知れない感覚が八幡の身体を風が吹いたように駆け巡るのだ。

「結局、友達止まりというか——」

そんな中、『まもなく、女子部活対抗リレーを開始します。最初のランナーの方々はスタート地点に移動してください』と競技開始のアナウンスが届けられる。

「まあ、良い。それより今は」

「そうだな、乳揺れを拝むぞお!!」

「おお!!」

野郎共の最低な掛け声に、後ろの女子が「きもいし、最低」と至極ご最もな蔑みの言葉を彼等に向かって吐き捨てた。不幸中の幸いにも彼等には届いていないようだが、グラウンドに熱視線を送るる男子と、観客席に冷えた視線を送る女子という地獄絵図は変わらない。そして、その狭間にいる八幡であるが、その熱量の差に気づかず、少し上の空になっていた。

絶対に聞き流せない、やけに引つかかる言葉があったのだ。

——勘違いしてはいけない。この言葉は、いまでも胸の誰にも踏み入れられないような奥底で、大きな凶体でずしんと鎮座している。

だが、いつからかふと考えるようになっていたのだ。

——平塚と八幡の関係は一体何なのだろうか。

そう問うと、あつという間に答えが出る。というよりも、前からずっとそう自認していたからだ。

——やはり、単なる都合のいい話し相手なのだ。

やけに気にかけてくるところも、結局は平塚の自己満足だ。カップルコンテストなる縁遠い大会と一緒に出かけるところも都合がいいからだ。

すると、即座に次の問いが生まれる。

——では、そうとなるとそれこそロボットのよう上位種たる存在が現れたら、簡単に気兼ねなく億劫もなく交換できるものなのだろうか。

八幡の中にこの問いが湧いてくるたび、それこそ少し前までは答えが出ていたはずなのに、今では答えを紡ごうとすると、今ではヒリとしたこそばゆい痛みが襲ってくる。

『友達止まり』

パーマ男は確かに言った。引つかかった言葉だ。その男と平塚は、『友達』ということらしいのは認識できた。まるで、悪いことのようにパーマ男は語っているが、そこには確かな繋がりがあるという事を示しているのだ。

それに比べると——。

そうして放心していた八幡の目を覚まさせたのは、野郎共の下卑た歓声とゴールの号砲だった。

「平塚も、凄かったなあ！」

「まじで、バインバインだった。やべえよ」

おしくらまんじゅうとでも言わんばかりに男達でぎゅうぎゅうに詰まっていた観客席は既に開けており、懇談会を開かれていている。白線のレーンの内側に目を凝らして見ると、平塚が他の生徒会のメンバーと談笑しているであろう様子も見える。

部活対抗リレーが終わったことは、火を見るより明らかだ。

これはあれだけ見て欲しいと言っていたので、どやさされると、数時間後の未来の様子を案じた。

——しかし、途端その未来も真っ暗に移る。

「そうだ、昼休み入ったら平塚に写真撮ってもらおうぜ！」

「うわあ、お前下心見え見えだぞ」

「べつ、別にいいだろ。それに下心じゃねえ。騎馬戦の感想を言うついでに、撮ってもらうだけだ」

「かかっ……い……ほんとに、そっちがツイでか？」
「うっせー！」

そんな近くにいた男たちの会話を聞くと、八幡はおもむろに立ち上がり、その場を立ち去った。

少し、耳の穴に人差し指を添えて。

そのまま、昼休み明けの次の競技の開始まで、八幡はグラウンドに戻ることは無かった。



昼休みが明け、スピーカーを通した声と、歓声が混ざりあった喧嘩囂とした音が、静寂な校舎の中にまで響くようになる。だが、音は聞こえても声は聞こえない巨大な防音室のようなこの空間が妙に心地よく感じていた。

八幡は校舎を彷徨うろついていた。そして人気のない階段の踊り場で腰を下ろし、菓子パンひとつの食事を済ませ、ただ出場する種目の呼び出しがかかるのをキリンとまでは言わないが首を長くして待つ。

——時計を見れば、もうまもなく、学年対抗リレーの呼び出しがかかる時間だ。重い腰を上げてその場を離れると、靴を履いて、昇降口から外に出る。

集合場所に来て、自分の順番の位置に座る。奇数番組と偶数番組で分かれていて、八幡は後者だった。座ったその周りは、何々君早かったよね。だとか、何何ちゃんと写真撮れた。とかを恥ずかしげもなく和気藹々わきあいあいと話している。

全くの無縁であるし、聞きたくもなかった八幡は、体育座りをし、膝に顔を埋めた。

そして、係の人による声かけに合わせて立ち上がって、入場する。

『まもなく、2年生による学年対抗全員リレーが始まります』

そのアナウンスと共に、第一走者が所定位置について、スタンバイした。学年リレーは紅組、白組をそれぞれ三クラスずつの三チームに分け、先着順で競う。つまり六レーン使うのだ。A・B・C、D・E・F、G・H・I。そしてJをそれぞれのクラスに三等分に分配し、それぞれを前から1、2、3と振り分けている。つまり、八幡達のチームは白1だ。

突然の余談だが、大抵第一走者は人気者であることが多い。運動でできることとコミュニケーション能力が高いことは正の相関関係がある事はまことしやかに伝えられているし、それは現実味がある。

だから、クラスメイトたちは、人気者の彼らに向かって精一杯の声援を投げかける。第1走者も満更でも無い様子で、手を振って応える。

はてさてこれが動物園のそれと何が違うのか、と思っていたこともあったが、さすがに自重するようになった。

『位置について、よーい』

ドンっという号砲の合図で走り出す。

八幡の順番は前から一五番目、この列にすると手前から八番目。真ん中というのは基本最も盛り上がりがない区間だ。つまり、八幡のような人物が割り当てられるのだ。

リレーのバトン練習も幾度かしたが、特別問題などもなく、前後の人とそれぞれ一言二言交わして終わったただけだ。

二番手に渡っても、声援は止まない。

特に後ろの女子達が騒ぎ始めた。すぐ後ろは、教室で良く平塚と仲良くしている背が高く、少し痩せ気味で、ボブカットの女子だ。

「京ちゃん、京ちゃん！ たっくんの番来たよー！」

別の女子が長身の女子——京ちゃんを煽る。たっくんとは、このクラスで人気者のサッカー部の男子の事だ。

「ばっ、ばか！ 余計なこと言うな！ もう、そんなんじゃないし」

すると、顔が見えない八幡にも分かるほど、照れているのが伝わる。その後も軽口を叩き合っている。肝心のたっくんのこととは見ていないような気がするのだが、突っ込むことなど当然しない。

その思いを寄せられているたつくんもミスすることなく、現状維持の順位でバトンを渡した。

そして、そうこうしてるうちにいよいよ八幡の番が来る。

一列の人達が全員走り出していくと、列先頭の八幡にお呼びがかかる。八幡の組の順位は現在四位である。

隣の人は頬を何度か叩いて深呼吸をし、別の人は友達に「やばい緊張してきた」と不安を吐露する。何を勘違いしているのだろうかと思わず八幡は心のうちで嘲てしまう。この順目の走者は別に期待されていないのだ。ただトラックを走り、失敗しさえしなければそれでいいという簡単な役割だ。盛り上がるはずも無いから、緊張などする必要無いのである。つまり八幡含めこの順目の人達は受け取った時の順位をキープすれば良い。

しかし、その八幡の中の常識に反し、この順目で、観客の歓声はドツとあがった。

その歓声の行先はこちらに向かってくる偶数番目のランナー。グングンとスピードをあげ、外回りで、一人、二人と抜き去っていく。その綺麗な漆黒のポニーテールは、淡白な色の景色の中で優雅にたなびいている。

「白1の方、準備してください!!」

係の人に指示されたとおりにレーンの一番内側で、構えの姿勢をする。まもなく一番手に来るのは白1チーム。だが、走っているのは、いつもリレーの練習相手をしていた女子ではない。

「比企谷っ、ゴーツ!!」

聞き馴染みのある声に背中を押され、右手を後ろに構えて、走り出す。

まだ距離はだいぶあったように思えた。

リレーの練習相手とは、テイクオーバーゾーンだけは超えることだけはならないようにと確認し合い、できるだけ手前で受け取るように決めていた。

このままだと、出てしまうかもしれない。だが、身体は意に反して動いていた。

『頑張るんだぞ！』

『できればじゃない。絶対に、だ！』

テイクオーバーゾーンのラインから出かかった時、差し出した右手に寸分違わずバトンが差し出された。それをギュツと強く握る。そして、そのままの勢いで走り出した。

「行けっ、比企谷っ！ 全力だあ！」

また、グツと背中を押される。

『倒れなければいい。バトンを繋ぐだけでいい』という思考が回らなくなっていた。

ただ、全力で、足を回して走る。

コースの内側を袂りに袂るように。

——走る。

——走る。

いつもリレーで走る時はハッキリしていた視界が、この時は、霞んで見えなかった。ただ、コースの茶色と端を踏んでいる一番内側の白線だけがぼんやりと見える。歓声は何も聞こえなかった。まるで自分一人だけの世界を、ひたすら何も無い場所を駆け抜けていくような感覚。

気付けば数十メートルの距離があつという間に終わりを迎える。

テイクオーバーゾーンがまもなく迫る。バトンの持ち手を変え、

「行けっ！」と、息切れがかった乾いた声を張り上げた。

「行けっ！ 比企谷っ！！」

何も聞こえないはずの世界で、その声はここまで聞こえてきた。

最後まで。走る。

そして、次の走者の右手へと、バトンを差し出した。

差し出した瞬間、周りの景色が急に現れ、軽い目眩で、足元が掬われるような感覚に襲われた。

だが、そこで息つく暇もなく係員に白線の内側へと掃き出される。前方に目をやると、前のランナーは一位で走っていた。

心臓の鼓動が速い。緊張というよりも、息が荒いがゆえの鼓動の速さだ。膝に手を付き、前かがみになってゆっくり呼吸を整える。

そのまま、走り終わった列の最後尾で尻を地面につけた。息を深く吸う度、急激にかわいた喉元にそれが擦れて、ヒリヒリする。

一番で受け取ったバトンを、一番で繋いだだけ。確かに、当たり前なことではあるのだが、鉄とプラスチックの合の子のような少しずしりとしてひんやりとしたバトンの感触はまだ手に残っていた。

その後も、リレーは進み、お役を全うしたこの列の人たちも、緊張からの解放もあつてか、自分の番を待っていた時以上に盛り上がりを見せていた。

自分たちのクラスはいまだに一位をキープしている。一位でバトンを繋いでいることも、この盛り上がりを助長させているに違いない。

レースも終盤へと差し掛かりポケーツと、行く末を眺めていたが、前の男たちが、「また、平塚が来る」と叫んだのを聞いて、目がまたおもむろに動いてしまう。反対側の、つまり奇数番目のランナーが今、全員出ていくと、その次に平塚がトラックの中へと足を踏み入れている。

奇数番目のランナーが、偶数番目のランナーに渡し、そのランナーが、平塚に渡す。

その瞬間、

「すっげえ、揺れてる!」

「静ファイト!」

「やばすぎる!」

「静、頑張れ!」

純粹な欲望と純粹な声援が織り交じった。

男たちの言うように確かに揺れていた。平塚の豊かな胸部は走る度に、縦に揺れる。それに魅了された男子たちは、悦びの声を狂ったようにあげるが、八幡は思わず息を飲んだ。揺れる胸だけじゃない、たなびくその漆黒の後ろ髪に、端正だが、少し歪むその横顔、そして懸命に腕を振り、必死に足を動かすその姿に、八幡は目を奪われていた。

そして、平塚は周りの期待を裏切ることなく、バトンを一番手のま

まで渡した。走り終えた平塚はさすがに疲れた様子で、列の最後尾に座る。

すると、すぐ後ろにいて大きな声援をかけていた長身の女子はいつの間にかいなくなり、ほか数名の女子と共に、さすがにくたびれた様子の平塚の元へと駆け寄っていた。「よかったよ!」「めっちゃ速かった!」と定型句みたいな言葉を投げかけ、平塚はそれに笑顔を返していた。

特に波乱もなく、そのまま学年対抗リレーが終わった。

八幡のクラスは、一着でゴールしていて、失格など特になければ、一位となるわけだ。チームメイト達は、「凄い凄い!」「練習頑張って良かった」と輪を作って喜びを共有している。

練習の時は散々文句を垂れ、大縄の時には世にもおぞましい陰口を叩いていた人達が、「みんな最高のチームメイトだ!」だとお通夜のような雰囲気ของทีมにも聞こえるように大声で称えあっている。八幡以上に練習に來なかつたサボリ魔君も、「あそこのお前、めっちゃ速かつたな!」とレースの様子を友人と興奮気味に語っている。

結局、『勝てば官軍』なのだ。

そんなクラスメイトの様子を見つめることもなく、八幡はどこか遠くを見ていた。共有できないのも慣れっこだ。輪に入れないのも慣れっこだ。でも、どこか――

そんな時、バツと視界が変わった。

でも、そのシルエットは今度ははつきり見える。

「やったな比企谷!」

「お、おう」

「いい走りだったぞ!」

「そりや、どうも。まあ、別に俺は繋ぐだけだったからな」

「そうだ、私が一番になったんだからな、もしミスしてたら今頃どついてるだろうな」

あはははと女子らしくない高笑いをかまし、どつきとは程遠い正拳突きof ジェスチャーをする。

「つていうか、なんで突然平塚に変わってたんだよ」

「ああ、それはだな——」

平塚いわく、八幡の一個前を走る予定だった人は体調不良により、代走したということだった。つまり、平塚は二度走ったということだ。

「昼休み中に君に伝えようと思ったんだが、どこにもいなかったから伝えられなかったんだ」

「なるほどな」

「まあ、何はともあれだ！」

平塚はバツと両手を肩幅程度開き、前に構えた。

八幡はその突飛な行動に瞠目する。

「その構えは何……？　パントマイム？」

「何って、ハイタッチに決まってるじゃないか、このタイミングでパントマイムなどする訳なからう？　ほれ」

「……俺はやらん。触ったら比企谷菌に感染したとかいわれるぞ」

「そんな幼稚なことするわけないだろ……。全く」

平塚は、ハイタッチ分の幅で掲げられた両手から、更に幅を広げた。

「じゃあ、ギョツて今から抱きしめられるのと、ハイタッチ、どっちがいい？」

突然の二択に八幡は当然、動揺する。

「はっ?!　わ、訳わかんねえし」

瞬きの回数が露骨に増え、眉も合わせてぴくぴく動いてしまう。

「ほれほれ、どっちだ」

「わ、分かったよ。ハイタッチすりゃいいんだろ」

「別に私はハグでもいいんだがな」

「からかうな」

八幡も嫌々とハイタッチの構えをとる。

「イエーイ!!」

互いに土にまみれてるものだから、叩き合うとパント、乾いた音が鳴った。だがそれでも平塚の掌は、想像以上に小さく、やわっこく感じられた。

そして、八幡に向けて、平塚はあけすけもなくにつこり笑っていた。

そういう笑顔に、男は弱い。冷静な自分は誰にでも向けられると知っているはずなのに、ジンジンと内側から暖まっていくなのを感じた。

「比企谷はこれで終わり？」

「そうだな。最後に救護係のシフトは残っているが。お前は選抜リレーか？」

「ああ、そうだな」

「頑張るぞ」と意気込んだ平塚は拳を握りしめて、ガッツポーズを見せつけた。

だが今、思えばこれは空元気だったのだ。



——八幡は、保健室にいる。当然、サボリではなく、救護係として、だ。保健室の棚を上から下まで満遍なく確認し、今、ベッドで寝込んで休養している人の具合に適切なものがあるかどうかを品定めしているところだ。

最初は、その人が倒れた時、騎馬戦の時と同様にとっても心配されたが、十分に対話できるほどの意識があったことと、痛みを伴っていなかったことから、重篤な病気ではないと判断され、保健室での療養となっていた。

「……無理しすぎなんだよ」

独り言が漏れ出る。正直、八幡は心配する必要は無いだろうと思っていた。だが、それは八幡の思い込みに過ぎなかったのだ。

八幡が、ガーゼなどが入っているもう一つの棚を漁っていると、ギシツとカーテンで仕切られたベッドから、それが軋む音が聞こえた。その音を聞くと、すぐに棚から手を離し、カーテンを開け、目の前のベッドを覗く。

そこには、やや青い顔で、はあはあと落ち着かない呼吸をして、布団をまくりベッドから腰を上げている姿が見えた。そして、目がやや虚ろになりながらも、こちらの方に視線を向け、いつもよりだいぶか

弱い声音で、「比企谷……？」と確かめてくる。そうだと返すと、続いて、場所はどこと、やはりか弱い声で尋ねてきた。

「保健室だ」

「ほけんしつ……？ 比企谷、具合でも悪いの……？」

「まあ、通年悪いみたいなものだが、いつも通りの具合だ、こっちは。今回、具合が悪いのは、お前の方だよ……」

「わ、わたし……、だって、わたしは……」

続きを言おうとした平塚だったが、唐突に汗ばんだ額に手を当てて、呼吸音が大きくなり、辛そうに呼吸をしていた。八幡は、再び平塚を寝かせて、そっと布団を被せた。

「はあ、はあ……」

目を瞑って、辛そうに呻く。顔にはうっすらと汗が浮かび、その綺麗な黒髪に滴っている。状況が状況であればひどくなまめかしいのだろうか、とてもそのような情は湧かない。八幡は、棚から引っ張り出した、新品の白のタオルを冷水に濡らし、それを平塚のいかにも熱くなっというような赤いおでこにそっと乗せた。

「体育祭は……」

「もうそろそろで終わりだ」

「え、でも……」

「学年対抗リレー走り終わった後、お前、パタッと倒れたんだよ。ほんとに電池の切れた機械みたいにさ」

「……そうだっ、け。でも生徒会の仕事……」

平塚は震える手で布団を握り、なんとか上体を起こそうとする。水に濡れたタオルもポロリと布団の上に落ちた。

「無理だ。やめとけ」

「怒ってる……？」

「ああ、そうだ、少し怒ってるな。お前みたいなやつが働きすぎるから長時間労働がデフォみたいになって、俺みたいなやつがこき下ろされるんだよ」

平塚を再び横たわらせて、また額にタオルをのせる。

「第一、騎馬戦も出て、リレー三種類も出たらこうなるに決まってる。

いくらなんでもオーバーワークなんだよ」

彼女を見て心に募ったものが少し口から漏れ出ていた。

「特に騎馬戦なんか、最後まで残って、あんな滅茶苦茶な戦いして、別に倒れるまでしなくても——」

「比企谷、やっぱり、ちゃんと見てて……くれたんだ……」

「ち、違う、人間観察が得意なだけだ。たまたま校庭覗いたらたまたまやってただけだ」

「見ててくれて、嬉しいな……」

「——っ」

そうやって弱々しくも、笑みを向ける平塚の姿を見て、もうかける言葉をなくしてしまった。

「喉乾いた……水……」

そう言って再び起き上がろうとする。それを八幡は再び静止した。

「俺が取りに行くから、少し待っとけ」

カーテンを開けて、すぐそこに生徒用として置いてあるペットボトルの経口補水液一本取りだして、そのキャップを緩めて平塚に差しだした。

「水よりもこっちの方がいいだろ。ほれ」

「ん、ありがとう……」

平塚は口元を飲み口につけると、少しだけ傾けた。

喉を鳴らす音がすこし聞こえる。それは、どこか妖艶で、少し、八幡にとっては耐え難いものがあった。

「じゃあこいつはここに置いておくから、好きな時に飲んでくれ。そろそろ保健の先生も来るし、お前の友達も見舞いに来ると思うから。安静にしとけよ」

席から立ち上がり、逃げるように、離れようとした時、長袖ジャージの裾をキュツと力なく掴まれた。

「いっちゃうの……?」

「まあ、そうだが」

そう答えると、掴まれた袖が、少し平塚の方へと引っ張られる。

「待って——……」

また少し引つ張られる。

「一人にしないで……………もう少しだけそばにいて……………」

ストン。八幡は席に座った。「ありがとう」の言葉には、素直にどういたしましてとは返せなかった。

「ねえ、比企谷……………」

「なんだ、また飲み物か？」

平塚は一回横に首を振る。

「——楽しかった……………」

「……………去年よりはな」

「よかった……………、比企谷が楽しんでくれて……………」

その答えを聞くと、愁眉しゆうびを開き、平塚はすつと目を閉じ、穏やかな顔で、赤子のように寝息を立て始める。しかし、未だに袖を摘んだままだ。

いつもは年不相応な出で立ちと振る舞いを見せる平塚の今の弱々しい、逆の意味で年不相応な幼さは、八幡にとっては驚くものと同時に、気持ちの悪い高揚感をもたらししていた。窓越しの夕日に照らされながら、安らかに眠るオレンジ色のその顔を見ていると、不意に八幡は手を伸ばしていた。

「んっ……………」

その時、少し平塚の寝相が崩れた。

伸びた手がピタリと止まる。

思いもよらない自らの行動に口元が大きく歪んだ。

怖くなった。不安になった。制御装置が壊れてしまったのかと思った。

が、今回はすぐに答えが出た。

感じたことのない電流がビリリと走る。そして、将棋倒しのごとく得体の知れない感情の正体に気付く。
知・り・た・く・な・っ・た・の・だ。

目の前の平塚の姿を見て、今までの平塚の姿を見て、平塚の手の温もりを知って、そしてもつと、知りたくなつたのだ。ポカンと口を開け、天井を仰ぐ。ヒリヒリとした胸の痛みも、きつとこれが根っこ

だった。

だが、八幡は都合のいいロボットでなければならぬ。

私的な感情は一切ない、ただ相手の望むことを、考えて行動するロボットなのであり、それをするだけがいいという簡単な仕事なのだ。期待はしない。勘違いもしない。だから、知ろうとしない。関わろうともしない。もししたら、ただ傷つくことを知っているから。

だが、今、制御のプログラムが必死に押さえつけているが、ショートしかけている。

端的に言えば、このロボットは壊れかけている。

壊れたロボットは、果たして、どんな最期を迎えるのか。

とても簡単な話である。

その結末を、浮かべることが酷く恐ろしくて、八幡は考えることをやめた。

そして、力ない握り拳で、意味もなく自分の頬をこれまた力なく殴っていた。頬骨から出る鈍い音は、カーテンに遮られ、その個室に虚しく響いていた。全て見ていた夕陽は、まるで嘲笑うかのようにカーテンの隙間から八幡の顔を明るく照らしていた。

四束： S o m e d a y i n t h e R a i n y
S k y

日がとつくに顔を出した時間だというのに、真四角の窓の外は、灰色に覆われて暗い。そして、その灰色があまねくものに疎まれることに胸打たれたのか、しとしとと涙を流している。

今は梅雨。

梅雨はそもそも湧かない活力が灰燼かいじんと帰す季節でもある。そうすると、平日の学校なんでものは登校拒否したくなるのも摂理だ。

この男——比企谷八幡も例外ではなかった。

むしろ、遅刻の常習犯である八幡からすれば、雨の日は本当に学校に行く気が失せる日なのだ。それゆえ、当然遅刻率も晴れの日に比べて高くなっていった。

唐突に、ジリリと容赦なく鳴り響く目覚まし時計。人の都合で鳴らされてるのに、人にここまで疎まれる存在はあるだろうか。

無機質な音のうるさすぎるノックで無理やり起こされた八幡は、寝ぼけ眼を開くこともままならない。

加えて、やけに体は重く感じるし、顔はいつもよりも火照っている。目を覚ましたあとともぐずり続ける目覚ましをあやすために体を起こそうとすると、勝手に身体が右へ左へと振らついでしまった。自分の意識がどこか遠くにあるような違和感。試しに小声を出そうとすると感じる喉のイガイガ。そして、額に手を当てて原因に気付くのだ。「あちっ……」

風邪をひいてしまった。熱と倦怠感と喉のイガイガと頭痛のアンハッピーセットである。



今朝、風邪をひいたと気付いてから数時間経った。

貧弱ではあるが病弱ではない八幡が風邪をひくのは随分久しぶりのことだった。

そういう訳で最初、妹の小町は、体調を崩した八幡の様子を見てズル休みを疑っていた。しかし、体温計の温度とそのガラガラ声から嘘ではないと気付いたようで、登校するまでの間に八幡のために濡れタオルやら何やらと色々と用意をしてくれた。

その後、小町が家を出てからは、自分の部屋の布団にただひたすら籠り、うんうんと魘うなされながらも、一度眠りに落ちると、目が覚めた時には、大方症状は快方に向かっっていて、小町が用意してくれた皮が剥かれたリンゴなどを頬張るほどの食欲は出てきた。比企谷菌の大勝利である。

かといって、本調子では無いのは確かで、別段精を出す趣味もない八幡は、ただ布団にくるまって、ブーツと天井を眺めているだけだった。

——暇だ。

世の人々にとつてはきつと当たり前の感覚だろうが、八幡にとつては不思議で慣れない感覚だった。

第一、少し前に「一人だけの世界でも生きていける」と心の中とはいえども豪語してみせた男が暇を感じている。

正当な理由で学校を休んで、体調が優れないとはいっても、親鳥の両翼に包まれてすやすや眠る雛鳥のようにふかふかの羽毛布団に我が身を預けくるまり続けていることは、八幡にとつたら最大限の幸福であるはずなのに、退屈すら覚えはじめていたのだ。

そして、八幡が暇を持って余している中、つい先程妹の小町が、中学校を終えて帰ってきた。

小町は帰ってくるなり、駆け足で八幡の部屋に入ってきた。少し髪と制服が濡れていて、息が少し上がりながらも、「お兄ちゃん大丈夫？」「まだ熱ある？」「なにか小町にして欲しいことある？」と、至れり尽くせりの手厚い対応を施してくれた。普段はごみいちゃんなどと蔑んでくることもあるし、小生意気なことを言うこともあるが、こ

ういう時には気が利くところは本当によくできた妹だなと八幡はしみじみ感心する。

コンコンと二、三度部屋のドアが叩かれて、「お兄ちゃん入るよ」と小町の声が聞こえた。

入ってきた小町は、白いタオルを入れた風呂桶を腰元に抱えている。

「はい、お兄ちゃん、これ、替えのタオル」

「ありがとな、小町。色々と迷惑かけちまって」

髪などは乾いているものの、小町のセーラー服の浅葱色の襟元にはまだ濡れて滲んだ跡がぼんやりと浮かんでいる。

「いいのいいの。お兄ちゃんには小町しかいないんだから。小町がいなかったら、お兄ちゃん死んじゃうでしょ?」

「いや、そんなことは……」

自信なさげに否定しようとする、小町は濡れタオルを八幡の額にのせながら、「ないわけないでしょ」とさらに強く否定して返してきた。何も言い返すことはできない。兄の沽券は引きちぎられて、ボロボロだ。

「だから、しょうがないから、小町がいつまでも面倒見てあげる」

とんでもないことをサラツと言つてのけた小町は、なにかに気づいた様子で「あつ!」と声をあげた。

「今のって、小町的にポイント高い!♪」

遺伝子レベルのアホ毛はピンと張り、そして相も変わらず腹立つ顔とポーズを決めている。

「それを言わなければ、ポイント高いんだけど」

「うるさいなあ、とにかく小町に、感謝してくれてもいいんだよ!」

「まあそうだな、感謝はしてる。ありがとな小町」

「おー、お兄ちゃんが珍しく素直だ。風邪でもひいてるのかな?」

「ひいてるんだなあ、これが」

「あつ、そうでした! ふふっ」

そんな軽妙な会話を交わしながらも、小町はテキパキと手を動かしてくれている。

少し前まで泣き虫だった気がしたのに、いつの間にか、すっかり屋さんになつてしまった。八重歯の似合う子供らしいあどけない顔から、面影は残しつつも大人びた顔立ちにもなっているのを感じる。

——小町はいつか立派なお嫁さんになるんだろうな。

そんな嬉しくあるようで、寂しくもある青写真を描いてしまう。

いつまでも面倒見てくれると宣言してくれたが、きつとそんな小町ですらも八幡の元を離れていなくなってしまう日が来る。

『お兄ちゃん、じゃあね』

——ダメだ、そんなことになったら。

『今まで、ありがとう』

——小町っ……………！

そう言い残して去っていく未来予想図の中の小町の背中は、どんどん小さくなつていく。その度に、本当に小さな背中だった時の妹の思い出が蘇ってくる。ただ違うのは手を伸ばしても、もう届かないということ。頭を撫でると、にひひと笑ってくれた小町はもう見れないということ。

——小町い……………

気付けば、自然と手を伸ばして、兄弟の証であるつんとんがったアホ毛を巻き込んで、慈しむように毛並みに沿って無言で撫で始めていた。以前と変わらず、アホ毛は撫でる度に、反発して、シャキッとたつてくる。

「な、な、なにっ、お兄ちゃん……………?!」

小町は兄の突然の挙動に、驚きはするも、抵抗はしなかった。顔を真っ赤に染めながらも、猫のように次第に目を細めていく。

「も、もう……………やめて、お兄ちゃん、恥ずかしい……………」

流石に恥ずかしいようで、三〇秒ほど撫でたあとでサツと手を払いのけられた。小町は「これだから、ごみいちゃんは……………」と文句を垂れ流しているが、そんな癪に障っているようではなかった。むしろ満更でもなさそうに見えるのは、都合がよすぎるだろうか。

小町はコホンと可愛らしい咳払いをして、「そういえばだけど、この風邪、昨日のでしょ。お兄ちゃんが帰つてる途中で大雨にあつて、ず

ぶ濡れになってさ」と言う。

「多分そうだな」

「学校に傘忘れるアンド一応雨の予報出てたのに放課後サイゼしてたからでしょ！ お兄ちゃんらしくないな。そういうところはきちりしてると思ってたのに」

「そうだったな、ボケーツとしてたわ。これは梅雨のせいかもな」

「ふふっ、何その変な言い訳」

一通り整理し終えた小町は皿に乗っていたリンゴがなくなっていることに気付き、皿を手に取り、お腹がすいてるかと思ねてきた。

「まだあんまり食欲はないかな」

「うーん、じゃあまたリンゴにしよっか。一応何かしらあった方がいいと思うし」

「ああ、頼むわ」

「はい」

小町はタオルをつけてた水が少し入った風呂桶や、リンゴの皿を小さなからだで全て抱え込んで部屋を出ていった。ドタンドタンと階段を駆け下りていく音が聞こえる。

そして、ちょうどその時だった。ピンポンと家のインターフォンが鳴ったのは。この時間帯に来るのは、小町の友人か宅急便ぐらいだ。だから特に気にすることなく八幡は小町がリンゴを運んでくるのを待っていた。

—— かれこれ一〇分以上待っていた。しかもその間に下の階からドタドタと小町の足音が聞こえてくるうえに、時折、「ええ?!」「本当ですか?!」「ストップ!」となにかと叫び声が響いてくるので、小町は何をしているんだと八幡は不思議に思っていた。だが、間もなくして、コトコトと階段をのぼってくる足音が聞こえ、そのすぐ後に部屋の扉が二回叩かれた。

「その、比企谷、入っていいか……?」

「いいぞ」と答えようとした時、八幡は強烈な違和感を感じ、おもわず上体を起こした。小町が額に乗せてくれた濡れタオルもポロリと落ちてしまう。八幡に問いかけてくるその声は、明らかに高めの小悪

魔っぽさかつあざとさ成分の強い猫のような小町の声では無いのだ。しかし聞き覚えはある。声に張りがあり、あざとさなどは一切ないが、どこか安心できて、包容力のある声。小町の猫の声と比べたらまるで犬のような。

だが、まさかいるとは思うまい。だってここは学校ではなく道端でもなく、必然の出会いも偶然の出会いもありえない比企谷家なのだから。

「返事がないな……。つてことは……。はっ！ なにかあったのか?!」
ボタンと、思いつき扉を押して入ってきたのは、
「比企谷っ、大丈夫かつ?!」

あらぬ勘違いをして、青色へと血相を変えている平塚静だった。薄手の白シャツと、膝上丈のチェック柄のスカートと普段よく見る制服で身を包んでいるが、凜とした顔立ちと、そのスラっとした立ち姿、出るところは出て、引き締まるところは引き締まっている外見は相変わらず高校生離れしている。その左肘にはスクールバックが引っ掛けられ、リンゴを乗せた皿が左の掌の上のつかっている。

「あ、ああ……。全然、つてわけでもないが、お前が今思ってるよりは全然大丈夫だ、平塚」

平塚静は「よかった」と胸を手に当てて、ほっと一息ついていた。良かったのかもしれないが、問題なのは平塚がそこにいることだった。平塚が八幡の部屋に入ってくることに違和感を拭いきれない。

「……。なんで、いるんだ?」

「なんでって、そりゃあ、お見舞いに決まってるじゃないか!」

平塚はにこつと笑って確かにそう言った。彼女はどうかやらお見舞いに来たらしいのだ。



平塚は運んできたリンゴを八幡の勉強机に置くと、勉強机の椅子に腰掛けて、彼女のバッグの中からクリアファイルを取り出し、紙を数枚取り出した。

「これ、今日の授業のノートのコピーと宿題だ。ここに置いておくからな」

「ああ……ありがとう」

平塚はその紙を机の上に置いた。

やはり、自分の部屋に同級生がいることへの違和感が拭えない。しかも同性ではなく異性がいることに。

「なあ、平塚。なんでお見舞い来たんだ？」

「なんだ、そんなに私がお見舞いにこられるのは迷惑か」

頬を膨らませて、ムスツとした顔になった。

「いや……、そういうつもりじゃなくてだな」

予想外の反応に慌てている八幡を見て、いたずらっぽい笑みを平塚は浮かべる。

「あはは、冗談だ。お見舞いに来た理由は、昨日のことがあるからだ、傘も返さなければならぬし。それにあの時、看病してもらった礼もあるしな」

「……申し訳ない。変な気遣わせて」

「なに、君が気にする必要は無い。私がしたくてやってるだけだからな」

「それと」と平塚は付け加える。

「今日メールしたのに全然返信が来なかったからな。ちよつと心配になって、というのもある」

「ああ、すまん。携帯まったく見てなかったわ」

「まあ、風邪だからな。私も失念していた。嫌われてしまったかと思つたぞ。私もうつかり屋さんだな」

八幡は枕の下に敷かれていたガラケーを手に取り、何気なく切られていた電源を入れた。

すると、ガラケーの画面が光った瞬間に、『You got a mail!!』の輪唱が始まり、恐怖に怯えているかの如くバイブレーションが止まらなくなった。

ようやく収まり、恐る恐るメールを開いてみると、

『今何をしていますか。返信ください』

『学校お休みになっっているようですが、昨日のことが原因でしょうか？ 返信ください』

『授業内容などはどのようにお伝えすればよいでしょうか？ 宿題と
かも渡した方がいいですか。返信ください』

『無視しているんですか。やはり私のせいですか。ごめんなさい。謝
りたいので、返信ください』

『学校終わりました。傘ともろもろを届けに行きます。返信くださ
い』

『今、学校の近くのコンビニにいます。なにか買った方がいいものは
ありますか。返信ください』

『今、あなたの家の近くにいます。色々渡したいものがあるので、出て
きて貰えますか。返信ください』

『今、あなたの家の玄関の前にいます。インターフォン押しでもいい
ですか。返信ください』

『今、リンゴをあなたの部屋に持っていきます。よろしいですか。返
信ください』

八幡はあまりの恐ろしさに思わず携帯を投げ出しそうになった。
メールになると言葉遣いが異様に丁寧になるのは知っていたが、その
ことが相まってよりおぞましさを引き立てている。

携帯が震えていた気持ちも痛い程を共感できた。

何よりも恐ろしいのは、このメールも一部抜粋であり、一〇秒おき
にメールが受信されているものもあって、全て合わせたら、一〇〇通
はくだらない夥^{おびただ}しい量のメールがよこされているのだ。しかも、途中
から、どこかの怪談でもみたような展開も始まっている。

人の方が幽霊よりも怖いとは誠に正鵠を射ている。八幡の肝っ玉
は干し梅の模様みたいにしわしわに萎みきっていた。

「……」

「ん、どうした？」

「……いや、何でもない」

たった今、目の前で催されていた携帯電話の一人劇場を見ても何も
感じていない様子を見て、平塚からのメールは必ず返信しようと、八

幡は心に誓った。

言葉に詰まっていた八幡の様子を見て、少し首を傾げながらも、「と
ころで」と平塚は切り出した。

「比企谷、肝心の体調の方はどうだ？ 熱はあらかた落ち着いたとは、
小町ちゃんから聞いたが」

「ああ、それはもう大丈夫だ。しかもたった今さらに下がった。うん、
平熱よりもだ」

「……？ そうか、それはよかった」

「ああ、今日はありがとうな。じゃあ……」

上手く言葉が繋がらない。いかんせん、お見舞いというイベントに
遭遇したことない八幡はお見舞いの慣わしなぞ、雀の涙も分からも
ない。だから事の始末を追えなくなっているのだ。平塚はいつまでそ
の椅子に座っている気なんだと、次の一手を伺うしかないのだ。

そんな八幡のささやかな苦悩を知る由もない平塚は、「そうだ、今
日、文化祭の実行委員になってだな」と新たな話題を切り出した。正
直、平塚はもう帰るんだと早とちりしていたものだから、「え？」と会話
の流れにはそぐわないヘンテコな声を漏らしてしまった。

「え？ とはなんだ」

「ああ、ええと、それはだな、実行委員会になるんだと思ってな」

「私に向いてないか」

誤魔化そうとしたものの、明らかに平塚はまたむうと不機嫌そうに
頬を膨らませる。

「いや、平塚がまた無理をするんじゃないかなあ、と思つてだな」

「……私の事、心配してくれているのか？」

意外とあっさりごまかせてしまった。何とかごまかせたら、八幡は
口が乗るタイプだ。

「まあ、そういうことだ。だつてお前、そういうの抱え込むタイプだ
ろ」

「う、うん、確かにそうだな……。そういうこと言ってくれるのはやは
り君だけだ……」

平塚は少し俯うつむいて、声を細めた。しかし、その言葉にはそこはかと

なく感慨深げな気持ちで込められているように八幡は感じた。

「でも、私が決めたことだ、最後までやろうと思う」

八幡は「そうか」と安堵の吐息が少し混ざった声で答える。その後、実行委員について色々聞くと、どうやら平塚は『物品係』としてその職務をまっとうするらしい。

『物品係』は、それぞれのクラス、有志団体の要望に応じて、物品を用意し、それらの引渡し、また管理を行う仕事だ。だから簡単に言えば、本当の縁の下の力持ちであり、働くのは文化祭の準備の前日と片付けの次の日で、文化祭当日は大きな仕事がないものである。と、八幡は思っていた。

しかし、どうやら平塚によると話は違うらしい。

「物品班は、後夜祭のキャンプファイヤーの準備を任されているんだ」「キャンプファイヤー、か。忌々しいな……」

『キャンプファイヤー』という言葉を聞いただけで八幡は眉が八の字になる。

この学校のキャンプファイヤーは、漫画でよく見る文化祭の後にやるタイプのキャンプファイヤーだ。そして漫画でよく見る男女で踊れば、その二人はめでたく結ばれるといういかにも嘘くさい学校の伝説もあるのだ。

つまり、八幡とは無縁であり、去年は校庭の中心で行われていたキャンプファイヤーを見ることはなかった。かわりに火が吹くような勢いで帰途についたことは言うまでもない。

しかし、この言葉は間違いなく八幡の真意であるが、失言をしたと思った。物品班にもなっている平塚はきつと楽しみにしているに違いないと容易に推測できたからだ。こんなことを言ったら、『抹殺のラストブリット』なる拳が八幡の脇っばらに、別の意味でお見舞いされるのではないかと、一筋の冷や汗がツターつと首筋を流れる。

しかし、平塚は少し間を置いて、一言、「……私もそう思う」と口にする。予想だにしない言葉を聞いて、思わず目をまん丸くさせ、平塚の方を見やると、膝の上に乗せられた拳はプルプルと震え、口は真一文字に結ばれている。

「……何が伝説だ。ふざけるんじゃない！　なんで他人がイチヤコラするのを見せつけられなきゃならないんだ。伝説というのもヘタレな男女共がキャンプファイヤーに託けただけのクソみたいな伝説だ！　なあ、比企谷もそう思うだろ?！」

「お、おう……」

そのあまりの平塚の勢いに、同意見の八幡ですらねこだまじされたように怯んでしまった。

「すっかりそのことを失念していて、引き受けてしまったのは身から出た錆だ。だから、成功はさせる。だがな、もしイチヤコラを必要以上に見せようものなら、私は、消化器でキャンプファイヤーの火諸共全てを消す……」

「おお……」

感嘆の声とともに八幡はぐくりと大きな息を飲んだ。これは、八幡なんて比でないほどの過激すぎるキャンプファイヤーアンチだったのだ。「なんでそんな嫌いなんだ」と平塚に尋ねてみたくはなるが、それこそ文字通りこの家が吹き飛ぶほどの地雷を踏むことになるかもしれないと思い留まった。

ただ、平塚のような人がそういうことを嫌っているのは知らなかったし、こんな身近に仲間がいたことを知れて、口に出すことは無いが素直に嬉しくもあつた。

「まあ、頑張れよ。やるとしても殺らない程度にな」

「そうだな、善処する」

善処するという言葉がここまで恐ろしく聞こえるのも中々ないかもしれない。というわけで、平塚の意外すぎる一面を知ったあとは、アニメの話に移った。相変わらずアニメのこととなると立て板に水のように話す八幡が話し出したことで、平塚の顔はうってかわって表情がほぐれ、笑顔が増えた。

そして、一通り談笑すると、「そういうえば……」と平塚は突然、部屋の周囲をクルクルと見回し始めた。

この部屋にあるものといえば、三段の本棚とその棚の上に飾られた特撮系の数体のフィギュア、制服と最低限の私服が入ったウォークイ

ンクローゼットと勉強机ぐらいだ。

「平塚、どうした？」

「チエックだとも。男子高校生の部屋がどういものか気になってだな。こんな機会はそうそうないしな」

興味津々な顔で机の下など隅々まで見回すが、そんな平塚とは裏腹に八幡の背筋はピンと伸び、やたらと冷える。疚しいものや平塚に見られて恥ずかしいことはきつとほとんど無いはずであるし、あるにはあるがそれは小町にすらも見つかからないように嚴重に保管されているので、見つかるはずはないのだが、どうしても不安になってしまう。それにそれらを平塚に知られるのは、不安なんて言葉では言い表せないほどの恐怖があった。

「や、やめてくれ……」

「ふうん？」

平塚は親父がたまに見せるような見事なまでに腹立つにやけ顔をこちらを向けてくる。

「その反応から察するに、何か私に見られたくない、見られるとまずい、やましい事があるということかな？」

想像以上に板についているにやけっ面を変えることは無い平塚は、たぶん親父と同じぐらい面倒くさいと、直感が伝えてくる。しかし、こういうのは相手が諦めるまで、シラを切り続けるのが鉄則なのだ。「ない。そんなものはとづくにこの部屋からはデリートしてやったわ」

「ふうん……？」

相変わらずのにやけ顔だが、見透かされているのは百も承知だ。八幡は毅然とした態度でそれに向き合う。すると、にやけ顔は崩れ、「あつはははー！」と大きな声で笑いだした。

「しようがないな。私の良心に免じて詮索するのはよそう。知られたくないことは誰にでもあるしな！」

その言葉を聞いて、ほっとした反面、妙に気になることが八幡の中に生まれた。

「なあ、平塚」

「ん、どうした？」

「平塚は知られたくないこととかあるのか？」

平塚は今、『知られたくないことは誰にでもある』と言ったが、平塚にもあるのだろうかと素直に疑問に思った。その答えはほぼ知っているが、一応、確認してみたくなくなった。

その問いを聞いて、平塚は軽く笑う。でも決して茶化しているよう訳ではなく、その目はしっかりと八幡の目を貫いていた。そして、口を開いた。

「そりゃ、私にだつてある。無かつたら後悔などしないしな。誰にも知られたくない、踏み入れられたくない私の『乙女の秘密の花園』はきつと君が想像しているよりもとても広いものだと思う」

「そうだよな。うん、やっぱりそうだよな」

やはり、平塚もそうだった。これは決して、失望ではなくて、安堵のほうである。平塚を知れば知るほど、彼女が八幡が最も嫌いな青春の擬人化ではないことを知ることが出来る。そして、それを確認することで、安心できる。しかし、次の一言で、つかの間の安心が揺らぐ。

「——でも、知られない」

衝撃だった。

条件反射で八幡は「どういうことだ？」という言葉を漏らしてしまふ。完全に呆気にとられた。『知られたくないのに、知られない』、こんな逆説は八幡の中になかったのだ。

「確かにおかしいことではあるな」と平塚は呟き、「でも」と続けた。「その秘密の花園を見ても、外装だけは綺麗に塗装されて美しくて、でも一歩踏み入れたら中身は毒に冒された醜い花達に溢れて居る場所を見ても、受け入れてくれる人がいたら、この人なら知られてもいいって思えた人にはさらけ出してみたいんだ」

平塚の顔は、いつになく真剣な表情に変わっていた。その言葉は一朝一夕のものではなくて、ずっしりと重く固い芯があった。普段から高校生離れしている彼女だが、その言い種、仕種が余計に年不相応の印象を醸し出している。

八幡はその様子を見て、その言葉を聞いて、開いた口が塞がらなかつた。

だが、平塚の言うことは分からなくもなかつた。

というより、痛いほど分かつた。

自分の中にもその願望があることを、たつた今、知つたのである。

誰にも見られたくないもの、言えないことを好意的に、同情ではなく本心で真摯に受け止めてくれる人がいたらどれだけ心強く喜ばしいのだろうか。八幡にはそもそも家族以外の他人と親しい関係がなかつたから、こんな願望に気づく余地すら今までなかつた。八幡も知られたいのである。

それを、たつた今他でもない平塚に気付かされたのである。

そして、そんな奥底に閉じ込められていた願望に気づいた今、自分がロボットとして明確に壊れてしまったことに八幡は気づいた。

私的な感情を抱いている。期待をし始めている。勘違いをしかけている。もつと知りたくなっている。もつと自分から進んで関わりたくなっている。そして、知つてほしくなっている。きつと自分が傷つくことになるかと分かつているのに。

今までは、相手の都合に合わせる、適度な距離感を保つ、自分からは動かない、そんなロボットでいるだけでいい、と割り切れたはずなのに、彼女を見る度に、彼女と話す度に、彼女を知る度に、それがどんどんできなくなっていく。不思議なほど簡単なことであるはずなのに。

考えてみれば前々からそうだったのかもしれない。ただ、「こうでなければならぬ」という極めて理性的な制御装置が、ひたすら無理やりその感情を押さえつけ、奥へ奥へと押し込んでいたのである。

だが、今それを潜り抜けて、急にありとあらゆる火口から噴き出してきたこの感情は、今までの人生の中で、抱いたことが無い、初めての感情だつた。

「病は気から」とは正しくその通りで、八幡にとってその感情というのは、未知のウイルスだつたのだ。そして気づいてしまったが故に制御装置など、あつという間に破壊されてしまった。文字通り、歯止め

が効かなくなってしまうている。

冷静ではなくなる八幡をよそに、冷静になった平塚は、「私、今とても恥ずかしいことを言ってしまったな。忘れてくれ」とため息を吐いて自嘲気味に苦笑する。

そして、平塚はおもむろに制服のスカートのポケットの中から携帯を取り出して、時間を確認する。

「お、もうこんな時間か。比企谷もよく考えたら病人だし、早くお暇しなくてはだな」

携帯を閉じて、ポケットに再びしまい込むと、カバンのチャックを閉めて、平塚は急ぐように椅子から立ち上がった。

「じゃあな、比企谷。お大事に」

「……あ、ああ、今日はわざわざありがとうございます」

「ほんとだ。このお礼は高くつくからな」

「いや、このお見舞い自体がお礼じゃなかったっけ?」

「まったく、そこは男らしく『ああ、分かった』と言うところじゃないか」

「残念ながら、俺はその論理が通用する相手じゃないんだよ」

「ぷっ……あははー」

平塚は吹き出すように笑った。「すっかり忘れてた」と笑いながら答えると、平塚は八幡に背中を向けて、扉に向かう。

その濡れ羽色の黒髪が重なる綺麗な背姿を見送ることになるが、八幡の心の中はいまだにぐちゃぐちゃに掻き乱されているままだった。この未知の感情に気付いてしまった今、この先平静を保ち、ロボットらしく振る舞うことなどできなくなることは明白であるのだ。そして、この感情という名の酷く利己的な欲望を満たすために必要なことは、きつと明確かつ強固な親しい関係を構築することだということにも気付いていた。

ロボットのようには代替可能ではなくて、代替不可能な唯一無二の存在になることで、初めて満たされるのだ。

世間の人々が当たり前前のように使う、八幡にとっては当たり前ではない関係。

では、どうすればそんな関係になれるのか。

それはきつと今八幡が、平塚に伝えるしかない。

しかし、できない。

なぜなら単純に、勇気がなかったからだ。

失敗してきた過去が、そんな関係を結んだ他人を作ることができなかった過去が、今八幡の背中に何重にも積み重なって、重く重く何よりも重く、手を弛めることなく全てがのしかかってくる。

あの時も、

『お前、ここ使うなよ。ここは今から俺らが使うから』

『じゃあ、一緒に……』

『お前は——じゃねえんだから、無理に決まってるだろ。お前はあつちで一人で遊んでやがれ』

あの時も、

『ねえ、——になってくれない?』

『ギャハハハハ！ お前なんかと——なんてなれる訳ないだろ!! ヒキガエルはカエルとでも遊んでれば?!』

あの時も、

『あの子、いっつも独りだよね』

『——いないんだ。可哀想だね』

あの時も、

『比企谷と——? ムリムリムリムリ?! だってあいつ気持ち悪いんだもん、なんか急に会話入ってきて、求めてねえこと喋ってくるし、空気読めないし。あいつと喋るくらいなら、ASIMO君、だっけ。絶対、あのロボットと会話してる方がマシだろ!』

あの時も、

『ていうか、そもそも比企谷君と——にすらなつたつもりになんかないんだけどな、え、と、勘違いさせてたらごめんね。……つていうかメアド交換しただけで、そんなこと思っちゃうんだ……。あつ……。ごめん、全然、そういうつもりじゃ、気にしないでいいからね……。』
ここで拒絶されれば全てが終わる。こんな過去の経験達が、それだけは懇切丁寧に教えてくれるのだ。

だが、伝えなければ、明確な関係を結べなければ、恐らく平塚静は、遠くないうちに八幡の元から離れていく。それはどうしても嫌だった。

八幡が人知れずそんな葛藤を繰り広げる間に、平塚は扉に手をかけていた。だが、最後に平塚は「言い忘れてたことがあった」とこちらに振り返り、

「明日は、絶対学校に来るんだぞ！」

と告げる。そして、続けざまに、

「君がいない学校は退屈だからな！」

嘘偽りのない笑顔で、八幡に言った。平塚にとっては何気ない一言なのかもしれないが、八幡の胸はポツと熱くなり、グツと背中を押し、とても大きな一歩を踏み出す勇気を与えることになった。

「な、なあ……！」

想定以上に大きく上擦った声が出てしまい、その呼び掛けに平塚も胸を突かれた様子だった。その様子を見て、引き返したくなかったが、覆水は盆に返らない。ここまで踏み出してしまったら、もう進むしかないのだ。

「ど、どうした比企谷……？」

「あのさ、別に無理ならいいんだが……」

心臓の拍動が、異常な程に高鳴る。恐らく今までの人生で一番。ばくんばくんと。

「俺と、その、……」

言葉につまる。中々出てこない、あの言葉が。

——ここでこそ、男らしくだ。

そう強く強く言い聞かせて、腹を決める。

喉が痛くても、呼吸を大きく吸って——、

「俺と友達になってくれないか——?!」

言い終えた瞬間、ギョツと目をつぶった。きちんと言えたのかも分からない。きちんと伝わっているのかも分からない。心臓の鼓動は、収まることなく、むしろ先程以上にばくばくと破裂しそうな程に暴れている。

全く時間はたっていないだろうが、一秒にも満たないほんの僅かな沈黙ですらも、永久の長さに感じる。そしてまだ平塚の返答が来ないことで、余計に心臓は暴れ、瞼を閉じる力も強くなる。

「馬鹿か、君は」

どくん、と、心臓がここで最も大きな一拍を鳴らした。

だが、その呆れるほど簡単な言葉によって、まさしくグサリと一突きされたように心臓の拍動は収まった。目の力みも一瞬で解ける。だが、平塚の顔を見れなかった。ただ陽が差さない向日葵のように下を向くしかなかった。

「はっ、はははっ、そうだよな……」

安心と、それ以上の諦めと、さらにそれ以上の後悔で心の中で無数の自嘲が止まらない。新たな失敗、つまり黒歴史の二頁が今確かに、ここで刻まれようとしている。

所詮自分は、平塚にとつてのロボット。

やっぱり、壊れたロボットは捨てられるのだ。

「そ、その、忘れてくれ……」

「全く、やっぱり馬鹿だな、君は」

平塚は一呼吸置いて言った。

「とつくのとうに友達じゃないか、私たちは！」

「……え？」

とてつもなく大きな泡を食わされた八幡が、黒目を右往左往させて、やつと捉えた平塚の顔は、これまた嘘偽りない笑顔であった。そしてそれは紛うことなき八幡へと向けられている。

「なんだ、君は私の事友達じゃないと思ってたのか？」

「いや、でも……」

「まあ、確かに当たり前すぎて言葉にしたことはなかったな。では、こ

こでハッキリさせておこうではないか！」

平塚は、八幡の瞳を捉えて離さないほど真つ直ぐ見つめ、八幡に向けて伝える。

「私、平塚静と君、比企谷八幡は、正真正銘の友達だ！」

平塚は八幡のもとに歩み寄り、目の前にすつと、手を伸ばした。

これの意味がわからない八幡ではない。

八幡も手を伸ばし、互いの掌をギュッと合わせる。

その瞬間、平塚の柔らかく優しい手の温もりが直に感じられた。そして、それは瞬く間に全身につたわり、今まで体験したことないほどの未知なる熱が一瞬にして八幡を支配した。

そして、その手はどちらからともなく自然とほどかれる。そこにも寂しさなどは八幡は感じなかった。確かな熱がこの身に伝わり、まだ残っているからだ。

「よしっ、比企谷、これから、よろしくな！」

「ああ、……よろしく頼む」

こうして、平塚静という初めての正真正銘の友達は、八幡の中で、決定的に、他の人とは違うかけがえのない特別な人になったのである。



風邪の余熱か、はたまた先刻の余熱か。

平塚が去った後も、ほとぼりが冷めない八幡は、ベッドで横になって、ただ訳もなく天井を見つめていた。実を結んだ勇氣は、達成感となって我が物顔で懐の奥深くに居座っているが、今し方は目を瞑ってやることにした。今までの比企谷八幡にできなかったことをやってのけたのだ、それぐらいは許してやってもよかった。

ふと、机の上のリングが目に入った。その一切れを手に取り、すぐさま齧る。ひとときわ甘く感じる。しかし、妙な舌触りがあり、リングをよく見ると、皮がところどころ中途半端に残っていた。小町はこのようなミスを滅多にすることはないので、珍しいと感じながらも、そのリングの一切れを口の中に入れる。

そして、もう一つ机の上にある平塚が渡してくれた授業ノートのコピー一式を手取る。いくら渡してもらったものとはいえども、勉強の類のものを見通すのは少し億劫だったが、なんとかそれは振り払って、一枚ずつ見ていく。とても丁寧な字で書かれていて、非常に見やすい。順に、数学、英語、日本史、そして最後に、国語のノートのコピーの最後のページの裏面を見ると、

『お大事に。明日学校で待つてます』

と大きく、特に丁寧な字で書かれていた。似合わないと分かっているながらも、相好を崩してしまおう。

ちようど、その時、八幡の部屋を尋ねる人が一人。それは、もちろんこの家に今唯一いる妹の小町だった。

部屋に入ってくるなり、八幡のいるベッドに駆け寄り、ダイヤモンドにも引けを取らないほど目を輝かせていた。八幡は、小町が入ってきた瞬間に、その茶化されるであろうにやけ顔を元に戻し、枕の下に急いでそのプリントを隠した。

「ねえねえねえ、お兄ちゃん、どういうこと?!」

「……何がだよ」

「そりゃあ、静さんのことに決まってるじゃん!」

小町は興奮気味にまくし立てる。

「あんな綺麗でスタイルもいい人がお兄ちゃんをお見舞いしに来るなんてどういう風の吹き回しなのさ」

「ただ、話をするだけの仲だ」

「話をするだけって、そんなことでわざわざ家にまで来ないでしょ」

まさしくその通りだ。こういう時に頭が切れるのは厄介極まりない。

「まあ、確かに、そうだな……」

「お兄ちゃんさあ、小町はそんな子供じゃないよ。ほらほら、本当のこと小町に教えて♪」

「……」

言葉を詰まらせていると、「教えて教えて♪」と顔を近づけてくる。風邪がうつるからと、布団を被って顔を隠しても、「教えて♪」と連呼

してくる。

実は、こうなると親父より面倒くさいのは小町だったりするのだ。
このままだと埒うちが明かないので、事の顛末てんまつを話した。

「というわけだ。どうだなんか文句あるか」

「ひゃー、あの自己愛の塊のお兄ちゃんがそんなこと。ふうん」

「な、何だよ。気持ち悪いな」

「ま、というか。静さん、お兄ちゃんの傘もって帰ってきてたし、静さんからも『妹から傘貸してもらうから大丈夫だ。お前はこれ使ってくれ』ってお兄ちゃんから言われて渡された。って話は聞いてたけどね。ちよつと信じられなかったから、一応確認してみたけど本当だったんだ！ お兄ちゃん、意外と隅に置けないじゃん！」

「カマかけたな?! 性格悪っ!!」

唐突に大きな声を出したものだから、ゴホゴホと咳き込んでしまう。

「そこは策士と行ってくださいまし。というよりも、お兄ちゃんがついたおつきな嘘を静さんに伝えなかつただけでも、ね……?」

「……サイゼのハンバーグステーキ」

「ね……?」

「……リブステーキ」

「はい、査収致しました!」

小町は満面の笑みを浮かべる。八幡は、いいお嫁さんになるという言葉は撤回することに決めた。絶対に婿さんは小町の尻に敷かれることになってしまうということに気付いてしまった。

「ま、とりあえず良かったねえ、お兄ちゃん!♪」

「だ、だから、そんなじゃねえって」

「とりあえず、小町はそつ、としておきます! あつ、今の小町的にポイント高いっ!」

いつもの、かつ本日二度目の腹が立つお決まりの文句とお決まりのポーズを見せつけられて、苦笑いするしかない。

「それに小町、少し——」

不意に口をもごつかせる。小町の口許がすこしだけ縦に歪んだよ

うに見えた。

「少し、なんだよ」

「……んふふ、何でもない。『乙女の秘密の花園』は秘密のままの方がいい時だつてあるでしょ?」

「秘密の花園つて、……まつ、まさか、小町、お前つ?!」

「じゃあ、とつとと治して、友達の静さんに元気な姿見せてあげなきやだね!」

「や、やめろ!」

八幡の慌てふためく様子を見て「あははは!」と、無邪気に笑う小町。だが、それも何だか憎めない。むしろ、今日はそのからかいすらも心地が良かった。それは、何のおかげかは言うまでもなかったのである。

余熱はまだ残っている。あの時初めて溶け始めた氷の壁は、灯り続けているその火によって崩れ始めていた。

五束一輪： Before Milky Way R
h a p s o d y

総武高校では期末考査も終わり、いよいよ夏休みがやってくる。期末考査と夏休みの狭間という、なんとも形容しがたい時期のある日の昼休み。

校舎の内と外を隔てるスチール扉の目の前、八幡はそこにある三段程度しかないコンクリートの階段に座り込んでいた。テニスコートからはラケットの快音が届けられ、通路脇の草花は、この裏庭にこの時間になると足繁く通ってくる海風に身を任せて、ゆらゆらと揺れている。

そして八幡は、その景色を楽しみ、慈しみながら、持っているお惣菜パンを頬張っていた。

そう、ここはいつもの八幡の一番のお気に入りスポット、ベストプレイス。そしていつも通りの景色——のはずであるのだが、横を向けば、いつもと違うのは一目瞭然だ。

海風になびく鳥の羽のような黒い髪。そして筋の通った鼻、キリツとした目元が覗くその整った横顔からは、中性的であるがどこか妖艶さも漂わせている。

「なあ、もし俺が体育祭の練習サボってたらどうしてたんだ？」

「うーん、殴ってただろうな」

あまりにも予想通りの答えに苦笑いしながらも、「まあ、でしょうね」と八幡は返さざるをえない。

「正直、今までの君を鑑みると一度や二度はサボるものだと思っただけだからなあ。だからその時は、拳一、二発で許してやろうと思っただんだ」

一度、手に持った缶のMAXコーヒを少し口に流し込んだ後、平塚は「でも」と続ける。

「あろうことが君は全ての練習に来てしまったわけだからな。私とし

ても拳がふるえなくて非常に残念だ」

そう言つて、平塚はMAXコーヒーを持っている手とは反対の手で一回、二回とストレートをしている。しかも、シュツシュツと柔らかな海風を鋭く切るようなキレのあるストレートだ。

これを喰らっていたら、どうなっていたことやら、と八幡は、ただ苦笑いでその様子を見るしかなかった。

こんな風に平塚と昼休みに一緒に昼食を取ることが増えたのは、ここ最近だ。以前にも平塚が誘う形は何度かあったが、こんなに頻繁にここ——ベストプレイスに集まるようになったのは最近のことであり、二、三日に一回は一緒に食事をとっている。

平塚からは、「私は前々からこうして君とお昼を一緒に食べたかったのに、比企谷が昼休みになるとすぐいなくなるからできなかつたんだ」と愚痴っぽく言われた。そのことに関しては思い当たる節がありすぎる八幡だったから、「すまん」の一点張りでその場を凌いだ。

そしてこういう時間を過ごすようになってから、一つ気付いてしまったことが八幡にはあった。

それは、一人で食べているよりも、隣に平塚がいて、話しながら食べているほうが、よっぽど心地よく、満たされるといふことだ。一人の世界が心地いいと達観したつもりで嘯うそぶいていたのに、こうもあつさりあつさりと掌を返してしまうと、ひどく都合の良い人間だと自嘲してしまふ。

「ん、どうした、比企谷？」

平塚に声をかけられハツとする。

覗き込むように近づけられたその顔は、あまりにも綺麗だった。だから、すぐに目を逸らしてしまう。

「近い近い。……ちよつと色々考えてただけだ」

流石に、「平塚といふこの時間が心地いい」とは恥ずかしくて、口が裂けても言えない。

普段なら綺麗な丘陵を描いている眉を曲げ、えらく勘繰った様子だったが、珍しくすぐ「ふくん」と何かしら納得し、「そういえば」と何かを思い出した様子で口を開いた。

「あともう少しで例のアレが来るということか！」

「ああ、そうだな。例のアレが来るな」

暦も夏至を過ぎ文月に入る。そして、はや五日。本日の日付は七月五日の月曜日。あと少しで来るものといえば当然、七月七日、そう七夕である。ただ彼らが言うアレとは七夕とは少し違う。

七夕の週の週末に開催される『七夕大決戦く彦星と織姫は誰だ?! 最強カップルコンテスト』のことである。

カップルでもない彼らが参戦する理由は、勿論最強カップルになるためではなく、コンテストの景品——二等賞のスクライド&プリキュアのキャラフィギュアセットがとても欲しいからという非常に欲にまみれた理由だ。だが、それゆえそのコンテストへの意気込みは他のカップルより人一倍強くなっていた。

「私は劉鳳が欲しいなあ〜！」

「俺はカズマだな」

「よしっ、決まりだな！ じゃあプリキュアは……」

その瞬間、互いに睨みをきかせ合う。

「私は、なぎさだ」

「奇遇だな。俺もなぎさだ」

その瞬間、戦争が始まった。

平塚がなぎさの魅力を語れば、八幡がその倍魅力を語る。そうしたら平塚は八幡を唸らせるほどのなぎさに関する考察を語り、八幡はそれに対する反駁という形で、自分なりの考察を語り始める。そして、ほのかの魅力も忘れまいと語り始め——。

そういう訳で二人は、飲むのも食うのも忘れ、ひたすら語らってしまった。そんな歯止めの利かない二人の様子を見かねてか、予鈴のチャイムが強引に終わりを告げる。

「はっ、もう鳴ってしまったな……」

「というか、まだフィギュアを取れた訳でもないのにな」

「……確かにそうだ」

互いに顔を見あわせる。そして、あまりにも滑稽で両者とも吹き出してしまった。「あははっ、取らぬ狸の皮算用とは、まさしくこの事だ

な！」と目じりの涙を拭いながら平塚は言う。

「とりあえず、一緒に頑張ろうな、比企谷！」

平塚が八幡の目の前に拳をグツと突き出す。しかし、それはもちろん八幡の鳩尾を突きぬけて、沈黙の臓器を驚かせるために打ち込むための拳ではない。

八幡も親指を他の四本の指にくるみ込んで、軽く拳を握り、平塚の拳の方へと突き出した。

「ああ、そうだな」

二人はコツンと拳を突き合わせた。骨にじーんと響きが残り、骨身の髓にじんわりと広がる。

それと、もう一つ。八幡は平塚について最近になって知ったことがある。

「そうだ、今日私暇だから、放課後、ラーメン行かないか?! 私、美味しいところ見つけたんだ」

それは、平塚が極度のラーメン通であることだ。

「ああ、いいぞ」

「やった！ 今日のは飛びつきり美味しいからな！」

上機嫌になった平塚は、聞いたことのない鼻歌を奏でて、MAXコーヒーの空き缶二つを中庭まで捨ててに行った。

こうなったのも最近のことである。二人で帰ることも増え、どちらも自転車通学であるのをいいことに、平塚オススメの近場のラーメン店に引きずり回されるようになった。おかげ様で、太っていくことしかしらなかった八幡の貯金箱は最近ではメキメキとダイエツトに成功している。

ただ、確かなラーメンの味と、美味しそうに頬張る姿を隣で見せられては、その出費も致し方ないと納得せざるを得ない。

——さて、今日はどんなどころに連れていってくれるのだろうか。

五束： Milky Way Rhapsody

「ただいまー、八積やっみ、八積でございます」

車掌の一本調子のアナウンスが車内に響くと、目の前の自動ドアが開く。

隣の杖を深く沈ませた白髭をたくわえたお爺さんは座席にどつぷりと座って降りる気配がなく、結局その車両でこの駅で降りたのは八幡だけだった。

駅のホームに降りると、他の車両から降りてきた人がちらほらいるが、皆揃いに揃ってスポーツウエアなのが、妙なところである。かくいう八幡も胸元にスポーツメーカーのロゴが刻まれている半袖の黒のスポーツウエアを着ているのではあるが。

そして、まもなく、八幡を運んでいた青と黄色のストライプをベルトのように車体に巻き付けている電車は、重い腰をあげ、ゆつくりと前へと動き始める。

ただいま、八幡がいるのは房総半島の東側を大きく回る外房線にある八積駅。県民でも滅多に訪れることがなさそうな駅ではあるが、電車が過ぎ去ったあとに残されたホームの風景は、コンクリートジャングルと形容される千葉市、もつと言えば京葉線周辺では考えられない長閑のどかさがあり、足元の手入れがあまりされてなさそうな黒ずんだ灰色の土瀝青アスファルトと、かえって活き活きとした木々の緑と、空の澄み切った青さが絶妙なコントラストを生み出していて、とても目の保養になる。

—— そうだ、写真を撮ろうと、腰ポケットに手を突っ込み、電車に乗ったときに合わせて切っていた黒色のガラケーの電源ボタンを長く押した。

今思えば迂闊だったのかもしれない。

携帯が一度ブルルと震え、電源がオンになった瞬間。目が覚めた携帯が何かに怯えるようにさらにブルルと震え出したのだ。それも何度も何度も。

——いや、まだ集合時間じゃねえよな……

そう思いながらも、恐る恐る二つ折りの携帯をパカッと開いて見ると、

『You got a ma You got a ma You got a ma You got a ma You got a ma You got a mail!!』

八幡は思わずガラケーを投げ出しそうになってしまう。二回目の体験だが、やはり怖いものは怖い。しかも今回に限っては、今日の朝、互いに起きたかどうかの確認をメールでしているので、メールする要件などないと八幡は思っていたが、それは考えが甘かったことは、肝心のメールを見てひどく思い知らされた。

『私は今、着きました。ですが、まだ集合時刻の15分前なので、ぜんぜん急ぐ必要は無いです。私は駅前で待っています。見ていたら返事をください』

『集合時刻10分前になりました。まだ、急ぐ必要はありませんが、見ていたら返事をください。お願いします』

『集合時刻5分前になりました。今どこにいますか？ 教えてください。返事をください』

『集合時刻3分前です。本当にこれていますか？ 不安です。見ていたら返事をください』

『集合時刻2分前です。大丈夫ですか？ それとも、まさか、来ないんですか？』

『集合時刻1分30秒前です。本当に、来ないんですか……？』

ぞつと肝が冷え、初夏はとつくに過ぎたというのに悴かしこんだように指先が震える。

そしてたった今来た『You got a mail!!』。そこには——

『集合時刻1分前です。そういう事ですね。分かりました。』

？

？

？

? ? ? ? ?

『後で覚えておけ』

顔面蒼白。腕に巻いたスポーツウォッチを見ると、確かに長針は残り一分ももうないことを伝えている。

おそらく次のメールが来たらこの携帯を揺らしたらチエツクメイト。

運の悪いことに、このホームから改札を出るには、連絡通路を渡らなければならぬ。

それ即ち、走る——。まさか、スポーツウエアであることがここで功を奏すとは八幡も思わなかった。連絡通路にたどり着き、昇り階段をタタターンと飛龍のごとく駆け上がり、下り階段をストーンと地龍のごとく駆け下りる。そして、駅員に切符を渡して、急いで改札を通り抜け、そのまま駅舎の外に飛び出る。

確かに、緑色の箱文字でJRとでかく書かれた壁の前に、黒を基調にし白のストライプが入ったスポーツウエアを身にまとい、青色のガラケーの画面を浮かさない顔でじっと睨みつける平塚が佇んでいた。

走ったせいか、全身は異常な熱を帯びていて、今にも汗が吹きでてきそうだった。であるのに、ただただ背筋だけはキーンと寒くなる。

「……平塚、悪い待たせたな」

肺は焼けそうになるが息を切らしているのをできる限り誤魔化し、八幡が顔色を伺っておそろのおそろの話しかけると、平塚は携帯を閉じて、そつとポケットにしまう。

八幡は少し腹筋に力を入れた。

そして、たった今、携帯に見せていた顔とは全く別の——満面の笑み。

「大丈夫だ！ 私は今来たところだからな！」

「……………は？」

平塚は明らかにおかしい常套句を言つてのけた。

殴られるものだと思つていた八幡は当惑していると、「一度は言つてみたかったんだ、このセリフ！」と嬉しそうに話し、上機嫌のまま「よし、向かうぞー」と号令をかけた。

そして、シヨルダーバックから地図を取り出した平塚は「こつちだな！」と指を指し、前に進み始める。普段は腰上に下がつてる髪の毛が一本に束ねられたポニーテールは、ぴよんぴよこ楽しそうに跳ねる。

殴られなかった安堵感よりも、八幡はむしろ余計に恐怖を感じるこゝろになつたのは想像にかたくない。

ここで得た教訓は一つ。『平塚と集まる時は、彼女より早く集まるべし』ということだ。

——日は真昼だから高い位置にあり、暑い日差しが直に降り注がれる中、ギリギリ郊外の町でよく見るような宅地と田畑が交互に訪れる少し大きな道路を三〇分ほど歩くと、池のようなものが並走するようになって、それを挟んですぐ隣に目的地の公園があつた。この池は湿地だつた時の名残だと、平塚は鼻高々に語つた。

入口に辿り着くにはもうしばらく歩いた。その池の向こう側からはドンドンと太鼓の音が聞こえてくる。

そして、やけに広々としたエントランスにたどり着くと、ズラつと奥の方まで出店が並んでいるのが見える。かなりの人数がそこにはいるが、その中には先程駅で見かけたようなスポーツウエアを着た人々が疎らまばらにいた。

そして、入口の脇にある大きな立て看板には、長生村ちようせい七夕祭りのポスターが貼られており、その隅には『七夕大決戦く彦星と織姫は誰だ?! 最強カップルコンテスト』開催』とデカデカとしたフォントで載つていた。

このコンテストは、最強カップルコンテスト。

実はこの最強とは、身体的な意味で最強ということである。

カップルで用意された競技に挑戦して、最強を決める。

巷ちまたでよく見るようなラブラブ度やイケイケ度で優勝を決めるような甘々の甘ったれたものは通用しないのだ。そのためスポーツウェアの着用が主催者側から推奨されていて、駅のホームで見かけた人たちも、きつと参加者達であった。

だが、だからといってそんなストイックなものではないようだ。所詮カップル競技の大会なのだから、当然といえば当然ではある。あくまで『思い出作り』なのだ。

それ故にこの大会に目をつけたのが平塚であった。

高校生というフレッシュで基礎体力があり、比較的運動能力の衰えが少ない彼らにとつては有利であることに加え、決して『本気』ではない、あくまで『思い出作り』の雰囲気。この二つの条件から、狙いの二位を獲得しやすいとふんで八幡を誘ったのだった。

これには八幡も素直に平塚の目敏さに感心してしまう。

そして当然のことではあるが、平塚からはこの大会までの間に自主的に体を動かすことを勧められ、一週間前からは朝かなりの早起きをして毎日一、二キロ走るなどそこそこの努力していた。

一度、たまたま朝早く目が覚めた小町に部屋を出ていくところをみつきり、不審の目を向けられたこともあった――。



「え、お兄ちゃん、こんな朝早くにその格好って、どっか行くの……」「いや、ちよつと運動しとこつかなあ、と思つてな。だから最近は近所をランニングしてるんだ」

どれがあのアホ毛か分からないほど髪をボサボサにして、寝ぼけ眼の目を擦りながら「ふーん」と小町は相槌を打つ。

「ま、どうせお兄ちゃんのことだから、急に小説家になるって言い始めて、三日で書くのやめた時みたいに、すぐ止めちゃうでしょ」

「くっ……」

理由を根掘り葉掘り聞かされると面倒くさいことではあったが、さうらつと昔の恥ずかしい歴史を掘り返された挙句、そのお陰で別の意味

での信頼を得てしまっているのは兄として非常に情けないところがあった。だが、何はともあれ怪我の功名。

「……まあ、せいぜい頑張つてね。小町また寝るから」

そのまま、「ふあ」と、とびきり大きな欠伸をしたあとドアをバタンと閉めて、小町は部屋の中へ消えた。



——と、こんなことがありながらも、なんだかんだで一週間は休むことなく走り続けた。家族公認の三日坊主男八幡にしては大進歩である。

「まもなく、受付を開始します。コンテストに参加を希望するカップルの方々は、こちらにおいて受付を行ってくださいー」

その声が受付の方からかけられると、人混みの中から一斉に人々、もといカップルたちは受付の方へと流れていった。カップルの群れに入っていくというのは、少し気が重くはなるが、ここまで来たからには背に腹はかえられない。

「そろそろ行くか」と平塚に声をかけ、その方を向くと、
「く、ぐや」じい」、りあじゅうばぐばづじろ」

と見たことないほどに顔を崩しながら、見たことの無いほどの涙をボロボロと流し、聞いたことの無い呪詛の言葉を吐いていた。

「りあじゅう」とはよく分からないが、いくらなんでも「爆発しろ」とは、おつかないことを言うなど八幡ですらも思った。この間のキャンプファイヤーの件からも察するに、やはり平塚の中には得体の知れないおぞましいものが、決して覗き込んではいけない深い深い井戸の奥底で蠢うごめき、巢食うごめっているのだろう。

とはいっても、受付の時間も限りがある。八幡は平塚をなんとか宥なだめるように問いかけた。

「平塚、行けるか？」

「うん、うん」

周りからの目線が集まっているのは気にしなくても分かる。傍か

から見れば八幡が平塚を泣かせているようにみえてしまった。仕方なく平塚が泣き止むまで待ち、そこから受付へと向かった。

「こんにちはあ。わあ、とっても若々しいカップルさんですね！」
話しかけてきた受付嬢は綺麗な笑顔を見せる。

「学生さんですか？」と彼女に尋ねられると、打って変わって平塚は本当に生き生きした様子で眉をぴくぴくと動かし、「はい、高校生です！」と即答した。

一方、単純にカップルと言われたことが照れくさい八幡は、頬を人差し指で二、三度搔いていた。

受付嬢はその対照的な二人の様子に目を細めながら、慣れた様子で手続きを始めた。最初にこのコンテストの参加費である二千円、つまり一人千円をそれぞれ手渡す。

「はい、確かに頂きました。では、まずここにお名前と生年月日と住所、あるのであれば電話番号を書いてください。彼女さんは左側、彼氏は右側をお願いします。では彼女さんの方から」

手渡された平塚は、ノートのコピーにあつたように、エントリーシートに麗筆れいひつをふるった。続いて八幡も妙な対抗心のせいか気持ち丁寧に書いて、受付のお姉さんへと渡した。

「はい、ありがとうございます！ ではお二人は、13番ゼッケンです！ 本日の競技の際はこちらを着用しててください！」

二人は受付のお姉さんに前後に黒色で『13』と書かれた黄色のゼッケンを手渡され、その場で着た。

「わあ、お似合いですね！ では、最強カップル目指して、頑張ってください！ 行ってらっしゃい！」

相変わらずの崩れない笑顔で手を振る受付のお姉さんに軽く会釈し、二人はコンテストの舞台となる陸上競技場に入る。

——受付を抜けるとカップル地獄であった。

右を向いても、左を向いても、前を向いてもカップル、後ろを向いても新しいカップルが入ってくる。芝生のグラウンド一面に、番つがいの

ゼツケンを着たカップルたちが各々愛の巣を作ってキャツキャウフと戯れていた。

なるほど、どうやら上を向いて歩くしかないようだ、と八幡は歯を食いしばって涙が溢れないように上を向く。

一方この状況で、反応を起こさないはずのない隣の平塚は、その光景を見るや否や「なあ、比企谷」と思いのほか冷静に八幡に語りかける。

「ん、なんだ。どうにかして爆発させろって？」

平塚は「いや違う」と首を横に振る。

「……私達も今はカップルなんだよな」

思いがけない平塚の言葉に、八幡の心がざわめく。

「あ、ああ……。周りからは間違いなくそう見られてるだろうな」

今の二人は誰が見ようとカップルなのだ。このゼツケン番号が同じ番号であることが何よりの証拠である。

「じゃあ」

突然、平塚は八幡の方へと左手を差し出した。

「——手を繋ぐぞ」

「え？」

「手・を・つ・な・ぐ・ぞ！」

「いや、聞こえてない訳じゃなくて。その……、平塚は大丈夫なのか？」

「何がだ。まさか比企谷菌とかの話か……？ 私はそんなことは一切気にしないと以前言っただろ」

「いや、そういう心配してるんじゃない。その恥ずかしくないのかな、と思ってだな」

手を繋ぐなど、妹の小町とすらも小っ恥ずかしくてもう随分していない事だった。ましてや、友人とはいえども、一度握手したことがあるといえども、異性の平塚と手を繋ぐことにはさすがに八幡は抵抗を感じた。

だが、そんな躊躇^{ためら}っている八幡に対し、「恥ずかしいわけない！」と、平塚は力強く否定する。

「そもそもカップルコンテストに来ているぐらいなのだから、手を繋ぐぐらい当たり前じゃないか。そうしなければ、怪しまれるだろう！ほら、比企谷早く！」

「分かったから、繋ぐから」

やけに圧をかけてくる平塚に根負けして、差し出されている平塚の左手に、八幡はそつと右手を合わせる。

そして、申し訳程度に手に力を入れた。

それでもやはり、ほんの少しふわつと反発してくる肌。

あの時と一緒に、平塚の手は柔らかくて、ほんのりとした全身までも包んでくれるような温もりがあった。

状況が状況であるとはいえ、こうして手を握り、平塚の肌の感触を直に味わうことは、やはり穴蔵にこもりたくなるほど恥ずかしいものだった。

急に高まった顔の熱は、照りつける夏の日差しのせいじゃないことは八幡も重々わわわっている。もう横の平塚に顔向けすることはできそうになかった。

「こつ、これでいいか?」

思わず声が裏返ってしまう。

「ああ、大丈夫だ。全く問題ないぞ」

非常に落ち着いた声音だった。

八幡はその瞬間論きとされた。平塚はなぜかカップルに強い怨念を抱いているが、明らかにあちら側の世界の人間で、きつとこういうことには慣れっこなはずであるとは理解にたやすいことだ。ボディータッチも男女問わずにしているのを目にしたこともある。

——いくら何でもテンパリすぎか。

少し熱ほとほりも冷めて、ちらつと、横を見る。

八幡が思い描いていた『余裕しやく綽々しゃくしゃくで、こちらの爆笑必至の情けない顔を見て、頬を大きくふくらませて笑いを堪えている平塚』——はそこにはいなかった。

俯いていた。目元は濡れ羽色の横髪に隠れて見えないが、ちらりと覗く頬はおそらく八幡以上に赤く、露わになっっている耳は、耳朶たぶから

耳先の方まで真っ赤っかに染まり切っている。

その有り様を見て、顔が尋常ではないほど勢いよく燃え上がるのを感じて、すぐに首を振って、顔を背けた。

——澄み切った青空の下、手を繋いでいるだけで上のお天道様よりも朱に染まり、動くことなく立ち尽くしている初々しい二人を見て、「あらあら」「若いっていいな」と周囲のカップルが暖かな目を向けている。

そんな思わずお天道様も綻ほころんでしまいそうな微笑ましい雰囲気会場に漂い始めた頃。

バンツ、という耳を劈つんざくような爆発音とともに、コンテスト会場中央に設置された立派なステージのスピーカーから、大音量のBGMが会場全体に響き渡る。

ステージに会場の視線が集まると、今度は舞台から白煙が吹き上がり、それが晴れる頃には、やけに奇抜な格好をした男の人影が浮かび上がってきた。

英国紳士が好みそうな黒色のシルクハットに、その側面には独楽こまみたいな紋様をしたでっかい巻貝がくっついている。デニム生地のおーバーオールオーバーオールの肩紐には無数のトマトらしき赤色のストラップが着いていて、その下のシャツからは大きい『長』の文字が浮かぶ。そして、極めつけは、羽織っているマントが明らかに漁業で見るとような網なのだ。

そして、その男は、握りしめたマイクを口元にちかづけ、「レディイイス、エエエエエンド、ジエントルメエエエエツ!!」と声高らかに叫んだ。

「これより、長生村主催、『七夕大決戦』彦星と織姫は誰だ?! 最強カップルコンテスト』を開催いたします!!! 司会は私、長生き×九十九里の申し子! ミスターナインティナイン!! よろしくう、お願いします!!」

ミスターナインティナインの挨拶が始まって、彼が深くお辞儀すると、大きな拍手が沸き起こった。

爆発音でハッと目が醒めた八幡は、気恥しさからかかえって周りよりも手を強く叩いていた。

「本日の参加してくれたカップルは、なあと、九十九組?! ほんとですか……? あつ、ほんとー! なんと、九十九組、参加いただいたているぞお!! これは何たるミラクルだアア!! ミスターナインティナイン感無量ですウ!!」

涙を拭う素振りを見せるミスターナインティナインに対して、「良かったなあ!」とどこかのカップルの彼氏が野次を飛ばすと大きな笑い声がどつと生まれ、そこから囃し立てる指笛がピューピューとあちこちから飛び交い始めた。

「ありがとう!! ありがとう!! さあ、ますます盛り上がってきたア!! では、早速だが、今回の大会のルール説明だア!!」

今回の大会では、二人一組の競技が三種目行われる。そしてそれは全て時間を計る競技だ。そのかかった時間の合計が少なければ少ないほど、順位が高くなる。

第一種目は、『障害物乗り越えて巡り会え!! 天の川障害物競走』。普通の障害物競走と違うのは、トラック上のコースに男女別の二つのスタートが設置され、彼氏は右回り、彼女は左回りで、いつかは二人が必ずコース上で巡り会うことになる。その巡り会うまでの時間がスコアとなる。

第二種目は、『息をピッタリ合わせろ!! 二人三脚一〇〇メートル走』。これは二人三脚そのままであり、いかに早くゴールできるかが勝負となる。

第三種目は、『協力してお買い物を持ち運べ!! お買い物競走!!』だ。これは、一〇キログラムの重りの入ったバッグを一〇個、計一〇〇キログラムを二人で協力して一〇〇メートル運べというものである。これもいかに早くゴールできるかが勝負となる。

「そして、この、三種目の合計タイムが少ないカップル上位五組が決勝戦に進出することができる!!! 参加賞は当然あるが、決勝戦に残ったら、確定でこちらの豪華商品を獲得することができるんだア!!」

ミスターナインティナインがパチンと指を鳴らすモーションをす

ると、舞台袖から白い布が敷かれた長机が運びこまれた。そしてその上には、賞品がズラッと並べられている。

まず端の方に、ちよこんと置かれているのは参加賞で、二千円分の今回の七夕祭りで使用できる券。これで、参加費分の元は取れるということだ。

そして、決勝進出者にはこの参加賞プラスに、第四、五位のカップルには、商品券五千円と海の幸セット。

第三位のカップルには商品券一万円と山幸海幸セット

「そして、第二位のカップルには、商品券三万円分と山幸海幸セットに加え、子供受け間違いなし！ こちらの超人気フィギュアたちをプレゼントだア!!」

確かに第二位の賞品のところには、フィギュアの箱が積み上がっていた。更によく見ると、スクライドやプリキュアだけじゃない。特捜戦隊デカレンジャーのフィギュアもあったのだ。

「なあ、比企谷!! あれだぞ、あれ!! デカレンジャーもあるぞ! すごいすごいつ!!」

平塚はまるで子供みたいにはしゃいで興奮気味に指を指す。明らかに周りからは浮いていたのだが、そんな平塚を窘める人はこの場にはいなかった。

「ああ、分かってる。絶対手に入れるぞ」

普段は感情の起伏が激しくない八幡ですらも、実物を見せられられると、自然と気持ちが昂ってしまっていた。

「そして、最後、見事最強カップルに輝いたカップルには、なんとオ!! 商品券五万円分と、海幸山幸セット。そして、カップルには持つてこいの東京ディステイニールランドワンデイパスペアチケットとオーシャンスパ九十九里への一泊二日のペア宿泊チケットをお送りするぜエ!!!」

第一位に贈呈されると賞品が披露されると、会場がドツと沸いた。周りのカップルは「絶対にあれがいい」と口をそろえる。確かにこれはとびきり豪華ではある。だが、あくまでこの二人が狙うのは二等なのだ。

「では、早速第一ラウンドを開始だア!!! 十一レースに分けて、行われるから、番号を呼ばれたカップルはスタート地点に移動してくれよなア!! 最初の組は五分後に開始するからな!! それでは発表するぞオ!! 最初は9、18——」

こうして幕開けた最強カップルコンテスト。

八幡たちの番号はなかなか呼ばれず、近くの芝生の上で入念なストレッチをしながらレースを観ていた。観客席には少しではあるが祭りの客も見に来ていて、中々の賑わいっぷりだ。

第一種目のコースの外観としては、まずハードルが五〇メートルほどあつて、設置された麻袋に両足を入れて二〇メートルほど飛んでいる。その後は、緑色の網の下を這いずってくぐりぬけ、とびきり小さい三輪車に乗ってハードル走より少し短い距離を漕ぐ。そして、最後の直線で五〇メートルほど走ると、異性の方のコースのゴールと合流する。

ただ、そこで再会できない場合は、異性のコースを逆走し、迎えに行くというなかなか奇想天外なルールではある。

ルールの特性上、彼氏側の方がゴールに早く着くことが多く、あるカップルは三輪車にのって再会、さらには網の下で這いずくばった状態で再会するなど、様々な彦星と織姫の再会の形が見られて面白いものだった。

「ところで、私達が二位になるためには、大前提として決勝戦に残らなければならぬな」

「ああ、だからこの三種目は全力でつてことか」

「そういうことになるな!」

『とにかく全力で』。このシンプルな言葉が、二人の中に共有された。

「次のレースが始まります! 番号を及び致しますので該当する人はスタート地点に集合してください。では参ります! 4、13、22——」

ついに、二人の番号である13が呼ばれた。八幡の拳にも自然とグツと力がこもる。

「よし、頑張るぞ、比企谷!」

「うっしや」

それぞれのスタートの方へと駆けていった。

八幡がスタートラインに立つと、左どなりのレーンかつぶくは恰幅の良い中年男性。「とおちゃーん、おかあちゃーん、がんばれよおお!!」と甲高く可愛らしい声で傍はたから叫ばれて、彼はその声のする方へ手を振り、「二等目指してとおちゃん頑張るぞー!」と笑顔で返していた。つまりは、数少ないライバルというわけだ。

右隣は隆々とした筋肉が溢れんばかりに実っていて、やけに黒光りしているガタイのいい男だった。身長も八幡より定規一本分ぐらい高いほどだ。いかにも足が速そうである。

だが、誰が速そうだとかは今日の種目では何も関係がないのだ。結局は自分自身の勝負で、いかに一秒でも早く平塚と合流できるかが鍵である。

それにもし、平塚が先にコースを走り終わり、八幡のコースに入つて合流しようものなら、僅かながらの男としての矜持きよつじが廃つてしまふ。

——とにかく全力だ。

それはあのリレーの時のように、平塚に背中を押され、周りの景色の色が混ざって、同じ色に染まった時のように、だ。

「そろそろレースを開始しまくす!」

吸う時には腹を膨らませて、吐く時にはへこませて、研ぎ澄ますように整える。

『ハードルは飛ぶのではなく、跳び越える。そして歩幅を一定に』。体育の授業の受け売りだが、今はこれを頭の中で何度も何度も反芻させる。口も自然と、その文字列をなぞるように動いていた。

「では、位置についてえ——」

耳あてをつけたスタッフは、右手を大きく伸ばし、銃口を空に向けた。

「よおこ——」

パアンと号砲が鳴る。

その瞬間、八幡は思いっきり地を踏み込んで走り出した。左隣の中

年男性は、すぐに視界から消えたが、気に留めている余裕はない。

最初のハードルを、跳び越える。そして、一步、二歩、三歩目で再びハードルを飛び越える。

後はただひたすら繰り返し。ガタンとハードルが倒れた音が耳に入ってくるが、ただ前だけを見る。

無我夢中になって走り抜ければあつという間に、ハードル走は終わっていた。

かなり上々な結果ではあるが、八幡は気は弛めなかつた。

行き着いた先に用意されているこげ茶色の麻袋に両足を突っ込んで、ただひたすら前へ前へと跳ねる。

一度、重心が前に傾き、転びそうになるが、なんとか堪えて、兎のようにぴよんぴよんこと跳ねる。

気付けば右隣にいた黒光りの筋肉質の男はもう麻袋を脱いでいた。

だが、追いつく必要はない。ただ、自分のできる限りのことをすればいい、と八幡は心の中で一度だけ言い聞かせ、あとは無心でぴよんぴよんこと飛び跳ねた。

そして、麻袋のコナーが終わると、緑の網の中へと潜っていく。

這いつくばって進むのは、かなり体力がいる。しかも、コースはクレイではなく砂であるから、前進する度にやけに土埃が顔にかかり、呼吸をするにもそれらがどつと口の中へと押し寄せてきて、普段なら不快感を催すはずだろう。だが、その感情に支配されることなく、淡々と前に進めるほどに、八幡は集中していた。

そして、息があがりながらも、途中で止まることなくゴールにたどり着く。最後には、すこぶる小さい三輪車が待ち受けている。

人によつては最もキツイかもしれない。だが、これは八幡の得意分野だ。

普段、通学に用いている筋肉をフル活用し、ペダリング——回転の意識を全神経に注ぎ込む。いつかの時の読み物から得た母指球ほしきゆうの話をもひたすら通学中に実践していたおかげで、それが非常に役に立った。

親指の付け根あたりで踏み込み、小さな円をひたすら描き続ける。

とは言っても、ハンドルのグリップに膝小僧が擦れて、少し痛くもなるが、それで今の八幡は止まらない。

そして、なんとかたどり着き、残り五〇メートル。既に疲労は蓄積しているが、ここで遅れをとる訳には行かない。

三輪車を乗り捨てた勢いで、全力で走る。

周りの景色が見えなくなるくらい、全力で。

境界が曖昧になり、全ての色が同化した。

すると、同化した色の中に前から、迫ってくる違う色の何かが見えてきた。

そこに意識を向けると、その色は黄色で、ゼッケンには、13番。あれは、平塚だ——。

気付いた次の瞬間、手を挙げて、パチンと相手の手を叩く。中々のいい音が鳴った。

そして、そのまますぐさま邪魔にならぬようコース外にはけるが、八幡の足がまるで別の生物であるかのようにいうことを聞かず、自然の緑の絨毯じゅうたんに誘い込まれるように芝生の上に寝転がってしまった。どうやら平塚も同じようで、気付けば八幡の隣で仰向けに横たわっていた。

まもなく、ストップウォッチを片手にした、計測係らしきスタッフスタッフがが寝転んでいる二人の元に駆け寄ってきた。

「13番のカップルさん、お疲れ様です！ とっても早かったですね！ 記録は——」

彼女はストップウォッチを見て、一度「おっ！」と驚きの声を上げる。

「二分二九秒ですっ！ とっても早いですね！ 多分今回のベストタイムだと思いますよ！」

少し早口で捲し立てて興奮気味に伝えると、彼女は「ゆっくり休んでいてくださいね！」と一言告げ、おそらくだが記録を報告するためにその場を去ってしまった。

その人が去った後も、暫くは起き上がることも、話すこともできず、ただ二人のハアハアと荒れた呼吸音が聞こえるだけだった。

燦燦と降り注ぐ日差しのせいで、目を開くことはできないが、ただ心地がよかった。

しばらくして息が整ってきたあたりで、八幡が「めっちゃ疲れた」とボソツと独り言ちる。すると即座に、「ああ、私もだ」と平塚も返した。「この調子だと、運動会の時みたいになぶつ倒れてしまいかもな」

「それは勘弁だな。また、俺が面倒を見る羽目になる」

「なんだ、その言い方は。でも、実を言うと、今回は比企谷の方が体力的には不味いんじゃないか？」

「確かにそうだわ。もし、そうなった時は——」

「断る！」

「ひどくないっ?！」

「当然の報いだ！」

「ぷっ!」「ははっ!」と二人は思わず吹き出してしまう。少し息が切れて乾いた笑いにはなるが、それもまた余計に面白かった。

そして、八幡が横を向くと、平塚もこちらの方を向いていた。

「とりあえず、ナイスファイトだ、比企谷!」

平塚は白い歯を見せ、ニカツと笑う。前髪が乱れて、少し汗ばんだ額が印象的に映った。

八幡もそれに応えるように口元を少し緩ませた。

「そちらこそ、ナイスファイト、平塚」

ふと意識を向けると、背中に芝生の柔らかく、でもどこかくすぐつたい感触を感じられた。

こうして寝転んだのは、いつが最後だっただろうか、思い返してそうとしても、もう遠く色褪せたセピア色の記憶で八幡には思い出せなかった。

ただ、心地よいものと、身体には刻み込まれていた。

そして、きつと、いつかまたこうして青空のもとで寝転んだ時には、今日この日を思い出すのだろうと、いつになるかは分からないが、それだけは確信できていた。

——もうまもなくして、第一種目のレースが全て終わった。大声を

出して、せつせと動くスタッフとは対照的に、周りのカップル達は会場の脇にある天然の日傘の下にこぞつて集まり、仲睦まじく談笑している様子が見られた。八幡たちもそれにならつて、日陰にうつる。

そして、一〇分ほどの休憩を挟んだあと、アナウンスが入る。

「大変長らくお待たせしたア！ 続いては第二種目、シンプルだけど、だからこそ奥が深い！ 息をピッタリ合わせろ!! 一〇〇メートル二人三脚ウ!!」

こうして始まった第二種目の二人三脚はさきほどとは逆順で、つまり、八幡達は比較的早く、レースが始まることとなった。

一種目の時と同じく意気揚々と挑んだ彼らだったが、結果的には失敗してしまった。

ただ一度転んでしまったのだ。

決して、密着するせいで、八幡の鼻の下が伸びて、気が逸れてしまったからという訳ではない。根本的に息が合わなかったからという訳でもない。

良いタイムを取らなければならないという焦りが、僅かなタイミングのズレを引き起こし、転倒してしまったのだ。『全力』という言葉が裏目に出てしまっていた。

その後何とか建て直し、おそろく上位四分の一ぐらいのタイムに持ち堪えていた。一度転んだ割には、良いタイムなのかもしれないが、上位五位に入ることができなければ全ての努力は水の泡。

ここで大きく上位勢と引き離されるのは彼らにとっては相当な痛手であることは間違いないかった。

「平塚、これ」

二人三脚を終えた八幡は、会場の外で買ってきた自販機で買ってきたスポーツドリンクを、日陰になっている芝生の上で涼んでいる平塚に一本投げ渡す。

祭り気分が出店で買うものかもしれないが、最近財布の中身がひもじくなつてしまったせいで、一銭一厘でも切り詰めた男には、自販機で済ませることが無難だった。

「ありがとう、比企谷」

「おう」

八幡は平塚の横の日陰に座ると、白のキャップを回して空け、かぶりつく勢いでそれをぐいぐいと飲み始めた。カラカラに乾いた喉を流れ落ちていくその潤いは、染み入るような筆舌に尽くし難い美味しさがある。

一口飲み、小さく息を漏らす八幡とは対照的に平塚は「ぷわあっはあ!!」と隠すつもりもなく豪快に吐き出した。

「やっぱり、汗流したあとのスポーツドリンクは最高だな!」

「確かに、なんでこんなに殺人的に美味いんだろうな。アウトドア派の人間の言ってることがほぼ全て空言にしか聞こえない俺でも、これだけは認めざるを得ないな」

そう言つて、もう一回かぶりつく。

二度目も殺人的に美味しく、一度目と負けない勢いでごくごく飲んでしまった。ボトルを見ると、もう目分量で半分はなくなつてしまっている。

「その通りだ。後は、やっぱり、ストレスが溜まった時の酒! あれは格別に美味かった!」

「え、お酒飲んでるの? そういや、サイゼリヤの時も……」

「ああ、いや。これは親の真似事だな。未成年の私を知るはずなからう」

「まあ、そうだよな。風紀を質す側の生徒会様がお酒飲んでたら、お終いだ」

平塚の親が、リアリストというよりもただ子供に大人の実情を隠さない人達だということは知っていたうえに、それ以上に彼女がそのような人間ではないと信じていた八幡は特に疑うことも無く納得する。

次第に身体も水分を欲することがなくなつて、キャップを閉め、大分軽くなつたペットボトルを芝生に転がすと、木漏れ日にあてられて透明なそれは光っている。

だが現状は幸先が良いとは言えず、お先真つ暗とはいかないまでも、いささか不透明なままだ。

「ちよつと、まづいかもな。思いつきり、ミスつちまつた」

左手を見れば、転んだ際に擦りむいた傷跡が、親指の付け根あたり
に少し痛々しく残っていた。少し力を入れるとじわつと血が滲む。

「まあ、確かに、そうだな。でも今更後悔したところで、後の祭りだ。
転んで大きな怪我がなかったことだけでも幸いだ。今は、次の種目の
作戦を考えようじゃないか」

八幡も「ああ、その通りだな」と応えて頷く。

「次の種目は、確か、一〇〇キログラム買物競走か。しかも一〇〇
メートル。これ字面以上にキツイんじゃないかねえか？」

「まあ、ルールのには五〇キロまず運んで、スタートに戻ってきて、も
う五〇キロ運ぶのもありってことだが、それだとだいぶ時間をロスし
てしまうな……」

「まあ、つまり良いタイムを取るには、なるべく最初の一〇〇メートル
で全部持っていきたいってことか」

「そうなってしまふな。だがそうとなると……」

平塚は真剣な様子で、少し手を顎に添えて考える。

八幡としても、ここで『俺が八個ぐらい持つわ』ととびつきりキザ
な事を言えたらいいのだが、結局、足を引っ張り、余計に遅れること
になるのは火を見るより明らかだった。八幡にはせいぜい六、七個が
限界だろう。

そして、平塚は「比企谷と私で半々というのはどうだ？」と提案し
た。

「いや待て、平塚、お前五〇キロ持てんのか？ だいぶ重いと思うぞ」

「大丈夫だ。君は私の事をお弱い女の子かと思ってるかもしれない
が、私はそんなやわじゃないぞ」

「いやそんな事は一ミリも思っていないが——」

「あ？」と平塚は目じりを吊り上げて、八幡を睨みつける。

「ま、まあ、とは言っても、さすがにキツイものはキツイだろ。いくら
お前の運動神経が高くても、重さはカバーしきれないんじゃないかねえか。
絶対的な筋肉量がちげえし」

「大丈夫だ、任せておけ！ 逆に君に手を貸してやる！」

「うわあ、そうならマジで恥ずかしいな……。とりあえず分かつ

た。じゃあ半々だな」

平塚から溢れ出る自信と、八幡の中の彼女に対する信頼もあって、その案が承諾された。

そうして、第三種目が始まった。

どうやら、今回は総合タイムが遅い順から呼ばれているようだ。

八幡の左どなりにいて、印象に残っていた子連れの恰幅の良い夫と、その妻の中年カップルは、第二種目でも八幡達のだいぶ後にゴールしていた。

最初のグループに呼ばれているのは、そういうことだと後から気付いた。

子供と思われる齡五、六歳ぐらいの男の子がとびきり大声で「とおちゃん、かあちゃん、ぜったい最下位にはなるなよおおお！」とかなかパンチの効いた純粹無垢な檄^{げき}を飛ばし、会場でどつと笑いが起きた。スタート地点で恥ずかしそうにあたふたとする夫婦の姿は、とても微笑ましいものだった。

何だかんだその夫婦は結局最下位であったものの、順当に往復してゴールした。その他のグループも同様に往復でゴールしているのがほとんどであり、一回で全てを持っていこうとするカップルは皆無だった。

そして、二人の番号である13番は最後まで呼ばれなかった。

「つまり、この様子を見ると、私たちにも可能性は十二分にあるということだな！」

「そうみたいだな」

しかし、それで安堵してはならないというのは八幡も重々承知だ。このグループの中で一秒でも、いや、もっと早くゴールしなければ目当ての決勝戦に進出することは叶わないだろう。

「いよいよ、この競技も最終組だア！ 番号は7、13、22、46——」

「よし頑張るぞ、比企谷」「おう」と呼びかけあって、再びスタート地点へと向かう。二人は一〇個のエコバッグがひとまとまりとなつて置かれているブルーシートの、左から二番目に、誘導された。

「お待たせしたなア、では最後のレースの始まりだア!! スターターの方よろしくウ!!」

「では、始めます!! よーい——」

パアンと銃声が会場を駆ける。八幡はスタート地点にあるエコバッグをまずできるだけ両肩にかけ、最後の一つは左右の掌の上で抱えるようにして持ち上げた。平塚も同じようにして、五〇キログラムを持ち上げた。

「大丈夫か、比企谷!」

「ああ、大丈夫だ」

隣のレーンは、22番。第一種目、第二種目とも隣に居たあの黒光りで筋肉質の男がいるカップルだ。第一種目でも、その実力はまざまざと感じられた。

このカップルの彼女の方は彼とは対照的に見るからにひ弱そうであった。一方で存命の人に美人薄命と称するのは些か無礼だが、それほどの淑やかさと麗しさが細身の彼女にはあった。そんな彼女はエコバッグを何とか一つ持っている様子で、一方黒光りの筋肉質の彼氏が、エコバッグ四つを両肩にかけ、一〇〇メートルの直線を疾風迅雷の勢いで駆け抜けて言った。その肩甲骨周りの筋肉が盛り上がった背姿は、紛うことなき化け物であった。

あの人類最強の範馬家の一族と言つても、信じてしまいそうなほどの化け物っぷりだった。どうやら、この調子で往復して、もう五つを持っていくという作戦らしい。

周りのカップルを見るとやはりほとんどがそうだった。一度は往復して運び切ろうとしている。

つまり、勝機はあった。

二人はそれぞれ五個のエコバッグを抱えて走り出した。

勿論、22番の彼氏のように本気で走ることなど到底不可能で、小走り程度の速さだ。だが、このペースで走りければ、かなり差をつけることはできそうだった。

予想はしていたことだが、これがかなり重い。まだ若干の余裕はあるものの気を抜いたら肩から崩れ落ちてしまいそうな恐怖感もあつ

た。

そして、異変が起きたのは五〇メートル、半分を少し超えた頃だった。

明らかに平塚の進みが遅くなり、八幡が後ろを振り向くと、見るからに辛そうな顔を浮かべ始めていたのだ。

「おい、平塚。大丈夫か」

「ああ、大丈夫だ……。気にするな。それよりも早く行かなければだな……」

ただそう答える平塚の身体は、足元から手の先まで今にも崩れ落ちてしまいそうな程に震えていた。

八幡は一度、両肩のエコバッグをレーン上に置き、平塚の元に駆け寄った。

「ひっ、比企谷っ、急に何?! 別に私は……」

「……バカ、見たらわかる。この期に及んで強がらなくていい。少し寄越せ」

「でも、ホントにつ……。あつ……」

八幡は平塚を一度座らせて、肩にかかったエコバッグ二つを腕から引き抜いた。そして、それを今度は彼の両肩にかける。

「これでも、俺、男の子なんだよ。この前格好つけようとして、失敗したの結構恥ずかしいんだ。だから、ここで挽回させてくれ。お前の前でカッコつけさせてくれよ、な?」

「——っ、うっ、うん……。分かった。でも、もし辛くなったら……」

「そりや当然、そんな時はすぐ平塚にお返しするわ。流石にそこまでカッコつけ通すのは俺には本当に荷が重いわ」

それを聞いた平塚の申し訳なきような顔は解け、そしてぷっと吹き出して、微笑を浮かべた。

「ああ、分かった。できる限り頼んだぞ、比企谷っ!」

「よしっ、行くか」

八幡は、二つのエコバッグを両肩に提げて、レーン上に置いてきた場所に急いで戻った。

それぞれの肩に三つ目のエコバッグをかけ、一つは抱える。

そして立ち上がった瞬間、今までとは比べ物にならないほど地面に押し付ける感覚が、一気に八幡に襲いかかった。思わず顔も頬からぐにやりと歪み、奥歯をぐっと食いしぼる。

エコバッグ五つの時とは違い一切余裕はなかった。というよりも、許容範囲を超えているのは八幡自身すぐに分かった。

やはり七〇キログラムは半端ではない重さだった。八幡の体重よりも重い。だから当然ではあるのだが。

ただ、平塚に見栄を張った手前、情けない姿は見せられなかった。

八幡は前までは、大の精神論反対論者だったが、ここ最近は頼っている節がある。そして、今回もそれに頼らざるを得ない。

——男らしくだ。

そして、一步。ズシンと全身の骨や五臓六腑に響くようなとても重い一步を踏み出したのだ。

結局、二着でゴールした。

一着は隣の怪物くんを率いたカップルだったが、それを考慮しなければ、素晴らしい結果だと言えよう。

ただ、八幡は見栄を張りきれなかった。

エコバッグが三つになった平塚は水を得た魚の如きの快走を見せたのだ。一方八幡も善戦はしたものの、やはり七〇キロの重さには善戦するのが精一杯で、残り十五メートル付近で、先に運びきって戻ってきた平塚に三つほど持ってもらって、フィニッシュした。

ただ、見栄は張りきれなかったものの、二着で他の上位勢のカップルと大分タイム的に差をつけている事には間違いなかった。

「最後、申し訳ねえ。あんなだけ大見得切ったのに、結局お前のごこと頼っちゃまった」

「いや、いいんだ。気にするな。というか、私の方こそごめんなさいとありがとうだ。あのままだったら、多分肩が壊れてた」

「それに」と平塚は一呼吸置く。

「あの時の比企谷はすごく格好良かったぞ!!」

「や、やめてくれ……。慰めだとしても、ガチで照れるから」

相変わらぬ裏表なく屈託もない笑顔で褒められて、素直に受け取ることが出来ず八幡はむず痒そうに目を逸らして、二、三度頬を人差し指で掻いた。

「本当に格好良かったんだから仕方ないじゃないか!」

——なんで、この娘はこんな恥ずかしいことを、堂々と言えちゃうの。

と、八幡は困りながらも、「ああ、そうか。そう言つて貰えて光栄だ」と今はその褒め言葉を渋々ながらも有難く受け取ることにした。

——総合の順位が発表される時間が差し迫っていた。あれだけ元気にしていた日も西の空へと落ちていて、空の色も鮮やかな橙色へと染まる中、先程見られた日陰も消えていて、カップルたちは自然と会場全体にバラけていき、それが影絵のように目に映った。

それぞれがそれぞれの時間を過ごしていると、突如開会するときのような大音量のBGMが一面へと響き渡り、昼時の開会式にはなかった眩いスポットライトが一斉に点灯し、ステージ上を集められる。

そして、その光の照らす中にはミスターナインティナインがマイクを口元に構えて立っていた。

「大変長らくお待たせ致しましたア!! まず、最初にお疲れ様でしたア!! さいっこうに熱い競技を見て、ミスターナインティナインさいっこうに幸せだったぜエ!!」

「ありがとうございます!!」と深々とミスターナインティナインがお辞儀をする。それに拍手が送られ、参加者側のカップル側からは、主催者側に対する労いの言葉が会場全体からステージに向けて飛ばされた。

「暖かいメッセーじありがとう!! 今年も開催して良かったぜエ!! よし、では早速だが、決勝進出カップルの発表だア!! スタッフウウカモオオン!!」

その大きな呼び声とともに、ミスターナインティナインが中央から

捌けると、舞台袖からは、プラカードのようなものを持った五人のスタッフが、ステージの真ん中に横一列に並んだ。それぞれのプラカードに決勝進出者の番号が書いてあるということだろう。

結果を踏まえると十分決勝に行ける可能性があるかと分かってはいたものの、八幡の手はじんわりと汗で濡れていた。

隣の平塚も両手を胸の前でギュツと握って祈るようにじつとステージの方を見ている。

ただ番号を見るだけでこのような感情にされるのは、受験の時以来だ。その時以上に緊張している心地さえしている。

「よしっ、では、発表するぞオオ!!」

ぐぐくりと息を飲んだ。

「栄えある決勝進出カップルは、こちらのカップルだア!!」

それと同時に、五人のスタッフが一斉にプラカードを上げた。

五つの番号が八幡の目に飛び込む。

そこには、『13』という数字が――

「あ……、あつた、あつたぞ!! 比企谷あつたぞ!! やつた、やつたあ……!!」

下手側、つまり左から数えて一番目のプラカードに確かに『13』と記されていた。

「おお、ホントだ、あるな!」

平塚は強めに八幡の肩を叩きながら、嬉しさを抑えきれずにぴよんぴよんと飛び跳ねている。八幡も彼女ほど表には出さないものの、ホツとしたのと同時に、異様なまでの高揚感と達成感に包まれていて、グツとガッツポーズが出ていた。

「やったぞ私たち!! 決勝戦に行けたぞ!!」

「ああ、まさか、ホントに残れるなんてな。こんなに嬉しいとは思わなかった」

「なあ、比企谷!」

平塚はそう言って、両腕を肩幅ほど広げた。八幡はそれを見て、少し面倒くさそうにしながらも、嫌がらずに両腕を肩幅ほど広げた。

「イエー——イ!!!」

叩きあつても、平塚の手は少し湿っていて、以前のようにパンと
いった乾いた音は鳴らなかつた。彼女もそれ相応に緊張していたよ
うだったことが分かる。

ただ、平塚は変わらず八幡に向けて、あけすけもなく本当に嬉しそ
うになつて笑つていた。

男は得てしてそういう顔に弱いもので、つられて八幡も思わず顔が
綻んでしまつていた。

そんな二人の嬉嬉とした様子を見ていた近くの女の人が「おめでと
う」と讃えてくれた。

そして、それは偶然にもあの中年夫婦の奥さんだった。

「最初の種目と二番目の種目の時、私たちの隣にいたわよね？」

平塚と八幡は揃つてこくと頷く。すると、奥さんはふふつと優し
く笑つた。

「なんかの縁だから、私たちの分まで頑張つてね」

「はいっ、頑張りますっ！」

平塚は元気に応えた。その時、旦那さんと一緒に五、六歳ぐらいの
短パン半袖の兄がこちらに向かって歩いてきた。あの子は毎レース
で熱い檄を飛ばしていた子だ。

そしておそらく幼稚園にも上がっていないような妹もよちよちと
歩いて、父と兄の後ろを一生懸命ついてきている。

兄は二人の顔を見るなり、目の前にいるというのに大きな声で檄を
飛ばした。

「カッコいいおにいちゃんとおねえちゃん、頑張れ!! カッコ悪いド
ペのおおちゃんとかあちゃんの分まで!! 応援してるからね!!」

そして、その兄の様子を真似て「わたちも、にいちゃとねえちゃ、応
援ちてる!」と舌つ足らずな妹も二人に声をかけてくれたのだ。

純粋な子供の応援に、思わず愛らしさが芽生えて、元来人見知りで
他人の子供は好かない八幡ですらも頬がだらあんととろけていく。
だから平塚の方はもう可愛いことこの上ないというような感じで、子
供の身長ぐらいの高さまでしゃがむと「むふふう、ありがとなく、お
姉ちゃんとお兄ちゃん頑張るからなく」と二人の綺麗な黒の髪のを

わしゃわしゃと撫でていた。

一方、引き合いに出されてばつが悪いお父さんは、子供二人に向かって、「余計なこと言うんじゃないよお……」と面目なさげに投げかけたが、威厳はなく平塚に頭を撫でられて心地よさそうにしている兄妹にはその言葉は届かなかった。

まもなく「ステージ前に集合してください」というアナウンスが入り、名残惜しくも中年夫婦とその兄妹に別れを告げ、ステージの前に集まった。

ステージ前に集まった人の中には、勿論、あのゼツケン番号22番のカップルもいた。他のカップルも、ここまで来たからには、という面持ちで、先程までとは打って変わってピリリとした雰囲気があった。

「というわけで決勝進出おめでとうございます！ 決勝戦は女子の個人種目と、男子の個人種目に分けられます。詳細は決勝戦開始前にて説明しますので、まずは着替えてもらいます！」

八幡は首をきよとんと傾げた。スタッフの言う着替えの意味が分からなかったのだ。

そしてまもなく、男と女に分かれ、スタッフに導かれるがままにしばらく歩くと、最初は、運動場に併設されたシャワールームに連れてかれていた。

そこで一通り汗を流した後、再び別の場所へと連れていかれた。

そして、先程の着替えがどういう意味かは、次にスタッフに連れられた場所の光景を見て、すぐ気付いた。

「……なるほど、そういうことか」

シャワー上がりの八幡が連れられた待合室のような部屋には、フィッティングルームのようなカーテンで仕切られた小部屋が五つ用意されており、そしてその部屋の中心には眩いばかりの白銀のタキシードのジャケットとパンツが計一〇着ほど、ハンガーラックに掛けられていた。そして、周りにはネクタイのハンガーラック、ベストのハンガーラック、そしてシューズボックスもある。

タキシードの尺などが分かるはずもない八幡は、取り敢えずピタリ

と合うサイズのものを選んで一通り着替えた。

スタッフの「お似合いですね！」という分かりやすいお世辞とともに、次はメイク室のような所へ連れていかれ、鏡台の前に座らされると、スタッフによってアホ毛混じりの癖の強い黒髪は、前髪がぐるりとかきあげられ、髪はワックスで固められ、みるみると見たことの無い髪型へとセッティングされた。

鏡写しの八幡の姿はもはや別人ではあるが、相変わらずの目つきの悪さが哀しくも彼であることを証明している。

そして、そんなことをしている間に時間はとつくに日没を回っていたようで、外に出て、ステージ脇の白テントの仮設の控え室まで連れていかれた頃には、会場周りの大きな電灯は光を放ち、会場を照らしていた。

控え室では、決勝戦のオープニングに関する指示をスタッフから受けた。その指示は呑み込むことができたが、いかんせん慣れないタキシードで、未だに非常に心が落ち着かなかつた。皺しわの一本もつけてはいけない気がして、自然と座り方もいつもの猫背から、真っ直ぐな背筋になっていた。

ただ、心が落ち着かないのは、それだけのせいではない。八幡が白のタキシードということとは、つまりだ。

まもなくして、舞台の方から、再び大音量のBGMが流れ始めた。「レディイイイイイス、エエエエエンド、ジェントルメエエエン!! いよいよお待ちかねエ!! 七夕最強カップルコンテストの決勝戦の始まりだア!!! 私は、予選においても司会を担当させていただいた、長生きと九十九里!!の申し子ミスターナインティナインだあ!! よろしくウ!!!」

ミスターナインティナインの挨拶だけが聞こえるが、その後、予選の時とは明らかに違う量の拍手と声援が聞こえてきた。きつと、祭りの観客も挙こぞって決勝戦を見に来ていているということだろう。

八幡は明らかに瞬きの回数が増えていた。周りのタキシード姿の男たちも、その歓声が聞こえると明らかに動揺していた。ただ、22番だけは顔色一つ変えずに、泰然たいぜんしじやく自若としていた。

「ありがとうございまアす!! それでは、早速、最強に相応しい決勝進出カップル五組を紹介していくぜエ!! まずは一組目だア!! カモオオオン!!!」

スタツフが「足柄あしがらさん」と呼ぶと、件の22番の黒光りのがたいのいい超人男——足柄は、鉞まさかり担いだ金太郎でさえも腰を抜かしてしまいそうな貫禄そのままにゆっくりと椅子から立ち上がった。まじまじと改めて見ると、身長が一八五センチは軽く超えてそうなほどかなり高く、目尻につれて釣り上がるその細長く鋭い切れ目は、見下ろされるだけで腰が抜けてしまいそうなほどの威圧感があった。

そして、彼が控え室を出ると、「圧倒的強さで、ぶっちぎりトップで予選通過した大本命、足柄・松田まつだカップルだア!!」というミスターナインティナインの紹介とともに、会場は再び歓声に包まれていた。

その後も次々と呼ばれ、いよいよ最後となった。そして、八幡は一人控え室に残っていた。

「そして、最後はア!! おっ、今回のコンテスト最年少カップルが、決勝に駒を進めたア!! では五組目、カモオオオン!!!」

八幡がスタツフに「比企谷さん」と呼ばれる。

いよいよ出番が来た。椅子から立ち上がる。

控え室から出て、舞台袖から舞台へと続く階段に臨む。そして階段を一段ずつ上がると、ステージには、先に呼ばれた四組のカップルが並んでいるのが見えた。

そして、反対の舞台袖から上がってくる人影を見て、思わず息を飲んだ。

「若さは、最強にふさわしい特権だア!! 青春の嵐を巻き起こせエエ!! 比企谷・平塚カップルだアアア!!!」

その人影が頭あたまになるにつれて、鼓動が早くなる。

ぼやけた黒い影は、やがて透き通るほどの白へと変わる。

八幡がステージ上に完全に立った頃にははつきり見えていた。

あまりの美しさに見とれてしまっていた。

あまりの可憐さにそれは絵画であるように見えた。

あまりの麗しさに本物の一国の姫君であるように思えた。

純白のウエディングドレスを纏った平塚静——がそこにいたのだ。八幡はスタッフの指示通り、一步ずつセンターステージに歩み寄る。それは当然平塚もそうで、一步ずつ近づく度に、八幡の心臓の鼓動が早く、強くなっていた。

たとえ、面前に下ろされたきめ細かい白のヴェール越しからだとしても、普段ですら油断すれば不意に見とれてしまう端麗な顔立ちが、いわゆるブライダルメイクによって盈盈としてより一層際立っていて、瞬きするのも惜しくなるほど目を奪われてしまう。

そして、ふくよかな胸元が露になっていて、艶やかでありつつも、肩や腰回りは華奢なその身体は、見事にウエディングドレスに調和して、引き立てられている。

まさしく、羞花閉月の美人とはこのことであつた。

そして、数歩歩いて、目の前に、立った。

指示通り、二人は腕と腕を絡める。手を握る時とは違う感触が八幡に伝わる。スタッフの指示が無かつたら、とんでもないことになっていたかもしれない。それほど美しかった。

そして、スポットライトがあてられているステージの前方へと、揃えて足を踏み出した。

そして五組がセンターステージに揃つた。

「では、この五組で決勝を行うぜエ!! 気になる最初の種目は、五人のシンデレラ達による、『ガラスの靴を蹴つ飛ばせ!! シンデレラ靴飛ばし!』だア!!」

ルールは非常にシンプルだった。

ガラスの靴に見立てたプラスチック製の靴を思いつきり遠くに飛ばすだけ。

まもなく、それは始まつた。

ハンマー投げや、やり投げで使うような簡素なサークルの中に、ウエディングドレスの衣装は、異様でしかなかった。ただ、そのサークルにスポットライトは照らされ、周りには老若男女の観客に囲まれ、今そこは舞踏会のステージよりも華々しい場所なのである。

——そして、平塚はぶつちぎりの一位で帰ってきたのだ。

「……やっぱ、すげえわ平塚」

「だろおー！ もっと褒めてくれてもいいんだぞ!!」

ふふんと鼻にかける平塚は、結局プラスチックの靴を二〇メートルも飛ばしたのだった。観客も花嫁姿の人が見せることはないであろう豪快なキックモーションに、言葉を失い、天高く放物線を描く靴は、一瞬夜の空に溶け込んで見失ってしまうほどだった。

勿論八幡にとってはありがたいことこの上なかった。今回は、この靴飛ばしの結果によって、男子個人戦に影響があるとの事だったのだ。つまり、ここで一位を取ることは、他と比べてだいぶアドバンテージを稼げたことになる。

「ああ、お陰で、何とかいけそうだ」

「私の頑張りの分まで頼んだぞ、比企谷っ!」

「うわっ、凄いプレッシャー……」

「二位だからな、絶対に二位だからな!」

「うげえ……」

胃がきりりと軋む音がして、八幡は苦い顔になる。

すると、突然平塚はしげしげと八幡のタキシードを見つめ始めた。

「……なっ、なんだ、やっぱ似合ってたないか?」

「いやあ、そういう訳じゃなくてだな。こんな早く比企谷のタキシード姿を見ることになるとは思ってなくてなあ」

「こんな早く? 俺は、一生着ることはないと思ってたが……」

お返しにじろじろと見てやろうと一瞬八幡は考えたが、そのウエディングドレスを一度見れば、理性が蒸発してしまいそうな気がしてやめた。

ふと耳元を見てみると、ある事に気がついた。

「というか、今更だが平塚はアクセサリーとか付けないのな、イヤリングとか。見た感じ他のカップルの人はみんな付けてるっぽいが」

他のカップルの彼女達は、それぞれ予選の時には身につけていなかったイヤリングや、ティアラ、胸元にはペンダントを付けていた。

ただ、平塚はそういう類のものは一切つけていなかった。それに、今日だけではなく、平塚と話すようになってから今までの間も彼女がアクセサリーをつけたことは無かったと記憶していたのだ。

ただ、何気なく放ったその一言で、平塚の表情は明らかに曇った。「……………いいんだ、私にそんな大層なものは。そういうのは彼女たちみたいな女の子らしい人の方が似合う。私みたいなのに女物は似合わないんだよ。正直、このウェディングドレスだって、私には全く似合っていないしな……………」

いつもは大層な自信家の平塚らしからぬ言葉は酷く自虐的に聞こえた。

そして、彼女はどこか遠くを見ていた。

何かを捉えているわけではなく、ただ遠くの暗闇を見ていた。その瞳は、吸い込まれてしまいそうな儂さだけでなく、煌びやかな月光を映さず、どんよりと濺よどんでいるようにも見られた。

八幡も流石に平塚の変わり様に気付き、咄嗟に「いや、そんなことは……………」と言葉を繕おうとしたが、平塚は「別に無理に気を使ってくれなくていい」とすげなく返された。

「私は可愛くなりたいとは思ってる訳ではないし、こっちの方が性に合ってるしな。……………私は生まれつきお姫様にはなれないんだ」

目を閉じて諦めたように言う平塚の言葉は、どこか嘆きにも憂いにも聞こえた。その言葉は一朝一夕のものではなかった。重たく固く、そして、深く深く根が張っている言葉だった。

八幡は頭を回して何かを伝えようと、平塚が彼にいつも与えてくれているように何かを伝えようとしたが、下手な慰めでは意味が無いどころか却ってその綺麗な薄墨色うすすみの瞳を余計に濺よどませるような気がした。八幡は無力さと歯がゆさを感じ、唇を少し強く噛む。

「おまたせしましたア!! ではア!! まもなく、最強カップルが決まる最終競技を開催するウウ!! カップルといえば当然あれだア!

そう、『お姫様抱っこ』対決だアアア!!」

そのアナウンスが流れると、それに呼び戻されたかのように平塚の面持ちは元に戻った。

「ごめん比企谷、こんなタイミングで、なんか変なことを言ってしまったな」

「君にだから言ってしまうのかもな」と平塚は笑う。まるで今のは内に秘めた醜い花だと自ら蔑むように。その笑顔はひどく不自然で、下手だった。

「……まあ、忘れてくれ！ よしつ、比企谷、最終決戦、頼んだぞ！」
八幡はこくりと頷くことしかできなかった。

——まもなく五組のカップルがステージに出揃った。さんざめくスポットライトは全て彼らに向かって浴びせられている。

カップルの前には、おもりが続々と運ばれてくる。

ただ、八幡達の前には置かれなかった。

「先程の靴飛ばしの結果が反映されるぜエ!! 一メートルにつきニキロのおもりを背負ってもらおう!!」

他のカップルの彼氏は、それぞれ腰や肩におもりを巻き付けた。背番号22——足柄に関しては、おそらく四〇キロほどのおもりを付けている。

そしてしやがみこみウエディングドレス姿の彼女の腰と背中に腕を回す。

八幡も、平塚に腕を回した。平塚の身体は想像したよりも遥かに華奢で、異性なのだと改めて認識させられる。平塚も、その細く靱しなやか腕を八幡の首周りに回した。

そして、いよいよ始まる。

「ではア！ 最終決戦!! お姫様抱っこ対決開始だア!! 泣いても笑ってもこれが最後オ!! 会場の皆さん、カウントダウンをご唱和してくれエ！ まずは三からだア！ 行くぞオ!! せえの——!!」

「三——っ!!」

「二——っ!!」

「二——っ!!」

「すたああとおおおお!!!!」

五組が一斉に立ち上がる!!」

大きな声援がそれぞれのカップルに向けられる。

——一分、二分と、時間が経っていく。

すると、次第に脱落者が現れた。

ドタンという音が鳴り、その振動は足元に僅かながらも伝わってきた。

「おおっと、ここで、寒川さむかわペアは脱落だア!!!」

——そして、気付くと残り三組になっていた。

八幡もかなり満身創痍であった。だが、目標の二位になるまでは、絶対にこの腕を解くわけにはいかなかった。

また一分と時が経つが、その時横にいるカップルが力尽きたように崩れ落ちた。

「くううウ!!」ここで、大磯おおいそ・二宮にのみやペアの脱落だアア!! だが、三位!! 是非惜しめない拍手を!!」

会場からは溢れんばかりの拍手と労いの言葉がかけられる。

いよいよ残り二組。

「ねえ、比企谷、もう」

首に回されている平塚の腕が少し緩んだ。下ろせの合図だ。ここで、下ろせばあれほどまで望んでいた二等が確定なのだ。

だが、下ろさなかった。

なぜか今、ここで八幡は平塚を抱く腕を解き、下ろそうという気にはなれなかった。

そして、その理由にはすぐ気がついた。

『このウエディングドレスだって、私には似合っていないしな……』

『……私は生まれつきお姫様にはなれないんだ』

八幡は平塚に認めさせたかったのだ、気づいて欲しかったのだ。そして、観客に見せつけたかったのだ。平塚のウエディングドレスが最

高に似合っていることを、女の子らしい可憐なこの姿が最高に似合っていることを。

正直、どうして平塚がそう思うに至ったか八幡には全くわからなかった。それはきつと八幡が彼女と関わる前に深く深く根を張ったものだ。

だから、八幡が全て解決しようなど、烏漕おこがましいことこの上ないのかもしれない。でも見てしまったからには、知ってしまったからには八幡は、彼女が醜いと思っっているその花は、醜くないと伝えたかった。そして、笑顔でそれを受け入れたかった。

それは、まさに平塚が裏表のない笑顔で友達であることを教えてくれたように。

口では照れくさくて素直に言えなくても、言葉では思いが上手く伝わらなくて曲解されるようなことがあっても、今の八幡には、たとえ一夜限りだとしても平塚をお姫様にしてあげることができた。

——絶対に勝つ……

そう固く心に決めて八幡はグイッとテグスに上から引つ張りあげられたように平塚をさらに持ち上げた。

当然平塚は突飛な行動に困り顔になって、彼の純白のタキシードの襟元を何度か引つ張った。

だが、八幡は頑なに下ろそうとはしなかった。その時は未だかつてないほど意固地だった。

平塚もとうとう襟元を引つ張るのをやめ、腕をギユツと回し、より八幡の方へと身体を預けていた。

足柄と八幡の一騎打ちになった。最強カップル誕生を目前に会場のボルテージはマックスになり、二人に向けての声援が送られた。

平塚の身体を少しでも下げたら、そのままずると下ろしてしまいうさだから、グイグイと上へ上へと意識を向ける。

だが、それから三〇秒たってはまだ終わりのゴングは鳴らなかった。八幡もそろそろ腕が悲鳴をあげていて、足が膝の方からがくがくと震え始めていた。だが、今、直に感じている平塚のまるやかな体温が、まるで痛みを中和するかのようになを奮い立たせていたのだっ

た。

さらに三〇秒たった。しかし、まだ鳴らない。あまりのしぶとさに八幡は思わず相手の方を少し横目で見やると、全身おもりで巻かれていますにも関わらず足柄は依然として悠然としていて余裕の表情であった。その上、足柄は抱えている松田と何か会話しているようにも見えた。

その姿を見せつけられて、少しも動揺がないというのは八幡には無理だった。途端にぷつりと支えていたテグスが切れたように腕が下りてしまい、土台となつている大腿筋と支えている二の腕の筋肉が張り裂けそうな感覚に襲われた。

——俺にはそんなこと、さすがに無理か……

そう諦めた、次の瞬間だった。

足柄は突然腰を下ろして、松田を抱えている腕を解いたのだった。会場の人々はその意外な結末に、目を見張った。

「——お……、これはっ……!! 足柄・松田ペア、リタイア……。『七夕大決戦く彦星と織姫は誰だ?! 最強カップルコンテスト』優勝はア……、最年少カップル比企谷・平塚ペアだアアアア!!」

ミスターナインティナインが背中を大きく反らし、高らかに叫ぶと、ステージの下の装置から大量の銀テープが月が照らす暗夜に向けて発射された。

そして、空中をうねるように舞い始めた勝利の狼煙のろしともとれるテープをその目に捉えた八幡はできる限りに丁寧のろしに最後の力を振り絞って、平塚を下ろした。

祭りの客で埋め尽くされた観客席からは、甲高い指笛が鳴る。そして今まで一番の拍手が二人に向けて送られていた。

——見事、優勝してしまったのだった。

その後すぐに表彰式があった。

村内会報に掲載する記事のためのインタビューがあり、ステージの上での記念撮影もあった。

それらが一通り終わると、もうだいたい夜も更けはじめていて、明日学校もあり、電車の時間もある二人は、祭りの出店を回ることはできず、そのまま帰らなければならなかった。

八幡の行動は突飛なもので、二等を何よりも望んでいた平塚から糾弾されるのも至極当然なことではあった。

だが彼女はそんなことをしなかった。

むしろ彼女は優勝したことを素直に喜んでくれているようにすら見えた。帰り道では大会の総括や賞品の使い道を二人で話し合ったりしただけで、結局八幡の真意を探られるようなことはなく、そのまま最寄り駅で別れることになった。



家に帰って、階段を一段飛ばして駆け上がり、部屋に戻ると、何よりもまず先に、記念品として手渡された紙袋の中から衣装に似たレース柄の白いリボンで丁寧に梱包された純白の包みを取り出して、机の上に置き、はやる気持ちを抑えて、慎重に開封していく。

そして、純白の包み紙の中に入っていた純白の箱を、なるべく傷つけないように、そつと開けた。そこには裏つ返しの木製の写真立てが収められている。石橋を叩いて渡るようにそれを取り出し、脚の部分を広げて、机の上に立てかけた。

そして、それを裏返す、つまり、写真が入っている方をこちらに向けた。

そこには、ステージを背にタキシード姿の八幡と、純白のドレスに身を包んだ花嫁姿の平塚が写っていた。

これは優勝した後に撮ってもらった二人の写真だ。

ポラロイドカメラだから、すぐに現像して貰えたのである。また後日、フィルムで現像したものを郵送して貰えるという話だった。

だが、にわか作りのポラロイドの写真だけでも、思わず頬がだらしなく緩む。緊張しすぎて表情筋がカチコチに固まっている八幡に關してはもはや滑稽であるが、隣にいる平塚がみせているとびきりの笑

顔が、心をじんわりと暖かくさせた。

やはり、平塚のウエディングドレスは最高に似合っていることがこの写真の中に確かに証明されている。それが嬉しくてたまらなかつた。

そして改めて実感する。本当に友達になることが出来たのだ、と。この写真は二人の確かな繋がりを示し、それが元来心配性の八幡には何より嬉しいものだったのだ。

こんなに良い友達を持てるなど、高校二年に上がりたての一人ぼっちの自分に教えてもこれっぽっちも信じていないだろうと八幡は思わず笑ってしまう。

——だが、ふと、本当にふと考えてしまった。

もし写真の中のこのタキシード姿の八幡が、見ず知らずの男にそっくりそのまま変わっていたら。そして同じように、平塚がこんな笑顔をしていたら——。

その瞬間、どつと黒いものが濁流になって押し寄せた。

黒いものは、積み上げられ心いっぱいに満たしていた多幸福感をいとも容易く飲み込み、ただただ真っ黒に染め上げた。

氷の厚い壁が溶けてしまったからこそ、入ってきた異物。

咄嗟に八幡は、その写真立ての足を畳み、梱包されていた箱に強く振^ねじ込む。そして、それを机の引き出しの中に仕舞うと、自分の身を布団に投げ、足と手をだらんと流して白い壁紙の天井を見つめた。しかし、その天井が真ん中からだんだん黒ずんでいくように見えた。

そして、その天井の黒ずみから、ぬるると、人影が現れる。それは、背格好は八幡と似ていて、さらにタキシード姿であるのに顔は真っ黒に塗りつぶされていた。

ただ、その人影が不敵な笑みを浮かべたのはなぜかわかった。そして八幡に向けて問いかけてきた。

「今が不満なのか？」

——不満はない。

「十分幸せじゃないか」

——確かにそうだ。

「なら別に俺でもいいじゃないか」

.....いやだ。

「.....ふっ、お前は呆れるほど欲張りで、どうしようもなく醜いな」

そう吐き捨てた人影は、天井の黒ずみに吸い込まれていく。

気付けば、元の白い壁紙の天井に戻っていた。

——八幡はまだ自分を知らなかった。

このようなひどく醜く傲慢な欲望が自分の中にあるなど思いもしなかった。

まだこの欲望に、名前を付けられなかった。

そして、酷く、自分自身が、嫌になった。

六束： This is Teeny Counter Punch!!

「ふああ……」

改札に切符を放り込めばすぐに緑色のゲートが開く。そうして出てきた八幡はよろつきながらも、何とか近くの案内看板に寄りかかって、口をとびきり大きく開けて欠伸あくびをする。

ただでさえ寝惚ねぼけ眼気味の目が、本当に寝惚ねぼけているので、もはや寝ている時の眼になっている今日この頃。

時刻は午前八時三〇分を回ろうとしている。

向日葵ひまわりは燦々さんさんと咲き乱れ、蟬せみがこれみよがしに騒がしくなった八月の初旬。

暦の上ではちょうどこの日に秋が立ったようだが、テレビメディアの中ではただ今は夏真っ盛り。全国の強烈な暑さを毎日のように喧伝けんでんしている。しかし、実際はその通りで、まだ朝方だというのに、随分と蒸し暑かった。予報ではこのまま暑さは増し、酷暑となるらしい。

この滴したたる汗はいくら拭っても、また汗が染み出てくる。

湿った潮風に交えた塩つけは、泣きっ面に蜂だ。

そう、今は夏なのである。つまり高校生にしてみたら夏休み真っ只中なのだ。夏休み中の八幡が高校に足を向けるはずもなく、これは私用のだった。

そして今、八幡は人を待っている。

集合の三〇分前、世間一般からすると早すぎるのだろうが、教訓は教訓だ。

待っている間にも、続々と改札から人の大群が雪崩なだれてくる。案内板の前に立っていると、冷ややかな目を向けられたものだから、八幡はいそいそと近くの手すりに腰をかけた。

その手すりの形は、いつもとは違った。キャラクターの形を象^{かたど}つてあるのだ。

こんなところまで凝っている。サラリーマンの汗が染み込んだ現実のあるの駅前との何の変哲もない手すりを見れば、世界が違うことが分かる。

あの改札は、まるで夢のような運命の国への最初のゲート。

現実の世界からの客はみな、案内板に描かれた竹を銜^{くわ}えた愛らしいパンダが指し示す方向へ吸い込まれるように進んでいく。

元来リアリスティックでペシミスティックだと自負している比企谷八幡という男は、めつたに寄り付こうとしない場所でもあった。単純に性に合わなかったのである。

決して、エンターテインメントが嫌いという訳でもなく、お一人様大歓迎の映画やゲームセンターには足繁く通っている。毎年恒例のアニメ映画シリーズは毎回欠かさず見に行っている程だ。

だが、そんな八幡も運命の国へと招待される運びになった。それは見事あの大会に優勝してしまったからだ。

今までの八幡であれば丁重に断っていただろうが、入園料がタダであるならば、乗り気ではないにしても、断ることもなかった。

ただそれ以上に八幡の中に芽生えた欲深い危機感が突き動かしたというのは、彼自身も十分自覚していることだった。

そこから十五分経ち、さらに客足が増える中、改札の向こう側にこちらに向かって手を振る人が一人居た。

「比企谷ーっ!!」

八幡が手を振り返すと、その声の主——平塚静は小走りで近づいてくる。彼女の私服は、あのスポーツウエアを除けば、初めて見たことになるが、少しダボツとした丸ネックのベージュ色の半袖に、少しダメージの入ったジーンズは、ボーイッシュに感じられた。

「おはよう、平塚」

「ああ、おはよう。早いな比企谷、待たせてしまったか?」

「——そうだな、めっちゃ待ったわ」

「もう、そこは今来たところだろう? ……まあ、君らしいといえば君

らしいか。とにかく、予定より早く集合できたのだから、急いで並びにいくぞっ！」

「えっ、あ、ああ」

平塚に急かされて予定より早く開園前のエントランス前広場に辿り着くと、思わぬ眼前の光景に八幡は愕然とした。こんな時候だというのに、広場の地面が見えなくなるほど人がみっちりびっちり芋を洗ったように犇^{ひし}めきあっている。

「うげっ……、帰りたい……」

思わず本音を漏らしてしまった八幡を平塚は「バカタレ」と言つて軽く頭をはたいた。

「まったく今からだと言うのに。そんなことを言ったら士気が下がってしまうではないか」

「でも、こんなクソ暑い中で、こんなクソ混んできるところ見せられたら、そう思うのかもしれない。逆に平塚は思わねえのか。しかもお前の嫌いなカツプル様がうじやうじやといるぞ」

「くっ、ぬう……。確かにそうだが、それでも私は思わない。そんなことよりも私はやっとうこうしてこの場に來れたんだ……。あの時の雪辱を……」

平塚はやわっこそうな唇を血が滲んできそうなほど強く噛んで、チケットに大きな折れ目がつくほど手に力を入れていた。

突然地雷を踏んでしまいそうになったのである。これまた触らぬ神に祟りなしということ、八幡は何もその事には触れなかった。

もう暫くして開園時刻になり、ディスプレイニアランドの園門が開かれた。続々と人が園内へと流れ込んでいく。

その門の先には大きな円形の花壇があり、それを取り囲むように様々なキャラクターがお出迎えしている。

そして、その奥には、西洋風の建物がどっしりと構えていた。久方ぶりのその光景に、八幡も思わず目を奪われていた。

平塚も同じようで、「久しぶりだなあ……」と心に染み入っているようであった。

しかし、それは僅かばかりの間だけであり、すぐに平塚は目の色を

変えていた。

「よしっ、比企谷。早速だがファストパスのために走るぞっ！」

ファストパスというのは、持っていれば長蛇の列を大幅にショートカットして人気アトラクションに早く乗ることができる券のことであるが、当然枚数制限があり早い者勝ちであり、その券のために走るということは良くある事であった。しかし、八幡は乗り気にはなれない。

「え、でも、こんなクソ暑い日に……」

「うだうだ言うな。何時間も暑い中で待ちぼうけ食らうよりはよっぽどマシじゃないかっ！」

「まあ、確かにそうかもしれないが、って、おい、待てっ……っ！」

結局八幡は平塚の後を追いかけるように園内を疾走することになった。

そして、無事一番人気アトラクションのファストパスを手に入れたのだった。

しかし、無事ではないのは我が身である。八幡は膝に手をつき、息を荒くしていた。

「ぜえぜえ、よし、これで、大丈夫だよな……」

「何を言ってるんだ。次は別のアトラクション乗るために普通に列に並ぶぞ。まだこの時間帯なら空いてるはずだから」

「嘘でしょ……」

「比企谷っ、走るぞっ、ほら早くっ！」

そして、またも全力疾走した。

息も上がって乾き始め、汗も滝のようにダラダラと流れる。とりあえず多めに持ってきたハンディータオルが早速役に立った。

八幡は額や首筋をそれで拭きながら、呼吸を整える。

一方、澄ました顔をしている平塚の無尽蔵っぷりに驚かされるものだった。七夕の時は体力はそこまで変わらないと思っていたが、どうしていまこのような差が生まれているのか八幡には分からなかった。

デイスティニーランドにまで来てここまで疲れる必要はないじゃないかと四の五の言ってやろうと八幡は思ったが、「なあ、比企谷、楽

しみだな！」と、そう飛び抜けて嬉しそうな顔で言われては、「ああ」と相槌を返すだけで文句もすつこんでしまった。

——一つ目のアトラクション、目玉の一つである山岳地帯を駆け巡るジェットコースターを乗り終えた後、階段で下へと降りる途中にある店で立ち止まった。そこには遊園地でよく見られるような、ジェットコースターの途中に撮られた写真がずらりと並んでいるコーナーがあった。

「ほら、さっきの写真だ！ 私たちは……」

「あれだな」

八幡は右から二番目の写真を指さす。

「お、あれか。どれどれ……、ぷふっ。私たち中々の写りっぷりだな」
「ああ、平塚にいたっては髪が前にかかって貞子にしか見えねえぞ。つーか何でそんなことになるんだよ」

「それを言うなら比企谷だって、目が死んでしまっているじゃないか」
「それは元々だ」

どちらからともなく堪えきれずに笑い声が漏れる。最近このようないじり合いも増えていた。だが、もちろん悪い気は一切しなかった。むしろ打ち解けられた証であるような気がして、心地よかった。

ただ写真に関しては、さすがに写りが悪すぎるので、購入しなかったのである。

——どうやら平塚は事前にある程度の計画を立てていたようで、その後も決まった時刻のファストパスを取るために、何度か全力で走った。他の客の視線などお構い無しで、とにかく走った。そして、コースの最後の最後で滝から落ちていくアトラクションなどの人気アトラクションを乗り倒した。ファストパスなしでは繁忙期はんぼうということもあつて、炎天下の中一時間以上待たされたが、アニメの話題のおかげでその時間も特に苦に思うこともなくあつという間に過ぎていった。

「今回は走らなくていいのか」

「ああ、休憩だな。私もさすがに疲れた」

最近できた話題のアトラクションを乗り終えた後、その近くの通りの一角にあったちようど日陰にもなっている木製のベンチに腰を下ろした。

平塚の手には途中のお店で買ったチユロスと、肩にはドリンクホルダーを掛けられていた。八幡の片手にもチユロスはあるが、ドリンクホルダーは高かったので買い渋った。

二人の座るベンチの前を横切る客の顔を見ると、皆幸せそうな顔をしている。これは凄いことだと八幡は感心していた。これが千葉の街中で見られるとは到底思えない。

ただ他の客から見れば、八幡達も幸せそうな顔をしている客の一人なのであろう。

「どうだ、比企谷は楽しいか？」

「ううん、どうだろうな。まあ、楽しいんじゃないかねえの」

「なんだその言い方は、まったく。私じゃなかったら怒ってるぞ」

「そもそも俺みたいなのやつと一緒に来ようとする物好きなんて平塚ぐらしいじゃないからな。お前が怒らないなら別にそれでもいいわ」

平塚は「ふふつ、確かにそうかもな、私だけかもな！」とやけに機嫌よく返してきた。

ここでしばらく休憩していると、平塚の目線が隣の売店に注がれていることに気付いた。そこには様々なキャラクターのカチューシャや被り物が売られていて、たくさんの人が立ち止まってそこで被せ合いつこをしている。

「なんだ、平塚、あれに興味あんのか？」

八幡がそう尋ねると、虚をつかれたようで、平塚は身体を仰け反つて分かりやすく慌てた。

「えっ、い、いや、ただ目に入ったただけだ！　そもそも私にああいうのは……」

歯切れの悪い尻切れ蜻蛉とんぼの言葉は、平塚にしては珍しい。ただ八幡は、彼女がそのように渋る理由は分かっていた。

「ま、別に買ってもいいんじゃないかねえの。いいじゃないか、今日一日ぐらいなら浮かれても。折角来たんだし」

「そうだよな。……うん、そうする!」

吹っ切れた平塚を見て、八幡がここで待つてるからと言おうとした矢先、彼女は「じゃあ、比企谷も買おう!」と提案してきた。

八幡は狒犬の阿吽あうんの阿の如く口をぽかんと開けた。

「は……? 何でそうなる」

「それは、だって、私だけつけてたら、一人だけ浮かれてるみたいじゃないか……」

「ええ、別にいいだろ。そんなの誰も気にしないって」

「やだあ、絶対にそう見られる!」

「いや、そんなの気にしねえって、俺らも別にそんな人いても気づかなかっただろ」

「……お願い、一緒に買って?」

普段は切れ長で二重瞼の頼もしささえ感じる双眸そうぼうをうるうると潤ませての可愛い猫撫で声は何よりもあざとらしくて、凶悪だった。今まで拳で判わからされてきていたのに、男の弱点が分かっているとしか思えない行動は、ある意味で拳よりも破壊力が高く、八幡もあえなく屈した。

「……分かった分かった。俺も買うから」

「本当か?! やった!」

そんな訳で駄々を捏こねた平塚にあつさりと流されるがまま、二人して店の前に立った。所狭しと並べられていて、思いのほかたくさん種類のカチューシャがあった。

平塚は取つかえ引つ変えに八幡の頭に商品を付けていって品評会を始めていた。

「これなんか、どうだ。ぷふっ、あははっ……! これは一番傑作だ!」

「……お前、笑っちゃってんじゃん。何それ、そんな似合っていないの」
「今写真撮るから見てみる! ……あははっ!」

平塚は携帯画面を覗き込むと、より一層大きな笑い声を上げた。確かに写真には、お世辞にも似合っているとはいえない、というより最早噴飯物ふんぱんものである猫耳の女物のカチューシャを付けて不自然なやけ面

の男が写っていた――。

「次はどうしようかなあ〜♪ んふふ〜♪」

上機嫌に鼻歌を歌いながら、平塚はベンチに座ってマップを見ている。

その頭には黒い丸耳にリボンがついた愛らしいパンさんのカチューシャがあった。

平塚は、何もついてないパンさんカチューシャとリボン付きのパンさんカチューシャで悩んでいたが、八幡がリボン付きの方が似合っていると言ったら、それからとびきり上機嫌になって、買った後もずっとこんな様子なのだ。

そして、八幡は、さんざん弄もてあそばれた挙句、結局は王道で無難なパンさんの被り物になった。ドリンクホルダーを諦めた男には当然この出費は非常に重いのだが、単純なもので平塚に一番似合っているとわかれて、躊躇ためらいもせず購入してしまったのだ。

「なあ、平塚、次どこにするんだ？」

「私はパンさんのバンブーフアイトに行きたいんだけど、比企谷はどう？！」

「よし、そうするか。俺も気になってたし」

「やった！ じゃあ、そうと決まれば！」

マップを畳んで平塚は立ち上がる。合わせて八幡も立ち上がった。



「バンブーフアイト楽しかったなあ、次は……。って、もうこんな時間か」

時刻は六時をとうに過ぎていた。いくら日が長いと言っても、そろそろ日没の時がさし迫っていて、黄昏たそがれの空には赤みがかかった入道雲が悠々と浮かんでいる。

「確か夜のパレードは、十九時半からだから、次のアトラクション乗っ

「たから見れなくなっちゃうな」

「うむむ、これはしょうがないな。断腸の思いで、今は諦めるしかない……」

「じゃあ中途半端に時間も空いてるし、お土産買いに行けばいいんじゃないかね？」

「おお、それは名案だ！」

それからエントランスゲートの近くの売店が集まったエリアに行って、お土産物を選んでいった。

八幡に至っては、お土産を買う相手など小町ぐらいしかいなかった。一方平塚はお土産を贈る相手が、一人、二人ではないようで、棚と随分とにらめっこして決めていた。

「すまん、時間かけてしまったな。じゃあ、パレードに行くかつ！」

「ちよつとその前に、トイレ行つていいか？」

「ああ、もちろん。私はここで待つてるからな」

少し離れた公衆便所へ向かった。そして用を足して、手を洗う。洗面台の鏡を見ると、写真で撮った猫のキャラクターのカチューシャ程ではないにしろ、お世辞にも似合つてるとは言えない被り物を付けた男がそこにはいた。

小町に見られたら最後、彼女の冷笑を買う光景がありと目に浮かぶ。ただこれも今日一日限りだと言い聞かせて、鏡から目を離れた。

公衆便所から出て、小走りで平塚のところへと戻る。

だが様子がおかしかった。平塚は確かにいたのだが、見ず知らずの男三人と話していた。

そして、そこで何が行われているか八幡に分からない訳では無かった。その男たちの顔ははつきりとは見えないが、下衆^{げす}笑いを浮かべているということは、遠目からでも分かった。それは良く噂に聞くものであり、八幡も嫌いな類の薄汚れた笑いであった。

昔の八幡だったら、ここで萎縮して夏の虫でも怖がって火からは飛んで逃げていったかもしれない。

だが、今は違った。

八幡は迷うことなく駆け寄る。

「あの、やめてもらって——」

喉元に刃が突き付けられたように言葉が詰まった。

その男達の顔をはつきりと見ると、急に言葉が浮かばなくなったのだ。

代わりに、夏のせいではない冷や汗が額をつたあと流れ始めた。

「あ? ……って、ああれ、比企谷じゃあん?！」

一番身長の高い男はそう言っつて、八幡の顔を舌なめずりしながら睨みつけている。

茶髪へと髪色は変わっているが、頬骨が少し浮いているその特徴的な顔を八幡は忘れていなかった。名前を伊勢原達也いせはら たつやといった。

「マジ、ヒキタニくんじゃん! ウケるわく!! しかも、何そのパンさんの帽子!!」

細く鋭い目を開き珍しいものを見るように薄茶色に汚れた歯を見せて笑うのは金髪の男で、ゆこ綾瀬あやせりょう遼といった。

「それ似合っていないですから!! 残念っ!!」

「やめたれつて、事実言っちゃうと、ヒキタニくん可哀想じゃんく」
そして、手前にいる男はパーマがかかった前髪をかきあげて鼻を興味もなさげに鳴らす。八幡に差し向ける目は酷く冷たかった。

その腫れぼつたいほど厚い二重瞼で西洋人のように彫りが深く鼻筋が通った男が厚木篤人あつぎあつとだというのも忘れられるはずが八幡にはなかった。

「……まさかとは思うけど、君が言っつてた連れつて?」

平塚は厚木の問いに、「ああ、そうだが」と間髪入れずに返す。すると、後ろの二人は腹を抑えて、ゲラゲラあざけと嘲るように大声で笑い始めた。

「おいおいマジかよ!! はっはっはっ!! ヒキタニくんとっ?! ムリムリムリムリ、腹痛てえっしょく」

「比企谷お前、金でも払つてんのか?!」

「いやいや、タツつん馬鹿なの?!! 金払つても、ヒキタニくんなんかとは絶対無理だつてく」

「それな！ 確かに無理だわっ！」

酷く馬鹿にされているのは阿呆でも分かる。

だが、八幡は何も言い返せなかった。今でも耳に——鼓膜にこべりついでるその声は、呼吸を不規則に早くし、身体を小刻みに顫えさせた。

「……君たちは比企谷のことを知っているようだが、一体どんな繋がりなんだ」

平塚が至極落ち着いた声で問いかけると、伊勢原は相変らずの癖の唾を含んで口を二度鳴らすことをしてから答えた。

「ああ、盛り上がっちゃってごめん。俺らさ比企谷と同じ中学なんだよねえ。なあー、比企谷ー？」

八幡は頷くことすらできなかった。

逃げ出したいと思った。だができなかった。それほど八幡の足までも立つことがやつとのほど震えていたのだ。

「……比企谷と何があった？」

「やめてえ、そんな怖い顔しないでー。折角の美人が台無しだよー」
「俺たち友達いないヒキタニくんと仲良くしてあげてたぐらいだし。ねえ、アツちゃん？」

厚木は仏頂面のまま、「ああ」と頷く。

「そうそう比企谷さあ、高校では上手くやってんのかもしいけど、中学の時色々凄かったからさあー!!」

伊勢原が唾を含ませ、にちよにちよと音を立てながら楽しそうに言う。綾瀬が思い出したように吹き出して続ける。

たった今、悪意の火が黒表紙の本の頁を火種にしてつけられると、瞬間に留まっている夏の虫を火炙りにした。

「そうそうー！ まず、初日になりふり構わず喋りかけてさ。大して喋れもしないのに場を回そうとして、みんなから嫌われてたよねえー！ だから、俺らがヒキタニくんと仲良くしてあげたって訳」

——やめてくれ

声は出なかった。その間にも愉快そうに、そして悪戯に、頁は捲られ、燃やされていく。

「学級委員とかも立候補しちやったり〜」

「メールとかもやばかったよなあー!」

——やめてくれ

「あと、最っ高にヤバかったのは!」

「あの相合傘のやつだな!」

——もう、やめてくれ……

「あの雨の日さ、『相合傘行けるんじゃないやね?』っていうアツちゃんが考えた冗談、真に受けてさあ〜!」

「『傘持ってるので、一緒に帰りませんか?!』って、昇降口の前で。ぷはっ、今思い出しても傑作だったよなあ!」

「『比企谷くん、メアド交換しただけじゃん。友達でもないのに』的なこと言われてたよなく、ヒキタニくんまじ可哀想だったわ〜」

それを聞いて、「なるほど、そういうことだったのか。よく分かった」と平塚は何かを察した様子で言う。

「……まあ、というわけだ。君が知らないだけで、比企谷はこういうやつなんだよ」

厚木は口角を少しだけ上げて笑った。これは、八幡を貶めた時と、全く同じ顔だった。今はまるで獲物を仕留めたような、そんな風に見えた。

厚木は一步平塚へと近づき、手を差し伸ばす。

「だからさ、そんなやつより、君みたいな良い子は俺らと——」

言い切る前に、厚木は言葉にならない声を漏らして、鼻孔を真ん丸に開き、福笑いのようになってその二枚目の顔を不細工に歪めながら後ずさってその勢いでしりもちをついた。

平塚が、鳩尾に向けて鋭い拳を放っていたのだ。その一瞬見えた彼女の横顔は鯁ばっついていて、八幡が一度も見なかったことのない、年不相応の厳しささえ感じさせるものだった。

座り込むこともままならず、地べたに転がって苦しそうに唸っている厚木は当然この世界の中ではひどく異質なもので、周り客からの注目を一斉に浴びた。そんなみっともない厚木の姿を見せられた綾瀬と伊勢原は狼狽えて目を泳がせる。

「きつ、君、何やってんの、正気つ……?」

綾瀬が声を上ずらせながら平塚に問いかける。

「腹が立ったから殴っただけだ。なんだ、女に拳を振るわれるのは初めてか?」

「は、は——?」

気が動転して、二人は口元がまごついて、何も話せない様子だった。「君たちは知らないだろうが、私は良い子じゃなくてこういう人間なんだよ。私が言うのもなんだが、君たちの器量ではおそらく私を扱いきれないぞ?」

綾瀬と伊勢原は何も返してこなかった。

「それと、ちゃんと比企谷に謝ってくれ」

「はっ、訳わかんねえし、なんで俺らが——」

「——あやまれっ………!!」

周りの野次馬も腰を抜かしてしまうほどの、腹の奥底から出たような威厳に満ちたたましい声。八幡も初めて聞いた声だった。そして、力が籠こもっているのか小刻みに震えている握りこぶしを見せてしまったのは、既に腰を抜かせたボンクラの白旗を引き出すことは難しくなかったようだ。

「ひいつ……、比企谷、俺らが悪かった。俺らが悪かったから、すまねえ、許してくれ……」

「……では、もう特に話すことも無いな」

「あと、最後に」と平塚は付け足す。

「君たちよりも、ずっと比企谷の方がカッコイイし魅力的だ。じゃあ、さようなら」

平塚は、まだ震えている八幡の手を力強く、優しく包み込むように掴んだ。そして、野次馬に取り囲まれたこの場から引き剥がすように、八幡の手を引く。

「ほらっ、早く行くぞっ、比企谷っ。早くしないとパレードの良い席埋まっちゃうからな!」

「あ、ああ……」

しばらく平塚に手を引かれていた。八幡はただそれに身を委ねる

だけだった。

彼女は二〇〇メートルほど走ったところで歩調を変えた。そして、唐突に平塚は笑いだした。

「あはははっ！ さっきの顔見たか、傑作だったな！ 軽く殴ったぐらいいであそこまでになるとは、比企谷はもつと凄いもの喰らっているというのに！」

「……」

「まあ、中々の賭けでもあったな。もしやり返してきたら、さすがに無理だったろうし、私も気が大きくなったものだ……。きつと恨みも買われてるだろうから、もし次あいつらに出会ってしまった時は、今度は君が助けてくれよな！」

おそらく平塚は冗談を言っている。ただ、八幡は何も言えず、全く笑うことはできなかった。

そして一言、周りの喧騒けんそうにかき消されそうなほどの小さな声で謝るだけだった。

「……比企谷、気にしなくていいから、全然気にしなくていいから。それに別に私はあんなことを聞いて君のことを嫌いになったりなんかしない。絶対にならないから」

「ああ……」

八幡の不安を見透かしたように平塚は子供をあやすような優しい口調なだで宥めてくる。

知られたくないないところを知られるのは、たとえ平塚といえども辛いものがあつた。古疵ふるきずをほじくり返されるのは、単純に恐かったのだ。

しかし、八幡の醜いところを見ても、おそらく平塚ならば受け入れてくれるかもしれないと彼は期待していた。そして実際、今、受け入れると平塚は言ってくれているのだ。ただ、それでもなお八幡は辛く感じてしまうのだった。

今は知られたくないことを知られたことも勿論だが、ただそれ以上に、いつも平塚に手を引かれ、背姿を追うだけの自分自身が、惨めまみで情けなかったのだ。こんな分際で隣にいて欲しいなどと欲に塗まみれて

いることが醜くて仕方なかったのだ。

「ほら、もう少しでパレードも始まる。あつ、あそこらへんがいいんじゃないか？」

「あ、ああ……………」

「じゃあ、行くぞ!!」

また平塚に強く手を引かれる。まるでこのままだと中に閉じ籠って、自責の念に駆られるだろう八幡を引きずり出すように。

園内の少し大きな通りの歩道で人混みを掻き分けて、そのうち見つけた少し空いたちようど二人分の隙間。そこに身を寄せるようにして、二人は座った。

まもなく、アウンズがかかり、エレクトロニカルな耳障りのいいメロディーが園内全体に流れ始めた。

観客も今か今かと待ちわびている頃、道の先の死角からのそつと舫先へびさきがその姿を覗かせた。

やがて、それは大きな帆を掲げて光り輝く巨船となった。甲板かんばんでは船頭達が楽しそうに沿道へ向けて手を振っている。それを皮切りに、次から次へと、様々な乗り物が、ディスプレイのキャラクターを乗せて、やって来た。

それはまさしく非日常。夢の世界とも思わせるような美しく幻想的な光景だった。

「うわあ…………、綺麗だなあ…………」

平塚は、うっとりとした様子で、それに魅入っている。

たしかに綺麗だった。

ただ八幡には、そんな絢爛豪華なパレードよりも、その煌びやかな灯りに輪郭を照らし出された平塚の横顔のほうがよく綺麗に見えた。

だが、綺麗すぎるが故に、隣に座っている八幡は自身の醜さがさらに炙り出されていくように感じた。

だから、パレードも、平塚の横顔も見ずに下を向いていた。

あの男達が言ったように、平塚にはもつと相応ふさわしい人がいるはずなのだ、と八幡も納得してしまっていた。だが、それでは嫌だと我儘わがままで

傲慢な欲望が胸を苦しいほど締付ける。

だから、そんな痛みから解き放たれたい八幡の弱さが、彼の口を動かしていた。

「何で俺なんかと——」

少し顔を上げて放った小さな声は、すぐお祭り騒ぎのパレードだったら掻き消されていたはずだった。

しかし、偶然今は波が過ぎ、ちょうどさかりの谷間であり、平塚の耳元に微かに届いたようだった。

「ん、今なんて……？」

「何で俺なんかと友達でいられるんだ……？」

「……だーかーら、さっきのことは気にしなくてもいいんだぞ。むしろ君の弱点も知れてよかったなあ。今度からからかいがある！君があの時私に傘を渡してくれたのもそういう事だったのか、ふっ」

「俺はっ——！」

顔を振り上げ、似つかわしくない張り上げ声を出す八幡の様子に、平塚も目を丸めていた。

「……俺は、平塚と違って、根暗で、空気読めなくて、欲にまみれて、情けなくて、気持ち悪くて、そして平塚に迷惑かけてばっかで……、なんでそんな俺と……」

また下を向いた八幡は、張り詰めたような震えたような声で絞り出した。それに平塚は呆れたようにため息をつく。

「はあ、全く君は。さっきも言ったが、私は良い人ではないんだ。苦手な人と一緒に二人つきりで過ごせなんて、まっぴらごめんだ。それに、私たち友達だろ？ まさか、私がボランティアで友達してると思ってるのか、君は」

「でも、それぐらい俺は……。よく考えてみりや友達になる理由もねえし……」

「——理由ならあるー！」

強く芯のある声で言い切った平塚はまた八幡に笑いかける。その声は、強く強く八幡の中で響いた。

「君と一緒にいると本当に楽しい、君と一緒にいたいって私が心の底から思うからなんだよ、比企谷」

何度も見た裏表のない、何の汚れもない、何よりも一等輝いている綺麗な笑顔で。

「ふふっ。そんな簡単な理由では、ダメか？」

その瞬間、胸の中に、強い風が吹いた。そしてそれが黒い靄もやや煤すすを一切合切いとも簡単に吹き飛ばしていく。

——こんな風は、桜の花がはらはらと舞っている春の日にも吹いていた。

それは、高校二年生の春学期が始まってすぐのことだった。

いつも通り八幡は昼休みにベストプレイスで誰にも邪魔されずのんびりしていた。

目の前の路地に薄べったく拡がり、淡いピンク色へと染めている花卉はなびらが、強い春の風に煽られて、まさしく花嵐となって宙を舞っている。

その光景をただ何も言わずに眺めているだけだ。校舎の隙間を吹き抜けていく風の音とが揺らされた木々の音が生み出す和音はどこか趣があった。

八幡にとって、自然物を見るのはとても好ましいことだった。それ以上に人が集たかまっているのを見るのが嫌だったのだ。

八幡にとって、周りの物が偶然奏でる音を聞いていることがとても心地よいことだった。それ以上に、人の声を聞くことが嫌だったのだ。

だから、この場所を棲家すみかとして選んだのだった。

そんな安寧あんねいを壊す侵略者がある日、八幡の目の前に現れたのだった。真っ直ぐ芯があつて張りのある声は、悪目立ちしていて心地よい和音をぐちゃぐちゃに掻き乱す。

「なんで話しかけてくるんだよ？」

頬に力がこもる。普段から疎まれる目もより一層の剣幕があつた。これは侵略者への威嚇みたいなものと相違なかつた。

「社会のはぐれ者への同情か？ 出席番号で前後になったからって、情けをかけようとしてんのか？ やめてくれ、俺は別に一人でも大丈夫な人間なんだ。逆に困るんだ。お前みたいなやつに近付かれると——」

次の瞬間、八幡は衝撃とともに腹が抉えぐられるような感覚に襲われ、漫画やアニメでしか聞いた事のないような声を漏らしていた。

その侵略者からみぞおち辺りに向かって、拳を放たれていたのだ。段から転げ落ちて、うずくま蹲る。横隔膜が潰された感じがして上手く呼吸もできなかつた。

しばらくしてなんとか息を整えると、当然突然拳を振るってきた相手へと睨みつけた。

「い、いてえじやねえか……。何すんだよ」

「——だって、話を聞いてくれそうにないから、衝撃のフーストブリットを見舞ってやったただけだ！」

なぜか侵略者は得意気に、そして制服からも分かるほどの目立つ胸を大きく前に張っていた。

「ス、スクライド……」

「やっぱり、君は知ってるのか、スクライドを！」

「知ってるからなんだ」

「私の見込みが当たったということだ！ やっぱり好きなんだな、スクライド。私も好きなんだ！」

「だから何なんだよ。話しかけてくる意味が分からん。あれか、新手法の詐欺か。共通の話題で仲良くなつてうっかり惚れさせた後に金をむし筆り取ろうとしてるのか？」

「そんな訳ないだろう」と平塚はきっぱり言う。

「じゃあなんで——」

「君と趣味が合いそうだし、話してて楽しそう。つまり私が君と一緒にいると楽しそうだと思ったからだ！」

思わず八幡が見とれてしまうほどの笑顔を侵略者——平塚静は見せつけた。

直ぐにいつもの癖でそれに隠された裏の顔を暴こうとしたが、その

時は全く見つかりそうにはなかった。

「それでは、ダメか？」

「……俺の都合はどうなるんだよ」

「君の都合なんぞ知るわけなからう！ 私が君と話したいから、君と話す。ただそれだけだ」

そんな有無を言わさぬ暴君まがいの態度に、思わず八幡も苦笑にも似た笑みを零^{こぼ}してしまった。

「もちろん君がどうしても、死ぬほど嫌だと言うなら、遠慮はするがな」

「まあ、今のところ殴ってきたインパクトが強すぎて、印象最悪だけだな」

「はっ?! あわわわ、すまん、許してくれ。この通りだ」

「まあ、いいわ。一応聞いておくが、死ぬほど嫌だから話しかけてくんなって言ったらどうすんだよ」

「その時は、殴る……?」

「ははっ、もう逃げられねえじゃねえか」

本当に無茶苦茶な話である。だが、妙に心地よかった。決して八幡がマゾヒストだからという訳ではない。ただ、八幡が最も嫌う彼に向けてと見せかけての我が身のための嘘が彼女からは一切見られなかったからかもしれない。

その時八幡の頬を叩いた風を——小さな小さな風穴を開けたあの強い風を未だに忘れてはいなかった。

——そう、平塚は出会った最初から言葉にしてくれていたのだった。

八幡のそばにいる理由を、その彼が知る限り最も澄んでいて、一等輝いている笑顔とともに。

そして、平塚のその言葉は嘘偽りない言葉だということを呆れるほど疑り深く、うざったくなるほど怖がりの八幡に対して、見限りもせず行動でいつも示していた。

「それにあいつらの知らない良いところを私はたくさん知ってる。自

信を持ちたまえ。君は私から見たらとっても素敵の人だぞっ！」

「……ありがとう、平塚」

普段だったら顔から火が吹きでるほど照れくさく、お世辞だと切り捨てるかもしれない平塚の褒め言葉も、今はただただ身に沁みるほど嬉しかった。

どれだけこの一人の女の子に救われているのだろうか、男としての情けなさに八幡は笑ってしまう。

「……すまん、急に变なこと言い出しちゃって。めんどくさいし、困るよな、こういうこと」

「いいんだいいんだ。それに、私、君の面倒くさいところも結構好きだからな」

八幡はぎよろつと目を見張った。

平塚にとつておそらく何気ない些細な一言は、彼には非常に大きく、簡単に心を揺さぶる。

当の平塚は、もうパレードの虜になっていて、今か今かと次の波を待っていた。そして、一際大きな車体が宴の曲の盛り上がりと共に、その姿をゆつくりと現していく。

とうとうパレードの山場が訪れようとしているのだ。

「比企谷っ、ほら、あそこっ!! パンさんが来たぞ、パンさんが!!」

「……本当だ、パンさんがいるな」

空言だった。八幡はパンさんを見ていなかった。

パンさんに釘付けになっている平塚の横顔を再び見ていたのだ。

興奮のせいかな少し赤らんでいるようにも見えるその顔は、やはり絢爛豪華なパレードよりも輝いているように八幡の目には映った。今この場所にある何より、今まで見た中で一番美しいもののように見えた。

ただ、だからと言って自分自身に対する醜さは湧き出てこなかった。平塚はこんな自分といることが楽しいと、一緒にいたいと言ってくれるのだから。

その代わりに、拍動が少し早くなるのを感じた。

そして、一つ、また欲がふつふつと湧き出てきた。

——こうして隣にいて欲しい、と。

顔を上げて、パレードを見る。

目の前には、一際大きく、そして輝く乗り物に乗った竹を口に銜えたパンさんがいて、丸っこい肉球をこちらに向けて手を振っている。そして、微笑みかけてくれているような気がしたのだ。

それは、まるで、世界中でたった一人しかいないであろう人物と、出鱈目でたらめでもなく誇張でもなく、そして紛れもなく運命的な出会いを果たすことができた八幡を祝福してくれているようであったのだ——。

——眠りに落ちゆくように異世界の灯りは消えてゆく。

あれだけ賑わっていたのはまるで夢であつたかののように、どこからか郭公かつこうの鳴き声が聞こえそうなほどの静けさを漂わせていた。

役目を終えたエントランスゲートは客人を見送ると、段々と閉じてゆき、錠をかけてゆく。そんな哀愁がある門を背にして二人は駅の方へと向かつて歩いていった。

結局、閉園時間の二十二時になるまで、アトラクションを貪り尽くすほど楽しんでいたことになる。

閉園時間までいても普通に帰れるという千葉市民である事の利点を余すことなく享受した。

「楽しかったなあー。比企谷はどうだ？」

頭からはすっかりカチューシャが取れた平塚は腰を前に曲げて、下から八幡の顔を覗き込むような格好で尋ねてくる。

「楽しかったな」

「おお、珍しく素直じゃないか」

八幡の口元は少し綻ほころんだ。

そして、たつた今浮かんできた言葉も、今日以前の八幡であれば常駐していた喉元の番人が胃袋の方へとすげなく突き返して、溶かしてしまつて無かつたことにしていただろうが、その番人とやらも八幡の方からお役目を終えて、姿を消した。

だから、その言葉が、八幡の口から紡がれた。

「——ああ、平塚と二人で来れて良かったわ。本当に良かった」
「ふうん。そうか、って——」

一瞬驚きで目をかっと開いて八幡の方を見た平塚は、目が合うとすぐに八幡にも分かるほどぼつと顔を赤く染めた。そして、顔を隠すように手をあたふたさせる。

「なつ、なつ、なつ、何を言うんだ君はっ?!」

「いつものお返しだ。言うなれば、ちよつとしたカウ・ン・ター・パン・チ、つてところなのか」

八幡のかましたカウンターパンチはささやかながらも平塚に効果観面てきめんだったようで、その言葉が耳に届いてる様子もなく、手櫛てくしで上から下へと解くように横髪を弄いじりながら、何か小言をボソボソと呟つぶいていた。

その様子を見て、可愛らしさとおかしさが同時に込み上げてくる。

「ははっ、平塚は人にはそういうこと言えるくせに、言われるのには慣れてねえのか」

「う、うるさいっ! ばかっ、なぐるぞっ!」

「流石に、勘弁だ……」

そこからは照れているのかはたまたまた機嫌を損ねたのか、顔を逸らした平塚はうんともすんとも言わなくなつた。

やっと口を開いたのは駅のホームで帰りの列車を待っていた時で、平塚は突然何かを思い出したようで「あつ、そうだった」と声を上げる。

「比企谷、手を開いてくれ」

「あ、ああ、分かった」

不思議に思いながらも八幡が言われた通りに、手を開くと、平塚はたくさんのお土産の入った袋を漁り始め、何かを手にとると、その手に取ったものを八幡の開いた手の上に置いた。

そこには、お土産屋さんお土産屋さんに並んでいたパンさんのストラップがちよこんとあった。パンさんが腕うでに抱かかえている宝石の型をした添え物そえものがきらりと輝きらいている。

「これ、パンさんのストラップ……。なんで俺に?」

「せっかく今日来たんだ、記念にな。それと一、二時間程早いけど、誕生日プレゼントも兼ねてだ」

「ま、まじで……?」

八幡は目を白黒させながら、その愛らしいストラップをまじまじと見る。

今日の日付けは立秋の八月七日。明日の八月八日は、確かに八幡の誕生日であるのだ。

「ああ、大マジだ！ 正直、コンテストで貰った商品券も親に渡してしまったし、最近財布の中身がひもじいから、このぐらいの物しか買えなかったが、その、どうだろうか……?」

少し不安げに八幡の様子を窺^{うかが}っている平塚だったが、彼からすれば言わずもがなのことであつた。

「——嬉しい。すげえ、嬉しい」

「そ、そうか！ なら、良かった……。君が喜んでくれればそれが一番だからな」

すると、平塚は再びお土産の入ったビニール袋を漁り出して、彩色だけが微妙に違うストラップを取り出したのだ。

「そして、これは私の分」

「え、ペアってこと?」

「べつ、別にいいじゃないか。これが二人でディスプレイニーで行つた思い出の証に、な……?」

「あ、ああ、お前がいいなら、別に何も問題はねえわ」

改めて八幡は手にしたパンさんのストラップを見た。

これは真正正銘、平塚が八幡のために、八幡の誕生日を祝つて買つてくれたものだった。その嘘偽りない事実にもまた彼の胸が熱くなる。

「……本当にありがとな、平塚。でも俺の誕生日をどこで……」

「ああ、それはな、秘密の集まりがあつてだな。生徒会っていうんだが」

「……なるほど、ただの職権乱用じゃねーか」

「まあ、そういうことだ。でも、ちっちゃいことは気にするな、つてやつだ」

ワカチコワカチコという変てこな言葉を急に口にした平塚に八幡は困惑して、眉根に寄せた。しらけた空気を察したのか一度咳払いをした後、「これも言わなければ」と続けて話した。

「お返しとかいいからな、別に。私の誕生日なんて気にするんじゃないぞ」

「なんでだよ」

「誕生日は年が増えるだけだ、これっぽっちもめでたくない。むしろ来ないで欲しい。減っていくのなら喜べるんだがな……」

その憂いはやけに感情のこもっているものに聞こえた。

「それ、もう二回りぐらい上の人の発言じゃねーの」

「そんなこと言ったら、絶対いつか後悔するぞ」

「そういうものなのか？」

「ああ、そういうものだ！」

「……そうなのか」

八幡が、勢いに負かされて口を閉じる。

そして、おかしくて二人して笑った。周りにいくらか人がいることも忘れて、かなり大きな声で笑っていた。

そんな二人の横に、重く鈍い警笛を鳴らして、二本の赤いストライプが入った長い電車が入線してきた。

時間ももう夜が更け始めている。通勤客のラッシュもとうに過ぎていて、車内は疎らに席が空いているほどだった。

二人はパレードの時よりかはいくらか楽に、空いてる座席を見つけ、そこに座った。

肩が触れそうなほど近い距離。

ちらりと横目で見れば、長い睫毛まつげが見事な上向きの曲線を描いているのも分かった。

ほんの少し前であつたら、『パーソナルスペース』だとかいう流行りの言葉を使って、八幡は逃げるように離れていた。

ただ、今はそんな事は微塵も思わなかった。むしろ、もっと近づいて欲しいとまでさえ思ってしまった。さすがに身体をくっつけるほど身を寄せることは勇気もないし、気恥しさが勝ってできないの

であつたが。

そんな八幡が故に、らしくない、本当にらしくない考えが頭を過ぎる。ただ、それをバグとして免疫が殺めてしまうことがなかったことも余計らしくなかった。

でも悪い気はさらさら無かつた。それは変革を恐れ動くことを止めた蛹が、蝶と成つて風光明媚な翅を拡げて威風堂々と自由自在に空を飛ばたくように、八幡は一人の女の子との関わりを通して、変わつて成長できたことの証左でもあつた。

この考えは賭けみたいなものであつた。だが、だからこそ八幡はなけなしの勇気を振り絞つてそれをその女の子にぶつけてみるのだ。

「なあ、平塚、急な話なんだが」

「ん、どうした……?」

鼓動は早くなる。なるだけ落ち着かせるように、一息整える。

「——九月に一緒に映画見に行かないか? 特撮の映画見に行こうかなと思つてて」

「ああ、そういうことか。……つて、えっ?!」

その誘いに、声をひっくり返して、平塚は八幡の顔を凝視する。車内でそんな声を出したものだから、少ない乗客の注目がこちらに集まり、平塚は慌てて口を両手で塞いだ。

傍からみなくてもデートに誘っているようなものである。それは八幡自身も重々承知していた。だがその想像以上の平塚の反応に、八幡もさすがに度が過ぎたことを言ったかもしれないと、少し息の詰まる思いを覚えた。

「い、いや、無理そうなら全然断つてくれても良いんだが……」

「ううん、行く。私も一緒に見に行きたいっ!」

「ホ、ホントか……?」

「うんっ!」

八幡の目に映る平塚の顔は口角を上げた嬉しそうな顔だった。もうその顔の裏に隠された真実を探そうなどという野暮で穿つた考えは毛頭なかつた。

ただこの目に映されたその顔が、胸を熱くさせ、気を抜けば顔が不

細工に緩んでしまいそうなほど八幡にとってこの上なく嬉しいものであったのだ。そしてあわよくば、彼と一緒に行くことがその顔を見せるほんの一因でもあったのならば、と願うばかりであった。

しかし突然「あつ、でも……」と、平塚は打って変わって声をすぼめた。

「私、これから文化祭準備もあるし、生徒会でイベントを開催するからとても忙しいんだ……」

「じゃあ、俺が合わせりやいいだけだろ。スケジュール的な決まったら暇な日教えてくれ、俺はおそらく、いや絶対、いや一二〇パーセント合わせられるから」

「うん、そうだな、ありがとう。でも、中々暇な時間は作れないと思うんだ……」

「そうか……」

「まあ、早く切り詰めたら余裕はできるかもしれないんだが、どうしても人手がな……」

そんな時、八幡の中に一つの案が浮かんだ。

これもまた、今までの彼なら絶対に浮かばなかった一つの案が。

「——じゃあ、俺が手伝えばいいんじゃないかねえの。自分で言うのもなんだが結構デキる方だとは思うぞ」

その提案に、また平塚は瞠目するが、すぐ遠慮気味に首を振った。

「いや、別に君に催促したい訳じゃないんだ。これは私の仕事だし、そもそも君のポリシーは面倒なこととはしない主義だろ？」

「まあ、確かにそうなんだけど、今は俺が手伝いたいんだよ。……なんだろうな。自分でも良く分からん。まあ、早く行くのに越したことはないっていうのもあるんだらうけど、でも、多分一番の理由はお前・というのが楽しいからなんだらうな」

予想外の追撃に平塚は、また顔を赤く染めた。

「——っ……！ なっ、なんなんだ、今日の君は、本当に。そんなこと言っ・て私をからかっ・てるのか?！」

「本当のことだから仕方ねえだろ。っ・ていうか、これまたお前がよ・くっ・っ・か、今日も言っ・てくれてた事じゃねえか」

「そ、そうだけど、言うのと言われるのは違うというか……」

「俺の気持ち分かったか？ お前はいつつも俺の事こういう気持ちにさせてんだよ」

「……う、うん。分かった」

平塚は顔を染めたままこくりと頷く。その後は、一日中遊び倒した疲れのせいか、それとも二人に押し寄せた羞恥心の波のせいか特に二人は会話せず、ただ揺られるがままに、時折肩に触れながらも、夢から持ち込んだ甘い残り香を味わっていた。

夜もすがら明るい市街地の狭間を駆け抜ける赤ベルトの電車は、ガタンゴトンと小気味よい音を奏でながら、まもなく八幡の住む町の最寄り駅へと近づいていた。

平塚はちようど一つ先の駅であるため、ここで別れることになる。

そして、ゆつくりと減速するとともに、八幡にとつては見慣れた相対式のホームが彼らを出迎える。

「というわけだ平塚、仕事必要ならいつでも呼んでくれ」

「本当にいつでも頼るから覚悟しておくんだぞ、比企谷っ！」

「ははっ、まあ、程々にな」

八幡は苦笑いでそう言い残すと、一步、ホームへと踏み出した。後ろを振り返ると、平塚は扉の前で立って見送ってくれていた。

「またな、比企谷」

「ああ、じゃあな、平塚」

八幡が言い終えた丁度その時、赤いランプが点滅する。それとともに二人の目の前に本日のお話を締め括るように灰色と赤色ストライプ模様の扉が閉まった。

電車はまたゆつくりとその丸い足を回し始める。

閉まった扉の向こうから手を振る平塚に向かって、二、三回ほど左右に振り返す。そしてすぐに電車はまるで平塚を連れ去るようにあつという間にホームを去っていった。

それが遠く遠く点になって消えゆくまで見送った。同時に電車の後を追う強い風が、運命の国から八幡を引きづり戻すように吹き付け、夢の残り香を吹き飛ばす。

確かにもう夢想からは完全に醒めた。

しかし心の中には暖かな余韻がまだ残っていた。

その余韻をホームの黄色い点字ブロックの手前で長らく味わっていた。

その時ズボン越しに感じるバイブレーション。そしてはや聞き慣れた『you got a mail!!』の音。

ゆっくり二つ折りの携帯を開いてみると、一通の写真メールが届いていた。

それは、閉館間際にパンさんと一緒に撮ってもらった二人の写真だった。平塚の笑顔は相変わらずとびきり眩しかったが、八幡も緊張で凝り固まった七夕祭りの時とは違って及第点の表情を見せられているように感じた。

そして、『今日はとても楽しかったです』と短いながらも全てが詰まっている一文が添えられていた。

保存のボタンをクリックし、同じく一文短いメールを返信した後、携帯を閉じる。

やっとホームから立ち去ると、既に誰もいない駅の階段を一段ずつ、物思いに耽りながらゆっくりと下りていく。

七夕の夜に写真を見てから湧き出た欲望。いやそれは姿を現さないだけで元からあったのかもしれない。

とかく八幡はその欲望に名前をつけることが出来ず、醜いものだと決めつけ苦心した。

しかし、思い返してみれば、その欲望の名前は今までの読み物の中や映像媒体の作品の中にも必ずと言っていいほど表現されていた。

ただ、その欲望を今まで感じたことがなかったから本当の意味が分からなかっただけだった。

中学の時分の八幡は、様々な作品や色めき立つ身の周りの人達の行動を見て、焦燥感からか真似事のようなことをしてみせたが、ただ傷を負うだけで、耳にする甘酸っぱく楽しく幸せなものには到底思えなかった。

そして、次第に一縷の希望さえも覗かせないように氷の厚い壁に閉じ籠って、そんな眩しい世界を諦めていった。

ただ結局は、百聞は一見にしかず、だったのである。

今日、その醜い欲望は、平塚の隣にただで満たされた。ただ、隣にただでひたすら嬉しくて楽しくて幸せだった。

そして同時に、この先もずっと隣にいて欲しいとさらに願った。もっとその綺麗な笑顔を見せて欲しいと思った。

欲望はより大きく膨れ上がったのだ。きっと平塚という限り、この欲望は際限なく膨張していくのだろう。

そして今日、この欲望と感情こそが、ありとあらゆる世の人々が吹聴していたそれそのものだった、と八幡は気付いた。

どうやら、この欲望の名前は――、

「……俺、平塚のことが好きなんだな」

恋というらしい。



「ふわあ……」

眠気の欠伸が襲う。一日中歩き、そして走り回ったことの当然の副作用だった。

街灯が照らす街並みには見慣れた看板、見慣れた表札、見慣れた全てのものがぼやけた瞳に映る。これらは閉じこもっていた八幡の全てであり、箱庭の中で暮らしていたようなものだった。しかし、今はこれが世界のほんの一部でしか無いことに気づき始めている。

そして、この見慣れた白色の外壁も、この見慣れた玄関も。鍵穴に差し込んで、扉を開ける。

「ただいま」

反響もしないような小さな声で言った。すると、廊下の奥の部屋――リビングの扉が勢いよく開いたかと思えば、そこから飛び出すように妹の小町が出てきて、大層な悪人面を隠しきれないまま駆け寄ってきた。

「おかえりっ！ 今日のは楽しかった?!」

「ああ、まあな」

小町は今日平塚と二人でディステイニールランドに行ったことを知っていたのである。この腹立たしいニヤケ顔もそのせいであった。

七夕の時は気付かれなかったが、今回はこの娘の目を欺くことはできなかったのだ。普段は夏休みで絶賛引きこもり御礼室内冷房の生活をしている男が、急に朝早く、そして彼の中ではまともな格好をして出かける瞬間を見たらば、小町が違和感を感じないはずがなかったのである。

そして八幡としてもいち早く出たかったものだから、だる絡みをされる前に直ぐに事情を伝えたわけである。

「それと、ほらこれ土産だ」

「わあ、ありがと〜♪ って、うげっ……」

小町に渡したのは、ディステイニールのキャラクター柄のシャープペンシルセットだった。しかし、小町は露骨に苦虫を噛み潰したような顔を見せる。

「あれ、嬉しくないのか？」

「いや、嬉しいけどさ。小町受験生なんだあって、現実に引き戻されちゃった」

「そのためのお土産だからな。勉強しろっていう、兄からの金言だ」
「言われなくても、するもん！ ふんっ！ お兄ちゃんなんか嫌いっ！」

「冗談だ、小町。まあ、あとこれもあるから」

臍へそを曲げてしまった小町に今度は可愛らしいパンさんがあしらわ

れているコスメポーチを渡した。すると今度は、ぱあつと満開の桜のような笑顔を見せた。

「わあ、ありがとっ！ 小町嬉しいっ！ 大切に使うねっ！ お兄ちゃん、大好きっ！」

「ははっ、相変わらず現金なやつだな、小町は。じゃあ、もう疲れたし俺部屋に行くから」

渡し銭わたせにを奉行ぶぎょうに払ったかの如く八幡は玄関の上がり框かまちを上がって階段に向かおうとすると、奉行は行かせまいと、小さい身体の両腕をめいっぱい拡げて、通せんぼをしたのだ。

「今日は寝かせないよ、静さんとのディスティニーデートの中身たっぷり聞かせてもらうんだから！」

「……はあ、めんどくせえ、それにデートじゃねえって。平塚がまたま当たったペアカップルチケットで誘う奴いなかったから、俺に来ただけで」

さすがにカップルコンテスト云々の話を切り出すと面倒になるのは分かっていたので、この部分は口からのでまかせを伝えていた。

「だとしても、そもそもお兄ちゃんに白羽の矢が立つこと自体が凄いなだよ！ 日本ドラフト会議でこれっぽっちも注目されなかった選手が、メジャーリーグの超有名チームにスカウトされる的なの！」

「俺に対する評価低くない？ と、突っ込みたいところだが、確かにその通りだな。平塚超人気者だし」

妙に納得して、感心してしまった。それほど普通に考えれば交わることはないような二人なのである。改めて同じ学校で、同じクラスになつて、出席番号が前後になつて、そして同じ趣味があつた偶然に感謝してもしきれない。そんな奇跡を噛み締めて、訪れた感傷に浸りかけている八幡のことなど知ったこっちゃない小町は待ちきれない様子で急かしてきた。

八幡は一旦荷物を自室に置いて、リビングに戻ると、椅子に座った小町が机を叩いて、ここに座れとジェスチャーしてきた。そして小町に尋問されるような形で今日起こったことを話した。同じ中学やからの輩やからに絡まれてしまったことや被り物を買ったことは話さなかったが。

「——まあ、こんな所だな」

「いいなあ、すつごい満喫してるじゃん！」

「ああ、楽しかったな。久しぶりだったが、こんなに楽しいもんだとは思わなかったな」

「小町も終わったたら絶対に行こつ！ あつ、そうだ。お兄ちゃんさ、貰ったの？」

「何を？」

「何って、誕生日プレゼントに決まってるじゃん！ まあ、さすがに、いくら静さんでもそれはないか。お兄ちゃんの誕生日なんて覚えてるの小町ぐらいだしっ！ 可哀想だから、私が静さんの分まで精一杯祝ってあげる！ あつ、今の小町的にっ——」

「いや、一応貰ったぞ。これ」

小町の憎たらしい決め台詞（ゼリふ）を遮る（さへぎ）ように、八幡は携帯電話を取り出して、そのストラップホルダーに吊るされたプレゼントを小町に見せつけた。

小町は吊るされてゆらゆら揺れているパンさんのストラップを呆気にとられた様子で見ている。

「……え、本当に貰ったの？」

「わざわざそんな寂しい嘘つくわけないだろ。本当に平塚から貰ったんだ」

「そうなんだ。へえ……、ぐすつ……、よ”かったね” え、おに”い”ち”ちゃん……」

「……泣き真似すんな。でもまあ、嬉しいわな。家族以外からまともに祝ってもらうなんて初めてだし」

改めてそのパンさんのストラップを見つめて、小町の前で顔がだらしく緩んでしまいそうになると、小町が聞き取れないほどの小声でぼしよりと何か呟いた。

「……ん？ どうした小町」

「ううん、何でもない。その誕生日プレゼント大切にしなきゃダメだよ？ 落としたりしたら最悪だからね」

「言われなくても分かっている。それと、小町、ちょっと相談事があるん

だが」

「しよがないなあ」と呆れるように言いつつも、小町はどこか嬉しうに唇の端を吊り上げて、可愛らしい八重歯を覗かせていた。

「で、相談って、どんなこと？」

「えつとな——」

こうして比企谷兄妹の^{だんらん}団欒はまだ続く。これから世界が無際限に広がろうとも、きつとこれはいつまでも特別であり続けると、八幡は小町の微笑んだ顔を見て感じていた。

七束： for This Day

公園に敷き詰められるように植えられた柑子色こしょうじの花を何輪も咲かせている金木犀きんもくせいの香りが仄ほのかに漂い、沿道に凜れんと健気けんげに咲く秋桜コスモスが、近々訪れる夜長を伝えている。あれだけ青々と茂っていた緑は、まだ斑模様まだらではあるが、赤い襦袢じゆばんに袖を通し始めていて、しんしんと冷える夜を迎える様相であった。

そんな草花には朝露が付いて、まだ浅い陽の光に照らされて、その露が宝石のように白く輝き、やがて葉の先から、涙なみだを流すように落ちていつて、斑な薄赤の葉を微かすかに揺らす。

そんな季節の移ろいを当たり前の暮らしの中で密かに告げる景色が、自転車を漕こぐ彼の横目には映っていた。

—— 駅前のロータリーに隣接している広場の中央には、ぽつんと大きい野球のボールと木製バットのオブジェがあつて、その脇には千葉ロッテマリナーズのマスケットキャクターが建てられている。この周辺には千葉ロッテマリナーズの本拠地の千葉マリンスタジアムがあつて、ここは俗に幕張新都心とも呼ばれる海浜幕張駅の目の前の広場であつた。新都心というだけあつて、周りを見るからにまだ月日が浅い建物が林立していて、通りには無駄なものがなく理路整然としている。

休日ということもあつて興業が盛んなこの街は若者中心に、大勢の人が行き交っている。

そしてこのオブジェの前にもまだ来ぬ人を待つてゐるであろう人々が、手持ち無沙汰な様子で携帯電話を弄いじり倒しているのが見受けられた。

その中に、着慣れない七分袖の鼠色を基調としたカーディガンを羽織つて、特に顔を強ばらせて、どこか落ち着きの無い様子でやけに開かれてくすんだ瞳孔どうこうを右往左往させる一人の男が立っていた。それ

もそのはずで、本日は初めてこの男——比企谷八幡が、想い人——平塚静を誘つてのお出かけであつたのだ。

平塚と運命の国——ディステイニールランドに行つた帰り道に今日この日の約束を取り決めてから、おおよそ一ヶ月と少しが経つていた。その間も八幡は、夏休み中は平塚の文化祭準備の手伝いを積極的に行い、二学期が始まつてからは、昼休みや放課後問わずに、暇さえあれば手を貸していた。そんな積み重ねが実つて、丸一日の休暇となつた本日に映画を見ることが決まつたのだつた。

平塚とは常々会つていたし、良く会話をしていたものの、いざ今日という日を迎えると、この緊張感たるや計り知れないものであつた。この緊張は前日からのもので、身分は高校生だと言うのに、まるで遠足前の小学生のように夜も寝付けずじまいで、目立たないようにしても少しの隈くまが目の下に浮かんできた。

例に漏れず八幡も待つている間は手持ち無沙汰であつたから高校の入学祝いで貰つたが滅多に付けないが、今日この日に限つて付けてきたメタルバンドのアナログの腕時計を先程から、携帯に代わつて何度も繰り返し見ていた。短針の動きがあまりに鈍のろまで焦れたいと感じるほど、それを見ていた。

今見ると、その時刻が指すのは、おおよそ集合時刻五分前であつた。いつもなら必ず十五分前には来て、確認の連絡まで寄越すはずの平塚が、遅れていることには一抹の不安が頭を過る。ただその不安も杞憂きゆうだつたようだ。

布越しに感じる振動。急いでポケットから取り出して、二つ折りのそれを開く。穏やかな浜風に揺られてからりころりと手の甲に点を打つように撫でる一本の竹を銜くわえたパンさんのキーホルダー、そしてその紐が伸びた先の携帯電話の画面には、『少し遅れます。ごめんなさい』という文字列が並んでいた。

そこから五分ほど、ちょうど集合時刻になつて、駅の方から小走りでこちらに向かつてくる。

その姿は、一ヶ月程前にも見たような光景と似ていてオーバーラップしていた。しかし、違和感があるように見えるのは、ディステイ

二の時と較べて、どこかきこちなくてたどたどしいせいであった。近づくにつれてコツコツという地面を叩くような音が目立って聞こえてくるのも余計にたどたどしさを引き立たせていた。

「ごめん、比企谷、遅れてしまった、……って、うわあっ！」

「ちよつ、あぶなっ……！」

平塚は平坦なタイルで躓くと、空足を踏んでそのまま前へと八幡の体の方に倒れ込んでしまった。

八幡は咄嗟に平塚の両肩を手で抑え、彼女も彼の胸板に寄りかかる形になった。華奢ゆえに細く感じる骨と、柔らかくて生温い肌の織り交ざった感触が八幡の手に直に伝わった。そして、その瞬間、ラベンダーの芳香に近い甘い甘く、心地よい匂いが鼻腔を攪り、身体の内へと指の先まで染み込んでいく気がした。

ただ、理性が、平塚の心配へと舵を切った。

「お、おい、大丈夫か……。足とか挫いてねえか？」

「うっ、うん、大丈夫だ……」

平塚が顔を上げた。小刻みな吐息が八幡の鼻先に感じられる程、平塚の顔は近かった。透き通るほどの肌理細かい血色の良い肌に、その魅力を引き立てる眉毛は、まさしく美しさの象徴だった。端から綺麗に揃えられた長く細い睫毛に、薄化粧があらわれているのだろうか、その普段よりも際立つ陰翳はものの見事であり、ほんのりと色付く艶のある魅惑的な切れ長の目元に掴んで離さないように見つめられては、目を離すことができなかった。まさしく八幡は見蕩れてしまっていた。

「——あつ、ごっつ、ごめんっ」

状況に気付いた平塚が手を離して、一步分後退りする。そしてあつという間に彼女の首筋まで紅く染まるのを見て、鏡写しのように八幡も顔が尋常ではなく熱くなるのを感じた。

「いつ、いや、大丈夫だ。ヒール履いてきてんだろ？ それだったらしょうがねえって」

「う、うん……」

少しの静寂が訪れた。それでは良くないと、頭を巡らして、何とか

八幡は話題を探した。そうして見つけた一つを、彼は切り出した。

「……その、なんだ。平塚、何かいつもと雰囲気が違うな」

その理由は火を見るより明らかで、平塚の服装にあった。研磨された大理石に見られるような滑らかな乳白色に近い肌が肩から鎖骨にかけて透けるようになっていいる純白の花柄レースのシースルーブラウスに、白玉のドット柄の紺色のロングスカートを合わせたコンビニの雑誌コーナーのファッション誌の表紙で見かけるような、いかにも女の子らしい服装であったのだ。そして、滝のように流し落とされ、新調したばかりの黒鍵のような色をした髪も、ふわりと波打っていて、毛先にいくにしたがってくるりと巻かれていた。

「……じ、自分でもこういうの似合わないことは分かってるんだ！」

今日はたまたまこういう服しか無かったから、しょうがなくてだな。それと髪は……」

八幡に指摘された平塚は、そう自らを卑下して、両腕でその白のブラウスを自信なさげに隠すようにした。しかし、八幡は平塚の服装を見て、彼女が思っているようなことは一切感じなかった。むしろ、その真逆であった。

「——いや、似合ってると思う。服装も髪型もすごく似合ってると思う」

「え……う？」

「似合いすぎててこっちが困るっていうか、めちゃくちゃ、その、えっと、可愛いっていうか、だから……、ええと……」

本当に似合っていたのだ。八幡も驚くほどに似合っていたのだ。そして、驚く程に可愛らしかったのだ。しかし、普段褒め慣れていないのが祟^たって、どうにも上手く形容できず、思うように口が回らなくなり、自分が何を言ってるかわからなくなっていた。次第に照れくさくなってしまうと口を閉じて、結局誤魔化すように癖の頬を人差し指で二、三度搔くことをしてしまった。

しかし、平塚は泡を食ったような顔でこちらを見つめている。

「ひっ、ひきがやっ……?!」

「え……、どうした……?」

「か、可愛いって……、今……」

俯いた平塚の裏声まじりの小さな声を聞いて、八幡は思いついた単語をそのまま口に出してしまつていたことに気が付いた。火を噴くほど恥ずかしいうえに、そう言う文言に抵抗のある平塚にそのようなことを口走つてしまつたのは迂闊うかつであることこの上ない。綸言汗りんげんの如しである。

「いやっ、今のは違うんだ！ ……いやいや実際似合つてるし可愛いのも嘘じゃねえんだが。ん……？ 待て待て待て、だからとにかく……」

必死に辯解べんかいしようとする度に自供していく容疑者の如く八幡はどんどんと墓穴かぶちを掘つていく。

しかし、却かえつてそれが信頼に足りえたようだった。八幡が一人喜劇をしている途中で、聞いたこともない鈴を転がすような声で、「えへへ……、そうか、そうか、良かった……」と呟いた。

「……比企谷も、その服似合つてるな」

続けざまにちよこんとだけ顔を上げて、すっかり上気した頬を覗かせての上目遣いのその言葉。

そんな一言に、八幡はたまらなくなつて胸をざわつかせてしまう。

「……ま、まあ、小町に身嗜みだしなみは最低限気をつけろつて言われてな。色々アドバイスしてもらつたつつか」

「だから似合つてるんだな。その、凄くかつこいいと思う、ぞ……」
「ありがとう、嬉しいわ……」

まだ集合して間もないというのに、心臓の鼓動が愛らしさで加速していった。つい先日恋心に気づいた男にとつては、この一幕は恋情が込み上げて溢こぼれてしまいそうで耐え難いものだった。

何とかその熱情を堰せき止めて「……よ、よし、じゃあ行くか」と、ぎこちなく切り出すと、平塚もまた「……うん」とぎこちなく相槌を打ち、こうしてぎこちない二人の出歩き、世間一般的に言うのであれば、デートが幕を開けたのであった。



「しゃあっ！ 私の勝ちだあ!!」

いじらしく女々しかつた麗女れいじよは何処へやら。平塚は躊躇ためらうことなく拳を高く突き上げる。そして先程の様子からは到底想像できないような猛々たけだけしい雄叫びは、大音量の様々なゲームサウンドが往く道を妨げるようにあちらこちらを飛び交うような中でも、それを真っ直ぐ突き抜けていくような響きがあった。

「……何でそんなに上手いんだよ」

「まあ、これが私の実力だ。踏んできた場数が違う。君には負けるつもりはないからな!」

平塚は横に座って項垂うなだれている八幡に向けて、ふふんと鼻にかけた態度を見せて、その豊かな胸元を前に張って見せた。薄手の服のせいで余計に目立っている。

ただそれで八幡は鼻の下をのばすようなことはなく、それ以上に目の前の画面に映る『You Lose!!』という橙色のフォントに鼻を折られたような気分になって、ひたすら歯軋はぎしりしているのだった。場数といっても、ベストプレイス、サイゼリヤ、ネットカフェと同じほど入り浸り、孤独を糧かてとして、鍛錬たんれんと研鑽けんざんを積んできたこの対人格闘ゲーム——ストリートファイターでの場数が劣るとは到底思えず、それゆえそんな生活を送ったはずがなからう平塚に負けるのは、さすがに自己評価の低い八幡といっても、矜持きようちがそれを許さなかった。どうしても、この胡座あぐらをかいている平塚の鼻を明かしてやりたいのであった。

「も、もう一回だ……」

「私は何回でも受けて立つぞ、いくらでもかかってきたまえ!」

——八幡は肩をがくりと落として、大きな溜め息をついていた。結局、数戦して、平塚に一度も勝てなかったのである。それが運が悪かったと言い訳できるならまだしも、横綱相撲を取られたように完膚なきまでに叩きのめされたのだから矜持きようちとやらはズタボロであった。

そんな八幡とは対照的に、連戦連勝で悦えつに入った平塚は上機嫌に鼻

歌を歌っていた。

「なあ、比企谷っ！ あれをやるうじやないか！」

平塚が目をつけたのは太鼓が二張並んだ筐体きょうたいだった。

八幡の意気消沈としてより淀んでいた目は息を吹き返したようにぎろりと光る。なぜならゲームセンターを訪れる時、必ずと言っていい程この太鼓のゲームは叩いていたからだ。彼が叩けば、一人、二人は通りすがりの人が立ち止まり、見物していった。それは滅多にない承認欲求を満たす機会でもあったのであった。つまり、アーケードゲームの中では最たる自信がこのゲームにはあったのだった。

「ああ、太鼓の達人か。うし、さすがに今度は勝つぞ」

撥ぼちを持って、二人は並ぶ。折角だからと、特捜戦隊デカレンジャーのオープニングテーマを選択し、八幡は難易度選択画面で隠し要素の最高難易度『ドンだフル！』を選択しようとしたのだった。ただ、一方の平塚も踏みとどまる様子はなく『ドンだフル！』を選ぼうとしていた。

「平塚もドンだフルやるのか。自分で選んどいてなんだが結構難しいぞ」

「大丈夫だっ！ 私は一人の時に死ぬほどやっていたからな、昔取った杵柄きねづかってやつだ」

「何が一人だ。本物の一人の強さ、見せてやるよ——」

啖呵たんかをきった八幡は、撥を振り上げて、太鼓の面をどんと勢いよく、威勢よく叩く。ドンちゃんの掛け声で撥をいつものポジションに構える。そして、あのエレキギターが抜群に利いた爽快な前奏が流れ始めた。

そして、ドンとカツが右端から流れてくるのであった。

——数分後。

「よしっ、全曲フルコンボだっ！」
「……」

もはや八幡は言葉を失っていた。平塚は、デカレンジャーの曲はおろか、より難しい他の曲も難なくフルコンボし、周りには片手では足りないほどの観客も集まっていたのだった。そして彼らはみな華

麗なる女太鼓奏者の圧巻のパフォーマンスに、目を奪われていたのだった。

「……お前、すげえよ」

「だから言っただろう。私は一人で遊び耽^{ふけ}って、取った杵柄があると」
「それにしても最高級品の杵柄すぎるだろ。俺だって結構やつてきたつもりだったんだがな……」

「ふふつ、まあ、きつと君の想像以上している以上に私は一人でやってくるからな！」

「でも」と言つて、平塚は八幡の目を見て、ほほ笑みかける。それは何の嫌味も感じさせなかった。

「やっぱり思ったことは、一人じゃなくて、二人、それも君と二人で一緒にやるとすつごい楽しいってことだつ！　ありがとなつ、比企谷つ！」

胸をすくようないつもの調子のその一言と、胸を高鳴らせるようなその笑顔さえあれば、些末なプライドは関係ないように感じた。それに、今までは一人で寂しく、暇な時間を潰すためだけに、通っていたあの淡白でうら淋^{さび}しいゲームセンターが、たった一人隣にいるだけで、こんなにも彩り鮮やかになるものだった。

「——ああ、そうだな。すげえ楽しいわ」

八幡も思わず笑みをこぼして、そう返した。

——そこからは、シューティングゲームや、クレイジーゲームを周った。ワンコインと言えどもお金は湯水のように溶けていった。だが、それ以上の対価——平塚とのかけがえのない時間を買っているのだとしたら、逆に安すぎるようにすら八幡には感じられた。ただただ幸せだったのだ。

そして骨の髄まで遊び倒していると、まもなく正午を過ぎて三〇分を回る頃になっていた。メインディッシュである映画の開演時刻は二時頃であるので余裕はまだあるのだが、昼食を取るにはちょうど良い頃合だった。

「じゃあ、そろそろ昼飯食いに行くか。まあ、いく場所は……」

「ラーメン！」

「だよな。そうなると思つて前もつて調べてきたんだ。評判いいところあるんだが、そこ行くか」

「おお、準備がいいな。そうしよう！」
「じゃあ行くか」

平塚の賛同も得て、八幡が意気揚々とゲームセンターを後にしようとした時、七分袖のカーデイガンの袖口を彼女にちよこつと摘まれ、軽く後ろへと引つ張られた。

「ん、どうした平塚？」

「……あの、その比企谷」

「なんだ、何かやり残したことでもあるのか？」

「うん、その、あの、あれ……」

また急にしおらしくなつた平塚が指を差した先には、八幡がゲームセンターに来る度にいつも目の敵かたきにしていたあの箱型の機械があつた。無駄にでかいと思えるその図体がどつしりと存在感を放つてそこにいくつかあつて、その周りではおそらく高校生であろう女子達が輪を作つて、楽しそうに話している。

「えつ、プリクラ……？」

「……うん」

「撮りたいってこと、か……？」

平塚は黙つてこくりと頷いた。

「俺と……？」

また、黙つてこくりと頷く。

「……ま、まあ減るもんでもねえし、いいんじゃないの？」

「……ほんとかつ？」

「ああ、本当だ」

平塚は愁眉しゆうびを開いたような顔になつて、今度は八幡の袖を前に引つ張つて、プリクラ機の方へと向かつた。

そして、八幡はおずおずと幕に仕切られた狭い個室の中へ入つていった。彼には、作法とやらも何一つ分からないので、平塚に任せるしか無かつた。続けて平塚も入つてくると、さすがに個室ということもあつて、この世界に二人だけしかないように錯覚させられる感じ

がして、ひたすら照れくさかった。

「……これって、ポーズとかも機械の指示に従えばいいんだよね？」

「ああ、そうだ」

平塚はアナウンスに従って、目の前の台にある画面を黙々と押している。八幡に何をしているのかがさっぱり分からないが、すぐに設定は終わったようだった。

「よし、じゃあ、始めるぞ」

『二人の思い出作っちゃいましょー！ では、まず早速ピースから！』

そして、五秒前からカウントダウンが始まる。隣の平塚は、指示されたようにレンズに向かって俄造りの笑顔でピースサインをしている。八幡も平塚に合わせて、そこに向かってピースをする。

『はいっ、チーズっ！』

すると、フラッシュが焚かれて、間もなくして目の前の画面には今撮った写真が映った。相変わらず平塚は撮りなれているのか、それとも単に明眸皓齒の美形だからなのかは分からないが、大変写りが良かった。一方で八幡も、その隈がめつきり消えるほど加工がかかって、もはや自分ではない男が写っているような気さえもした。

「うお……、こんな感じなのか」

「うん。よく撮れてるじゃないか！」

平塚は画面を二、三度押す。

そこから、次々と『あさっての方向に向かって！』『変顔！』など、お題が提示された。多かれ少なかれ恥ずかしさはあるものの無理難題を要求されることはなく、八幡も人生初のプリクラもそこそここなす事が出来ていた。次第に凝り固まったものが解れてきて、平塚との会話が弾むなど、存外に楽しいものだったのだ。

そして今度は『お気に入りポーズ！』のお題が出された。

これには、八幡は仮面ライダー剣の変身ポーズで、平塚は特捜戦隊デカレンジャーの変身ポーズで、写真を撮った。画面に映った写真の纏まりの悪さに、二人は可笑しくて声を出して笑っていた。

しかし、最後の最後で、その難題にぶつかってしまったのだ。

『じゃあ、最後に——二人で抱き合っ！』

「ひっ、これはさすがに……」

八幡の顔は引き攣^{くわ}って、片方の唇の端を釣り上げて、苦笑していた。

『5！ 4！』

八幡は何もポーズを取れずにいたが、そんなこと知る由もない機械の無情なカウントダウンが始まった時だった。

何も言わぬまま平塚は急に、八幡の脇腹と腕の間からその華奢な腕を後ろから差し込んだのだった。

そして、彼のなだらかな肩にしなだれて、もう一方の腕も前からも差し込んで、抱きつくような形で、腕を組んだのだった。

羽毛布団に包まれたようなあまりにも柔らかい感触の急な来訪は、八幡の身体中に轟^{とどろ}くほどの擦半鐘^{すりばんじょう}を胸が打つには余りに事足りすぎていた。

『3！』

「ひっ、平塚さんっ……?!」

八幡は目を白黒させて、声を裏返させながら呼びかけても、平塚は無言のまま頑固一徹として組んだ腕を離す様子はなかった。それどころかよりぎゅっと強く抱きしめてきたのだったから、八幡の腕の感覚神経は麻痺し始めていた。

そして、その意固地な様子は、まるで七夕の時の意趣返^{いしゆ}しのようにも感じられた。

『2！ 1！ はいつ、チーズっ！ お疲れ様でしたっ！』

平塚は、すぐにするりと八幡の脇から腕を引き抜く。ただ、二人の間に会話なぞ生まれず、顔も見合せることなく、沈黙の高気圧がこの狭い部屋に降ってきていたのだ。

しかし、目の前の画面には、今撮った写真が躊躇うことなく写し出される。その写真には、人様には見せられないような表情を浮かべた二人の男女が写っていた。

そして、落書きスペースに移った時には、最後に撮った写真は画面に映し出されていなかった。

——二人は随分と、満足した様子で巷^{ちまた}で有名なラーメン店を後にし

ていた。

プリクラを終えた直後はいたたまれなさがあり、完成された写真をまともに見ることはなくそのまま鞆にしまいこんで、ラーメン店に向かった。

そのような雰囲気をそのまま引き摺^ずって、店に入ったものだから、あまり口を交わさず、まるで別々の客のように黙々と食べ始めたが、あまりの美味さに頬が蕩^{とろ}け落ちると、その気まずさは次第に霧へと消えたようで、「美味しい」とひっきりなしにその美味さを礼賛^{らいさん}していたのだった。

そしてそこから二人は歩いて、少し離れた目的の映画館に向かっていく。食後の運動にも程よい距離であった。

「映画、楽しみだなっ、比企谷っ！」

「ああ、もう身震いが止まらねえわ」

興奮を抑えるのが精一杯な八幡は、体の震えが止まらなかつた。一年に一度の楽しみが、もう目の前に迫ってきているのだった。さらに隣には、平塚もいる。今までで一番楽しみであることは、間違いないかった――。

「えっと、ここの道を真っ直ぐ行くんだよな……」

途中に海浜幕張地区の案内板があり、念の為に映画館の位置を確認するために、一度立ち止まった。そして八幡は携帯を取り出して映画館の住所を調べようとすると、平塚は驚いた様子で声を上げた。

「あっ！ 比企谷、それ……」

平塚が指したのは、潮風にあたつて振り子のように揺れているパンスさんのキーホルダーであった。これは紛うことなくディスプレイニード彼女に誕生日プレゼントとして貰った物であった。

「まあ、学校じゃ何言われるか分かんねえから流石に付けられねえけど、今日は折角だし付けてみようかなって……」

「実はあ……、じゃじゃーん！」

平塚は肩にかけた薄桃色のショルダーバッグから、青色の携帯を取り出して、八幡の目の前にそれを突き出した。そして、そこには八幡と同じように、ストラップホルダーから一本の紐が伸びていたのだ。

「平塚も付けてたのか」

「私も今日付けてみようかなって思ったんだ」

「偶然だな」

「ああ、偶然だなっ！」

八幡は単純ながら胸が熱くなるほど嬉しくなった。偶然の産物と分かっていても、考えていることが同じというだけでも、飛び跳ねるほど嬉しいものであった。彼女との心の繋がりが感じられて、安心できるのであった。

そして目的の映画館に辿り着くと、既に二人が見る回の特撮映画の案内が始まっており、急いでポップコーンとドリンクをカウンターで注文すると、そのままスクリーンの中へと入っていった。

——スクリーンから出ると、平塚はそれは興奮気味で、今にも語り出したいという風に見えた。当然それは八幡も同じであり、この内に滾る熱を一刻も早く共有したかったのだ。

「やはりすごい面白かったな！」

「ああ、特に——」

その時、後ろの方からどこかで聞いた覚えのある元氣潑刺な幼い少年の声が聞こえてきた。

「あつ！ あの時のにいちちゃんとねえちゃんだあつ……！」

後ろを振り返ると、飛びかかるような勢いで小学生低学年ぐらいの背丈の少年が八幡の膝元に腕を回して抱きついてきた。

「おおっ……」

彼は加減を知らないタックルに思わずよろけるが、弥次郎兵衛のよくな平衡感覚を発揮して、何とか倒れずに堪えた。何の悪気も無い故に悪びれる様子もない少年は、膝に埋めた顔をこちらに向けた。

「にひひっ！ にいちちゃん、ねえちゃん、久しぶりだなっ！」

それはカップルコンテストで会場を和ませる檄を飛ばし、決勝前にはこの二人のことを応援してと言ってくれたあの夫妻の長男坊だったのだ。相変わらずの短パン半袖姿で、前と少し違うのは生え変わりのためか所々歯抜けであるところだが、恥ずかしがる様子もなく

につこりと白い歯を見せている。思わず八幡もそれに釣られて口元が朗らかにゆがんだ。

「ああ、久しぶりだな」

「おお、元気にしてたか、少年っ！」

「うんっ！ 元気にしてたぞっ！」と答えた長男坊に平塚は随分首つたけなようで、しゃがみこんであの日の時のようにスポーツ刈りの黒髪ををわしゃわしゃと猫可愛がりするように撫で始めた。彼も抵抗することなく、気持ちよさそうに目を細めて、それを受け入れていた。

長男坊の話の聞くと、どうやら彼も同じ映画を見ていたようで、二人ではなく、長男坊を含めた三人で映画に関する立ち話が始まった。

「バンがすっげえかつこよかった！」

「うんうん、君はよく分かってるじゃないか！」

「ああ、この映画のおかげで伴番バンバンのこともっと好きになったな」

「俺、将来バンみたいになりたいんだ！」

「ああ、なれるさ。ねえちゃん達がいつかピンチになった時も助けるんだぞー！」

「うん、絶対助ける！」

そんな画面の向こうのヒーローに憧れる長男坊との立ち話は留まることを知らず、他人の目も忘れて話惚ほうけていたところであった。「あつ、いたつ……！」とやけに安堵の混じった女の人の声が聞こえ、その声の主は、まだ小さい女の子を腕に抱えてこちらに向かってくる。その顔は、かなり眉間に皺しわがよっついていて、今にもその安堵が別のもの変わるようであった。

「もうカイトつたらっ……！ トイレの前で待っててつて言ったでしよー！」

「でも……、七夕の時のにいちちゃんとねえちゃんが居たから」

「また、そんなこと言つて、つて、え……？ あらっ！」

長男坊——カイトの母は、八幡と平塚の存在に気付くとだいぶ驚いた顔で、挨拶してきた。二人も合わせて挨拶を返す。

「ごめんなさいね、うちの子が迷惑かけて」

「いえいえ、そんなことないです。なっ、比企谷？」

「はい、息子さんとお話できて、すっごい楽しかったです」

「それならいいんだけど。でも奇遇ねえ。まさか、こんな所で会うなんて。お二人は映画見終わったところ？」

「はい、実は私たちもちょうど特撮の映画見てて」

カイトの母は予想外であったようで、「えっ、そうなのっ?!」と大きな声をあげていた。

「じゃあ一緒に見てたのね！ でも、こういう言い方はあれだけど、かなり珍しいわよねえ」

「確かにそうですね。私も彼以外見たことないです。でも、お陰様で共通の趣味ができたというか」

平塚に彼と言われて、おもむろに瞬きが増えた。確かに今は、恋人を演じる必要があるので、当然の言葉遣いではあるが、今となっては偽りだとしても恋人だと見られているだけで、頗る嬉しくなるのが恋する男の純朴な性分なのであった。

「へえ、そうなんだ、良いわねえ……。あつ……。じゃあ、大会の時も、実は二位のフィギュア狙いだったりとか？」

「まあ、そうでしたね。彼が頑張りすぎちゃって優勝しちゃいましたけど」

「そうだったんだあ。まあ、でも彼氏さんすっごいかつこよかったわ！」

急に褒められたものだから、八幡は謙遜で、手を横に振る。

「いつ、いやいや、そんな事ないですよ。俺、すっごい必死でしたし」「必死になってくれるのが何より嬉しいの！ すぐ諦めてた情けないうちの主人と比べたら雲泥の差よっ！ ねっ、シーちゃん、お兄ちゃんかつこよかったよねー」

カイトの母が腕に抱えられたままの娘——シーちゃんにそう語りかけると、まだ舌足らずながらも、「うんっ、にーちや、とつてえも、かつこよかった！」と、稚い微笑みを浮かべて八幡に言った。

「シーちゃん、ありがとなあ」

八幡もとても綺麗なものに心を漱がれた気分になって、平塚のようにまだ小さく、掌に収まってしまいそうな頭を毛並みに沿うように

して撫でた。シーちゃんはきやつきやと嬉しそうに笑ってくれている。なんだかそれは、小さい頃や、つい最近のとある雨の日の時の感触に凄く似ていて、ひたすらに懐かしさと愛おしさが八幡の中を駆け巡っていた。

「にいちゃんとってもタコみたいに顔真っ赤つかだつたけど、俺もすっげえかつこよかったと思つたあ！ ねえちゃんも抱っこされてる時、最後の方はいちちゃんよりも顔真っ赤つかでめっちゃ頑張ってたしなっ！」

「そうだそうだ。つて、かつ、カイトっ……?!」

カイトの爆弾とも言える発言が突如襲いかかり、平塚は鳩が豆鉄砲を喰らったように慌てふためいたが、彼女は急に開き直って、

「……そ、そりゃ、あんなことされたら、誰だつて照れるに決まつてるじゃないか！」

照れ隠しかぶいと顔を背けた平塚を見て、あの時の咄嗟の行動がこの期に及んで、その恥ずかしさが蒸し返してきて、八幡は音を立てるように後ろ髪を搔いていた。

カイトの母は、そんな二人の様子を見てぶふつと吹き出していた。

「本当、お似合いのお二人ね。羨ましいわあ」

カイトの母はそう呟くと、頬に手を置いて、何か自分の身の上を憂うれいているのか、大きなため息をついていた。

ちようどその時、彼女の携帯が鳴ったようで、それを取り出して、電話に出る。何度か「あー、はいはい」と素っ気なく繰り返すと、電話を切った。

「主人が待つてるみたいだからそろそろお別れね。二人の時間を邪魔しちゃうってごめんなさいねえ」

「いえ、全然邪魔なんてことはないです！ また会って話すことができますよ！」

「うふふ、ありがとねえ。私達もまたお話出来て嬉しかったわ」

そうだ、とカイトの母は何かを思いついた様子で、手元の携帯電話を弄り始めた。

「お節介かもしれないけど、二回も巡り合うなんて、何かの縁だから、

連絡先交換しない?」

「はいっ、是非っ! じゃあ、私とでいいですか?」

「うんっ、いいわよ。女の子同士、秘密のやり取りしちやいましょうねえ」

カイトが「かあちゃんは今もう女の子じゃねえだろ」とつつこむと、綺麗な瓦割りがカイトの脳天に繰り出されていて、それはだいたい痛かったようで、しやがみこんで頭を抱えながら唸っていた。

「よし、これで完了っつと、ありがとねっ! あっ、そうだ。最後に名前乗つとかなきゃね。私は二宮基子。このみやもとこ。そして……、シーちゃん、お名前言うのできる?」

基子に求められて、シーちゃんは、うんとまだ小さく細い首を縦に振って、「わたちのなまえは、にのみやしおりでしゅ。三歳でしゅ」と上手に自己紹介をして、最後にぺこりとお辞儀までして見せた。

「葉、か。いい名前だ。それときちんと自己紹介できてえらいぞお」

「ああ、本当だ! 大会の時の比企谷とは大違いだっ!」

「よ、余計なこと言うな、平塚」

「だって、あの時の比企谷は、ぷふっ……」

平塚は堪えきれず吹き出してしまった。八幡が優勝者インタビューで、観客の面前というあまりにも非日常的で慣れないシチュエーションに立たされて、緊張のあまり壇上で嘔み倒した事を引き合いにい出されると、さすがに八幡も弱ってしまった。

カイトの母もその時の様子を覚えていたようで、平塚と同じように思い出してくすくすと笑っていた。

「ぷふっ、じゃあ、次、カイトも」

「うん、わかっているっつて! 俺の名前は、二宮海斗!かいと。今、小学校二年生で七歳!」

「そうか、海斗は小学生か! もう立派なお兄ちゃんじゃないか!」

「まあな! そして、ねえちゃんとにいちやんの名前は確か……。ええと……」

決勝に残っていたから何回か苗字は実況されていたものの、一ヶ月以上も前となると、海斗も流石に臆気な^{おぼろげ}よう^げで、二人は順に名前を名

乗った。

「私の名前は平塚静で——」

「俺の名前は比企谷八幡だ」

「じゃあ、しずねえとはーにいか、よろしくなっ！」

「しずねえ、はーにい！ よろちく！」

「ああ、よろしくなっ！」

一通り自己紹介を終えたところで、基子が「じゃあ、もう行くわよ」と海斗に声をかけるが、彼は少し浮かない顔を見せた。

「どうしたの、海斗？」

「かあちゃん、またはーにいとしずねえに会えるのか？」

「大丈夫、会えるから。アドレスも交換したし」

「はーにいと、しずねえもまた会うつて約束してくれる？」

「ああ、当然だっ！」

八幡も平塚に合わせて、頷いた。

「でも、やっぱり心配だから、これするぞっ！」

カイトは右手の小指だけを上向きに立てて、二人の前に腕を伸ばした。

これは幼い頃に良くしたあの契ちぎりの構えであった。

しかし、二人でやるからには一人余る。八幡と平塚は顔を見合わせて困っていると、海斗が鶴の一声を発した。

「はーにいとしずねえ、どっちも一緒にやるんだ！」

子供の奇想天外な発想力には、八幡も恐れ入った次第であった。八幡も、平塚も右手の小指を上向きに立てると、三人であの形に結ぶ。とびきり小さい海斗の小指を、二人で包み込むように。そして、海斗が「せーの」と声を掛けて、

「二指切りげんまん嘘ついたら、針千本のーます、指切った！」

約束の呪文を揃って、声高らかに言い切って、三人は小指を離した。海斗は大層満足した様子で、また、歯抜きの白い歯をいっと見せた。そして、基子に連れられて、栞と海斗は映画館を去っていった。

「しーちゃんと海斗。嵐のよう二人だったな、比企谷」

「ああ、でも可愛いもんだな」

「その通りだ。とつても可愛かったなあ……」

平塚はしみじみと言った。八幡と違って人付き合いが良好に見える平塚だが、特に子供に関しては、格別に好きだと言うのは、今までの態度からもだいたい窺い知れた。

「子供かあ、いいなあ。私もいつか子供を連れて一緒に特撮の映画見に行けたらなあ……」

平塚はそう何気なくボヤクが、二人きりでなおかつ異性の八幡からしたら反応しづらいことこの上なく、「そつ、それは良さそうだな」と吃つたように答えてしまった。

「……いつ、いや、比企谷つ、これには別に深い意味はないからな、ナイナイアリエナイザーだからなっ！」

「あつ、ああ、大丈夫だ。さすがに分かつてる」

そんな時、偶然にも、二人の目の前を親子連れが通つて行つた。父と母の間に、小さな子供がそれぞれの片手を繋いで、仲睦まじそうに歩いている。街中にいればよく見かける光景だが、それが八幡には途方もなく羨ましくなってしまう。

そして、深い意味が無いことは分かっているとは言いつつも、その背姿を羨望の眼差しを見送つて、ただ胸の内にある理想像をその光景に重ね合わせていた。

——映画も見終わった事で、本日の主な予定は終わったことになるが、丁度二人揃つて見ておきたいものがあるということ、つい二、三年ほど前に開いたばかりの、アウトレットモールに足を運んでいた。

夏休みの中頃から、小町は料理、特に弁当を作ることが受験の合間の息抜きのようなものになっていた。

それは講習会で昼食を自弁する必要があつたことが切っ掛けであり、そこからはどうやら嵌つていったようで腕に縊をかけて弁当を作るようになっていった。それゆえ、夏休み中は八幡が文化祭準備の手伝いのために午前中から出かける時は、朝早く起きて小町が昼食用の弁当を拵えてくれていた。

しかし、二学期からは学校が始まり、料理と勉学の二足の草鞋はさ

さすがに厳しかったようで、弁当は作ることは無くなったが代わりにたまに手軽なお菓子を作って、振舞ってくれたりしていたのだ。

八幡は、受験の合間の息抜きとは言っても朝早く起きて、時間を削ってまで弁当を作ってくれた小町にお礼として、加えて相談に乗ってくれたお礼として、何かお菓子を作るために必要な調理器具を買ってあげたかったのだった。

そして、平塚も丁度調理器具を見たかったようなので、まず調理器具が取り揃えられた店へと向かった。

八幡はそこで値札を見るが、小物でも想像していた以上に値が張るものも多く、最近出費が嵩かさんでいて、節制をモットーにしている男子高校生の財布に払える余裕は無かった。しかし、八幡には使うタイミングが無く、財布の札入れでひっそりと息を潜めているもの——七夕祭りの優勝賞品として贈呈された商品券二五〇〇〇円があつた。どうやら使い時らしい。

一方、平塚も真剣な様子で、並べられている調理器具を手にとって、フライパンの表面を少し撫でていたり、底が浅い所謂浅型の土鍋と、底が深い所謂深型の土鍋を手にとって見比べてたりして、じつくりと品定めをしているように素人目からも見えた。

「平塚も、やっぱり料理とかするの？」

「まあ、たまにだがするかな」

「ふーん、そうか。まあ、お前のことだからきつと料理上手いんだろうな」

「いや、そんなことは無い。小町ちゃんの方が全然上手だし。夏休みの時に君が持ってきていた弁当を見ていたら私にも分かるよ」

八幡はふっと、鼻で笑った。

「なあに言ってるんだ。もとより小町より上手いってなんて思ってるねえって。小町は俺の妹であり、中学生であり、受験生であり、三ツ星シェフでもあるんだ。まあ、今は勉学はげに励むってことで、料理の仕事は休職中なのが残念だが」

「……全く、相変わらず君は小町ちゃんのことになると、本当に兄馬鹿になるのだな」

「兄馬鹿じゃねえ、事実だ」

「そういうのを兄馬鹿というんだ、バカタレ。まあ、そこまで仲がいいのも羨ましい限りだ。一人っ子の私としては本当に羨ましい」

「まあな、小町は最高の妹だ」

八幡のおさままらない兄馬鹿っぷりに平塚は呆れるように笑うと、手に取ったステンレスのお玉を元々吊るされていたフックに掛け戻した。

結局、八幡は、オーブンでお菓子を焼いた後、プレートを取り出す時に、小町が少し熱がついていたのを思い出して、厚手の可愛らしさに意匠を凝らしたミトンを一雙、持ち腐れていた商品券を用いて購入することにした。

その後は色々な商品を見て回った。

八幡には敷居が高いアパレルショップに行くと、平塚によるささやかなファッションショーが行われた。彼女はボーイッシュなものからガーリッシュなものまで毛色の違うものを淡々と着こなして、八幡に披露していた。しかし、ファッションに関して門外漢である彼には詳しいことはどうしても分からず、やはり率直な感想しか述べられなかった。

しかし平塚にとってはそれが良かったようで、特に八幡が良いと反応したものを一着購入していた。

そして次に向かったのはこれまた八幡には敷居が高いアクセサリーショップで、ここでは千紫万紅の宝石がショーケースの中に陳列しており、立てられた値札の中には八幡が思わず息を呑むほどの桁数の品物があつた。

そのような見るからに場違いの若齡の二人の懐事情を考慮したであろう店員に勧められたものは、この店の中では最も安い部類に入るものだが、最低限五桁は必要であつた。当然購入は不可能であつた。しかし、試着は可能であり、是非どうぞということ、平塚が勧められたアクセサリーを試着していた。

「どうだろうか。私に似合ってるだろうか……？」

少し眉を曇らせている平塚の首元には、ハート型の輪の中に一輪の

花があしらわれた可愛らしいネックレスが、目立ちすぎずも可憐さを引き立てるように淡く輝いていた。

それを見て八幡は思わず顔を綻ばせて、ぱっと思ひ浮かんだ感想をそのまま告げる。

「ああ、よく似合っつてんじやねえか。いちやもんつけられるなら色々言っつてやりたいところだが、残念ながらいちやもんはつけれそうにねえな」

「ふふっ、ありがとっ……！」

平塚は可愛らしくはにかんで、それを丁重に外すと、店員に愛想良くお礼を告げていた。

八幡はその様子を見て、無性に嬉しくなっていた。

それは、あの七夕の夜に見た平塚の顔を未だにはつきりと覚えていたからだ。あの重たく固く根が深く張った、底冷えした自虐は耳に残っていた。

あの顔をした理由は未だに分からない。ただ、あの顔をした平塚が、可愛らしく、そして似合わないと彼女が諦めていた装いを、こうして自信を持って、褒め言葉を素直に受け止めて、宝石のように玲瓏れいろうとした双眸そうぼうを輝かせて、一等輝いている笑顔を浮かべている。そして、その克服の一翼を八幡が少なからずも担うことができたのではないかと僭越せんえつながらも確かに感じるから、喜ばしくなるのであった。

—— 相も変わらず盛況を呈するモール内を、二人が談笑しながら並んで歩いている時であった。目と鼻の先に、彼らの身長ぐらいの大きさの看板が出てきて、それが何か認識すると、二人とも興奮した様子で擦り寄っていった。

「比企谷っ、剣とデカレッドだっ！」

「おお、本当に何でまたこんなところにあるんだらうな」

そこには仮面ライダー剣と特捜戦隊デカレンジャーデカレッドの等身大パネルであったのだ。どうやら近くが子供の天国こと玩具コーナーであるから置いてあるようなのであった。二人して携帯を構えてそのパネルの写真を撮り、折角ということで平塚の携帯で

通りがかった人に頼んで二人が写った写真を撮ってもらった。こうして思い出の頁は確かに、一頁ずつ刻まれていくのであった。

その場を離れたあと、休憩スペースのようなところで、先程の写真をメールで送るといふ話になって、二人が携帯を取り出して操作していた時。

少し遠くの店が並んだ通りのから「あれっ、静じゃん！」と通りの良い女の声が聞こえてきた。今日はどうやら知り合いに良く会う日らしいのだ。

八幡がその声のほうのする方へ顔を向けると、おそらく同世代の女子二人がこちらの方を見ていた。

その二人はそろそろとこちらに近づいてきていた。だんだんと容貌がはつきりしてくるが、どうにも学校内で見た覚えはなかった。

「え、しかも男の子と一緒にいない?！」

「うっそ、そんなこと。……ってほんとだあ〜！」

その二人の言い種からすると平塚の知り合いらしいが、当の平塚は二人の存在に気付いた時、歓迎している様子はなく、むしろ露骨に眉の形をぐにやりと歪めていた。

「げっ、桜とツル……」

平塚が呟くその名前は、八幡は今までで一度も聞いたことがなかった。

「はろー、静っ！ 何してるのさ、しかも男の子と二人で。……って
ういか、君っ、あの棒倒しくんじゃない?！」

「あつ、本当だ〜！ すっごい面白かったよ、あれ」

「えっ、ああ、そりやどうもです……」

どうやら二人は八幡のことは体育祭の時から知っているようであった。確かに平塚は中学の同級生と一緒に見ていたとは言っていたが、彼女達の事だったようだ。

今までの人生において、知っているけど知られていないことはあつたが、知らないけど知られていることはなかった八幡にとっては何とも不思議な感覚であつて、反応に困ってしまった。

「なるほどなあ、体育祭の時、静がたいそう気に入ってるなと思つたが

そういう事かー」

「ちよつ、桜っ！」

「ね〜」

「あははっ！ それでさあ、ツルがさつきね——」

その様子から見て、この三人が仲がいいというのは八幡にも分かり、だからそのやり取りに入るのは億劫おっくうに感じられた。

すると、ただ傍らかたわでじっとしている八幡の様子を見かねた一人が、話しかけてきた。

「あつ、ごめんごめん、棒倒しくんは私たちのこと分からないよね。どうも、私、静の中学の頃の同級生、大磯桜おおいそぎくら！ よろしくっ！」

活気横溢かつきわういつとして気さくな笑顔で八幡に名乗る大磯は、平塚のように人当たりの良いのであろうことが伝わってきた。そして、黒と茶色の間の色合いで染められたさっぱりしたミディアムカットで、ほんのりと日に焼けた感じであり、すらっとした体格は、その内面と見事に一致しているようにも思えた。

「は〜い、どうも〜。同じく、静しずちゃんの同級生の〜、秦野鶴子はだのつるこです」

すぐくおつとりとして余裕があるそのしゃべり方は、大磯とは対照的であり、どこか箱入り娘のような気品すらも感じた。そして、その肌は本当に箱の中に閉じ籠こもって暮らしていたのかと思うほど透き通るほど白くて、ベージュ色の髪も相俟あいまって、日本人らしくない西欧風なようであった。ただ身長は飛び抜けて低く、その丸っぽい顔もあつてか、小町と同じほどの年齢かと錯覚するほど、幼く見えた。

「平塚の高校の同級生の比企谷八幡……、です」

「おお〜、比企谷八幡くん。珍しい名前だね〜、よろしくね〜」

「よろしくねっ！」

「……よろしくお願ひします」

「比企谷くん、全然タメ口でいいよー」

「あつ、ああ、わかった」

それで良しと大磯はにこやかに八幡に微笑みかけると「よしっ、では早速」とこの場の指揮を執とり始めた。

「静の雰囲気がいっつもと違う件について」

「静ちゃんの髪の毛、そんなくるくるだったっけ」

「いやっ、これはだな……」

取り繕おうとする平塚を横目に、大磯は何かに気づいた様子で口を開いた。

「——っっていうか、良く見たらその服、最近、静が珍しく私達を呼びつけて選んで欲しいっていったやつじゃん!!」

「あっ、ほんとだ。私、そういうのに疎いからっけ」

「え、マジで……?」

八幡も思わず声が漏れてしまった。するとその反応を面白がって、大磯が乗っかるように「比企谷くんマジだよ! マジ!」と言った。

「ち、違うんだ、これは、そっ、その……」

「静ちゃん、理由すっごい誤魔化してたけど、こういう事だったのか」

「あわわわわわ……」

平塚は金魚を模したように口を開けたり閉めたりしていた。見るからに動揺しているのだった。

「じゃあ、次に、一気に切り込んじゃうけど、二人はどんな関係なの?」

「ま、まあ、仲のいい友達だ。なっ、比企谷?!」

平塚が、『余計なことを言うんじゃないぞ』と目伝いで訴えてくるのであった。ただ、友達であることは嘘でもなんでもなく事実であるのだから、八幡も「そうだな」と普通の調子で答えた。

それを聞いて「ふーん」と大磯は至極つまらなそうな顔をしていたが、秦野は二人が写真を交換するために握っていた携帯の方をまじまじと見始めて、にやりとしてひと言。

「じゃあ、質問だけどそのお二人の携帯にぶら下がってる、その見るからにおソロのパンさんストラップは何かな? 普通の友達が、見せつけるようにお揃いのストラップなんて付けるのかな」

「おっ、さすがツル探偵、目の付け所が鋭い!」

「えっへん、どんなもんですか」

「い、いやツルと桜。これは、比企谷とデイスティニー行った時にだな。……っつて、ハッ?!」

平塚は慌てて両手で口を塞いだ。しかし、これこそ論言汗の如し。大磯と秦野は平塚のあまりの間抜けなとんまに、探偵ごっこの手応えがないのかもはや呆れたような顔になっていた。

「うわあ〜……、お手本通りの墓穴〜」

「というか、二人でデステニーまで行つたのか……。あのお土産もそういうことか……。くつ、幸せ者め……」

「いや、説明したら色々ややこしくなるから。とにかくそういうのではなくてだな……」

平塚が言い訳探しに口元をまごつかせていると、まるで住宅街の正午の貴婦人たちの井戸端会議のようなノリでひそひそ話を始める。

「——これじゃあ、邪魔しちゃいけないですね〜、桜さん〜」

「ええ、そうね。これは邪魔しちゃいけないやつですよ。ツルさん」

二人は、示し合わせたようにほくそ笑んだ。

「というわけで、じゃあね〜、静ちゃん楽しんで〜。文化祭の時また会いに行くからね〜」

「ていうわけで、ひきが……。えーと、言いやすく。そうだ、ヒツキー君！」

「ヒツキーって、それ女性歌手か引きこもりじゃなあい〜?」

「いいのいいのっ! じゃあヒツキー君、静のこと頼んだよ!」

「あ、ああ、分かった」

「お二人共、お幸せに!」と去り際に^{からか}言葉置き土産にして、大磯と秦野はその場から逃げ去るように、まさしく嵐のように消えていった。嵐の後の静けさというのだろうか、二人はしばらくの間、貝のようになつて、その場に立ち尽くしていた。

「……平塚、また嵐が来たな」

「う、うん。そうだな、とんでもない嵐だったな。……ちなみにだが、比企谷。あの二人が言つてたことだがな……」

「まあ、違うよな。さすがに分かつてるわ」

「……あ、ああ、そうだ。たまたま秋服を切らしてて、買ったただけなんだ」

「なるほどな」

八幡はほつと胸を撫で下ろしていた。もし、先の大磯と秦野の言っていることが本当だとしたら、思い違いも甚だしい有り得ぬ希望があると思ひ込んでしまふかもしれないからだ。

それからは、ウィンドウショッピングを続け、一通りモール内を回ったところで、夜までには帰るといふ話であつたので、このタイミングで帰ることに決めた。

海浜幕張駅へと向かう。街ゆく人達も、多くは駅の方へと向かつている。途中で八幡が停めていた自転車を拾い、それを手で押しながら自転車を挟んで二人並んで歩いていった。

駅前広場の前のタイヤは街灯と建物からの白っぽい人工的な灯りで照らされている。そして、広場の野球の像の色が、周りを覆い始めた薄々とした黒と混じつて、ぼんやりと浮かび上がるのを見ると、この一日があつという間に終わってしまったことを実感できた。

「今日も楽しかったなっ！」

「ああ、すげえ楽しかったわ。ありがとな。じゃ、俺帰るわ。またな、平塚」

自転車を押してそのまま帰路に着こうとした時だった。「ひっ、比企谷っ……！」と平塚に呼び止められて、八幡は動きを止める。

「ちよつと、待って……」

「ん、どうした。また何かやり残したこともあるのか？」

平塚は首を横に振って、小さく口を開く。

「……ごめん、今日一個だけ、君に嘘をついたんだ。さっきの秋服を切らしてたつていうのは嘘……」

「え……？」

「本当は、ツルと桜が言つてたように今日この日のために、二人に頼んで服を選んでもらったんだ……」

平塚は、顔を下に向けた。

「私、今日、比企谷と出かけるの凄く楽しみだったから……。ちよつと頑張つて、その、お洒落^{しゃれ}してみようかなつて……」

「——っ!!」

「こんなの……、引くよな……」

頬を赤らめ、目をうるませた平塚は上目遣いで、遠くで鳴く蟋蟀こむすびのような細かい声で、八幡に尋ねてきた。

「いやいや、引かない引かない。俺だってめっちゃ楽しみだったから。誘った側だし。この服もこの日のために新調したやつだし。むしろ楽しみにすぎたて引かれないか心配だったわ」

「ふふっ、そっか、比企谷もなんだ……、すごく……、すごく嬉しいな……」

言葉通り、そしてそれゆえ形容しがたいほどの本当にとびきり嬉しそうな顔を平塚は見せていた。

この時、八幡の何かが、完全に崩れ落ちる音がした。

「その、また、二人でこうやって出かけてくれるか……？」

「……ああ、そうだな。また二人でどっか行くか」

「あと、それと、その、文化祭も二人で回ってくれるか……？」

「……分かった、二人で回るか」

「じゃあ、私たち二人だけの——、な……？」

平塚は、もう既に大事な約束がある右手とは逆の左手の小指を立てて、ゆっくりと左腕を伸ばして、それを八幡の胸の前に差し出す。

八幡もそれに応えるように、左手の小指を立てて、平塚の指とぎゅっと絡めた。その指は外にいるせいか先程よりも少し寒く感じた、ただ八幡のよりも随分と小さくて弾力のあるもので、絡めている内にじわりと温かみが伝わってくる。

「指切りげんまん、嘘ついたら、針千本のーます。指切った」

絡めた指をどちらからともなく離すと、平塚は熱を含んでいそうな目を潤ませて、優しく微笑んで、顔を八幡の耳元に近づける。彼女の甘美な匂いがまた擦るように、入り込んできた。

そして、普通なら周りの足音や、自動ドアの音、微かな轍わだちを残していく車の音に吞まれそうなほどの掠かすれた声で、

「——約束だぞ」

そう耳元で囁くと、そのまま駅の構内へと入っていった。八幡は呆然と立ち尽くし、その姿を自然と目で追っていた。

階段を登る手前。

平塚は立ち尽くしていた八幡の方へと振り返り、口を縦に、そして口を横にと動かした。何かを伝えようとしているのだろうが、読唇術どくしんなど持ち合わせない八幡には、人混みが時折遮る中ではさっぱり伝わらなかつた。そして、何かを言い終えた彼女は手を小さく振ると直後、階段の向こうへと妖精のようにひらりと姿を消してしまった。

——平塚の姿が見えなくなった瞬間、八幡は自転車を走って押し、近くの車道に飛び出る手前で勢いよくサドルに跨り、そこからは人目を憚はばからず全速力で漕ぎ出した。

——可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い可愛い

息が荒くなる。ペダルを全速力で漕いでいるからだ。

鼓動が荒くなる。それは、全て平塚のせいだった——

——可愛いんだよ。可愛いすぎるんだよ。そんな顔、そんな仕草見せられたら、どうにかなつちまうだろう……

叫ぶことができたなら叫んでいただろう。サンドバックでもあったのなら思いつきり殴っていただろう。だが、そんなことは今はできないのであつた。だから、その手に余るほどの激情の行先は、自然と全て二本の健脚けんきやくの方へと向かつて、よりペダルを回す速度はただひたすらに速く、速くなっていった。

八幡にとつての、一番の嵐は、一挙一動で八幡を惑わせ、こんな狂おしいほどの激情をもたらす平塚静なのだ。

——大通りと交わる交差点で信号待ちをしていた。数多の車が行き交う中、しばらく全速力で漕ぎ続けた八幡はガス欠のように荒い呼吸をしたままだった。しかし、やけに長い赤信号のおかげで、だんだんと息も落ち着いてきていた。

恋心に気付いてしまったが故に、今日の平塚は八幡にとっては辛抱ならないものだった。

待ち合わせの時と言い、プリクラで写真を撮った時と言い、いつもとは明らかに違い女々しくも愛らしい姿を見せていた上に、まさか今日この日のために、平塚が着飾ってくれるなど思いもしなかつた。

そして、だからこそ一つ、ある希望が、八幡がとびきり望んでいた

が半ば諦めていた希望が、今こうして芽を吹いて姿を見せたのだ。それは、平塚が八幡のことを好いてくれているという希望である。そして、そういうえばこんな話があったことを、八幡は不意に思い出していた。

総武高校のいわゆる学校の七不思議の一つ。

『キャンプファイヤーを共に踊った男女は結ばれる』

八幡だけでなく、平塚すらも馬鹿馬鹿しいと毛嫌いしていたあの噂話。

まさか間違ってもそれに肖ろうとするなど絶対にないと、過去の八幡は考えていたはずだ。いや、当たり前すぎて考えることすらしなかつたであろう。

現在の八幡は今ここで心に決めたのだった。

文化祭は二人で回ることを約束した。そして、そのまま文化祭が終わった直後のキャンプファイヤーの時、平塚静を誘うことを。この誘いが受け入れられれば、実質その希望は現実のものとして花開くのである。

そしてもし共に踊ることができた暁には、平塚静にこの想いを伝えよう——。

しかし、その希望はただの八幡の思い込みにすぎないかもしれないということが分からないほど、恋に盲目にはなつてはいなかつた。さすがに経験がないから、どうしても分からないものは分からないのである。

だから、当然、全て八幡の思い込みで、失敗するリスクも考慮できたのだ。むしろ、失敗と、その失敗による二次災害だけは、過去のトラウマが否が応でも八幡に教えてくれるのだった。

高校に入ってから失敗を極端に恐れて、傷つくことから逃げ続けてきて、孤独で生きることを孤高だと自己満足してきた男が、ここまですキーなことを選択するということを、もしそれこそ孤高狷介を至高だと盲信する過去の八幡が聞いたならば、一言目で思いつく限りの侮蔑で馬鹿にして、見下したような、そして全てを諦めたような腐り眼で、睨め付けてくるだろう。

しかし、それはもう過去むかしの八幡なのである――。

たった一人の少女と出会ったことで、何もかも情けないほど変えられたのだ。そして、この無謀にも見える勇氣も、彼女がいたからこそ得られたものの最たるものであった。

そして、この決意が熟したのは、ただ純粹に、一秒でも早く、一瞬でも長く、平塚静の隣にすることを八幡が心の底から願っているからこそであったのだ。

だから酷く怖がりの八幡からすれば、こうして肖ること自体が、この恐怖と心の底からの願望のまさしく折衷案せっちゅうあんであったのだ。

随分と長かった赤信号もついに青へと変わる。

使い込んで色が落ち始めた灰色のラバーのハンドルを力を込めて、握る。靴底についた土で所々焦げ茶に汚れたペダルに左足を乗せる。

――青になった。

いち早く歩き出した横断歩道を渡る人を、すぐに抜き去る。

あとはもう、信号はない。

街灯が照らす数秒後先の未来へと。

前輪のライトが照らす目の前の未来へと。

そして、この道が続くはるか先の未来へと。

ただ前へ、前へと。

己おのが決めた道を、彼はただ前へ、前へと突き進むだけだった。

八束： J u s t F r i e n d s

校舎の内と外を隔てるスチール扉の目の前、八幡はそこにある三段程度しかない混泥土コンクリートの階段の中段に、右側を一人分けて座り込んでいた。テニスコートからはラケットの快音が届けられ、通路脇の雑草は、この時間になると足繁く通つてくる海風に身を任せて、ゆらゆらと揺れている。そのような穏やかな風も、足音を忍ばせて近づいていく季節のためか、手の甲にあたると少しだけ肌寒く感じた。

ここところは、この昼休みの刻限は文化祭準備にあたっていたが、今日は珍しく休暇であった。

だから八幡は久しぶりにこの場所にいた。

彼は別段何もしていなかった。いつもならば、片手にパンやらを持って頬張っているのに、今日の彼の両手はすっからかんであった。

それは、決して断食をしているからという訳ではない。また手持ち銭が底を尽きたからという訳でもなかった。

間もなくして、後ろのスチール扉の戸が、開けられる。そちらに誘われるかのように風が八幡の顔に吹き付けて、つられるように後ろを振り返った。

そこにいるのは、平塚静だった。一顧傾城けいせいの美女とはまさにこの事であり、その嫋やかたおかであつて、凜とした佇まいたたずが遍く人々あまねを魅了することであるのは想像に難くない。何を隠そう八幡もその一人であつた。

黒色のブレザーは、衣替えの時期をいよいよ実感させる。それによつて、その透き通るほど美しい素肌は隠されていて、名残惜しさに駆られつつも、隔絶することによる秘匿性がより美しいものであることに拍車を掛けているように思われた。

一方で、平塚のスカート丈は夏服であつた一学期に増して短くなつているように八幡に思えた。そのため、僅かに海風に靡なびいただけでもうっすら見えてしまうようになった影を落とした肌色は凄まじく

煽情的せんじょうであり、背徳感からすぐに前を向いた。

そして、いつもの場所——八幡と同じ段の右隣に平塚は腰を下ろした。

横を向くと両手とも空手の八幡とは対照的に、平塚の掌の上に緑色のバンダナと桃色のバンダナで包まれた何かが乗せられているのが見えた。

「え、何それ。てつきり、パンかと思ったんだが」

今日、平塚に、とっておきのものを持ってくるから購買でパンは買わなくていい、と言われていたのだ。

しかし、いかにも人の手に作られたようなその包みの風体を見て、八幡はいくら平塚の持つてきたものと言えども勘繰らざるを得なかった。

「いや、その、今日はちよつと、君に食べて欲しいものがあつてだな……」

「えっ、何を？」

「とりあえず、これを開けてみてくれっ……!」

平塚は二つのうちの一つ——緑色のバンダナの方を、声を上擦らせながら八幡に手渡した。

受け取ったそれは見た目よりも少し重く、その布越しにプラスチック特有の抵抗もなくするりと滑る感じがした。だが、パツクなどと違って、固いのだ。そして、想像したよりも嵩かさがあるのであった。

その手触りから正体を推察していると、平塚が急かしてくるので、丁寧に結ばれた結び目を解くいた。すると花開くように布が四方八方にほろりとはだけて、そこにあつたのは——。

「え、何これ。弁当ってこと……?」

それは、二段弁当だったのである。手作り料理を作る時に用いるごく一般的な弁当箱の見た目そのままである。

そして八幡の問いかけに対して、平塚は慌て気味に何度か頷く。

「そっ、その……、お弁当作ってみたんだ……」

「……何で、急に」

「いいじゃないか。練習だ、練習!」

「練習……？　ますます訳が分からなくなってきたが」

「練習っていうのは、えつと……」

平塚は目を散らつかせた後、短くなつたせいか捲れたことでちらりと露見している程よく引き締まつた腿ももの付け根あたりに視線を落とし始めて、季節外れの蚊の鳴くような声で、

「……文化祭で君と二人で回る時、折角だからお弁当作ってこようと思っ

言いついてな」
言い終えると周りの木々の葉のように、絹糸けんしじみた肌理きめ細やかな頬がだんだんと染まつていく一部始終を見て、八幡はまた鏡面に写つた自分自身を見ているような気になつた。

「——つ、なつ、なるほどな。そうなら、前もってそう言ってくればいいんだが」

「だって、それは……、恥ずかしいじゃないか……」

平塚はその頬に浮かんだ含羞がんしゆうの色を隠すようにぷいと顔を逸らしたものの、結局、首の細い筋にまで、その色が浮かんでいたのだから、徒労であつたと言えた。

更に、今、恥ずかしいことになっているのでは元も子もないような気はしたのであるが、当然八幡にとって悪い気分など殊更なかつた。

むしろ、平塚が手作りの弁当を作ってくれたうえに、二人で回ると約束した文化祭に向けて準備してくれていることに、避けようのない面映おもはゆさを感じる一方、男心が揺さぶられないはずがなかつた。

八幡は、より一層丁寧に、壊れ物を扱うように、その弁当箱の蓋を開けてみる。まず一段目には日の丸の位置に梅干しが置かれたつややかに光る白飯があつた。そして、それを横に置いて、もうひとつの方のゴムのような弾力のある白い蓋も開けてみると、主菜、副菜が彩り鮮やかに並べられていた。

見栄えに関しては、鼻貞ひいぎ目抜きにして完成度が高いものであつたが、もう一つ、八幡にとって驚きがあつた。

「おお、俺の好物ばつくだ……」

「そうか、それなら良かった。……じゃあ、早速食べてみてくれない

か」

「ああ、じゃあいただきます」

まずは一口サイズのハンバーグを、一緒にあった割り箸でつまんで、口に入れる。

そして、咀嚼する。

「ど、どうだろうか……?」

まさしく平塚は固唾を飲んでいる様相で、頬張る八幡の顔色をじいつと窺っていた。

「うん、めちやくちや美味しい」

普通に美味しかった。

美食家などではないから、塩つけが濃いだとか、風味がどうかの意見具申はできないし、そもそも彼らがふんぞり返って高慢ちきにご高説賜る一糸一毫の差分など舌が適度に肥えただけの八幡には分かっていなかった。

彼にとつては、ただ純粹に好みに合っていて、非常に美味いと感じたこの料理は、非の打ち所がない完璧な料理なのであった。彼の中の三ツ星だと礼賛する小町の料理ともどちらが優れていると尋ねられなくても、甲乙つけがたいほどの完成度であった。

そのような八幡の反応を見た平塚は強ばらせていた頬をぱあつと弛緩させると、腕の前で小さくガツツポーズをしていた。

「ほんとかつ……?!」

「ああ、このハンバーグめちやくちや美味しいわ。俺が好きな味だ。まあ、でも、そんな驚くことでもねえだろ。平塚そもそも料理上手いんだろ?」

「いや、でも……、比企谷に美味しいって言うてもらうのは凄く嬉しくて……」

そう言つて、肩の力が抜けたように微笑まれました。倍美味しく、そして倍愛おしく感じてしまうのが男の性であった。こうも容易く胃袋まで掴まれてしまつては、いよいよ完全に身体の芯から先々まで平塚の虜になつてしまうことは明らかであった。

「よしっ、じゃあ、私もっ!」

平塚は、満足した様子で、もう一つのピンクのバンダナの包みを開いた。それは八幡に渡したものと中身は同じである弁当であり、「頂きますっ!」と元気よく言つて、食べ始めた。良く言うように同じ釜の飯を食べば、自然と話は盛り上がるものであった。

「——そういや最近、気が緩んじまつてるのか分かんねえけど、よく消しゴム無くすんだよなあ。ノートとかも授業中見当たんねえなあと思つたら放課後すぐに見つかったり。歳のせいでもあんのかな」

動かしていた箸先を一旦止めて八幡が自分自身の健忘けんぼうっぷりを何気なく呟く。きつと、これは気が浮かれているせいだと、自覚はしていたのではあるが。

すると、やけに年に関する話題は手厳しい態度を取りがちな平塚が、案の定噛み付いてきたのであった。

「何が、高校生風情で歳だと言つてるんだ。歳をとるともつと大変なんだぞ。腰とか目とか肩とか、ほんと辛いんだ」

「おいおい、やけに詳しいじゃねえか」

「ああ、これは親からの——」

「——受け売りか?」

八幡は、したり顔で、平塚に言つて見せた。

平塚は一瞬戸惑つていたが、すぐに目を細める。

「——ふふつ、ああ、大正解だつ!」

その後も、二人でこのおかずが美味しいとか、平塚がこれは苦勞したんだとか、色々言い合つたりして、笑つて、寛くわげる。そんな何気ないささやかな幸せが、何の変哲もないこの場所で、青々とどこまでも澄んだ秋の晴れの日の午後に、確かにあつたのであった。

今ここに断言しよう。この場所は、文字通り最高ベスト・プレイスの場所であつたのだつた。

——その日の放課後だつた。生徒会へと続く廊下の途中で、平塚が一人で居るのが見えた。どうやら携帯電話に夢中になっているようで、少し猫背になつてかぶりつくように画面を見ていた。

少し驚かせてやろうと柄にもなく思つて、横に並んだ。だが、平塚はあまりにも夢中で気づく様子もなく、その横顔はやけに喜色まみに塗れ

ているように見えた。

「何してんだ？ そんなまじまじと携帯見つめて」

「ひっ、ひっ、比企谷っ……?!」

腰を抜かしたように教室の外壁に手をつけて、大きな声で驚いた平塚は胸元に携帯電話の画面を押し付けて、八幡から隠すようにした。

「いやっ、これは、見ないでくれっ……!」

「あっ、いや、すまん。別に全然見てねえから」

「なら、いいんだ。じゃあ、また後でっ……!」

平塚は、風紀を守るべき生徒会役員とは思えない速さで廊下を駆け抜けていく。不思議には思いつつも、八幡は追いかけることは無かった。

駆け抜けた平塚を追う風で靡いた掲示板上に貼られたポスターが目に入る。そこには総武高校文化祭の日付と、スローガンがでかかと誇張気味に書いてあった。文化祭の開催日は二週間後の日曜日である。

「……今日の帰り、買いに行くか」

そう独り言ちて、八幡は仕事場へと向かった。今日の放課後の仕事は、本日届けられたキャンペーン用物の物品を校庭の脇にある倉庫にしまうことであった。そこまで手間と時間はかからないらしいということだけは平塚から事前に聞いていた。

八幡は窓の隙間から流れ込む秋風に乗せるように自然と鼻歌を歌って、廊下を歩いていった。

——それから週を跨いで、ある日の放課後であった。

その日は、先日の秋晴れがまるで虚構であったと思わせるほどの秋雨ということだった。校舎の中にも、その雨音は鮮明に聞こえてくる。ふと廊下から窓の外を眺めると、息苦しくなるほど厚い雲の黒い天井から雨が白いカーテンのようになって、同じ色の屋根が瓦のように敷き詰めて並んだ住宅街に降り注いでいたのだった。

自転車通学一本の八幡も今日は詮方なく、バスを足替わりにして登校した。雨中のバスは、あの雨の日の特有の匂いと、バスの匂い——悪く言えばエアコンディショナーを久しぶりに稼働させた時に感

じるような黴かびの臭いが調合されて、見事に彼が好まない臭いに満ちていた。そのうえ、肩が濡れたクタクタのスーツ姿の社会人が、顔に疲労こんぱいの四文字を見事に表現して、吊革に掴まっているのであった。しかも一人ではなく、数人も、鮫すし詰め状態で。そんな場所に居合わせたら、ただでさえ雨の日で鬱蒼うつそうとしているのに、感化されてより気分が落ちて、滅入めいじゆってしまう。

だから、八幡は基本多少の雨であれば、雨合羽を羽織はねおりって自転車で行くことに拘こだわっていたが、本日の雨はそんな彼をも諦めさせるような、目の前の視界を覆うような大雨であった。

ただ過去と決定的に違うのは、この雨の中でも学校に向かおうとする気概が八幡に確かにあったことであつた。その訳は、言うまでもなく平塚がいるからであつた。

バスに揺られながら、全身を赤く染めていた大通りの脇で連なつた街路樹イチョウジュの公孫樹イチョウがこの大雨を受けるのを見て頭を過よつたのは、この打ち付けるような大雨は、あのベストプレイスに根を下ろしている生命にとつて恵みとなるのか、それとも災いとなるのかということだつた。それは想像し難く、はてさて過ぎてみなければ分からないものであつた。

今日も今日とて昼と放課後の時間は、文化祭の手伝いであつた。

八幡は濃紺の愛用するスクールバッグを肩に提さげて、いつも通り平塚の手伝いをするために放課後に生徒会室に向かつている途中である。

生徒会室のすぐ手前の階段を上っている時、一つ上の階の踊り場から、何やら物物しい声が聞こえてきたのだつた。

初めその声を聞いては分からなかつたが、八幡がその様子をちらりと階下から覗いて見えたのは、すらりと伸びた腕足で八頭身は軽くあり、俳優のように小顔で高い鼻梁びりようが際立つ二枚目のたつくたつくんこと清川きよかわ巧たくみの物乞い顔であつた。

今年の体育祭の全員リレーの際の黄色い声援からも分かるように、いわゆるクラスの人気者であり、普段は冷静沈着な振る舞いをしていて、文武に秀ひよくでた眉目秀麗しゅうれいさ、更に英国紳士のような気品と、性格か

ら女子から好かれていることも多かった。

そのような男が、このような我を失ったような声を出し、普段は引き締まり、清廉さを漂わせる顔を今のように崩すとは思えず、一度は耳を疑い、目を擦った。

しかし、論より証拠。その姿はやはりクラスで何度も見たのだから、見間違うはずはなかった。

八幡が生徒会室に最短距離で行くためには、この階段を上らなければならぬのである。しかし、友情関係の軋轢あつれきが生じたのか、はたまた痴話喧嘩なのか何かは分からぬが、取り敢えず目睫めくしようの間の面倒事に巻き込まれないためには急がば回れ。

我関せずと見て見ぬふりをして迂回しようとした時であった。

「だから、平塚っ……！」

ぴたりと歩みが止まる。

清川が呼んでいたのは確かに、平塚の名前であった。

それはまるで爆撃機に襲われたかのような衝撃で、最近は鳴りを潜めていた欲望から生まれたあの危機感がとどろに鳴り響く警報とともに急に膨れ上がってきた。そして、八幡は咄嗟とつさに階下の影になる欄てすりの壁に屈かがんで身を潜ひそめながらそば耳を立てていた。

「俺と、付き合おうよ……。この通りだからさ」

息が詰まった。瞬きが止んだ。心臓が止まった。

これは、まさしく今そこにいるであろう平塚に対する告白だったのだ。

それに、間違いなく二人はお似合いと世間で評されるものであった。
「ごめん、清川。何度も何度も申し訳ないが、私は君と付き合うことはできないんだ」

その瞬間——聞き慣れた心地よい声が聞こえた瞬間、八幡は全てを吐き出すように深い深いため息をついた。

「何でかな。そんな俺じゃだめかな？　いつも仲良く話してくれてる

じゃん」

縫^{すが}り付くように聞こえる声は、普段からは考えられないほど弱々しくて情けなかった。清川のことが好きな女子が見れば、卒倒してしま
いそうなほどに。

「いやっ……だから、君とは……」

「別に好きな人とかもないんでしょ？ だったらお試しでもいいか
ら付き合ってよ」

その時だった。

「私には、他に好きな人がいるんだっ——！」

「えっ……本当に……？」

「あっ、ああ……」

八幡の心臓の鼓動は、鞭打たれたように早くなって、今にもはち切れ
そうなほどに脈拍が大きくなった。

「それって、もしかして……、比企谷ってこと？」

更に予想だにしないかった清川の一言。

八幡の鼓動は過去に類を見ないほど最高潮に達している。体温が著
しく上がり、血は特急列車の如く全身を駆け巡る。

——今思えばここで引き返せばよかったのかもしれない。しかし
かし、八幡の中にあつたやけに確信めいてしまった希望、そして自信
の存在が、彼をその場に留まらせてしまったのだった。

「——違う。比企谷はただの友だちだ」

頭蓋の先から足の爪先まですべての身体の力がすんと抜け落ちるような感覚があった。

そのあまりの呆気なさに、最初は何が起きたのか分からなかった。心臓は不気味なほどに早いままでも、ほとぼし迸るほどの熱は、高鳴りはすっかり消え去っていた。

「じゃあ、私は仕事があるから——」
階段を上がっていく足音が聞こえる。酷く落ち着いた足取りであつた。

八幡はまるで抜け殻のようになっていた。全身に力が入らない。しかし、一刻も早くこの場から離れなければいけない気がした。そうでなければ、比企谷八幡という男が決定的に壊れてしまうと本能的に分かったからだつた。

だが階段の欄てすりを掴もうとする手は突然小刻みに震えはじめ、立ち上がろうにも足も纏もつれて上手く動かない。

そして真つ暗になるのではなく、急にじんわりと、目の前の世界がじんわりと滲にじみ始め、すべてのものが、無際限に裾野すそのを広げていくと思われた世界が、瞬く間に白くなって、無に帰っていくようだつた。無に帰るということは、すべてが消えて終わるということであつた。

やがて頬を伝うように何かが一筋垂れたのを皮切りに、とめどなく溢れ始めた。

その時、ようやく気が付いた。

この一世一代の恋は実らないことに。

——八幡は走って、階段を駆け下りた。何段も飛ばして、とにかく、走った。動かなかつた手も足も勝手に動いた。

下駄箱に向かつて、上履きは脱がず、土足を手に持って、嘲笑うような非情な大雨の中、傘もささずに、早くこの学校の中から逃げ出すように、走って。

通行人からは白い目で見られていたのだろうが、必死で走って。走って。走って――。

赤信号が男の滑稽な姿を見て嘲笑う。

しかし、彼にはもうそれすら見えなかった。

男を怒鳴りつけるような大きなクラクションが鳴った。

しかし、彼にはもうそれすら届かなかった。

雨の陰鬱な匂いに仄かな金木犀の香りは掻き消されて、柑子色の花卉の行方は杳として知れない。

雨に打たれた沿道の秋桜は、力なくかぶりを垂れている。その生命の象徴であり、輝く月にも見えた中央の山吹色はその花卉に覆われて、姿をすっかり隠していた。

だがこの男は、それにすらも目をくれず、ただひたすらに、走って、走って、どこまでも、走って。

早く、この世界から、逃げた――。

――家に着いた。全身はずっしりと重くなっている。八幡の足元には、尋常ではない量の雫が、ズボンの裾から滴り落ちていて、三和土には水たまりを作っていた。髪はあの癖毛がぺたりとくつついて無くなるほど、濡れていた。

三和土には一つも靴がなかった。幸い小町は、まだ帰っていないかったようだった。今日は塾があり、夜遅くまで帰ってこないのである。そして今、小町の存在が不意に浮かび上がった時であった。八幡の中には、すっぽり抜けた穴から噴き出てくるように小町を心配させてはいけないという至上命題が生まれ、それが思考の中核に据えられ、ときぱきと証拠を消すように動き始めた。

それは別の何かを考えていないと、動いていないと、酷く無情で残酷な現実に蝕まれ、壊れてしまいうさだからでもあった。

八幡はまず、急いで着替えた。雨粒が染み込んだ白い襟シャツは洗

濯カゴに入れた。色が変わっているように見えるブレザーは必死にドライヤーを使って乾かして、自室の部屋の窓に吊るして干した。

知らぬ間に泥濘ぬかるみに足を踏み入れたことで、土がこべりついた上履きは、汚れを擦り落とすためのブラシを使って、一心不乱に、まるで靴磨きが生業なりわいであるかのように、何度も何度も磨いた。最早、もとの白色に戻った後も、磨き続けていた。

風呂場には入った。ただ、シャワーを長らく浴びたが、風呂は沸かさずにシャワーだけで上がった。フローリングの床は狭い溝に垂れ落ちた雫が入り込んでいて、それを雑巾で執拗に拭いたりしていた。

しかし、それも当然程なくして終わった。

何もすることが無くなった八幡は、逃げるように自室のドアを開き、誘われるように布団へと潜った。

——潜って、その柔らかさに触れた瞬間。どこからともなくどつと涙が溢れた。

有り得ないほど溢れ出てきた。

最初は嗚咽おえつだった。噛み殺そうとしても、漏れ出てきた。門番はもう、いなくなっていたのだった。

だから次第に、声を引くようになって、しまいにはしゃくり上げるように泣いた。

過剰な程に優しい羽毛ぶとんの温もりが、途中から余計辛くなつて、剥いで床へと投げ捨てた。

一頻り泣いた。いくら泣いても、胸のつかえはとれず、むしろ時間が経つ度に締め付けられた。枕元の白いカバーを見ると、ぐつちりと濡れていた。

鼻を嚙りながら目尻を赤くして、睨みつけるように天井を見上げた。するとこんな天気であるから、もう夜かと思わせるほどいつもの白天井は、黒で濁っていた。

そして、ずっと、一人の影が蠢く。

影はやがて見覚えのある純白のタキシード姿になった。その顔も同じく乱雑に墨で塗られたようで、見えなかった。

ただそれが、極めて満面で、不快な笑みを浮かべているのだけは分

かった。

「残念だったなあ……!!」

「期待した結果がこれだ……!!」

「欲張りなお前が悪いんだよ……!!」

「全部、全部お前が悪いんだよお……!!」

「じゃあ、平塚は俺が——」

おもむろに枕を掴んで、目先の天井に向かって、思い切り投げつけた。

ぶつかって、大きな音を鳴らして、枕は落ちてくる。

八幡の顔を目掛けて落ちてくる。

だが避けるつもりなど毛頭なかった。

白いカバーは、だんだん目の前に近づいてきて、大きくなって、やがて黒になって、そして、すべてが消えた。

——八幡は翌日、普通に学校に登校していた。まるで、何事も無かったのかのように。

しかし露骨に平塚を避けるようになっていた。

休み時間と昼休みは誰よりも早く教室を出た。ずっとイヤフォンを付け続けた。

ベストプレイスには出向かずトイレに籠こもった。そして、文化祭の準備を手伝うことは一切無かった。

携帯電話もマナーモードに設定し、メールは一切を無視した。

その二日後の放課後、八幡がいそいそと帰る支度をし、教室を出て、下駄箱に向かっていた時、最近の八幡の様子を訝いぶかしんだのか、先回りして通り道を塞ぐように平塚が声をかけてきたのだった。イヤフォンを耳に付けていたとて、無視できる状況ではない。

八幡はイヤフォンを耳から外したものの、すぐさま目を遠く、窓の外の方へと逸らした。八幡の胸には釘を打ち込まれたようなずきりとした鋭い痛みがあった。

目下の空は不気味なほど青かったが、そのすぐ奥——東京湾が臨む方角には時化を想起させるような暗澹とした雲翳が峰をなして、秋の空の表裏を見事に体现していた。頗る心地よい秋晴れも陰鬱とした秋雨も、紛うことなき現実なのであった。

「……な、なあ、比企谷。その……」

「すまん、今日も無理だ」

「え、まだ何も……」

「じゃあ、俺帰るから」

八幡は不自然なほど極めて落ち着いた様子で、平塚に背を向けて、離れるように足早に、歩き出した。

「ま、待ってくれ……」

その言葉が耳に入っても、足は止まらなかった。それどころか歩調は早まるばかりであった。

「ねえ、比企谷、私のことを見てく——」

肩を平塚に掴まれる。彼女の温もりが確かに伝わってきた。だからであつた。掴まれたすぐ後、八幡は煩わしいものを払い除けるようにその腕を振り払ってしまったのだつた。

「ひき、が、や……？」

「……わりい、最近体調悪くてな。だから、もう当分手伝えそうにねえわ。じゃあな」

「あつ……、ひき、が……」

その言葉を最後に、もう平塚は八幡の後を追いかけてこなかった。遠ざかる身体的な距離が、直接心の距離に繋がっている。そして、遠回りの階段を下りて昇降口に着く。不意に後ろを振り返るが、当然、平塚の姿などあるはずがなかった。

ただ、胸の刺痛もすっかり消えていた。

こうして、また、一つ、自分を嫌いになつた。

昇降口を出ると、湾上に蟠っていたはずの黒雲がやれ愉しように、そして蔑むように、地上の八幡を真上から見下ろしていた。だから、彼は背筋を弧を描くように曲げて、いつもと変わらぬ地面へとその腐りきつた眼を向けて、歩き始めた。

——その日から平塚が八幡に話しかけてくることは無くなった。携帯電話に連絡を寄越すことも無くなった。こうして、また、高校二年生に進級する前の、当たり前だった暮らしが八幡の元に戻つてきた。

休み時間はイヤフォンを付けて眠つたふりをして過ごした。

音量は以前よりだいぶ上げていた。

それだけではなく、イヤフォンをより耳の深く差し込むようになった。内耳ないじの敏感なところに触れて軽く痛みが出るほど深く差し込むようになった。

昼になれば足早に教室から出て、ベストプレイスに繰り出す。そこで当たり前だった位置——その混泥土の階段の中段の真ん中にどっぷりと腰を下ろした。

そこで、独り黙々と購買で買った惣菜パンを口に摘んでいた。味は極めて普通であった。

あれだけ嗜好しこうしたMAXコーヒーも飲まなくなっていた。あの甘さが、今の彼には受け入れられなかったのだ。代わりに、慣れないブラックコーヒーを購入し、飲み終わったあとには、長編のピカレスク小説を持ち込み、その世界に逃げ込んで、次第にのめり込むようになった。

風が強い——木枯らしが吹き荒れる日のことだった。本の頁ページが意志を持って反抗してくるものだから、仕様がなく読むことは諦めて、短冊を模した単色の葉を本のどに隙間なく収まるように挟んだ。

その本を八幡の体が丁度風除よけになるように置いて、ふと、周りを見る。あのひねもす続いた冷たい雨は、生命の終わりを告げる非情の雨だったようだ。

今、追い討ちのように吹き荒すぶ木枯らしの音が乾いて鳴る。その余りにも残酷で、平等な風が木々を撫でている。撫でると言っても柔らかく一入ひとしほの優しさがあるものではなく、鉄鑪やすりで木皮を削っていくようであった。

それを必死に受け止める身寄りのない残された葉が鳴らす音があ、その二つの音による和音がここにはあつた。

もちろん、その和音に生や希望はなく、ただ寂しく逃れようのない死の音であった。だが、その方がやけに近い存在の気がして、憐憫と親近感が湧いた。傷を舐めあえる気がしたのだ。

そして、放課後は道草食わず真っ直ぐに家に帰った。

家に帰ると、何をすることもなく、部屋にこもった。食事はしっかりと摂った。勉強はいつもよりした。

家では常に普通を装っていた。

そしてまた、学校に行き、同じことを繰り返した。

単調な生活の繰り返し。

同じことを繰り返すだけ。その様子は、まるで、人間型のロボットであつた。

ただ、皮肉なことに、お陰で悩みの種であつた健忘はめつきり消えていた。

代わり映えのないモノクロームの日常。

もう彼に色は、戻ってこなかった。

——一週間程経ち昼食を独りで食べていた時、後ろのスチール扉が突然開いた。

顔を驚掴みにするような冷たい風が吹き付け、八幡は反射的に振り返る。

しかし、そこには、見ず知らずの、おそらく校章から見ると、一年生の男子生徒が一本の棒のように突っ立っていた。彼は、後ろに振り返った八幡と目を合わせると身体を仰げ反らせた。そして、何も言わず、不躰を詫びるように一礼だけすると、そそくさと走り去っていった。

傍から見れば些事ではあるが、彼には大事であつた。

彩り鮮やかな想い出の残滓と似通つた光景によつて、走馬灯のよう

に蘇ってくるようであった。しかし、必死に思い出すまいと首を振った。

更に、同時に胸に刺されたような痛みがあった。

その駆け足で離れていく後ろ姿が妙に目に焼き付き、次第にかけがえのないものを手放したような気になって、ひどく苛まれた。

しかし、後悔は先に立たずであるとは、この世の理であるのだ――。

――次の日の放課後、依然として帰宅してからは自室の厚い羽毛布団の中で、八幡は無聊をかこっているだけだった。

この頃、この時間は何も考えないようにすることを、一途に考えていた。そうすれば、時間が早く経って、体感的に早く眠りにつけられるように感じていたからだだった。

その時、一階の小町から呼び声がした。

いつも通り、呼ばれて直ぐに下に行くのと、あの日買って渡したミトンを付けたままの小町からプレートほどの大きさがある茶封筒に包まれた郵便物を受け取った。

どうやら宛先が八幡らしく、それを受け取って、差出人を見れば、何が入っているのかはすぐに要領を得た。

「お兄ちゃん、何なのさ、それ。確か、長生村^{ちやうせい}って、九十九里の方にある村だよね」

「秘密だ」

「ぐえー、ケチー」

「お兄ちゃんにも秘密はあるんだ、堪忍しろ」

「まさか、例のアレですかあ……?!」

「……ちげえよ。とにかく秘密だ」

「むう、教えてくれたっていいじゃん、お兄ちゃんのケチんぼっ……！」

ぶうたれる小町を横目に、八幡は急いで階段を上った。そして、その郵便物は、日常生活において絶対に視界に入り込まないような場所にしまいこんだ。

これは他でもない自衛のためであった。

しばらくして、また徒然^{つれづれ}としてベッドの上でぬぼつと手足を伸ばしてだらけていると、小町がどうやら何度も呼びつけていたようで、催促するように部屋の扉を叩く音が室内に響いた。

「ねえねえ、お兄ちゃん聞いてる?」

「ああ、わりいわりい。もう一度頼む」

「もう……。お菓子できたから、下に来てー」

「分かった。今行く」

部屋の扉を開けると目の前には、小町が立っていて、彼女は八幡の顔を見上げて、目を見るのではなく、何かを探っているのか、顔の隅々を隈無く見ていた。

「ん、どうした小町、お兄ちゃんの顔に何かついてるか?」

「いや、別にそうじゃないけど……」

「なんだ、じゃあ、小町のお菓子頂くとするか。今日も楽しみだわ」

「ね、お兄ちゃん」

「今度はなんだ、小町?」

「何かあった?」

今度は真つ直ぐ、腐り眼の瞳の奥の方まで見つめていた。それはまるで、そこに埋めた秘密を掘り起こしているようであった。しかし、今、自らの顔がとくに強ばっていたり、眉間^{みけん}に皺を寄せるような力を入れていなかった。自然体を装っているはずなのであった。

小町に、心配を負わせている。

唯一の至上命題ですら遂行できないのか、とそんな自蔑^{じべつ}の念が生まれるながらも、しらを切つて、お惚^{とぼ}け顔を演じて見せた。

「ははっ、そう見えるか……? 別になんもねえけど。それにそもそも何かあったら、真つ先に小町に報告してるわ」

「そっか……。まあ、何でもいいから相談してね」

「ああ、分かった」

お菓子冷めちゃうから早く来て、と小町が先に階段を降りていった。八幡はそこで、頬を少し骨身に響く強さで平手で二回叩き、悩み事などない能天気を取り繕うために、飛び跳ねるような軽快な足音と、高らかな唄声までを口ずさんで階段を降りていった。

——文化祭の前日になった。あの日から彼此かれこれ二週間ほどが経過したが、終ついぞ、八幡の生活は変わることはなかった。

いつも通り起きて、いつも通り過ごして、いつも通り帰かえってきて、いつも通り飯を食たべて、いつも通り寢床につくだけだった。

延々と続くモノトーンの単調な生活。

もう、あのような夢物語の中の彩色に近い目映まばゆい色は二度と戻つてこず、あの日々も遠い日の幻想へとなりゆくことをいよいよ確信していた。

そして彼はまたあの誰も寄せ付けぬ厚い氷の壁の中に独り閉じ籠もり、今度は一生開くことはなくなるのであろう。

ふと左手の小指を見る。この指には二人で出かけた日に交わした大切な約束があるはずだった。しかし、まもなくこれも反故になる。全てが終わる。

そんな未来への諦観を頭の中で巡らせて、一人枕元に伏していた。こんなと誰かが部屋の閉じかけた扉を叩く——。

まもなくして扉を開けたのは小町だった。

甚いたく真剣な面持ちで、八幡の部屋に入ってきたのだった。

八幡は慌あわてて、うつ伏せから座る形に直ただつて、いつものように俄造にわかりのいつもの顔をして見せた。

「どうした、小町。こんな夜遅くに」

「聞きたいことがあって」

「おうなんだ、なんでも聞いてくれ。あつ、明日の文化祭のことか？」
小町は首を横に振ふつて、八幡が座まっている横に腰を下ろす。そして、八幡の方を向むいて、こう尋ねる。

「お兄ちゃん、何かあった？」

「いや、別になんもねえよ。何かあったらまず小町に——」

いつものように普通を装うとした時であった。

「嘘だあ、小町には分かるよー。だって今、明らかに目が死しんでるもん。腐くったなんかじゃなくて、死しんでる」

「うつせえ、周期でこういう時が来るの。死し目期めなの」

動揺せずに落ち着いて軽口を返したが、小町は笑う様子はなかった。

「誤魔化せてるつもりかもしれないけど、全然できてないよ。最近のお兄ちゃん、すごい不自然だし」

「……いや。そんなことは」

口を真一文字に結んでいて、凜とした真剣な眼差しで、八幡の目を貫いていた。

そして、小町は、核心に触れるようにその口を開けた。

「静さんのことでしょ」

「お前、適当なこと——」

「適当じゃないよ」

きつぱりと小町は断言する。その厳かな強さに八幡は何も言い返せなかった。

「分かるよ、お兄ちゃん。小町、お兄ちゃんのことずーっと見てきたけど、そんな顔初めて見たもん。それに、色々無理してる。無理してるのを隠そうとして、無理してるように見えたよ。しかもここ一週間ぐらいは日増しに酷くなってる」

どうやら最初からは鍍金は剥がれ落ちていたようである。小町の勘が鋭い以前の話であったようだ。十八番であるはずの三味線を弾くために並べる御託すらも今の八幡には思い浮かばなかった。

「……」

「最近のお兄ちゃん、おかしかったんだよね」

「あつ、もちろんいい意味でね！」と小町は少し茶化して言った。そして、小町は八幡の最近の様子を一つ一つなぞるようにつらつらと話し始めた。

「……あんだだけ捨かれてたのに、かなり素直になったし、学校行くのも楽しそうだったし、今まで見た中で一番活き活きしてた。これっぽっちも関心がなかった身嗜みも気にし始めてたし、この前の相談事だってあるし、それにデイスティニーにも映画にも二人で行ってるじゃん。それに、ドケチのお兄ちゃんが小町にミトンまで買ってくれたし」

そして、小町は、こう結論づけた。

「それもこれも全部、静さんのおかげでしょ？」

——まさしくその通りであった。

「……だから、すごく辛いんだよね？」

——まさしくその通りであった。

妹に物の見事に見透かされているさまに思わず自嘲気味た薄ら笑い零れる。

これはもう馬脚ばきやくを露わあちにせざるを得ないようであった。

「ははっ、小町には完全にお見通しつてわけか」

「お兄ちゃんの事だったら、静さんにはまだ負けてないからね！ 生まれてからずっと隣にいて、お兄ちゃんのことずっと見てきたんだから！」

えっへんと、小町は小ぶりの胸を手で二、三度軽く叩いて、鼻高々などやり顔を見せつけた。

八幡にとっては、普段であれば少し苛立ちそうな小町のその態度も、意外なことに今は安堵でしか無かった。

彼は独りではないのだ。何ものにも変え難い、絶対の繋がりを持った小町がいる。小町であれば初めから、心配するだけでなく、真摯に相談に応じてくれていたはずだ。そんなことを彼は失念していたのであった。

小町を心配させまいと無理に動かしていた非常用電源をそつと切る。

「小町、聞いてくれるか……」

「うん、いいよ」

八幡は一度目を閉じて、一息、吸った。

「——平塚のことは好きだ。多分……、いや本当にどうしようもねえくらい好きだ」

「……うん、知ってる。それで何があったのさ」

「……最近平塚に好きな人がいるって聞いちまってな」

「静さんに……？」

深深と頷くと、八幡は滔々とうとうと語り始めた。

「ああ、平塚の口からしつかり聞いたんだ。誰のことかも分からねえし、俺が平塚から直接聞いた訳じゃねえが、あいつが他の同級生と会話してる時、聞き耳立ててたら聞こえちまったんだ」

「でも、それって冗談抜きでお兄ちゃんの事じゃ……」

「俺じゃないっていうのもはつきり聞いた。比企谷はただの友達だとき。流星に比企谷を聞き間違えはしないわ、ははっ。盗み聞きした天罰かなこりゃ……」

「そんな……」

「そつからもう話せてねえんだ。もう、怖くて仕方なくて……」

八幡は、言葉に詰まりかけても、横にいる小町がしつかりと見つめてくれているのを感じて、滔々と話を続けた。

「——正直、自惚うぬぼれてた。平塚と一緒にいる時間も増えて、あいつと喋る時間も増えて、色んな顔を見せてくれて。誕生日プレゼントだって買かんぬきぬきってくれて……」

門かんぬきぬきで閉じ込めていた平塚との思い出を一度引き摺り出すと、続けざまにずるとかけがえのない彼女との思い出が溢れ出てきた。

そのどれもが光輝こうき燦然さんぜんとしていて、今の彼には明るすぎたのであった。

胸が締め付けられて、今にも愍然びんぜんな弱音を吐きそうであった。だが、何とか歯を食いしばって、一言、もう一言紡いでいく。

「……映画一緒に見に行った時は、また二人で出かけようって言ってくれたし、見たことないようなとびきり可愛い服を着てくれたりもしたんだ。しかもその日のためにわざわざ新調してくれたって。そしてこの間は弁当も作ったくれた」

「え、お弁当……」

「……ああ、だから、恥ずかしい話だが、あいつも俺の事好きでいてくれてるんじゃないか、って思ってた」

「……うん」

「……でも、よく考えりゃ、それは勝手な俺の思い込みだ。こんなこと今まで無かったから、勝手に勘違いしてたが、友達なら有り得るものなんだろうな、きつと。だから、友達で満足できない欲ごうまん深くて傲慢ごうまんな

俺が悪いんだ。俺が……」

「お兄ちゃん……」

「俺はずっと平塚が隣にいて欲しいって思っちゃった。でも、平塚は別にそんなこと思っていないだって……」

その歴然たる事実を改めて痛感して、余計に胸が苦しくなった。やはり釘を金槌で打ち込まれたような痛みがあり、思わず胸を手で抑えた。

「だからって、自分が苦しいからって、現実を思い知らされるのが怖いからって、俺は、平塚を遠ざけて、邪険な態度とって……。でも……本当はっ、俺はっ……」

「お兄ちゃん……」

小町のその声は、包み込むような優しい声だった。

「……ごめんな、小町。こんな情けない姿見せて。自分のことで精一杯なはずなのにこんな余計な心配かけさせちゃって」

「ううん、そんな事ない。そんな事ないよ」

「……俺、お、れ……」

とうとう言葉が出なくなつた。妹の前だと言うのに、心の奥底から今にも、溢れ出てしまいたいそうになっていた。

「お兄ちゃん頑張ったね。すっごい辛かったでしょ」

「お、れ、本当に……」

「うん、本当に頑張ったね」

小町に、優しく頭を撫でられる。その小さくも、優しく慈愛に満ちた手で、ただ、優しく、そつと。

「頑張ったね」と母性を感じるような優しい声で何度も口ずさんで。

八幡は、堪らずはらりはらりと涙を流した。

——暫くして、八幡が落ち着いたあと「私が思ったこと、正直に言うね」と小町はまた真剣な様子で切り出した。

「これはさすがに、静さんが酷いと思う。勿論お兄ちゃんも大概だけど、それはいくら何でも思わせぶりすぎるもん。静さんから話を聞いてないから、決めつけることはできないけど、好きでもない男の子に

そんな思わせぶりなことは普通絶対にしない。そんなことしたら最低だし、いくら静さんでも私は軽蔑する」

「——でも」と一息置いて、小町は続けた。

「でもね、お兄ちゃん。私、静さんがそんな事する人だとは思えないんだ。正直、静さんとほとんど会ったことはないけど、それでもそう思えたんだ、小町は。静さんが看病しに来た時あったでしょ？　そもそも看病に来ること自体もそうだし、あの時、お兄ちゃんのことすごくすごく心配してたんだよ。それに、静さん、実は料理すごい下手だったの、お兄ちゃん知ってた？」

小町の言葉に八幡は瞠目する。そのような心当たりはなく、むしろ鼻根目抜きにしても、確かに美味しかったあのお弁当が記憶にあったのだった。

「いや、全然。むしろ上手いんじゃないか。実際貰った弁当はめちゃくちゃ美味かったし……」

「お兄ちゃんさ、静さんがお見舞いに来た後のリンゴの中に皮付きのやつあったの覚えてる？」

八幡はよく覚えていた。あの雨の日、平塚が帰った直後に一番に手に取った一切れの林檎が、それだったからである。

「ああ、覚えてるけど……。え、あれは小町が……」

「ううん、違う違う。絶対私あんなことしないもん。静さんに剥いてもらったほうがお兄ちゃん嬉しいかなって思って、それで、包丁渡したら、危なっかしいし表面に皮だらけになっちゃって。それで聞いたら、中学の家庭科で黒焦げの料理作っちゃったぐらい料理下手なんだって言った。その後私がほとんどやったけど、一個ぐらいは静さんが剥いた皮付きのやつ残してあげてもいいかなって」

「……そうだったのか」

「そんな静さんが、料理作ってくれるなんて、お兄ちゃんのために見えないところで相当努力したんだと思う。しかもお兄ちゃんに悟られないぐらい、ちゃんと美味しい料理を作って。だから一日とかじゃなくて、あの日から相当努力してたんだと思う。それに、多分なんだけど、やけにお兄ちゃんの好きなおかず入ってたと思うし味付けもお兄

「ちゃん好みだったでしょ？」

「確かに入ってた……」

「やっぱり。実はそれ小町が教えたの。この前たまたまスーパーで会ってさ。その時、お兄ちゃんの良い料理とか味付けのこと伝えてたから。後、静さんからお兄ちゃんの話色々聞いたよ。その時の静さんの顔見てたんだ。本当に楽しそうな顔してたんだよ。小町もびつくりしちゃうぐらい。そんな人が、お兄ちゃんを弄もてあそぶようなことしないと思うんだ」

「だから、小町から提案があるの」と言う。

「お兄ちゃん、もう一回だけ静さんと、今度は面と向かって話してみようよ。私が明日文化祭に行つて聞くこともできるけど、今回は絶対にお兄ちゃんから聞いた方がいいと思うんだ」

「でも……」

「怖いのは分かる。女の私でもお兄ちゃんの気持ち痛いほど分かる。でもこのままだったら、絶対にお兄ちゃん一生傷を残したまま、引き摺ずつちやうと思う。ここ最近のお兄ちゃんの様子を見てたら尚更」

小町は、怖気付く八幡を励ますように彼の肩を二、三回叩いた。

「ちゃんと話そう。そして、ちゃんと納得するまで話し合おうよ。思い違いだったらラッキーじゃん！ まあ、もし、残念なことに静さんに他に好きな人がいるつてなつちやったら、文句沢山言つちやつていいよ。お兄ちゃんがスッキリするまで死ぬほど文句言つていいよ。文句言うのは一級品でしょ？ 今回は小町が特別に認めるからっ！

まあ、でも、静さんに他に好きな人がいるつて多分諦められないでしょ。別にいいじゃん、好きになることに罪はないんだから」

「それにつ……い」と、今日一番の声を上げた。

「私は、私だけは絶対にお兄ちゃんの味方で、ぜーったいにそばに居てあげるから。お兄ちゃんがさつきみたいに泣いて帰ってきたら、小町の抱擁力で癒してあげるからさ！ あっ、今の小町的にポイント超たっ——！！」

小町の決め台詞ゼリッパを遮るように、八幡は小町のその一回りも二回りも小さく細い身体を抱き締めていた。

恥ずかしさ以上に、その八幡を慈しんでくれる絶対的な温もりが愛おしくて、有難くて、大切なものに、感じられた。

「なっ、なに、急につ、お兄ちゃん!? ま、ま、ま、まさか、本命は私っ——!?!」

「——小町本当に、本当にありがとう、勇気貰えた。俺、ダメな兄ちゃんだけど、精一杯頑張るからさ。応援しててくれ」

すると、小町もすつと全てを受け入れるように、八幡の背中にその細くしなやかな腕を回した。

「……うん、頑張つてきてね。小町は、いつでもいつまでもずつとずうつとお兄ちゃんの妹だから」

勉強机の上に置かれたアナログ時計も、机の抽斗ひきだしにしまっている滅多に付けない件の入学祝いのメタルバンドの腕時計も、たった今、人知れず長針は○を、短針も○を指していた。

——本日は文化祭当日午前〇時である。

こうして小町に背中を何度も張り手されたからには、兄としても、そして男としても腹を決めるしかないのであった。

平塚と話し合つて、どのように転んだとしても鮮やかに後腐れもない結末を迎えていこう、と八幡はそう誓った。

九束： H a s C o m p l e t e l y M e l t e
d

——背筋をやや曲げて、目を伏せて、廊下を独りで歩く。

廊下をすれ違う人々は、総武高校の生徒だけではない。ヨチヨチと懸命に一歩ずつ歩く子供から、杖をついてのっそりと確かめるように一歩ずつ歩く老人までいて、かたや見慣れない制服に袖を通して中学生や、白髪混じりの中年といったように老若男女が入り乱れていた。

そう本日は、総武高校文化祭開催日である。

「真ん中ぶち抜いてチョー気持ちいい……！ ストラックアウトどうですかあ〜」

「気合いだッ……！ 気合いだッ……！ 気合いだ——ッ……！！ 気合いのこもった総武焼きそばア〜!!」

「舞台の中心で、愛を叫ぶっ！ どうか、体育館に見に来てねえ〜」
それぞれの出し物に沿った衣装に身を包んだ総武高校の生徒たちは、お手製のプラカードを持って、その異邦の客を引きつけるために流行りの言葉を使って、大きな声を出している。

教室の前の廊下の壁には目を引くような装飾が施され、扉の前に座る受付は忙しなくやってくる客に対して、嫌な顔一つせず、却って大層充実した様子で応対していた。

ただ、八幡はその様子には目もくれず独りで歩いていた。

——人混みに当てられて参ってしまった彼は、教室がなく人氣のない部活棟の廊下の壁に寄りかかって静静と佇んでいた。

もう午の刻も終わりに近づいている。

窓の外を見ると、憎いほどの快晴であった。

思い立ったように八幡は制服のポケットから携帯電話を取り出し、

二つ折りのそれを開くと、メールを打ち込む画面であった。

宛先のメールアドレスの欄には、平塚静のそれが打ち込まれている。

しかし、本文は一切の空白であった。

——結局、八幡はまだ平塚と会って、話す事ができていない。小町に激励げきれいされたが、やはり負け戦に足を踏み入れるほど勇猛果敢で無鉄砲しやうぶんな性分ではなかった。傷を負う兆きざしが僅かでもあれば石橋つかはしらの束柱つかはしらの一本一本までも何遍なんべんも何遍も叩いて渡るような男が、大きな切傷が残ることが目に見えている状況に怯おびえなはずがなかったのだ。

この変え難く、歳を重ねるごとにアイデンティティの核となつていった性分については、生まれてきてからずっと連れ添つてきた自分自身が一番良く識しつている。

だから、逃げ場を無くすために決意の証として、勉強机ひきだしの抽斗ひきだしの奥底にしまった平塚からの贈り物のストラップ——笹くわを銜くわえたパンさんのストラップと今日のために購入していた赤いリボンで口を結ばれた花柄の入った小さな紙袋を引っ張つてきた。

しかし取り出したまではいいものの、それを見てしまった時にまた釘を打たれたように胸が鋭く痛むのが怖くなって、直視することは叶わなかった。

ストラップは手で掴んだまま、制服のポケットの中に押し込むようにして、その紙袋は愛用する紺色のスクールバッグの内ポケットに突っ込んでしまった。

そして八幡は今日の朝から何度も携帯電話を開いて、平塚宛に電子メールを送ることも試みた。しかし、打ち込もうとすると指が震えて、次第に洋灰ようかいで固められたように微動せうどうだにしなくなつて、結局できずじまいなのであつた。

——決意といつても中途半端であり、覚悟を決めることはできなかった。

いつまで経つても腑ふ抜ぬけた臆病者であるのだ。

人がいない廊下は思っていたよりもだだっ広く、まるで伽藍堂がらんどうのようであった。どこまでも延びていくような壁に寄りかかって、しばらく八幡は空白の画面で独り寂しく点滅するカーソルを見つめて、固まっていた。

別に恋文など書く必要は無い。奇を衒てらうことも書く必要は無い。『会って話が見たい』という文言さえ綴つづればいいのである。

しかし、それすらも八幡にはできなかった。

そのような中、ひっそり閑かんとしていた廊下の端の方からの足音が聞こえてきて、八幡はその方へと目を配った。

そこには、文化祭の案内図を広げて、仲睦むつまじく八幡の方に向かって歩いていく男女の姿があった。

特にその女子の方は八幡もよく知っていた。何かと平塚と引き合いにいざされ、可憐いとけなで、稚いとけなさすら感じる童顔の美少女であり、学園内屈指の人気者である山王弘子さんのうひろこであった。

その横の男の方は名前は知らないが、野球部由来と思われる坊主頭すらも瑕疵かしにさせないくりつとした目が特徴的である中性的な顔立ちだけは見覚えがあった。

「ねえ、劇が終わったらさ、ハニートースト食べよっ！」

「おう、ヒロがそうしたいなら、そうすっか」

「うんっ……！ じゃあ、早く行こっ。劇始まっちゃう！」

そのような在り来りあきたな会話を交わしながら、その二人は八幡の目の前を通り過ぎる。

その時二人は八幡の方を見向きもしなかった。だが、それは意図的に無視したのではないだろう。

きつと二人だけしかいない世界に入り込んでいるから八幡の姿などそもそも視界に入っていないのだ。

二匹の雌雄しゆうの鴛鴦おしどりが目の前を通り過ぎた後、その背中を自然と追ってしまった。

付かず離れずの距離感でありながら、心は絶対的に近くにある。そのようなことが赤の他人の八幡にすらも分かるから、余計質たちが悪く、恨めしいほど羨ましかったのであった。

窓の外は相変わらず嫌味たらしいほど輝く太陽であった。誰が為に差し向けられた光なのかは、考えるまでもなかった。

その時、囃らずもぐるると胃袋が鳴った。

「何か、食うか……」

八幡は結局、何も打ち込まず、その携帯電話を閉じて、ポケットにしまいこんで、二匹の鴛鴦から目を背けるように歩き始めた。

そして、歩いていると次第に飴のよう(やまびこ)に反響して聞こえてくる人々の声。喜樂しかない偏った音色(かたよ)にイヤフォンでも差し込んで耳を塞ぎたくなるが、彼はそれを了簡(りようけん)してやり過ぎした。

これも彼の中途半端なりの決意のうちの一つなのであった。

——相変わらず人気の無いベストプレイスで独りで購買で買った弁当を食べていた。脇にはブラックコーヒーの缶を置いている。

丁度その時間に小町から連絡があり、文化祭には行かないということであった。結びの言葉には、このような体たらくを決め込んでいる八幡の様子を見越したのか、背中を押すような激励の言葉が長々と綴られていた。

しかし、それを見てもやはり指は動かなかった——。

ベストプレイスを発った後も八幡は根無し草の如くゆくあてもなく彷徨うように廊下を歩いていた。

次第に焦燥感に駆られて、立ち止まる回数が増えた。しかし、携帯電話を開いたはいいものの、結局道端の地藏菩薩(ぼさつ)のように固まって、閉じての繰り返しであった。

そうこうしている間に文化祭も、刻々と終わりに近づき、昼間の盛況はすっかり消え、まるで門前雀羅(もんぜんじゃくら)を張ったようであった。あれだけ飛び交っていた音も隠れん坊で遊んでいるかのように息を潜めている。

窓の外にいた燦燦とした天道様は、富士の山が奥に聳える穏やかな海原へとゆつくりと腰を下ろし始めて、空がそれを迎えるために燈籠を飛ばしたように赤橙色に染まっていく。

しかしそのような光景を目に留めることもなく、ひたすら背を弓な

りに曲げたまま、目を伏せて歩き続けていた。

——突然、「あつ！」という大きな声が目の前でして、すこし顔を上げた。そこには一ヶ月ほど前に幕張で偶然会った平塚の同級生である二人の女子——大磯桜と秦野鶴子の姿があった。

「ヒツキーくんじゃん、久しぶりーっ！」

「あゝ、ほんとだ。久しぶりー」

「どうも」

挨拶を交した後、大磯は手を額に添えて右に左にきよろきよると見回す。

「あれ、静とは一緒にいないの？」

「いや、いないな」

「そっかあ……。私たち用事あって今来たばかりだから、まだ会えないんだよねー。なら折角だし……」

大磯は八幡へとぐいっつと顔を近づけた。その瞳には興味のある二文字がありありと描写されている。

「ヒツキー君、最近どうなのっ……?!」

「確かに私も気になる」

秦野も乗っかかり、二人の女子にぐいと身体を寄せられ、厭わしく思つて八幡は露骨に眉を曇らせた。しかし、遠慮の二文字はどうやら彼女達の辞書には記載されていないようでお構い無しであった。

「どうって」

「もちろん静とのことに決まつてんじゃん！」

「それは……、ええと……、その……」

奥歯に物が挟まったような八幡の口振りに、即座に女の勘が働いたようで、大磯はその理由を推察していた。

「……ねえ、静と何かあつた？ まさか喧嘩とか」

「まあ、喧嘩っていう訳では無いんだが、ちよつと話しづらくてな……」

「ふうーん、なるほどね」

「で、その状況っていつぐらいからなの？」

「……かれこれ二週間は話してねえな」

「二週間……!?!」

想像以上に長かったのだろうか、二人は口を揃えて驚嘆の声を上げた。

「それは結構長いね……」

「まあ、そうだろうな」

すると、大磯は「突然だけどき」と声を上げた。

「ヒッキー君は、静のことどう思ってるの?」

「平塚のこと……」

「私としては静って、人当たりも良くて、自信にも満ち溢れてて、皆を引っ張るリーダー的存在で、おまけにえらい美人で、本当に何でもできる完璧超人だと思ってるんだ。ヒッキー君もそう思うでしょ?」

大磯に同意を求められたが、八幡は顎を引くことができなかった。

確かに高校一年生の時の彼であればパブロフの犬のように領いていたであろう。平塚静を初めて見た時は、関わることの無い、彼とは一から十まで何もかも違う完璧な人間だと八幡は感じ、勝手に敵意を覚え、敬遠していた。

だが、高校二年生に上がって、平塚と関わるようになった彼は、その彼が彼女に対して抱^{いだ}いていた固定観念を改めざるを得なくなっていた。

平塚静は、断じて完璧などでは無かった。

人並みに悩む少女であった。

自信が無い少女でもあった。

守りたくなるような弱さもある少女であった。

だから八幡は、頸^{くび}を横へと振った。

「平塚は完璧な超人ではない、と思う」

「さすがヒッキー君だ。やっぱり君はそう答えるんだね」

その答えを聞いて大磯は大層満足した様子ではにかんだ。しかし、一瞬、それは作り笑いのようにも見えた。

「静は、完璧じゃない。そんな当たり前のことに、私、中学の時に気づけなかったんだ」

「私もそうだな」

「今思えば、あの子一人で抱え込むような子だった。何でもできちゃうから基本は困らないんだけど、一回だけ、中学で生徒会長やった時、一人で何でも熟こなしてただけど、倒れちゃった時があったんだ。でも静はそれを乗り越えて、結局最後までやり遂げたから、私たちは勝手にあの時は静の体調が悪かったんだねで納得しちゃって、完璧な静っていう理想像を押し付けたままにしちゃったんだ。でもあれは、間違いなくオーバーワークが原因だったんだと思う」

「それに静しずちゃんはず、他人の背中を押ししたり、手を引っ張っていったりするのは得意だけど、自分のことを変えようっていうのあんまり無かったよね。今思えば」

大磯は深く頷いた。

「多分、私が想像する以上に静ってずっと不器用だし臆病だったんだなって今になって思う。でも、そんな静が急に変わろうとし始めたの。」

私は興味無いからいいの一点張りだったお洒落しゃれとかもするようになったし。服を選ぶ時には、あの一人で何でもしようとする静が私たちに手伝って欲しいとも言った。服を買いに行った時に、絶望的に下手びで唯一の弱点だと思ってた料理も、一生懸命張り始めたっていうのも静から聞いてたし。それに何より、あの笑顔かな」

「そうだね、体育祭の時と言い、幕張の時と言いあんなキラッキラな顔見せられたらね」

「あんな、本当に心の底から楽しそうに笑ってる静見たこと無かったからさ。幕張の時ちよつかいかけたのは半分そのせい」

一瞬、大磯が切なさが詰まった白粉おしろいを塗まじたような顔で窓に顔を向けていた。それは円ついでらな瞳を細めて、橙色の光を射影機代わりにして、まるで遠き日のフィルムの中の一コマ一コマを窓というスクリーンに映して眺め、感傷に浸っているようであった。

「——でもあの時、静に踏み込んで変えられるのは君しかいないんだろうなあ、って思い知らされちゃったからなあ」

「——だから、ヒッキー君」と大磯は、八幡の方へと見つめ直していた。

出逢い頭で見せたものは違う新面目を呈して、証明写真のようにその表情で固めていた。

「静が悩んで、抱え込んでるのに気付いたら、ヒツキー君が手を差し伸べて、そして引つ張ってあげて欲しい」

「俺が手を差し伸べて、引つ張る……」

「うん、ヒツキー君にして欲しいんだ。何で急にこんな話したのかって言うと、私は静が今凄い一人で悩んでると思うからなんだ」

「私もそう思うなく。一週間も、つてことはね。だから比企谷君がずるずるつて静ちゃんのこと引つ張ってあげてね」

「あははっ、何かそれじゃ逆に足引つ張てるみたいじゃん！ まあ、とにかく何で話さなくなっちゃったとかは私たちが深く首突つ込む所じゃないと思うから、早く静と会って話して、仲直りするんだよっ！」
大磯は秦野のボケに軽くツツコミを入れた後、そのように言ってますように笑って八幡の肩を軽く叩く。

しかし、「ああ、分かった」という簡単な言葉がまるで彼の口からは出てこなかった。寧ろ胸が梳くどころか、余計に泥炭が溜まっていて澱んでいくような感覚があった。

「それって、俺じゃなくてもいいんじゃないか——」
「え？」

「手を差し伸べて、引つ張るのは俺じゃなくてもいいんじゃないか。別にあいつにとって俺は、友達の一人に過ぎないんだし……」

「いやいや、比企谷君は間違いなく静ちゃんにとって特別だと思うよ」

秦野のその何気のない言葉に、巧まずして眉間の皺が少し深くなつた。

「でも、俺が特別だつていう証拠がないだろ……」

「証拠ならあるじゃん、例えば——」

二人から列挙されたのは、先も述べたようなファッションや、料理や、そして笑顔のことであった。

しかし、ファッションや料理、そしてあの笑顔ですら、八幡もこの二人も知らぬ親しい他人に見せている可能性があるのだ。

極めて我侭わがままで厚かましいということは重々承知しているが、慰めなぐさでも憐れみあわれでもなく特別であるというのであれば、八幡が静にとつて特別であるという確固たる物質的な、唯一無二の証拠を、彼は欲していた。

しかし、そのような証拠は無いと、とつくに諦めていた。

だが、その時、その痼しこりとなった諦念を潰してしまうような八幡が忘れ去っていた証拠が秦野の一言によって再び思い起こされるのであった。

「——パンさんのストラップ」

「ああ、確かに。あのパンさんのストラップは静からの誕生日プレゼントなんだってね。静に問い詰めてゲロった時はビツクリしちゃった。ヒツキー君は当然知らないだろうけど、静って、人の誕生日にプレゼント渡したことないんだよ。ヒツキー君に渡したのが、初めての他人への誕生日プレゼントだって、本人からも聞いたし」

「静ちゃんに中学の時なんで渡さないの、って聞いたら、『他人のためにあれこれ考えるのは面倒くさいだろう！ だから渡さない！』って堂々と言ってたもんね」

「つまり、裏を返せばあのストラップは、静が生まれて初めて他人のためにあれこれ考えて買ったストラップなんだよ。まあ、それでおソロってだいたい攻めてると思うけどね」

「私は、特別でもない人に贈らないと思うけどなく。おソロなら尚更」

「そうだったのか……」

八幡は彼女達の話の聞くや否や、そのストラップをすぐに確かめたくなり、ズボンのポケットに手を入れて、それを探った。しかし手にはポケットの内側特有の布の滑らかな感触があるだけで、凸凹おうちのあるものは見つからなかった。他のポケットにも手をつ突まつ込み、弄まさぐったものの、空っぽであった。

「——あれ、ストラップがない……」

ポケットに入れていたはずの笹を銜えたパンさんのストラップは消えていたのであった——。



八幡は、今日一日辿たどった足取りをなぞるように、血眼ちまなこになって校舎内を探し回っていた。その唯一無二の繋がりを一刻でも早く感じたかったのだ。

『私たちも探すの手伝うよう。大切なものだもんね。ね。サクちやん』

『うん、当然でしょ！』

大磯と秦野は、そう言つて嫌な顔一つせず手伝つてくれた。彼女達には文化祭の実行委員に直接落し物が無いかを尋ねに行つてもらつていた。

連絡を取るために、大磯とメールアドレスを交換したが、まだあちらからはメールは届いていないという事は、見つかつてないということだった。

——校内を一通り探したが、パンさんのストラップは見つかることは無かった。大磯からの連絡もまだない。

八幡は外へと繋がるスチール扉の前に立っていた。この場所が最後であった。

目の前のドアノブに手を掛け、半回転分ほど捻ひねつて、扉を開ける。開けると風が音を引き連れて、道を塞ぐように八幡に襲いかかった。

しかし、それは眇びようたる猫騙しに過ぎなかった。とは言つても、昨日の八幡であればこのような虚仮威けおどしの風に足元を掬すくわれて、すぐに踵きびすを返していたかもしれないが。

扉の向こうの三段程度しかない混凝土コンクリートの階段を見る。そして、昼食をとるために座つたその中段に目を凝らす。

そこにはパンさんが抱かかえている蒼玉あわたまを模したような蒼色の添え物と斜陽の相反的な紅色が折り重なるように縷ない交まざつて、彼に居場所を示すように光っていた。

「あつた……」

安堵あんどのため息を吐いて、八幡はそこに落ちていたストラップを拾つた。

そして意を決して、その手元のパンさんのストラップを久方ぶりにまじまじと見た。

このストラップ自体は、何の変哲もないよく見かけるようなパンさんのストラップである。

しかし撫でるように触れていると、この無機質の中に、確かな温もりがそれにはあった。全てが無に消えたと早とちりしていたが、消えている訳では無かった。彼がその温もりを感じない様に閉ざしていただけであつたのだ。

そこに、彼が酷く畏れていたような胸を穿く鋭い痛みもなかった。「まずは……」

八幡はこのストラップを共に探してくれている人達に連絡をしなければならぬ。

携帯電話を取り出してメール画面を開く前に、まずは携帯のストラップホルダーに、そのストラップの紐をきつくきつく結んだ。

『見つかった。探してくれて、ありがとう』
この簡素で当たり障りない文面で大磯へと送信した。

ちょうど同じ時に、学校全体から田舎風情を思い起こさせるような情緒溢れるメロディーが流れ始め、十数秒後にアナウンスが流れた。

それは、文化祭の一般公開の終わりを告げるものであつた――。

八幡はそのスチール扉を開いて校舎の中に戻ることはなく、一度この混泥土の階段の中段にどつぷりと腰を下ろす。

そして、携帯電話からぶら下がり、ゆらゆらと揺れるストラップを眺めた。

他人の誕生日にプレゼントを一度も買わなかった平塚が八幡のために買ってくれた人生で初めての誕生日プレゼント――そのような枕詞がつくだけで、彼にはこのストラップはどんな高価な宝玉や金塊よりも価値があつたのだ。

そうして、八幡は久しぶりに自ずから思い返していた。

全てはこの場所から始まつた。

本当に何も無い世界であつた。

決して暗闇で、閉じ込められているという訳では無い。

しかし、どこまでも果てしなく延びていくような青空の下、季節の移ろいという上辺を剥ぎ取れば、本質的には何も変わらない光景を永遠に眺めるだけであった。

そんな世界をいとも容易く、一発の拳で粉々に壊されたのだ。新たな世界を見せつけて、怖気付く手を引いて導いてくれた、たった一人の少女によって。

そこからは、驚天動地の日々であった。何もかもが初めての経験であった。

こんな世界が色鮮やかであるとは思わなかった。

幻想のようにも思えた。しかし、あれは幻想ではなく紛うことなき現実だったのだ。

確かに傍から見れば、その全ての色は真つ当な人間生活を送っていたらば通過儀礼のように経験する当たり前のことなのかもしれないなかった。だから第三者は平塚の行動を経験の少ない男を騙す手練手管と看做すかもしれない。

ただ、譬えそうであったとしても彼にとっては特別で千金万金では計れないかけがえのないものであった。

「ははっ、やっぱり、小町の言う通りだな」

そうぼやいて、一人分空くように左側へとずれる。右を向けば、いつか見た燦然と輝き、目が眩むほどの平塚の笑顔がそこにはあった気がした。

その瞬間に胸の澱みを一切切吹き飛ばす、何時かの時にも感じた強い強い風が吹き抜ける。

——やはり、比企谷八幡という男は、もうどうしようもないほど平塚静に心酔しているのであった。

改めてこのベストプレイスを左顧右眄して見渡してみると、通路脇の葉を持たない美しい木々たちでさえ、夕焼け空を背にして枝の先々から真つ赤な花を萌ゆるようであった。校舎のペンキがところどころ剥けているはずの白壁は、圧倒的な赤に染められて、塗りたて宛らの様相であった。

今、八幡は覚悟を決めた。

平塚と今日会って話す。そして一通り事情を説明した後、この想いを伝えるという覚悟を。

盗み聞きをしなければ、今日八幡が伝えていたであろうことである。

これが彼なりのけじめであった。

「——うし。腹括るか」

そう顔を上げて呟いた時、手元の携帯電話が震動した。八幡がそれを開くと『you got a mail!!』ともの一度だけ流れるのであった。

受信したメールを開くと、差出人は当然ではあるが大磯からで先程彼が送ったメールへの返信であった。

『見つかってよかった！ 今度は失くさないように大切にするんだよ笑。あと、静にもさつき会ったんだけど、キャンプファイヤーやるのに必要な倉庫の鍵無くしちゃったみたいだから探してあげてねー。そしたら静と仲直り出来るきつかけになると思うからさ笑。 静のことよろしく頼んだよ！ 最後に、さつき確認し忘れちゃったから、多分ヒツキー君は分かっているとは思うけど一応ね。今日は折角の——』

メールの内容を確認し、大磯のアドバイスを重々承知して、携帯を閉じる。

だが、どうしても看過できない問題もあった。

一般公開の文化祭はもう閉幕した。タイムテーブルを粗方把握していた八幡は、キャンプファイヤーの準備は閉幕後すぐに行われることは知っていた。

だからそのキャンプファイヤーに用いる丸太から備品までが一緒に置かれた倉庫の鍵を紛失をすることは一大事であり、それを発見することが、火急の事態であることは認識できた。

何より引き受けた当初は不倶戴天の敵とでも言わんばかりの怨み節を述べ、愚痴を零しながらも、平塚がこの文化祭のために、そして他人が喜んで欲しいという大それた素晴らしい望みのために、貴重な

休みを返上して積み重ねてきたものが、この数十分で水の泡となるのは、その姿を隣で見っていた八幡には到底耐え難かった。

キャンプファイヤーの物品を搬入する時に倉庫の鍵を用いたから、形はよく覚えていた。だいぶ年季が入っており木目がはつきりとしている大きな木製の札が草臥くたびれている細い白の組紐で括り付けられており、常に自転車操業の公立高校らしい錆かけの鍵であった。

「探すか……」

腰を上げると、すぐに左手にある駐輪場の奥の茂みの方へと向かう三人の女生徒の姿が見えた。今日は文化祭であるから自転車による登校が禁じられていて、遮かざる自転車が一台もないから駐輪場の奥まで目に入ったのである。

普通であれば出し物の片付けをしている筈はずであるから、不審に思つて少し近づいてみると、その内の一人の手には、大きな木の札が紐で結び付けられている鍵があった。

それはまさしく、今、平塚が捜している倉庫の鍵であった。

八幡は、迷う寸暇すんかを惜しんで、鍵を取り返すために動き始めた。

——八幡は三人の近くへと向かった。そして起伏のないのっぺりとした声で、三人に話しかける。その三人はマトリョーシカのように綺麗に背丈が大中小に分かれていた。

「なあ、お前ら、なにやってんの」

「……いやっ、これはっ……」

分かりやすく肩を竦すくませ、その三人の女生徒は、八幡の方へと振り返る。

その表情には、「別にそういうつもりでは」と揃いも揃って可哀想な私を演出していたが、その中で、手に倉庫の鍵を握っている一番長身で細身のボブカットの女——大野京子おおのきょうこは、八幡と目が合うと百面相の如くすぐに別の仮面を取り出して、すげ替えた。それは、顎を上げて、見下したような仮面であった。

「なあんだ、比企谷じゃん」

「言わないでにおいてやるから、鍵を返せ」

「嫌だ。なんでお前に指図されなきゃいけないの?」

大野は木で鼻をくくつたような態度で、すげなく言葉を返す。しかし、八幡も下手に出て、へこへここと食い下がることはしなかった。

「お前ら自分が何やってるのか分かってるのか。別に誰にも言うつもりねえから早く返せ」

「阿呆だなあ。一人で来ずに先生でも連れてくればよかったのに。今ならあんたのこと犯人にできるよー。こっちは証人三人もいるんだし、ねえー」

「うん、阿呆だねっ!」

「まあ、所詮比企谷だからねー」

そう言つて、三人は却つて暇潰しの玩具を見つけたように、いじつては笑いのし始めた。

ところが彼女達に間拔けな失策を弄された八幡は、苦虫を噛み潰したよう顔をするかと思えば、そぐわない不敵な笑みを浮かべていた。

「——そういや、今日の夕焼けは見事だよなあ」

「は、急に何言つてんの? まさか、現実逃避つてやつ? あははっ、笑え——」

大野は口を開けたまま、止まっていた。そして、三人揃つて血の気が一気に引いていくのが彼にも分かった。

その理由はどこかの御殿様の紋所のように見せびらかされた八幡の携帯電話の画面に映った一枚の写真にあった。

「珍しく駐輪場もすつからかんだし、折角だから記念にパシヤリと撮つてみたら、なんとまあ、ビックリ。片手には、行方が分からなくて搜索願の出てる鍵をしっかりと握りしめている者を含めた女子生徒三人衆がいるではないか。こりゃあ摩訶不思議だ。何でこんなところに探してる鍵があるんですかね」

「盗撮しないでよ……、消してよ……」

「盗撮じゃなくて、俺はあくまでこの綺麗な景色を撮っただけだ。だってそもそも、片付けをしてこの時間に、生徒が来るはずもないこんな場所に人がいるなんて思うか。俺はそうは思わねえけど。まあ、一応、証拠としてここに時刻も載つてるからな」

八幡は画面の右上の方を指差して、態とらしく指を啄くように動かして、三人に示した。

「……という訳だ。鍵を返してくれ。返してくれたら、目の前でこの画像は消してやるから」

「脅しかよ……」

「まあ、目には目を齒には齒を、悪行には悪行で対抗するのがベターだからな」

鷹揚自若に八幡が言葉を返すと、大野は瑠瑠質が悲鳴を上げているかと錯覚するほど鈍く痛々しい音を鳴らして齒軋りしていた。

一方周りの二人は写真を見せつけられてから、最早屠所の羊のようであり、おそらく実行犯と思われる大野が白旗を擧げること待つように、彼女に目線を送っていた。

しかし、中々大野は鍵を返そうとしなかった。

「ほら、時間がねえから、早く返せ」

「……あいつが悪いんだよ」

「あいつ……?」

「静が悪いんだよ……! あいつ、私が好きだって知ってた人の事証かして、傷付けやがった!」

大野は唾を飛ばす勢いで、語気を荒げる。大野の言う平塚が証かした相手は、清川巧のことであろうことは彼に対する平素の大野の態度から見ても容易に推測することが出来た。

「前々から気に入らなかつた、ああいうの! なに、なんでも出来るからって、スーパースター気取りのつもり?! ね、二人もそう思うでしよつ……?!」

急に同意を求められて、横の二人は狼狽えたようで、必要以上に縦に首を振っていた。まるでロックシンガーに指示されて、一心不乱に行うヘッドバンキングじみたその同調圧力は、もはや滑稽の域である。

しかし、その積もり積もった恨みつらみが形を変えた修羅を模した形相は笑い話で済まされるものではなさそうであった。

「別に平塚は証かしたつもりはねえだろ。ただ断っただけじゃねえ

か。お前のは、世間一般的に八つ当たりつて言うんじゃないんですね」

「は、はあ?! なんでお前があいつの肩を持つのお前だつてこつち側だろ! ……つて、比企谷が知ってるわけないか。じゃあ、教えてあげるよ! お前は、あいつに弄もてあそばれてたの!」

「……」

——弄ばれていた。

いくら特別な関係だと納得させて、覚悟を決めても、他人にそのように評されると、多少なりとも響くものであった。

急に押し黙った様子の八幡を見た大野は、薄気味悪く、口角を少しあげる。

「そういや、結構昼休みとか一緒にいたもんね。デイスティニーとか幕張にも二人で行ったんでしょ」

「なんで、そのこと……」

「風の噂で聞こえてきちゃったんだよねえ。ま、それでもね、あいつはお前のこと好きじゃないんだつて……! あはははつ……! ほんと可哀想! ぷふつ……!」

寝耳に水とでもいうような八幡の面構えを指を差して、吹き出して嘲笑あざわら始めた。

「それにお前、この学校の色んな人からも嫌われてたんだよ? あたし聞いちやったし。例えば、お前の消しゴム消えたり、ノートが授業前に限つて失くなつたりとかしてたでしょ!」

「何でそれを知ってる……?」

「噂で流れてきたつて言つてんじやん。それで、実はあれはお前のごとが嫌いになった奴がしたらしいよ!」

「どういう事だ……?」

「受け入れられないのかなあ、ほんと可哀想。ま、静がお前のこと好きじゃないつて分かったから止めたつばいらしいじやん。つまり、全部あいつのせいなんだよ、気づいた?! 私は優しいから教えあげちゃつたあ」

八幡は混乱して、口をあんぐりとさせて、言葉が出てこなかった。

なぜ大野がそのことを知っているかだけではなく、あの気の緩みによる健忘の現れだと思っていたここ最近の失くし癖は、実は八幡のことを嫌っているという目に見えない人の仕業であることに魂飛魄散と
していたのであった。

「第一根暗で誰も近づかないようなお前に、なんであいつが近づいたか分かる……？ それはね、あいつにとつて都合が良かっただけ、ただ、それだけじゃん！ 友達って言葉ほんつとこういう男を誑かすのに便利だよねえ。ほんと、同情しちゃうなあ。あいつには勘違いさせられて、ほかの男子共には勘違いされて、ほんつとに泣いてあげたくなるくらいに可哀想だよねっ、ははっ……！」

煽りに煽る大野はここで妙案を思いついたようで、「あつ、そうだ！」と声を上げて、片手に握った倉庫の鍵を八幡に見せつけて、ほくそ笑んだ。

「だからさ、ここはいつその事私たちと手を組んで、お前も、一緒にこれを隠そうよ」

「そんな事絶対に出来るわけないだろ。とにかく鍵を返せ」

「この期に及んでなに善人面してるの。お前も被害者なんだよ？」

そして、大野は一度舌先で唇を湿らせて、言った。

「——だから、私たちと同じような気持ちも味あわせてやろうよ！」

あの、他人の気持ちも理解できないクソビッチのゴミクス女にさっ……！」

その言葉が耳に入った瞬間であった。

今まで何があつても決して切れることがなかった頑丈な有刺鉄線がぶつりと切れる音がした。

そして、その内側から今まで日の目を浴びることのなかった黒褐色の泥泥とした岩漿が、どつと噴いて出て八幡を瞬く間に覆って灼き尽くした。

「……………取り消せよ」

酷く底冷えした声が八幡の口から発された。

「……………は？」

「今の言葉、取り消せつつてんだよっ……!!」

「……ひいっ！」

「いくら俺のことは悪く言うのは構わないが、平塚を侮辱するのだけは絶対に許さねえ……！」

大野は、気圧されて先程までの女豹の如き威勢は露と消えて、総毛立たせて縮こまった子猫のように一步、後退りした。残りの二人は大野を置き去りにして、臀に帆をかけたように一目散に逃げていった。しかし、未だかつてない憤然に満ちている八幡は、容赦なくその猫を追い込むように一步、また一步詰めていく。

「……ちよ、ちよつと」

「平塚はそんなやつじゃねえんだよ……！」

他の誰かに見られているなど思考の外で、八幡は煮え滾る腹の奥底から怒号を飛ばしている。

大野は八幡の言葉を失っていたようだが、意地が勝ったのか突飛に臀をまくって声を荒らげた。

「……い、いや、あいつはそういうやつでしょ！ 優等生气取って、何食わぬ顔で男を誑かすクズじゃん！」

「お前が平塚の何を知ってるんだ……！ 何にも知らねえくせに平塚を貶すんじゃねえ……！」

八幡の怒声は、ますます凄みと重みを増していく。

しかし、徳俵に足がかかっている大野も後には引けまいと、怯まずに言葉を返してきた。

「は、はあ……?! お前だって、なんも知らないでしょ！ アイツにちよつと優しくされただけで絆された根暗童貞野郎がしやしゃんじゃねえよ！」

「お前よりは、知ってたんだよ……！」

喉の内側が擦り切れそう、今にも喀血する気配すらそこにはあった。それほどの音圧と音量で、怒髪天を衝いたような声を張り上げていた。

「あいつが強がりなところも、寂しがり屋なところも、人並みに悩みを抱えていることも、楽しい時に本当に楽しそうな顔で笑うこともお前よりは知ってたんだよ……！ 俺以上になんも知らねえお前が、偉そう

に平塚の事貶すんじやねえ……!」

慣れない怒髪天の如き胴間声で言い切ると、息遣いを荒らげながら、また一步近づいた。

大野は、とうとう完全に萎縮してしまったようで、目にはいっぱい
の涙を含んで、その細長い身体全体を震慄させていた。

「な、何なんだよ、お前……。こっち近づいて来んなよ……」

「とにかくもうやめろ、鍵を返してくれ。これ以上、平塚のこと侮辱されたら——」

八幡は、その後の言葉を口にしなかった。

しかし、感情の発露を鏗際で堪えていて、その代わりに大きく震えている彼の拳が、暗にその後続く言葉を示していた。

「早くしろ……」

「ひいつ……」

左手の握り拳を解いて、拡げ、大野の目の前に差し出す。

「わ、分かったから。ほ、ほら……これでいいんですよ」

大野は声を震わせながら、八幡の手の上に倉庫の鍵を置いた。彼女の頬には、血涙のようにも見える紅染めされた滴が流れていた。

「ああ」と八幡が相槌を返すと、大野は直ぐに背を向けて駆け出した。

だがスチール扉を開けた直後一度立ち止まり、八幡に憎悪に染まった鋭い一瞥を送り付けて、校舎の中へと姿を晦ました。

手元を見れば、大野から取り返した少し錆び付いた鍵が、夕陽を浴びて赤銅色の光沢を覗かせていている。

ふと校舎の窓を見ると、そこにはただでさえ鋭利な目を吊り上げて、眉間には皺が寄って凄みがかかり、その額にはくつきりと青筋を立てていて、鬼気森然とした面持ちの男が映っていた。この顔と対峙した大野には一種の殺気も宿っているように見えたかもしれない。

思わず八幡はそこから目を背け、自らの顔を撫で回す。

再びその窓を見ると、いつもの顔に戻っていた。

そして、大きなため息をついた。

「はあ……、何やってんだ俺……」

あの窓に現れた我を忘れたような顔は、純粹な怒りによる産物では

なかった。

もちろん、平塚に対する侮辱は、断固として許容できるものではない。

しかし、窓に映っていた顔は、この二週間程の個人的な鬱憤が含まれた不純な怒りであった。

これを女子に向かつて、ただ内にある私的な感情までもぶつけてしまったのだ。結果的には威嚇いかくになったとは言え、女子相手に拳も震わせてしまった。

しかし、自責の念を募つらせるのは、今八幡がすべきことではなかった。まずすべきことは、この手にある鍵を、一刻も早く平塚の元へと返すことであった。

——校舎の内と外を隔へだてるスチール扉の目の前、八幡はそこにある三段程度しかないコンクリートの階段の中段に座り込んでいた。

テニスコートは寝静まっついていて、風は向きを変えて、元にいた場所へ送り返すように陸風が東京湾の方角へと吹き抜けていく。その風が、昼時であれば舗装された駐輪場から校舎に続く目の前の小路こみちを綾あやなす薄茶色の斑点はんでんに見えるが、すっかり宵闇よいやみの中へと飲み込まれてモノトーンの黒へと同化してしまった落ち葉をふわりと巻き上げる。

だが、その黒い落ち葉のいくつかが八幡の真上に舞い上がった時、三等星の如く幽かそけく光った。生命いのちとしての最期の輝きかのように映ったが、それは違ったのであった。

眼前にある校庭の中央へと目を向ける。そこにある篝火かがりびは龍のよううずにその図体を仰々うげげしく渦巻くようにくねらせて上へと、遙か高い空の先まで昇っていくのであった。

それが、星のない首都近郊の空へ一面の灯あかりを届けていた。死んだ落ち葉を照らしていたのはまさしくその燈ともしびであった。

その周りを囲んで、総武高校の生徒達は群れを生なしている。

その中でとりわけ生徒が固まっているところでは、たった今どよめきが起きた。

目を凝こらすとそこには、学園内の美少女と持て囃はやされる山王弘子

と、昼間に横に並んで廊下を歩いていた坊主頭の男が抱き合っているのが見えた。

こちらまで届いてくる指笛が、その驚きを伝え、誰かが「最強カッブルの誕生だア!!」と嘯うそぶいている。

まだ宴うたげは始まってもないのに、誰もが興奮に包まれ、頭は茹ゆだつて、狂乱する。

その狂乱へと連れ去る光彩陸離こうさいりくりの輝きは、去年の彼にはただ徒いたずらに目を焼き焦がすものには見えなかった。だから、その姿を須臾しゆゆも見ることではなく、逃げるように去っていったのだった。

しかし、その輝きは全ての人を等しく照らし貫く輝きであった。たとえそれが死を迎えた、最も憐あわれむべきものだとしても。

今、八幡の胸元のブレザーは、その光を受けて、淡あわく、揺らめきのつて切り絵のように陰翳いんえいを変えていく。

ただ、狂乱へと誘いざなうほどの熱は与えてくれていなかった。八幡が冷静に俯瞰ふかんして見られるのは、この場所から遠巻きに、独りで見ているからに違いなかった。

そして、その鮮やかな光と夥おびただしい熱を受ける向こう側との依怙えこひ鼻肩ひしにも似た絶対的なコントラストが虚むなしさと、殊ことに自己憐憫れんびんを彼に齎もたらした。

それゆえ皮肉なことに八幡が護まもったあの燈は、昨年以上に心を抉えぐるものになっていた。

しかし、あの火の光をこのようにして浴びることは自身に課せられた使命である気がして、逃げることなく留まっていたのであった。

——八幡は、もう動かなければならなかった。

まだ平塚には会っていないかった。大磯が提案したように、校庭の脇にある倉庫の鍵を用いて口実を作れば、平塚と話す機会を設けることができただろう。

ただ、これを理由に渡すのは恩着せがましい上に、姑息こそくだと感じた。だから渡すでもなく、いずれ目が届くであろう場所に、その鍵を置いて去ったのであった。

二つ折りの携帯を開く。そして、メニューボタンからメール機能を

起こす。

下書きに文字列を入力する。この場所に来て欲しいと。覚悟を決めても、やはり今までにないほど指は震えた。何度も打ち間違えをしては打ち直す。

このメールを書いた先の未来は、八幡にとっては辛いものである可能性が高い。

しかし、書かなければモノクロームの無味乾燥な未来が待っていることは間違いなかった。

逡巡^{しゆんじゆん}しては始まらない。

大磯、秦野に、小町に背中を押された。

先程パンさんのストラップを見た時、少なからず特別な関係であることを信じたことができた。

そして、あの轟々^{ごうごう}と燃え盛るあの焚き火より強く耀^{かがや}く一等星の如き笑顔が再び甦^{よみがえ}って目に映った時、改めて八幡は自覚したのであった。

やはり、平塚のことがこの上なく好きであるということ。

小町は認めてくれると言ったものの、別段平塚に言う文句など一つも浮かばない。

—— 潔く告げて、潔く玉碎^{ぎやくさい}する、のだと。

震える指で、何とかボタンを押して、一文字ずつ文字を打ち込んでいく。

そして、時間をかけて完成した平塚宛てへの一通のメール。

十字ボタンの真ん中の丸い送信ボタンを、一呼吸置いた後に、押した丁度その時であった。

何の前触れも無く、背にあるスチール扉の戸が、開けられたのであった。向こう側の熱気を多分に含んで薄まった温^{ぬく}んだ風が吹き付けてきて、八幡の前髪を掻^かき上げるように揺らした。

だが、八幡は振り返らなかつた。

そこに彼女はいるはずなどないと思ったからである。

「比企谷……」

しかし、後ろから八幡を呼ぶ声が聞こえたのだった。

都合のいい幻聴^{げんちやう}でも聞いているのかと思った。

だが、それにしても声が生々しかった。

あの、芯があつて、耳触りが良くて、優しさがあつて、愛おしくて、忘却できるはずなどなくて、だから耳を塞いで、思い出すのを長らく拒んで、そして今一番聞きたい声であつた。

少ししてから手元の携帯を閉じて、八幡は振り返らずに、「どうしてここに居るんだ」とその幻聴に尋ねた。

すると、程なくして答えが返ってきたのだ。

「君のことを捜していたからな……。多分ここにいると思つて……」

「俺のことを探してた」

「……その、倉庫の鍵のことの札をしようと思つたんだ。君が大野から取り返すところ見てたから」

「……そうか、見てたのか。あれはその、気にすんな。大野は嫉妬でおかしくなつただけだ」

そう口にして、自らの言葉にどこか引つ掛かりを覚えた。

嫉妬——どこかで、恋敵がたきになりつつある友人に嫉妬する男の話を讀んだ。その男は、嫉妬の矛先を当然その友人に向けていた。つまり、嫉妬を他人に当て付けることで、痛みを発散させ、自我を保つていたと、彼は解釈した。

八幡も同じであつたのだ。

しかし、八幡の対象は見えない誰か——純白のタキシード姿を着た黒塗りの顔の男であつたのだ。

だから、嫉妬の熱的な感情が外的世界へと発散されることなく、行き場を無くして彼の中で空転し、その炎が彼自身を焦がし尽くした。それをどうにか味わわないために、拒絶という形をとつて関わることをやめたのであつた。

このことに今、気付かされた。

あの小説を讀んだ時、何も知らなかつた八幡は、なんと愚かな男だろうと理解できずに苦笑したが、今、その嫉妬に狂つた男——先生に「君も同じですよ」と後ろ指差されているようであつた。

酷く愚かであつた。しかし、覆水盆ふくすいに返らずという。

そして今、愚かしい自分を柵おろに上げていることに嫌気が差す。だ

が、この性分はもう仕様がなかった。

まず、すべきことが彼にはあるのだ。

「うん、大丈夫だ。もう気にしていない。だから、その……、ありがとう、比企谷……」

「別に礼をされるようなことはしてねえよ」

平塚は聞きたいことがあると、続けざまに口を開いた。

「なんだ？」

「……私のこと」

やけに長い間が置かれる。

「私のこと、嫌いに……、なったのか——？」

絞りでたようなその声は、今までにないほど震えていた。ただ、八幡もそれに共鳴したように聳動が止まらなかった。

「それは……」

「私がおか、君に酷いことをしたのなら教えて欲しい。ちゃんと謝るから……」

「……………」

すぐには言葉にはできなかった。

口を開こうにも言葉は出ない。

脳天に浮かんでは、泡のように一瞬で破裂して、波紋だけ残して消える。

——やはり怖かった。

彼は暫く押し黙っていた。

ふと手元の携帯電話が目につく。

相変わらずそれは落ち葉を巻き上げた風に靡いて、健気に揺れていた

もう進むしかないのだ。

恐らく八幡にとっては辛い時間がやってくる。

だが、潔く告げて、潔く散ることを覚悟した。

だから、そのためにまず彼は事の顛末を伝える。

「——別に嫌いになったわけじゃない」

「じゃあ、なんで……」

「お前が清川に告白されてるところに居合わせたんだ。そして聞き耳立ててたら、お前に好きな人がいるってことを聞いちゃった。それからはお前に顔を合わせられなくなった」

「そうだったのか……」

自身の嘆かわしい行動を改めて憂い、思わず鼻で笑う。

「ははっ、ちゃんちゃらおかしいよな。別にただの友達なはずなんだけどな——」

続けて非礼を詫びて、想いを伝えようと段取りを決めた時、平塚が割り込むように口を挟んだ。

「——比企谷、単刀直入に言うと、あれは嘘なんだ……」

「……………え——」

『嘘』

突如放たれたこの一単語に思考回路は混迷を極め、続けるはずだった言葉が宙に舞った。

だが背を向けている八幡の内情を知る由もない平塚は話を続けた。

「実は清川に告白されるのが数回目だな、何回もしつこく迫られたから、つい口を泣らせてしまったんだ。自分でも咄嗟のことでどうしようもなくなつて、あの場を取り繕うのと……」

躊躇うように、言葉に詰まらせた。

「……そ、その、言い訳がましい上に、何を言っているんだと思われるかもしれないが、君が傷ついて欲しくなかったからあのように言ったんだ」

「え、ちよつと、待って。じゃあ、他に好きな人がいるって言うのは……？」

「嘘なんだ」

「は、ははっ、はははっ……」

「そのだから、比企谷、私……」

「——はあ、良かったあ……………」

「……最近ずつと蟠踞していた力みが物の見事に灰燼と帰して、全身を空っぽにする程、深い安堵のため息を吐いていた。思わず漏れ出た

言葉は、心の底からの言葉であった。

「……つまり、比企谷は妬やいていたということか」

「……ああ、その通りだ。何も言い返せないな。本当に情けない」

「そうか、君が私のことで妬やいてくれたのか……」

安堵の波に飲まれ愁眉しゆうびを開いた八幡であったが、忽たちまちその波が引くと、そこにあつたのは目の前の平塚に対する慙悔ざんかいの念であった。あの邪険じゃけんな態度が、いかに平塚を傷つけたのかは今の彼には想像に容易い。

八幡は勢いよく腰を上げて、振り向いて、深く頭を下げて謝ろうとした。しかし、それは叶わなかった。

知らぬ間に真後ろにいた平塚は、恰あたかも八幡に見せまいと突如顔を俯うつむかせて、彼の胸にしなだれるように身体を預けてきたからだ。

その懐かいろかしく懐炉カイルロのように身体に染み入る温もりは、言葉にせずとも全てを赦ゆるしてくれそうであった。

しかし、言葉にしなければならぬのは彼の責務であったのだ。

「その、平塚。俺、お前のごとすぐく傷つけたと思う。本当に申し訳ない」

平塚は何も言わなかった。ただシャツ越しに彼女の吐息が感じられるだけであった。

しかし、程なくして彼女は力ない拳で、八幡の胸板を叩いた。そして、更に押し付けるように胸元に顔を擦り寄せる。その為、額の熱さと、鼻先の冷たさまでもが伝ってくるのであった。

「平塚……」

「……殴る。……もう一発殴る。……いやもう一発殴る——」

声を窄すぼめながら、何度も何度も力ない拳で叩いた。

しかし、その拳は確かに肋あはらから全身の骨の髄ずいにまで響き渡り、今まで平塚から受けた拳の中で、もつとも痛いものだった。

「私つ、すつごい心配だったんだから……」

「本当に申し訳ない」

「君に……、避けられるようになってから、全然楽しくなかった。辛かった。本当に、本当に、辛かった……」

「本当に申し訳ない。俺が悪い」

平塚の声は次第にぶつ切りになり、その華奢きやしゃな身体も小刻みに震えていた。

ただ八幡にできることは、誠意を持って謝ることだけであった。

「ほんと、に。ほんとに……」

「到底許してもらえとは思ってない。だから、何回も謝らせて欲しい。無視したり、腕を振り払ったり、最低な態度をとって、最低なことをして、本当に申し訳なかった」

「ほんとにつ……ぐすつ、すつごく、すつごく……、わだしいつ……」

次第に平塚は言葉を出すことも儘ままならなくなっていった。何かを堪えるかのように、八幡の胸倉を皺になりそうな程強く掴んでいた。

しかし、段々と八幡のシャツがじわりと濡れていく感触があつて、声をしゃくり上げだしたので、平塚が泣いているのが分かった。

彼女の慟哭どうこくを見るのは当然初めてであつた。

その後も平塚は泣き続けた。

赤子のように大きな声を上げて、泣き続けた。

八幡は平塚を泣かせてしまったのだ。

実はもつと彼女を泣かせていたに違いなかつた。

力が抜け落ちた彼の腕は、彼女を抱き締めることも、そして、彼女の頭に添えることも無かつた。

気障きざな男であればやってのけたであろうが、彼には無理であつた。

それは性格が異なるだけではない。そのようなことをする資格が今の彼には無いように感じたからだ。

彼はただ黙つて、平塚が曝さらけ出している彼女が味わつた哀しみに身を抓つかまされているだけであつた。

「——あはは、泣かないつもりだったんだがな」

数分経つて、八幡から身体を離した平塚は鼻を噉すり上げて、何度も目尻こすを擦こすっている。その跡は蚯蚓みみず脹ぼれのように赤くなっているのが、暗がりの中でも分かつた。

久しぶりに見た平塚の顔は、やはり娟麗けんれいとしていた美しかつた。しかし、その顔に泪なみだの跡は似合っていなかつた。それは、他の誰でもな

く八幡が付けてしまったものであった。

「本当に申し訳ない。平塚」

もう一度謝った。今度は深く、深く頭を下げる。

「もう大丈夫だから、顔を上げてくれ。そもそも私が許すも何も、君が謝ることなんてない」

「いや、俺が」

「——ううん、私が悪いんだ」

そう言っつて、あの嘘に至るまでの経緯を話し始めた。

平塚の話は端から信じられない話であった。

それは、総武高校裏サイトと呼ばれる、匿名掲示板がインターネット上にあつて、そこにあるスレッドの一つに八幡に対する悪口が書かれており、それから嫌がらせの話が持ち上がった、という話であった。

遡ると、もう五月、つまり体育祭より前から、そのような悪口は始まつていたそうなのだ。

平塚の話通りに、携帯を開いて、検索をかけると、そこには確かに裏サイトと呼ばれる掲示板があつて、悪意には慣れていた八幡が言葉を失うほどの、罵詈雑言——つまり、一人の人間に向けられた不特定の人々による可視化された敵意と悪意があつた。

理由は至極単純で、冴えない根暗男である癖に、高嶺の花である平塚と仲良さげに傍にいるからムカつくというよくある類いのものであつた。

その中には、デイスティニーや幕張に行つたこともそこには記されていた。

そして、可視化した悪意が八幡に嫌がらせとなつて実体化したのは、九月の下旬以降であり、それは丁度消しゴムが紛失するようになり、ノートが授業前に消え始めた時期と重なる。しかし、それらはまだいい方で、実行はされていないが身の毛もよだつような嫌がらせ——もはや虐めを提案しているような書き込みもあつた。

つまり消しゴムを紛失したり、ノートが授業前に限つて行方知らずになつていたのは決して浮かれ気分であるという訳ではなかつた。

全部八幡からは見えない悪意によるものだったというのだ。

「……まじか、消しゴムとかノートが消えてたのはそういうことだったのか」

流石に悍ましく鳥肌が止まらなかった。しかし、それで清川が八幡の名前を即座に挙げたことや、大野が詳らかな情報を知っていたことにも合点がいく。

「私はその事を知ったのは、クラスの女子が影でその話をしているのを偶然耳にした時だった。まさかと思って検索して覗いて見たら、もう書き込みが凄いことになっていたんだ。そして、色々一人で考え込んでしまった。」

もし私が声を上げたり、学校に報告したら、君が余計嫌がらせの対象になるかもしれない。もし私が君にその事を相談してもそうだ。

どちらにせよ、きつと君は優しいから、私が迷惑被らないようにと、自分を傷つけて解決してしまう。それか私から離れていってしまうんじゃないかって……。

考えすぎだつて分かつてはいたんだ。でも、数パーセントでも、そういう可能性があると思うと、言えなかつた。君に傷ついて欲しくなかつた。君と一緒に居られなくなるなんて絶対に嫌だつた……」

平塚はわなわなと震えて、それを必死で抑えるように普段は瑞瑞しい桃色の唇が赤く滲むほど強く噛んでいるのが、不意に灯りが口元を照らしたとき気付いた。

「だからあの時、清川に他に好きな人がいるつて思わず言ってしまった時に、咄嗟に比企谷はただの友達に過ぎないんだつて一言言つてしまえば、君への嫌がらせは終わるかもしれないと考えてしまったんだ」

確かに平塚の考えは、見事に功を奏していたのであつた。あの忘れもしない雨降りの日の夜を境に、平塚は八幡ではない他の人の事が好きという話とその掲示板へ流れ込むと、途端に見えない悪意は八幡への興味関心をなくし、ぱたりとその手の書き込みは消えて、別の話題へと移っていたのであつた。だから、当然その日を境に、八幡が消しゴムを紛失することはめつきり無くなつたのである。

「——でもそれは酷く短絡的たんらくだった。君の耳にもし入ってしまったら、など至極簡単なことを想像することが出来なかった」

濡れ羽色はの後ろ髪が前方へと垂れ下がるような勢いで、平塚は頭を深く深く下げた。

「ごめんなさい比企谷、私が悪いんだ。私が……」

「顔を上げてくれ、悪いのは俺だ。俺が拗ねすずに聞けばよかっただけの話だ。平塚は俺を守るために嘘ついてくれたんだろ。だから平塚が謝る必要は何も無い」

「ううん、だとしても私が悪いんだ。私がもし、君と同じ立場だったらすごい不愉快、いや、そんな言葉じゃ言い表せないほど嫌な気持ちになると思う」

顔を上げて「それに」と平塚は、付け足す。

「私から事情を説明すれば解決できたことなんだ。でも、怖かったんだ……」

もし、ただの私の思い違いで、もつと別のことで傷つけていたとしたら、君は私に失望するのではないかとすごい不安になったんだ。

たとえ、思い違いでなくても、もしかしたら、こんな嘘をついたことを知ったら、君は私のことを嫌いになるかもしれないって、君のことが傷つけたらもう私のこと見向きもしてくれなくなるだろうって、本当にすごい怖くなった」

少し背筋は曲がり、肩は震えている。

「——また君に、あのように手を振り払われたら、もう私の心は粉々になつてしまいそうな気がしたんだ。だから私はできなかった。

私が言っていたことは綺麗事だったのだな……。本当に大切だと、傷つけてしまうのは、こんなにも、こんなにも、恐ろしくて怖いものなんだな……」

滔々とうとうとまるで自白でもするかのように語った平塚は、「でも」と続けた。

「今日会った桜とツルに背中を押されて、そして君が鍵を取り返してくれた時、私のことあんなに知ってくれてる、思ってくれてるって知って、ようやく君に話しかける勇氣を持てたんだ。本当に私は臆病

者で、すごい狡い女だ………」

平塚は暗い顔を面に残したまま、目線を落として、そう自らを卑しんだ。

ここまで平塚の謝る理由を口を挟まずに聞いていた八幡は、彼女の様子を見て、あろう事か一つ同意の相槌を打った。

「——確かにすごい狡いな」

「だ、だよな……、こんな私」

八幡の言葉を聞いて、より一層声を萎ませる。腰周りのスカートしほの布地を強く握っていて、自らを責めるような大きな黒い徒波あだなみが裾に向かって放射状に刻まれていた。

「だって、そんな臆病で狡いところですら阿呆あほみたいに可愛いと思えるんだからな。本当に巫山ふざけ戯てる。マジで不条理だ」

「え……？」

平塚は八幡の言葉に青天の霹靂へきれきとでもいった表情を見せる。しかし、男心というものを考えれば当然の話であった。

——だって、そんなに俺の事を考えてくれてるなんて知ったら、飛び跳ねるほど嬉しいに決まってるじゃないか。

「平塚は狡いんだよ、本当に。一人の根暗で冴えない男の純情散々掻き乱しやがって。人生一八〇度変わったぞ。相当高値がつくからな、これ」

「そう言われても、困る……」

「まあ、取り敢えず、当然だが俺は平塚のことを許す。それで、これ以上はいくら言ってもキリがねえから、今回はお互いのせい、お互い反省ってことでいいよな。これでおあいこだ」

「うん、うん……、うん……。よかった、本当によかった」

平塚は胸に手をあてて、撫で下ろす。そして、ようやくどっと大きく色々なものが詰め込まれたたような息を吐いていた。

「こんな事もう無いようにしなきゃいけないな」

「うん、私もそう思う」

「じゃあ、ほうれんそうを徹底しよう。ほうれんそうっーのは、何かあつたらすぐ報告する。連絡する。相談するっていう」

「それって……」

「ああ、俺の親からの受け売りだ」

とっておきの平塚の台詞を八幡が堂々と盗んでの所得顔を見せてつけると、平塚の顔が朗らかに崩れた。

「ぶふっ……、あははっ！」

笑っている。平塚が笑っている

また屈託なく笑ってくれている。

昨日まで金輪際見ることができないと思っていた眩しい笑顔が確かにあった。

その顔を見て胸が薪が焚べられた竈のように奥底からじんと熱くなり、自然と八幡も頬を緩ませて、笑っていた。

二人して二週間分の笑みを取り戻すかのように笑っていると、唐突に校庭の方から、マイクを通した声が響いてきた。

『名残惜しいですが、キャンプファイヤー残り五分です!! じゃんじゃん楽しみましょう!』

すっかり失念していたが、今はキャンプファイヤーの時間であった。宴はいつの間にか始まって、向こう側にいる生徒は、激しく燃え盛るようでありながら、哀愁を漂わせる名の知らぬ円舞曲に合わせ踊り狂っていた。更に残り時間も五分と僅かであるという。

もちろん八幡に踊る相手がいるとするなら、目の前の平塚だ。

だが、考えてみると、あの発言が嘘だからと言って、八幡の恋路が成就する訳ではない。むしろ、言い種に抛れば彼女に好きな人はいないということになる。

キャンプファイヤーの学校の伝説は当然平塚も知るところであるから、ここで誘えば言外に好意を伝えることになるのだ。

「そっ、そっ、そっ、いや平塚は踊る相手はいる、……のか?」

「いる」

その探り探りの問い掛けに対する即答に思わず八幡は戸惑い顔を浮かべ、咄嗟に勘繰りを働かせた。

すると平塚は竹篋返しとでも言わんばかりに悪戯っぽく笑って、

「——目の前に、な……」

と囁いて、八幡を見つめる。

心臓がその瞳に操られたように高鳴る。

彼は今にも欣喜雀躍きんぎやくやくとして一人でに踊り出してしまいそうな我が身を必死に抑えた。

「……ははっ、してやられたな、こりや。……よしっ」

一、二歩後退ずさつて、階段を下りる。

膝をつかずとも生まれた高低差は、まるで御伽噺おとぎばなしでよく見るあの光景であった。

すぐそこにいるのは八幡にとってまさしく世界でたった一人の姫君だった。

彼は、その姫君に向かつて、手を差し伸ばす。

「——平塚静さん、俺と一緒に踊ってくれませんか？」

「……………はいっ、よろこんでっ！」

八幡が差し出した手に、細く小さな手が乗せられた。

その女性らしさを感じるしなやかな指の間に節くれだった指を差し込んで、ぎゅつと結んで、固く繋いだ。

不思議と、顔から火が出るほどの恥ずかしさは無かった。

平塚もその混泥土の階段を降りて、校庭の方へと、少しでも灯りがある方へと二人並んで、固く手を結んで、歩いていく。

誰もいない、誰も見ていない鈍色の混泥土で舗装にびされた蹊こみち——ここが今、魔法にかけられたように舞踏会ステージの舞台へと変貌する。

二人はぎこちないステップを踏み始める。

作法などは分からなかった。

しかし、気の向くまま、その円舞曲ワルツに合わせて、踊った。

——踊った。

今、狂乱に誘い、没入感を味合わせるほどの迸ほとばしる熱を確かに感じた。それは、あの篝火かがりびの熱もそうであったが、それより遙かに彼女の熱が伝ってきたからであった。その熱は全身に染み渡るように伝って、心

地良さで溢れる。

やがて、さらに奥の、奥の方へと染み渡っていく——。

それは、彼の内にあった氷をいとも容易く溶かしていった。

奥底にあった——決して解けることのなかった残り雪も、とうとうその熱に当てられて、じわりと溶けだした。

そして、その下に隠れていた新芽が顔を出している。

今、その新芽——夢の芽は、消えたと思われていた希望という名の肥料が撒かれたことで、瞬く間に育ち、夢の蕾と成って、活き活きとしていた。

それはまもなく清らかに澄んでいて風光明媚な花を咲かせようとしているのであった。

まさしく、夢心地であった。

——二人は踊り飽かす。

不意に平塚の顔が、燈に照らされて闇夜に明るく浮かんだ時であった。

もう何度目か分からない。だが、やはり何時とも変わらない。

眦の方に向かって傾らかな丘陵を描き、細く整えられた眉毛と、鼻梁高く、切れ長な双眸は中性的な魅力を漂わせる。一方、はつきりとした二重瞼の真下で、遠くの点し火が揺れる瞳はどこまでも澄み切っていて、朗らかに形を変える瑞瑞しい桃色の唇は、遍く人々を魅了するような可憐さを醸し出していた。そして、それらが同居して生ずる沈魚落雁の美しさに八幡は見惚れてしまったのであった。

「うおっ——?!」

余りにも美しすぎる平塚に目を奪われた八幡がステップを踏み外し、足を絡ませてよろけてしまったがために、平塚も釣られる形でバランスを崩して、両者とも舞台上で倒れてしまった。

八幡は後ろから倒れて、固い混泥土に背中を打ち付けたものだから、それ相応の痛みがあったはずだった。

しかし、その痛覚は鈍って表に出なかった。八幡は別のことに気を

取られていたのだ。

八幡の目と鼻の先には平塚の顔があった。瞳は潤み、頬はあの篝火よりも明るく上気していて、婀娜あだつぽかった。そして彼女の濡れ羽色の長く艶つややかな髪が、八幡の頬を掠かすめるように流し落ちていく。その少し荒い吐息は、ただならぬ熱を含んでいた。

混泥土を背にして仰向けの八幡に対し、それに覆い被さるように、平塚が四つん這ばいになっていたのである。

「す、すまねえ。怪我不いか？」

平塚は何も言わず、首を横に小さく振る。

「それは良かった。平塚、今、起きるから」

しかし、平塚は一向に起き上がりとはしなかった。

それどころか、八幡の顔に、ゆっくりと近寄ってくるのであった。

「——ひきがやあ……」

そう嬌声きょうせいに近い鼻にかかった声で八幡を呼びかけると、その流し落とされた黒髪を、耳裏へとかきあげた。

彼女の潤んだ瞳がそつと閉じられ、妖あやしげに光る桃色の唇が、八幡の口許くちもとへと迫ってきていた。

その姿があまりにも可愛くて、艶なまめかしくて、愛おしくて、そんな彼女から端たんを発した情は奔流ほんりゅうとなって彼をも呑み込んだ。

そして、八幡も目を閉じた時であった。

『終了でえ——す!!』

司会の快活な終了のアナウンスが、この舞台の二人の元にも届いた。

二人は揃って、足元から鳥が飛び立ったように飛び起きて、互いに目を逸そらす。

「——」
甘美な雰囲気が一変して、気恥しさが、二重にも三重にもなって二人の身にのしかかって、箝かんこう口令が敷しかれたかのような静寂が訪れていた。

暫くして、八幡が漸ようやくその重たい口を開く。

「な、なあ、平塚」

「……なつ、なんだ。比企谷……？」

「その、ええと……」

いつものように襟足えりあしを二、三度搔いた後、口を開く。

「平塚、今日駅まで一緒に帰らねえか。せつかく歩きだし」

「……うんつ、分かった！ あつ、……でも、私、キャンプファイヤーの後片付けが……」

「それは、俺も手伝うからさ」

平塚はその言葉を聞いて、くすりと微笑んだ。

「そうだな。ここ最近君は連絡も寄越さずにサボっていたのだから、その分ここで取り返してもらわなければならないな」

「ああ、だいぶ負債溜ふさいまつてるから、なるべく早く早く返済するわ」

「となると、明後日の片付けもびしばし働いてもらうからな！」

「ああ、覚悟しておく」

アナウンスが入る。今度は先程の祭りの時とは違って、一本調子な業務連絡が入った。

『キャンプファイヤー担当の生徒は至急集まってください——』

「よしっ、いこうか、比企谷っ！」

「おう。行くか、平塚」

互いに顔を見合わせる。そして、示し合わせたように二人は並んで歩き出した。

雪解けとは無縁の、緑が抜け墜おちて土かえに還る哀しい肌寒い季節かもしれない。

しかし、どんなに暑い季節を経ても解けなかった雪は今日この日をもって完全に解けて消えた。

後は、この夢の蕾が花開くのを、今暫し待つだけだ——。

十束： the Blooming of the
Dreams

校舎の灯りは完全に落とされて、遠くから眺めれば総武高校はまるで神隠しにあったように夜の帷の中へと姿を消してしまっているであろう。

あれほど轟轟と燃え盛っていたキャンプファイヤーの燈も熄えて、遺された黒く焦げた丸太の積み木からは名残の灰の芥子粒が穏やかな夜風にその身を委ねている。遙か彼方にある弓張月の月影がその灰の一粒一粒を射抜いて、細雪のように舞っているのは、誠に壯観であった。後片付けをする中で八幡が見たその光景が、今年の総武高校の文化祭が終わったことを如実に物語っていた。

——月の光と、等間隔に置かれた街灯、そして土瀝青の上に縹渺たる黒の轍を残して通り過ぎていく車のヘッドライトが照らす東京湾沿いの片道三車線の大通りの脇の歩道を、付かず離れずの距離感で、どちらが先導するわけでもなく、八幡と平塚は二人並んで歩いていた。

物を少々運ぶだけの文化祭当日中に行う簡単な後片付けを終えて、二人は帰路についていたのだ。

東京方面へと進んでいるため左手には、この目からは茫洋に見える東京湾の海が広がっていて、耳を澄ませば直ぐ隣の海辺にあるテトラポットに打ち寄せているであろう潮騒が微かに聞こえてきた。

目的地の駅までの道は宅地を抜けて海岸から離れていくので、海沿いの道を通ることはない。つまり、二人は最早遠回りどころか、目的地から遠くに離れているのであった。しかし、二人はこの道を自然と選んでいたのである。

——暫く歩くと、花見川の河口に架かる立派な橋梁——美浜大橋

に差し掛かっていた。

二人は眺望を楽しむ為に少し柵が彎曲して突き出している場所
で立ち止まる。河口に向かった漣は、川の流れに押し返されて、儂い音
を立てて消えていく。潮の匂いが満ちる世界の中で、海岸線に沿うよ
うに電飾が、ずっと奥まで弧を描いて繋がっているのは、人工物であ
るというのに殊に幻想的であった。

「ほれよ」

「おつ、ありがとう、比企谷」

比企谷は途中の自動販売機で買ったマックスコーヒー二本の内一
本を平塚に手渡して、手元のもう一本のプルタブに指をかける。

開けた缶を左右に揺らして香りを立てると、匂いだけで毒されそう
な甘さが伝わってくる。

そして、久しぶりのそれを嘍ると、——やはり物凄く甘かった。

「久しぶりに飲んだが、殺人的に甘い……。でもすごく美味しいな、比
企谷」

「ああ、そうだな」

マックスコーヒーの甘味を存分に嗜み、あつという間に中身を一
滴残らず空にした頃。所々剥げ落ちて錆を感じる鉄の欄干の真下に
置いてあるスクールバッグの横にその空き缶を置いて、房総半島の方
へと向かう灯りもない遙か遠い水平線の先を眺めるように八幡は腕
を置いて寄りかかった。間もなく飲み終えた平塚も做うようにして、
空き缶を下に置いて八幡の隣に寄りかかっていた。

「——文化祭も終わっちゃまったな」

「ああ、そうだな。約束をすっかりすっぱかしてくれた誰かさんのせ
いで、今年は全く楽しめなかったがな。一緒に見たかった劇とかあつ
たのになあ……」

顔を横に向け、じとつと不満が露わになっている目で睨みつける平
塚に、八幡は肩を窄めた。

「うっ……」

「必死に練習してきたお弁当も食べる人がいないから、結局作れな
かったしなあ……」

「ゆ、許してくれ……」

「とつくに許してはいるさ。でも、約束は約束だ。しょうがない。だから、後でしつかりと針千本飲んでもらうしかない」

「やっべえ……、俺死んじゃうじゃん……」

魂が抜けていったように声が萎しぼんでいく八幡を見て、平塚は声を上げて笑っていた。

「あははっ、冗談だ。こうなってしまったのはお互いのせいなのだからな。君も針千本飲むなら私も飲むしか道がなくなってしまうー！」

「……いや、でもこのまま許されることになっちゃうのは、冗談抜きで俺自身が納得できないな。やっぱり約束を破った大きな原因は二週間お前と目すらも合わせないようになした俺にある。何かしらの罰は受けるべきだと思う。……でも針千本飲むようなことはできねえから、できればもう一度チャンスが欲しい。つまるところ、代わりに別の約束をして欲しいんだ。今度は絶対に守る。破ったらそれ相應の罰を受けるつもりだ」

八幡の角張って語る様子を見て、平塚も籜たがを閉めたようにその声音を低くして、芯が通ったものへと変えた。

「そうか、君がそう言うのなら分かった。で、その代わりに約束は何だ？」

その約束の内容は、二人で舞台ステージの上で踊ったあの瞬間に、八幡は熱に絆ほどされながらも決めていたのだった。

それを、今、伝える。

「——来年の文化祭は二人で楽しもう」

「ああ、そうだな。来年こそは二人でだな。約束だぞ。今、言質げんち取ったからな」

前科一犯の男のことを信用ならないのか、平塚は僅かばかり表情を崩して、「絶対だぞ」と八幡の肩を人差し指で執拗しつように小突く。

——だが、彼がここに結ぼうとしている約束は、それだけでは到底足りなかった。

「いや、来年の文化祭だけじゃない。いつもの昼休みも、来年の体育祭も、受験勉強も、映画も。そして、高校卒業した後も二人で色んなと

ころ行きたいし、できる限り一緒にいたいと俺は思ってる。カップルコンテストなんかもどうだ。来年からはディフェンディングチャンピオンじゃねえか」

八幡は話している途中からさすがに照れくさそうに頬を二、三度掻きながらも、約束という体をとった青写真を描くと、平塚はその切れ長で魅惑的な双眸を丸めながら彼の顔を見つめて、固まっていた。

「……まあ、とにかく、今日の分をちゃんと埋め合わせるために、これから一年、いや何十年ずつとかけての約束だ。……何十年はさすがに重すぎると思うかもしれないねえが、でも、俺はそうしたい」

「——待つて待つて。ねえ、比企谷、それって……」

「正直、キャンプファイヤーの時もう伝えてしまったようなもんなんだが……」

鼓動が五月蠅い。喉から漏れ出てしまっているのではないかと思うほど、和太鼓を打った時のような一打一打に重たく染み入る響きと音がその鼓動にはあった。

こんな鼓動を人生で味わうことはないと思っていた。

しかし、今確かにこの胸で鳴っている——。

——失敗する可能性がある。分岐点が無数に設置されてはいるが引き返しのつかない人生という道において、嘗ての彼では、ただその一点で絶対に避けていた諸刃の剣と言える道であった。更に、狷介孤高を気取っていた彼は、この道を選ぶことは尚更無かったはずである。

だがある日を境に募りに募って、今では一言や二言では語り尽くせないほどにまでなった彼女への膨れ上がった想いが、為人や理性を超えて雪解け水と混ざって今にも外へと溢れようとしている。

更に、この胸にある確かな希望が、この目に映った光彩陸離の彼女の笑顔が彼の背中を一押しした。

生来の性分という赤信号が点つていたとしても、八幡はその道を進むのだ。その上、たとえトラウマという暴風雨が吹き荒れていようとも、悪意という炎が身を焦がしに来ることがあろうとも、もう止まることはしない。

——覚悟は決まった。ただ一秒でも早く、長く平塚の隣に居るために。

八幡は深く深く息を吸った。

そして、目を瞑ることなく、真っ直ぐ彼女を見て、告げる。

「——平塚静さん、好きです。俺と付き合ってください」

心臓が涸れ涸れになりそうなほど叫んでいる。言い切った後に、目を閉じてしまいそうになるが、固い覚悟で不安や惑いを振り切って、ただ愛しいその人を見つめていた。少しでも多くこの想いが伝わるように。

しかし、目を背けたのは平塚の方だった。

「——いいのか……？」

「へっ……？」

その予想外の挙措と返答に八幡は、素つ頓狂な声を漏らしたが、平塚はいたって真剣で、そしてどこか思い詰めた様子でいた。

「……………私なんかでいいのか？」

平塚は、まるで黒々とした影の中へと逃げ込むように足元を見下ろして、自分自身で否定するように大きく頭を横に揺さぶる。

だが、八幡は止まらない。

「……………ああ、平塚がいい。平塚じゃなきゃいやだ——」

「……………でも、私が臆病すぎるせいで今日まで君を傷つけてしまった。それだけではない。これからも関われば関わるほど、きっと君に私の醜いところを見せてしまう」

「臆病で傷つけたところは俺も一緒だ。ていうか、俺なんて小町にも、大磯にも秦野にも背中押されたのに、結局話しかけられなかったんだぞ。それに俺だってこれからも平塚に醜いところ、情けないところ、見せることになると思う。だから、どんな平塚が醜いと思うところで俺は笑って受け入れたいし、平塚には俺の醜いところを笑って受け

入れて欲しい」

「でも、実際、今まで私の中身を見た人は、遅かれ早かれ皆、私のこと……。だから君も、君ですらもいずればっ——！」

声を荒らげて、頭を振り上げた平塚の瞳の中に宿やどっているのは、不安、不信、諦念ていねんであり、きつと彼女が何時いつかの雨降りの日に言った深く心の底へと根の張った醜いと自蔑じべつする花々の姿なのであった。

だが平塚は全く完璧などではないのは、八幡はとうに知っている。人並に悩む癖に一人で抱えてこんでしまう不器用さがあつて、他人を簡単に動かす癖に自分を変えられない内弁慶うちべんけいで、きつと八幡と同じぐらいの小心者であることを彼は知っている。他にも醜いと彼女が卑いやしむ花を咲かせているのかもしれない。

でも、だからこそ、平塚が愛おしい——。

そして、八幡は力強く断言する。

「——それは、他の奴らに見る目がないだけだ」

——今こそ、八幡が男らしく、乙女の秘密の花園に一步踏み込んで、そこで花々に囲まれて蹲うずくまつて怯おびえている平塚に手を差し伸べて、外へと引つ張り出す時だ。

そう八幡が断言した時、平塚は一瞬はつとした顔をする、すぐにその内側に差し伸べられた手を意固地いこじになつて払い除けるように俯うつむいた。しかし、八幡は怯える少女に手を差し伸ばしたまま、一瀉千里いつしやせんりに語り始めた。

「平塚は、なにか成し遂げるために超努力するし、でも逆に一人で抱え込みすぎて、ぶっ倒れちまう不器用なところもある」

——それだけではない。

「男気あつて格好良いところがあると思えば、ときおり凄く女々しくなるところもあるし」

——それだけではない。

「頼り甲斐があつて打たれ強いのかと思えば、守りたくなるような弱

いところもあるし」

——それだけではない。

「自分の好きなことをあんな楽しそうに語るし、俺の話を楽しそうに聞いてくれる」

——それだけではない

「面倒見がいいと思えば意外と抜けてるところだったり」

——それだけではない

「背中押して人を変えることができるくせに、すごい自信がなくて臆病な可愛いところだったりもある」

——それだけではない……

「……限がないな。確かに平塚の中にはまだ俺に見せてないことがたくさんあるかもしれない。さすがに平塚のこと全部知ってるなんてこれっぽっちも思っていない。」

でも、今日まで俺は平塚のことを知れば知るほど、好きになっていってるんだ。平塚は醜いと思ってるかもしれないところも俺にとっては所謂痘痕も鬢えくぼってやつで、かけがえのない魅力なんだ。きつと、これからもお前のことを知る度にもっと、もっと好きになると思う。だから他の奴らの見る目が微塵みじんもないだけだ。まあ、俺からしたら逆にありがてえかもな」

八幡のらしくない気障きざな言葉に堪たまらなくなったのか、顔を撥ね上げた平塚の頬は、今日見たあの富士の山の袂たもとへと沈んでいった茜色あかねの夕陽とは比にならないほどの真紅しんくに染っている。

「わ、分かったから、それ以上はやめてくれっ！ 押揶からかうつもりなら、なっ、殴るぞ！」

「そういう案外照れ屋さんなところも追加だな。流石に殴るのだけは大いぶマイナスだが……。それに俺は平塚を押揶うつもりなんて毛頭ない。本気で俺が思ってる事だ」

「うう……」

そうしてぬばたまのように鮮やかな黒をした艶つややかな横髪で顔を隠して羞はじらう姿も、途方もなく可愛く思えてしまうのは、八幡が罹患りかんしてしまった恋の病故だろうか。

その暖かな感情に浸りながら、また八幡は口を開いた。

「——平塚、俺はずつと間違えてた。友達も作れなかった。それで馬鹿にされた。他人ひとを好きになれなかった。それなのに無理やり他人を好きになろうとして、余計、周りから馬鹿にされて勝手にトラウマ作って、他人が怖くなつて、鬱ふさぎ込んで。」

多分平塚に出会えてなかったら一生このままだったと思う。でも平塚と会ってから変わったんだ。

俺と友達だつて言ってくれて、本当に嬉しかった。

俺といることが楽しいつて言ってくれた時、ずつと胸の中にあつた黒い靄もやみたいなもんが消えた。

俺の醜みにくいところを見ても笑つて受け入れてくれた時、本当に救われた。

他人と喋るのがこんな楽しいとは思わなかった。他人とこんなと一緒にいたいと思えるようにならなかった。この人の為に色んなことをしてあげたいと思えるようにはならなかった。他人のこともつと知りたいたいと思えるようにはならなかった。

……だからその分、平塚が隣からいなくなるって思った時は、すごく辛かった。生きてきた中で一番辛かった。胸が延々と締め付けられて、痛くて、だから口ポツトみたいにも何も考えようとしなくて、何も感じようとしなくて、生きた心地がしなかったんだ。

俺の人生で多分こんなに隣にいて欲しい、離れないで欲しいと思う人はもう絶対に現れないから——」

想いを成なる丈言葉で紡いで、ぶつけて、また彼女の双眸を見つめた。八幡を見つめ返す淡墨色の虹彩にはもう花々の姿は無く、どこまでも透き通るように光っていた。磨とがれた紅玉べにだまのように深々たる紅に上気したままの頬は、殊更可愛らしさを胸いっばいに充みたした。

そして、八幡は改めて実感した。

——やっぱり、俺はこの人のことが……………

また、もう一度深く深く息を吸った。渺渺たるこの思いが全てその短い言葉に乗って、彼女に届くように。

「——平塚静さん、好きです。俺と付き合ってください」

鼓動は大波打って、今にも堤防を壊していくように高鳴った。でも目は一瞬たりとも離さなかった。少しでも多くこの思いが伝わるように。

先程とは違い、平塚も八幡の眼を見つめていた。

だが、待てども返事は返ってこなかった。口を開く様子もない。

それどころか、八幡が見つめる平塚のその瞳には、確かに彼の姿が映っていたが、それが次第にぼやけていって見えなくなってしまうた。

やがて、平塚は鼻を少し啜り出したかと思えば、ほろりとほろりと金剛石の輝きを帯びた大粒の涙を落として始めていた。その二度目の思わぬ反応に、最初は慣れない気障な振る舞いをして最大限格好つけることができた八幡も、いよいよ混乱して瞳孔を右往左往と動かす。「……え、これ、ダメってこと？ 泣かせるほど嫌だったのか。うわっ、最悪だ。しにた——」

その瞬間だった。

八幡の肩には、彼女の手が置かれ、目の前には長い睫毛があつて、頬には秋宵の寒さで冷えた鼻先が当てられていた。目前の閉ざされた瞳の眦には金剛石の如く光っているものが見えた。

そして、彼の唇には、今まで感じたことのない、余りにも柔らかく、茹だるほど生温かく、蕩けるように甘いものが優しく触れていた。

——突然、平塚との距離が○になったのだ。

それはほんの一瞬のことであった。

すぐに平塚はさっと後退る。

八幡は目を白黒させて、慌てて口元を手で抑えた。

「平塚、今の……」

「なんで、こんな時だけ君は鈍感なんだ。これは嬉し涙というやつに決まってるじゃないか……」

「もうっ、馬鹿っ……」と漣と共に消えてしまいそうなしおらしい声で呟いた。

そして平塚は潤んだ目を細めて、八幡だけに向けて、柔和に微笑む。

「私も、比企谷八幡くんが好きです。私でよければ付き合ってください——」

—— 軀が震える。

—— 心が震える。

—— 命が震える。

声にもならない叫び声が全身に轟いた。熱で沸点を越えた血潮が全身を光の速さで迸った。

—— 刹那、本能に突き動かされたように八幡は勢いよく平塚の軀をきつく強く抱きしめていた。彼女の軀はとても柔らかくて暖かくて、でも華奢で、そして少し顫えていた。彼女の馨しい香りが、鼻腔を擦り、より理性を蒸発させていく。

程なくして平塚もそれに応えるように、八幡の背中にきつく腕を回した。胸元を感じる二つの生命の鼓動は、どちらも早鐘を打つように速く、その一拍一拍が幸福感を全身に運んでいた。

八幡は愛しいこの人をもう二度と、絶対に離さないように、更にきつく抱きしめると、平塚も同じ様にきつく抱き締めてくる。

「比企谷、好きっ……。比企谷、好き……。好き……。好き……」

確かめるように、届けるように、吐息を多分に含ませた猫撫で声で何度も何度も、平塚は八幡の耳元で愛を囁く。今まで堰き止めていた想いを、一気に放流しているようにも聞こえた。

愛しい人に、このようにされては、当然八幡も溢れる激情を抑えることはできなかった。

「俺も好きだつ……、平塚つ……！」

きつく回した腕を解いて、平塚の肩を掴んで、少し引き離す。

二人は幾許いくばくか見つめ合った。恍惚こうこつとしながら、熱を含んだ目は、月光と街灯の灯りを映して燃えたように艶なまめかしく光る。

言葉もなく、合図もなく、ゆっくりと揃って目を閉じ、顔を寄せた。そして、二人はまた口付けあった。

温もりを求め合うように、愛を確かめ合うように、永く永く口付けあった――。



「……夢みただいだ」

「ああ、俺もだ」

晴れて恋人になつた二人は、この橋の下にある検見川けみがわ浜の手前にある緑道へと下りていた。そこにあつた背凭もたれのある木製のベンチに腰を下ろして、肩を寄せあつている。平塚はしなだれるように八幡の肩に頭を乗せていた。しなやかな女の指と節くれだつた男の指を絡めるように固く結んで、二人はひたすら甘い雰囲とうぜん気に陶然と酔い癡しれていた。

「あつ、そうだ。ちよつとすまん、平塚」

「えっ……っ？」

何かを思い出した八幡は突如、固く結ばれた手を解いてスクールバックの中を漁っていた。そして取り出したのは、今朝パンさんのストラップと共に抽斗ひきだしから持ってきた、赤リボンで口を結ばれた花柄の入った小さな紙袋であった。

突然手が解かれ、良い雰囲気おのに自ずから水を差してきたことに納得がいかないのか、平塚は可愛らしく頬を膨ふくらませて、むすつとした顔で八幡に訊たずねた。

「むう、何だそれは？」

八幡は、その紙袋を平塚の目の前に差し出した。

そして微笑を湛たたえて告げる。

「——平塚、誕生日おめでとう。受け取ってくれ」

「え……」

突然の祝福に一驚いっしょくしょうを喫きつしている様子の平塚は、八幡から差し出されたそれをおずおずと受け取って、その紙袋を目を丸めながら眺めていた。

「うそ、ありがとう……。でも、なんで私の誕生日……。あつ、ツルと桜か……。いや、でも、ツルと桜に教えられたとしても、今日中に買うのは無理なはず……」

「七夕のカップルコンテストの受付する時、エントリーシートに生年月日書いただろ。あの時見てたから、買ってみたんだ。サプライズにしたくて、ずっと言っていなかった」

「そういう事なのか……。きちんと君は私の誕生日、覚えていてくれたんだな」

「そりゃあ、他の誰でもない平塚の誕生日だし。……その、あんま嬉しいかねえかな。正直迷ったんだ。平塚、誕生日祝われたくないって言うってたから」

平塚は首をとりわけ大きく横に振り、口角を大きくあげた。

「ううん、嬉しいっ……！ おかしくなっちゃいそうな程凄く嬉しいっ……！ 私、こんなの初めてだから知らなかったんだ。好きな人に祝ってもらえるのは、こんなに嬉しいのだなっ……！」

八幡は首をとりわけ大きく縦に振り、口元を朗らかに歪ませる。

「その通りだ。好きな人に誕生日を祝ってもらえるのは嬉しいんだ。ようやく平塚も気付いたか」

「うんっ！……ね、比企谷、早速開けてもいいか？」

「ああ、勿論だ」

平塚はその口に結ばれた赤リボンを解いて、小さな紙袋から中身を取り出す。

それは、灰色のケースで、彼女はその蓋をゆつくりと開けて、また目を見張っていた。

「え……、これ、ネックレスじゃないか。しかも、これ、あの時のフラワーブーケの……」

八幡は照れくさそうに、襟足の辺りを乱暴に掻いた。フラワーブーケネックレス——これは、二人で幕張へと映画を見に行った時に、アクセサリーショップで平塚が試着したものであった。

「……やっぱ、こういうのは少し重かったか。でも、あの時の平塚、すっげえ綺麗で可愛かったから、また見てえなつて」

また平塚は首を振る。

「ううん、すっごく嬉しい！でも、これ高かっただろう。こんな高いもの……。ストラップと比べたら……」

「まあ、二万ぐらいはしたけど、ちょうど二万円分商品券あったし、何より俺が付けて欲しいと思ったから、当然の出費だ。だから別に値段とか気にしてくれなくていい。それに平塚から貰ったパンさんのストラップは、俺にとってはそこら辺の高価な宝石なんかよりもよっぽど価値があるから、これじゃ足りねえぐらいだ」

「ふふっ、ありがとう。ねえ、比企谷これ、もうつけてもいい？」

「もちろん、いいぞ」

しかし、平塚はそのネックレスを持ったまま微動だにしなかった。その様子を訝しんで八幡は声をかける。

「ん、どうした？」

「そっ、その、せっかくだから君に付けてもらいたいんだ……」

上目遣いで、そう含羞を頬に添えて問掛けるその姿に、思わず八幡

は息を呑んだ。やがて面映ゆきと愛しさが込み上げてくる。

「あ、ああ、分かった。じゃあ灯りのある方へ行くか」

二人は緑道沿いにある丁度並木と背丈が同じぐらいの街灯の下へと移った。八幡はそのネックレスを受け取って平塚の後ろに回る。彼女の艶やかで街灯にも映えて紫光りした黒髪を丁重に掻き上げて、その細い首に腕を回して、丁度項あたりのところでネックレスの留め金具を留める。

「よしっ、できた」

「どうだ、似合うだろうか？」

八幡が少し後ろに引いて、彼の方に振り返った平塚を見ると、思わず口元が綻んでしまった。

灯りが無ければ闇夜に溶け込んでしまいそうな黒色のブレザーが身体を包む中、ハート型の輪の中に一輪の薄桃色の花が配われた可愛らしいネックレスが、目立ちすぎずも平塚の可愛さを十二分に引き立てて、うつすらと覗かせる白皙の首元で淡く輝いていた。

そして何より、今、平塚が見せている一笑千金の笑顔に、とても良く似合っていた。

「ああ、やっぱりすっげえ似合うわ。残念ながら文句なしだ。褒め言葉しか浮かばねえよ」

「ふふっ、ありがとう。本当に嬉しい。一生大切に作る、絶対に作る。どんな時も絶対に肌身離さないから」

そのネックレスを掌にちよこんと乗せて、慈しむような柔らかな眼をそれに向けて、平塚は言った。

「え、学校でも付けるの恥ずかしくない？ それに色々、探られるの面倒でしょ。あとなるべく風呂場とかでも外してね、それ白金とかじゃないから、駄目になっちゃうらしいし」

「う、うん……。急にそんな現実的なこと言わなくてもいいじゃないか……」

二人で顔を見合わせる。

そして、どちらからともなく吹き出した。

「ふふっ……」

「ぶつ、あははっ……！」

暫く笑つて、平塚は目じりの涙を拭^{ぬぐ}っていた。

「はあー、笑った笑った。あつ、そうだ、比企谷」

「ん、どうした、平塚？」

「面倒くさいだろうが、私と付き合う上での五箇条いだろうか？」

「何じゃ、その五箇条の御誓文的な。まあ別にいいけど。どんと来い」

八幡は平塚の全てを受け止める覚悟ができています。

平塚は、まず一つと、意気揚々と八幡に見せつけるように左手の人差し指だけを立てる。

「私、多分すつごい我俣^{わがまま}だぞ。君が想像しているよりもずつとな」

「ああ、大丈夫だ。お前の我俣片っ端から付き合っっていくわ」

即答する八幡を見て、立て続けに中指を上げてピースサインを作つて、二つと声高に言う。

「記念日とか沢山作るし、一緒に祝ってくれなきゃすぐ拗^すねるからな」
「そりゃあ、大変かもな。とりあえず今日は平塚の誕生日兼交際初日で一年で一番の記念日決定だな。忘れた日にはとんでもない折檻^{せつかん}だな、こりゃ」

「ああ、その通りだ」と言つて、即座に薬指をあげる。

「三つ！ 他の女の子と仲良くしてたら妬^やくからな」

「おお、束縛……」と八幡は思わず声を漏らした。

「とは言つても、俺だつてお前が他の男子と仲良くしてたら妬く。つていうか、俺の方が恥ずかしいぐらい今日まで嫉妬しまくってたわけだしな。だから、むしろ心配なのは俺の方だ。正直言えば、あんまり他の男と二人きりとかで喋つて欲しくないし、体育祭の時みたいにツーショット写真を撮つても欲しくないし、ボディータッチとかもできればして欲しくない。でも、平塚の都合もあるのは知ってるし、きつとこんな束縛されたら嫌な気持ちになるだろうから、強制はしたいとかは全然思つてないんだが……」

「——いやっ、もうしないっ！」

平塚は恰も宣誓^{あてが}するかのよう^{せんせい}に、断言する。

「事務連絡とかでどうしてもせざるを得ない事はあるかもしれない

が、それ以外はしないっ！」

「……そうきつぱり言ってくれるのはすげえ嬉しいんだけど、さすがに付き合いかもあるんだから厳しいだろ。別に無理してほしい訳じゃないし、足枷あしかせにもなりたくない訳じゃないんだ」

「いいんだ、私は比企谷さえ傍にいてくれればいいから。もう恋人の君が少しでも嫌がることはしたくない。たとえ他の人達に嫌われたとしても、そっちの方が断然私にとっては嫌だから」

「そうか……。うわあ、めっちゃ照れくせえな……」

慣れ親しんだ歯きぬに衣着せぬ物言いきぬで恥かずかしげもなく平塚に言われ、機嫌斜めならずであるのと同時に顔が勢ほいよく火照ほってゆくのを感じて、八幡は思わず空を見上げた。

「……ま、まあ、だから、これは必然的に異性の知り合いが多い平塚を縛る俺のための決まりみたいになっちまうよな」

「ううん、そんな事ない。そ、その私だって、今日、桜が比企谷のメアド持っただけで、すごい怖い顔になってしまったから……。私だってこれからはできればそういうこととして欲しくないと思ってる……」

「ははっ、俺ら似たもん同士みたいだな」

「……うんっ、どうやらそうみたいだなっ！」

次に小指もあげて、四つ。

「二人で色んな所に行つて、思い出いっぱい作ろうな！」

「当然だ。色んな所行つて、楽しい思い出沢山作るぞ」

そして、最後に親指を立てて五つ。

「この先、ずっーと私の隣にいるんだぞ……」

「ああ、勿論だ。他の奴らねたに妬まれようとも嫉そねまれようとも、極論平塚に嫌だつて言われても我が物顔で居座つてやる」

八幡の答えに平塚は満足した様子で相好そっこうを崩すと、今度は小指だけを立てて、彼の前に差し出した。これが何を意味するかは言葉にせずとも彼にはすぐ分かった。

「さつきしてなかったからな」

「そっういやそっうだった。完全にこのこと頭から飛んでたわ」

八幡はそれに応えるように、小指を立てて、差し出された平塚の小指と絡ませて、ぎゅつと結んだ。八幡のよりも随分と小さくて弾力のあるもので、絡めている内にじわりと温かみが伝わってくる。

「指切りげんまん嘘ついたら、針千本のーますっ！」

「ゆび……………、ってあれ……………」

最後の掛け声の前で平塚は口を噤んでいた。

「どうした、平塚？」

「最後の確認だ。これは一生物の約束だからな。ぜーったいに破るんじゃないぞ？ 破ったら、今回は千本増量で二千本だからな」

平塚は悪戯っぽく笑う。

それに八幡は深く頷く。その腐り眼に覚悟を据えて。

反故ほごにしてしまった約束を結んだ左手の小指。

——この指に今、新しく果てのない海誓山盟かいせんさんめいの約束をここで結ぶ。

「ああ、今回は絶対に破らない。一生かけて守り通すわ——」

「よしっ……………！ じゃあ、行くかつ！ せーのっ！」

二人で声を揃えて、

「指切りげんまん嘘ついたら、針二千本飲ーますっ！ 指切った……………！」

そして、二人は絡めた指を離した——。

——指切りを交わした後、二人は目と鼻の先の砂浜——検見川浜へ足を運んでいた。見渡す限り二人だけしかない砂浜は、まるでこの世界にこの二人だけしかない錯覚させた。

浜辺に寄せては消える白波。絶えることなくやって来てはまた消えていく。しかし、波打ち際に消えていった波の跡が確かに残っていた。後ろを振り返れば、二人の足跡が克明こくめいに砂浜に刻まれている。

そして、打ち寄せる波が靴に被らない砂の色の境目に二人横に並んで立っていた。

「綺麗な場所だよな」

「ああ、俺もそう思う」

「……ねえ、比企谷、早速、最初の我俣言っていいだろうか——？」

「何なりと。ま、俺ができる限りのことだけだな」

勿体ぶるように少し間を置いて、平塚はその我俣を口にした。

「名前で呼んで………」

「え、そんなんでいいのか」

「そんなので良い。いや、そんなのが良い。……というか、これから先ずーっと、ず——つと我俣言い放題なんだろう？」

「ははっ、そうだな。今度からずっと静の我俣聞いていかなきゃいけないな」

「そうだそうだっ！ これから、——つて、今、静って」

「そりゃ、名前で呼べ、つて言うから」

「むう、私はもつとロマンチックにだなあ」

「ははっ、さすがに俺には難しかったな。じゃあやり直すわ」

八幡は、こほんと咳払いをして、口元を綻ばせる。

そして、とびきりの想いと愛を言葉に込めて——。

「——静、大好きだ」

「うんっ、私も八幡が大好きっ……！」

両手を拡げて抱きついてくる静を、八幡は包み込むように抱き留めて、かけがえのない温もりを確かめ合って、また耳元で何度も何度も愛を口吟み合う。

間違はなく今、二人の夢の華が煌びやかに咲き誇っていた。彩り鮮やかな千紫万紅の花弁が二人を祝福して、それを支える立派で屈強な金剛不壊の茎根が二人を讃えるようにあった。

そして、永遠に枯れることのない、悠久の幸せを約した夢の華は、二人の中に更に深く深く根を下ろしていくのであった——。

「ね、八幡っ……！」

「どした、静？」

「生きてきた中で、今が一番、——幸せだっ……！」

純白で覆われた稜線りょうせんのように白波が何処までも連なる茫洋とした海と、幽かそけく照らす下弦の弓張月。弓なりを描く湾岸の電飾が果てなく延びる幻想的な光景を背にして、咲き誇った静の笑顔は、裏表もなくて、何の穢けがれも汚れなくて、何よりも輝いていて、何よりも澄んでいて、何よりも可愛らしくて、何よりも美しくて、何よりも愛しくて、そして、何よりも今まで見た中で一番の笑顔であった。

——たった今、八幡は新たな夢を見つけた。

この世界で一番愛しい人を、今以上に幸せにするという終わりなき夢を——。

——Continue to the Epilogue……

——壁面が白を基調としているその室内は、窓から差し込む陽の光によって、より一層、白の純度を増していた。

部屋の中には、絹の手織りだという精緻な文様が配われた格調高いペルシヤ絨毯が敷かれ、陽光が文様の一つ一つを彫り上げ、その華やかさを際立たせていた。化粧台には、日常生活では滅多にお目にかかることのない奢侈な化粧品が並べられていて、繊細で仄かな香りを漂わせていた。

その部屋の隅にあり、見るからに値が張りそうな革製の背凭れが鉤留めされた白銀のソファに腰を下ろしている純白の衣装を纏っている男女は、何やら楽しげに談笑している。日脚は二人の左手の薬指にまで伸びて、その指に詰められた銀色の指輪を煌煌と光らせていた。

耳を傾けると、どうやら二人は思い出話に花を咲かせていたようであった——。

「……確か、そんな感じだったな、あの時は」

「このフラワーブーケももう一〇年か……」

静は首元のネックレスを掌の上にのせて、愛おしい目でそれを見ている。その淡く光る花には所々細かな傷みが入ってしまったているが、却ってその傷の一つ一つが、二人で積み重ねてきた思い出の一言なのであり、このネックレスは思い出の結晶なのであった。彼女はそこに刻まれた年月に思いを馳せているようでもあった。

「やはり、文化祭の日のことは昨日のように思い出すな」

「静、それは言い過ぎだ。この一〇年もっと色々あったら」

「ふふっ、そうだな。楽しい時も喧嘩した時も、辛い時もたっくんあったな」

「でも、確かにあの時ほど、辛くなったのは今のところねえな」

釘で打たれたような鋭く激しい胸の痛みを、八幡は未だに鮮明に覚

えていた。生きた心地のしない——死んだような生活を送っていた二週間程の日々のこともだ。

「私もだ。もつと素直に言えれば、すぐに解決したんだけどな」

「まあ、まさか俺が静と仲良くしてたことで嫉妬を買って虐められかけてたとは思わなかったからなあ。裏サイトに載ってたとか、やつは今考えてもゾツとするわ」

「でも、それも交際し始めてから、綺麗さっぱりなくなってめでたしめでたしだったな！」

「それは次の登校日に静が堂々とクラスの中で交際宣言してくれちゃったからだろ。くつそ恥ずかしかつたぞ、あれ」

八幡は、若かりし日の一幕を思い出して苦笑する。

静は文化祭の次の登校日、普通であれば曖にも出さないとところを、もはや見せびらかすように一日中八幡の傍にべったりくっついて過ごしていたのだ。そして当然、静の変わり様にクラスメイトが気付かぬはずもなく、憶測が飛び交い始めた。その上、折もあるうに二人が優勝した七夕祭りで行われた長生村のカップルコンテストについて記された会報が偶然発掘されたようで、より騒ぎに拍車をかけていた。

ある程度その噂話が人の耳朶じだに触れた後の昼休み。ベストプレイスに向かうために八幡に声をかけて教室を出ようとした静に、同じクラスの女子がまさか付き合っているのかと尋ねてきた時、「ああ、私は八幡と付き合ってるぞ！」と静は何の躊躇ちゆうちよもなく即答して見せたのだった。

静がそう言い放った後の教室の中の異様などよめきは、八幡の耳に今でもこべりついている。

しかし、静が大つぴらに言っただけの事では、比企谷嫌いに校内の評判が傾くと思いきやそうでもなかった。八幡に対する静の好意が完璧に露顕ろけんしてしまったので、諦めざるを得なくなったということに加え、高嶺たかねの花を手繰り寄せた地底人とも言うべき八幡に良い意味で興味を持つ人が増えたことで、八幡が覚悟していた比企谷嫌いの風潮はすっかり薄れていったのだった。

「あれは若気の至りってやつだ！　しょうがないじゃないか。駄目って分かってても、抑えられないぐらい君と付き合うことが出来たのが嬉しかったんだ」

「まあ、当然悪い気はしなかったし、結果的にはあれで良い方向に進んだからな。でも、あの時は常に背後を警戒してたからなあ。数名の男子生徒からの凍こてつく波動を常に感じてたし、気抜いたら思わぬところからぐさりと刺されるんじゃないやねえかって」

「あははっ、確かに修学旅行が終わるまでは良く後ろを見ていたなっ！」

「いや、まじで笑い事じゃねえから……。でも今となっては良い思い出っちゃ、思い出かもな。まあ、それはそれとして修学旅行でさ——」

八幡は、丁度静が今言った恋人として迎えた京都の修学旅行の話を切り出した。そして二人は、また、思い出のアルバムを捲めくって、二人の歩んだ足跡を辿たどって、長らく追憶を愉たのしんでいた——。

——一〇年分にも及ぶ分厚い頁の束を綴とじて、二人の思い出話が幕を閉じた。壁にかけられた趣おもむきのある木製の鳩時計が指し示していた時刻からすると、凡おおよそ五分後に次のプログラムが始まる予定であった。

「八幡、次は何話そうか」

「ま、話さなくてもいいんじゃないやねえの。もうすぐお呼びもかかるだろ。後はのんびり過ごさねえか」

「嫌だ、八幡。何か話題出して」

「ええ……」

気怠けだるげな八幡の反応に、静は空木うつぎに咲く卯うの花のような白さを持つた玉の肌をむくりと膨らまして、八幡を睥睨へいげいしていた。

「むう、仕事のせいで君と話す時間なかなか作れないことが多いから、沢山喋しゃべっておきたいのに……」

確かに静の言うように、付き合い出してから二人は造次ぞうじてんばい顛沛にも離れることはなかったが、第一志望が異なり別々の大学に進学してからはそういう訳にもいかなかったのである。

——そのため八幡は相当の努力をしたのだ。偏ひとえに努力といつても千差万別であるが、彼が特に注力したのは就職活動である。

高校二年の麗うららかな春の比ころおい。八幡は起伏もなく単調に過ぎ去る日々と、過去の経験と現状に起因する底知れぬ厭世えんせい観を抱いていたことから、働くことに意義をつゆも見い出せず、将来志望する職業は専業主夫うつせいぶと嘯うそいていた。

しかし、その桜の花弁はなびらが吹雪ふぶく春に、一人の少女と出会ってから、八幡の考えが根元から変わった。それ故、働く事の意義——平塚静というこの世で最も愛しい女性を幸せにすること——を彼は明確に見つけ出したのであった。

静とは別の大学に進学した後、キャンパスライフうつつに現を抜かして遊び惚ぼうけている同級生を横目に、就職活動をする上で有利に働く資格試験の勉強を行ったり、資格に関するサークルにも出向き、そこで同様の志を持つ友人を作ることが出来た。三年時には粗方あらかた志望する企業を絞り、インターシップにも積極的に参加した。

結果的にそれらの努力が実つて、八幡は高校生の自分には夢にも思わなかった誰もが知る名の通った大企業の内定を獲得する事ができたのであった。

だが、就職してから静と同棲どうせいを始めたものの、短期間ながらも地方への出張なども多くなつてしまったのであった。その上、静は国語の教師の道を進んだため、二人の時間が大学生時代以上に見つけられない事が多く、時に擦れ違うことも儘ままあったのだ——。

「まあ、確かにそうだけだよ。取り立てて話すこともねえし、俺は今、この雰囲気しきを肅々しゆくしゆくと味わってたい気分なんだけどなあ……」

渋り続ける八幡に対して、むくれ続ける静だったが、はつと何かを思い出した様子で口を開いた。

「そうだった、そうだった。これは私の我俣わがままだ。君が必ず叶えてくれるという私の我俣だ」

「静の我俣をなんでも聞くって約束したけど、こうもお安く使われるとなあ……。まあ、それこそアニメと仕事の話ぐらいしかねえけどなあ。アニメの話は長くなるから時間足りねえし、それに仕事の話

つつても、俺は相変わらず剛つよしさんに世話になって、びしびし扱しどかれて
いるだけだしなあ」

「あつ、そう言えば、挙式に剛さん来てくれていたな！ 一〇年前から
まさかここまで繋がるとはな」

「言われてみれば、確かに改めて考えるまでもなくすげえことだよ
なあ、この縁って」

——二人が語る剛さんという人物に八幡が会ったのは、内定が決ま
り、入社前に所属先の部署へ挨拶をしに行った時であった。

ずらりと並んだデスクを順々に回って挨拶している最中、遠くのデ
スクの方へと目を向けると、奇妙な既視感を覚えたのだ。目を凝らし
て見ると、見覚えのある鋭い目を携えた強面こわもての顔に、椅子が軋きしんで悲
鳴をあげてしまうほど常人離れしている体格、そして春先であるにも
関わらず日焼けしたような肌黒である男が座っていたのだ。

いよいよ八幡はその男に挨拶をするために彼のデスクに近付いた。
その二の腕や胸の辺りが張っていて、盛り上がったスーツ姿はお世辞
にも似合っているとは言えないだろうが、来た者の背筋を真っ直ぐに
伸ばさせるような厳むかしかな雰囲気は確かにあった。

「初めまして、四月から入社して、こちらの部署で働かせていただくこ
とが決まった比企谷八幡と申します。 一日でも早く戦力となれる
よう頑張りますので、御指導、御鞭撻べんたつの程よろしくお願いいたします」
「こりゃ入社前なのに態々わざわざどうも。俺の名前は足柄剛だ。これから、
よろしく……って、ん……？」

定型の挨拶をした八幡と目が合うと、剛は顔を近づけて眼光人を射
るような目付きのまましげしげと八幡の顔を見詰めて、小首を傾かしげ
た。そして、ややあつて剛は八幡に尋たずねてきた。

「……君って、もしかして、千葉県の長生村の七夕祭りのカップルコン
テストに出た経験はあるか？」

「はい、実は何度か出させてもらっていて、六年前は、多分足柄さんと
一緒に出場していたと思います」

その返答を受けて、剛は「やっぱりそうか！ あの時の君か！」と
機嫌よく声を上げて、八幡の肩をやや痛みを伴うほど強く叩いたの

だった。

剛——足柄剛は、その年の六年前、八幡達が初めて出場した長生村の七夕祭りのカップルコンテストで、競技中に常に八幡の横にいたあの黒光りの筋骨隆々としていた巨漢であった。その身体能力は参加者の中でも比倫を絶して、圧倒的な強さで他の追隨を許さず、決勝戦まで駒を進め、その決勝戦では大きなハンディキャップを負いながらも最後の最後まで八幡と鎬を削ったことも到底忘れ得ぬことであつた。

確かに彼の事は良く記憶に残っていたが、八幡達が複数回カップルコンテストに出場した中で彼が参加したのはその一度きりであり、偶然一度同じ祭りに参加して、対決したという袖が触れ合った程度の多少の縁だと思っていた。しかし、実際はその縁は遥かに強固なものであつて、まさか同じ会社で、更に直属の上司になろうとは思ひもしなかつたことであつた。

その後、顔見知りということ、八幡の教育係を剛が担当することとなり、次第に私的な交流も深まっていき、今では結婚式に招待するまでに至っている——。

二人してその一〇年来の不思議な縁故を沁み沁みと感じていると、静は突然気を落として「……本当は陽菜さんにも来て欲しかつたのだがな」とぼやいた。

陽菜さん——足柄陽菜はカップルコンテストで旧姓の松田陽菜として出場していた剛のパートナーであり、大柄で黒光りした筋肉隆々の巨漢の剛とは対照的な羽二重肌はぶたえの瘦身麗人そうしんれいじんであり、美人薄命びじんはくめいを体現したような儂はかなさと神秘を纏まとった佳人かじんであつた。

存命の人に美人薄命と評するのは無礼極まりない話ではあるのだが、後々、彼女は当時重篤じゅうとくな病気を抱えていたことが剛から話を聞いて分かつた。——先天性の心臓病である。重度な運動は禁じられていたため、二人で負担を分担でき、適度に体を動かすことができるカップルコンテストに参加していたということなのであつた。

そして剛曰く、二人が次の年からカップルコンテストに参加しなくなつたのは、陽菜の心臓病に関する手術が本格的に始まつたからだそ

うであつた。

そのような彼女は本日の二人の華燭の典には訳あつて参加するこ
とは叶わなかつたのであつた――。

ただ静の顔はすぐ霽が吹き飛ばされたかのように晴れやかになつ
た。

「――だが、めでたい事だからな！」

「ああ、とてもめでたい。それに、まさか俺らの結婚した日と被ること
になるとは思いもよらなかつたな」

八幡も、ここまで来ると運命めいたものを足柄夫妻に感じざるを得
なかつたのであつた。

――それは一昨日の金曜日のことであつた。この日は、八幡と静に
とつて一年の中で最も大切な日であつた。静の誕生日兼二人の交際
記念日である。

加えて今年は、交際を始め、そしてあの一生物の約束を交わしてか
ら、丁度一〇年という節目の年であつたのだ。

そして、二人は一〇年目にして、ようやく籍を入れる運びになつた。
長針と短針が揃つて真上を向いた午前〇時の市役所に、共に婚姻届
を提出した。

二人が晴れて歴とした夫婦となつた金曜日の午後。普段の日と変
わらず出勤し、会社の休憩室でマックスコーヒーをお供に静お手製の
弁当を八幡は頬張っていた。静は母校である総武高校で教師として
働いているが、有難いことに毎朝早起きをして八幡のために弁当を
作つてくれているのである。中身は八幡の好物で固められていて、別
に用意されたタッパーの中には可愛らしいうさぎりんごも隅でこち
らを見るように置かれていた。

やはり、今日も今日とて格別に上手い弁当であつた。

頬張る八幡の隣には、コンビニ弁当を食べている上司の剛が居て歓
談していた。

「そう言えば比企谷もようやく結婚か。おめでとう」

「ありがとうございます。まあ、今更感もあるかもしれませんが」

「いやいや、めでたい事じゃねえか！」

「もちろん結婚できて嬉しいです。それに婚姻届出しに行った時は、静は泣き出すほど喜んでくれてました。けど、やっぱ一〇年も一緒だと結婚したからって昨日と今日で特別何か変わったような気はしないですし……。早く結婚すれば、もっと静を喜ばせてあげるようなことできたんじゃないかって」

「まあ、往々にしてそういうものだろ。俺のところだつて長く付き合ってから結婚したし、別に結婚したからって何か大きく変わった訳じゃねえよ。むしろ大きく変わる方が変だろ。二人で長い時間かけて積み上げてきたものが結婚したつてだけで何もかも変わつてたまるもんか。……でも、確実に何かは変わつてるんだよな。例えば――」

そう言つて剛は、机の上に置かれている静お手製の弁当を指差した。

「とうとうその弁当も、今日から正真正銘の愛妻弁当になったじゃねえか」

「……確かに言われてみればそうですね。そつか、これが、俺の初めての愛妻弁当……」

八幡は、思わず口元を綻ほころばせた。

確かに小さいことが変わっているのだ。

「……いいなあ、俺も早く食いてえなあ、陽菜の弁当」と嘆きながら、剛は割り箸で弁当の最後に残った梅干しを摘み上げて、口に運んでいった。

「酸っぱ……。ああ、後、他にもあるぞ。例えば陽菜が電話に出て名前を名乗った時とかな」

「確かに結婚したから、苗字一緒になったんですよね。まだ全然実感無いですね」

「そうか、比企谷はまだか。あの時はすげえぞ。ああ、俺らは夫婦になつたんだなあ、つてひしひし感じるんだ。それですつげえ幸福感に包まれるんだよなあ」

思い起こして少し口角を上げる剛であったが、その時突然彼の胸ポケットから着信音が鳴り響いた。

「おお、なんて言うタイミングの電話だ。もしかしたら噂した陽菜からかもな。じゃあ、悪い、比企谷、少し席を外すな」

「分かりました」

剛はポケットからそれを取りだして、休憩室の外に出た。八幡は、とびきりお気に入りサイズの一口サイズのハンバーグを箸でつまみ上げて、口の中に放り込もうとした時であった。

「本当ですかっ……!?!」

室内にいても五月蠅いほどの大音声おんじやうが扉越しから響き渡っていた。八幡は、一度摘んだハンバーグを弁当の中に戻し、一旦部屋の外へと出た。

「はいっ……、はいっ……」

部屋を出たすぐそこに剛は居たが、やけに神妙な面持ちで、スマートフォンを握る熊手のようにごっごつごつとして太い手は似つかわしくないほど震えていた。

「はい、分かりました。妻の事をよろしくお願いします」

剛の様子は携帯を切った後も変わらなかった。

八幡も話は剛から聞いていたため、何が起きたのか容易に察しはついたのであった。

「陽菜さん、いよいよですか……?」

「ああ……、陣痛じんつうが始まったらしい。早ければ今日中の出産だそうだ」
「じゃあ、剛さん、急いで陽菜さんの元に行つてあげてください。部長には俺が連絡しておきます」

だが、剛は顔の面に神妙さを引き摺ずったまま、まるで独活うどくの大木にでもなったかのようにでかい図体ずうたいを固めて動こうとしなかった。

「どうしたんですか、早く行かないと」

「……やっぱり、いざこの時が来ると結構不安だな。しかも予定日より結構早いんだ。陽菜は確かに心臓の移植手術には成功して、医師にも出産は全く問題ないと言われたけどな……」

「——なら、尚更じゃないですか。陽菜さんが一生懸命痛みに闘つてる時に、剛さんまでそんな顔してどうするんですか。陽菜さんが少しでも安心できるように、明るい顔で声枯れるまで励ましてあげるのが

夫の務めなんじゃないんですか」

「……ああ、そうだな。ありがとう、比企谷。じゃあ、行ってくるわ。色々よろしくな」

「はい、行ってらっしゃい。良い報告待ってます」

八幡は、会社の廊下を駆けていく間もなく父親になるであろうその人一倍大きい背中を見送った。

その日の、午後二十一時。陽菜が元気な男の子を無事出産した、という連絡が剛から届いた。また健康状態も母子ともに極めて良好だったようであった――。

——このような訳で、陽菜はまだ産まれたての赤子と一緒に産婦人科に入院している為、出席できないのである。

「近々結婚の報告も兼ねて会いに行こうな。それに陽菜さんには返さなければならぬ恩があるからな」

「陽菜さんがカップルコンテストの時、剛さんを諭さとしてくれなきゃ、あのデイステイニー行けなかったわけだし、あの世界一大切なパンさんのストラップも静から貰えなかったわけだから……。うしつ、今度、赤ん坊に必要な育児品とかを持ってくか」

「そうだな。可愛い赤ちゃんに会うのが楽しみだ」

「ああ、写真で送られてきた赤ん坊、本当に可愛かったからなあ……」

八幡が昨日送られたまだ目を開けていない産まれたての赤ん坊の写真を思い出して優しそうに呟くと、静はタキシードの袖口を摘んで、物言いたげに軽く引つ張る。

「ね、八幡……」

「ん、どうした、静？」

「私達もいつか、な……う？」

上目遣いで頬を少し赤く染めて恥じらいを帯びて問い掛ける男心を分かっているとしか思えないじらしい仕草に、用意できる返答は一択しかない。

「——ああ、もちろんだ」

八幡の迷いのない答えを聞いて、静は破顔して、ぱあっと明るくなる。

「できれば、俺は女の子がいいなあ。静の遺伝子入ってたら絶対可愛いし」

「もうっ、八幡ってば……。でも、私は男の子がいいなあ」
「それはどうして」

「女の子だと君が溺愛できあいしてしまいそうだから……。そしたら私の事よりも子供のこと優先してしまいそうで……」

「ぶふっ、はははっ……!」

意外外の可愛らしい静の理由に、八幡は思わず吹き出して腹を抱えて笑い出す。

「なっ、笑うことはないじゃないか……」

「いやいや悪い悪い、子供にまで嫉妬する静が可愛すぎてな。いや、でも、待てよ……。確かに男の子だったら……。——やっば、静を取られるの無理だわ。絶対女の子が良い」

「なんだ、結局、君も私と一緒にじゃないか」

「ああ、俺ら似たもの同士みたいだな」

八幡のその言葉を聞くと、静も吹き出して、頤おとがを解いて、目尻に浮かんだ涙を拭ぬぐっていた。

「そんなゲラゲラ笑うことでもないだろう」

「いやあ、何か随分前にも似たような会話があったような気がしてなあ」

「ああ、言われてみれば、確かに俺もそんな気がしてきたわ」

「ぶふっ、あははっ!」

「くっ、あははっ!」

そして、二人して笑っていた。

静の言う通りであった。こうして二人で話して、笑い合っている方が幸せであるのだ——。

「——まだ時間あるな。そういや、そっちの仕事の方はどうだ。海斗かいとの事はまあ、いいとして、あのなんだっけ、雪ゆきが浜はまだっけ……?」

「いや、雪ゆきのしたノ下したと由比ヶ浜ゆいがはまだ」

「そうだそうだ。で、その子達とはどうなんだ。静が鼻屑ひいきにしてるんだろ?」

「ああ、相変わらずとつてもいい子たちだよ。君にも会わせてやりたいぐらいだ。うん、本当にとても……」

静は急に蠟ろうろうが溶けてまもなく消え入ってしまう燐光りんこうのように暗く震えた声になって、その美しい瞳がどこでもない虚空こくうを捉えているように見えた。静のそのような姿は久しく見ておらず、八幡も異変を直ぐに嗅ぎ取る。

「……だから、だからもし一〇年前に彼女たちがいたら、私は君に選ばれなかったのかもしれないな」

その静の言葉には最近芽を出していなかった不安の種子が植うわつていた。

「……静、ちよつとこつちに身体寄せてくれるか」

「え、うっ、うん……」

八幡はしなだれるように身を寄せてきた静の頭を覆う純白のヴェールを少し退とかして、頭を優しく撫で始めた。髪型が崩れないように細心の注意を払いながら、軽く手櫛てぐしを入れてやったりもした。静は抵抗することなく、途中から猫のように目を細めて、それを心地よさそうに受け入れていた。

そして、暫しばくして、その手を止めて、静の見掛け以上に華奢きゃしゃな身体を一度抱き締めた。そして不安を撫で下ろすように背中を摩さすつてから、静の肩をやや強く掴んで、彼女の顔を見た。

透き通るような血色の良い雪の肌はだえに、なだらかな丘陵きゅうりょうを描く整えられた蛾眉がびは殊に彼女の眉目麗しい様相を表象していた。端から切り揃えられた長く反り返った睫毛まつげに、ブライダルメイクを粧めかして際立った陰翳いんえいはいみじくも尤ゆうなるものであった。

このように世界中の誰よりも美しいと思える静の容貌ようぼうの中でも、とりわけ魅惑的な薄墨色うすずみの虹彩こうさいが不安で揺らめく瞳を捉えて、告げる。

「——静が急になんの心配してるか分からねえけど、これだけは断言できる。他の女ひとを選ぶなんて絶対はない。俺は絶対にお前のことを選んでる。他の誰でもなく静しか俺には考えられねえんだ」

甚いたく真剣な眼差しを向けて八幡が言うと、静は植うわつていた不安の種が取れたように愁眉しゆうびを開いて柔らかく笑った。

「……ごめん、八幡。君の気持ちを試すようなことをしてしまった。でも、彼女達を見るとどうしても不安になっしまった。……。だから、君がそう言ってくれるのを求めてしまった。やはり私はいつまで経っても狡すずくて怖おそがりで、臆病おそだな」

「全然いい。やつぱさそういう狡すずくて怖おそがりで臆病おそっていう静の可愛いところが俺は大好きだからさ」

「私もそういう優しい八幡が大好きだ」

少し目を逸そらして、八幡は頬を二、三度人差し指で搔かいていた。

「やつぱ、こういう気障きざな台詞セリフは性に合わねえな。照れくせえ……」

「ふふっ、ねえ、八幡っ！」

「ん、どうした？」

「私のとっておきの秘密、言ってもいいだろうか？」

「このタイミングでか……？ まあ、別にいいけど。知つときてえし」

静は深く息を吸って、そして口を開いた。

「——私、君に出会う前、長い夢を見てたんだ」

「ん……？ それが、どうした」

「その夢は、良い夢だったんだけど、どこか辛くて満たされなかった。だがな、君に会ったことでその夢から醒さめたんだ。そこからはいつも幸せで、常に満たされてて、私にとって最高の世界だったんだ。まるで魔法にかけられたみたいにな」

「……それが、秘密？」

拍子抜けした八幡が怪訝けげんそうに問い掛けると、静は急に顔を朗らかに崩して、高らかに言う。

「ああ、これが私のとっておきの秘密だ！」

「全く、この期ごに及んで言うから、もつとんでもないことだと思ったわ」

「……とんでもないって、例えばどんなことだ？」

「例えば、『私、実は男の娘こでしたっ！』とか」

「ばっ、馬鹿者ばかものっ……。私が男の娘じゃないっていうのは、そ、そ、その、とつくに分かつてるでしょ……」

静の頬はみるみるうちに紅潮し、それは耳の先から、首筋までを朱

色に染め上げていった。その様子を見て、思わず不敵な笑みが八幡から溢れ出た。

「……ふっ、結婚式のウエディングドレス姿っていう、今日限りの恥じらい顔、まじ最高だわ。よし、ちゃんと焼き付けてるよな俺の目。今のは間違いなく永久保存版だ」

「——っ……！　もうっ、八幡の馬鹿っ……！」

刹那、五臓六腑が壊れるような衝撃と共に胴体の内側へと何かが減り込む鈍い音がすると、人から出るはずのない渴いた奇声が、八幡の口から漏れ出た。

直後に八幡は白銀のソファから崩れ落ち、鳩尾あたりを抑えて、呼吸も碌にできず、ペルシャ絨毯の上で寝転がって唸り声を上げ始めたのであった。

丁度その時、二人がいる控え室の扉を叩く音があつて、部屋の中に結婚式場のスタッフが入室してきた。

「少々遅れてしまい申し訳ありません、新郎新婦様。まもなく披露宴前の——、……って、新郎様、大丈夫ですかっ……!?!」

当然火を見るより明らかな尋常ではない八幡の様子を見て、矢も盾もたまらず駆け寄ってきたスタッフに対して、「あ、あはは……、大丈夫です……」と路肩に転がる今にも死に絶えそうな蝉のような掠れ声で言葉を返した。

「でっ、ですが、明らかにお腹を手で抑えられていますけど……」

「いえ、全然大丈夫です。私の旦那、しょっちゅう腹痛に襲われるので」

「で、では急いで御手洗の方に——」

「大丈夫です♪　ねっ、八幡?」

八幡は蹲りながらも、小さく頷いていた。

「そ、そうですね。ですが、もし新郎様の体調が優れないようでしたら、近くのスタッフに直ぐご連絡下さい」

「分かりました♪」

「でっ、では、まもなくお時間ですので、ご準備の方を……」

「はいっ!」

「は、い……」

スタッフは加えて、披露宴の前に時間を取って、静が強く希望した催し物をするということと、体調が優れなかったら連絡して欲しいということをも再三伝えて、部屋から出ていった――。



「――新郎新婦様、此方に。まもなく扉が開きます。開いたらカーペットの上をお進み下さい」

「分かりました」

その指示の元、八幡と静は、二回り以上彼らよりも大きく、均整のとれた鉄の装飾が施された木製のアーチ型の扉の前に立った。

「では、開きますっ！」

その掛け声と共に大きな扉が軋むような音を立てて内側に開かれる。その瞬間、流れ込むように入ってきた秋の日の目映い光が、目眩しをするかの如く全面に燦然と輝いて、二人を包んだ。

やがて、その輝きが淡く薄くなると、二人の目に浮かび上がるのは、往く道を示す深紅のカーペットであった。

そして、その道に沿って、奥までずらりと列席者が並んでいた。

八幡はその光景を見て、一入の感慨に耽けた。あの時、道を進む決意をしたからこそ、このように道が続いているのだ。割れんばかりに鳴り響く祝福の拍手が、正しい道を選んだ自分のことを褒め称えているようにも感じた。

ちらりと隣の静を見ると、今の陽射しにでもやられたのだろうか、その背には光る水粒があった。八幡は、そんな静に腕を差し出す。

「静、行くぞ」

「……うん」

二人は腕を固く組んで、光が照らす深紅のカーペットが敷かれた階段を下りていった。すると、一斉に鮮やかな花卉が宙を舞い始め、百花繚乱と咲き乱れているようであった。これは元々の予定には入ってなかった列席者からのサプライズのフラワーシャワーであつ

た。

その光景は、幻想的で、心揺さぶり、筆舌ひつぜつに尽くし難い美しいものであった。

胸に込上げるものを抑えながら、階段を下りると、まず迎えたのは親族である二人の両親であった。簡単に挨拶を終えた後、続くのは妹の小町であった。

「結婚おめでとつ、お兄ちゃん、静さんっ！」

そう祝福の言葉を澆刺はつちつと言つて、小町は籠かごの中の花弁を二人の頭上へと放つた。

「ありがとな、小町。今日は受付までやってくれて」

「本当に小町ちゃん、ありがとう」

「いいんです、いいんです。私がお二人に一番近いんですから、私がするのは当然です。二人のことはいつまでも面倒見てあげますからっ……！ あつ、今の小町的にチョーポイント高いっ……！」

決め台詞を言い放つた小町は誇らしげに胸を張つて、ふふんと鼻を得意げに鳴らした。直ぐに小町は、八幡の方を指差して、

「絶対お兄ちゃんを静さんを幸せにすることっ！ 分かった!？」

「ああ、勿論だ」

その即答に納得したように何度か頷くと、今度は静の方を向いて、「静さんは、お兄ちゃんのことですら困つたら私に相談してくださいね。私も、静さんと負けないぐらいお兄ちゃんのこと知ってますから!」「ふふつ、分かった。小町ちゃんにいつでも相談させてもらうからな」「よしっ、おっけーでーすっ！ じゃあ早く行つた行つたー！ 皆さん待ってるから!」

二人は小町に急せかされ、一、二歩前に進んだ。だが八幡には今日、小町に言わなければならぬ言葉があるのだった。だから、一度立ち止まつて、小町の方に振り返つてその言葉を伝える。

「——小町、今日は本当にありがとうな。ずっとだめだめなお兄ちゃんだったと思うけど、お前が居てくれたおかげでこんなお兄ちゃんもここまで来れた。小町が俺の妹でいてくれて本当に良かった。本当に今までありがとう。そして、これからもよろしくな、小町」

「……！」

八幡の言葉を聞いて、俯うつむいた小町は何かを呟つぶいているようであったが、彼の耳には届かなかった。そして暫くして、小町が顔を振り上げて、

「……うんっ、私も、お兄ちゃんの妹で良かった！ これからもよろしくねっ、お兄ちゃんっ！」

一瞬覗かせた小町の瞳は潤んでいるように見えたが、直ぐにくしゃりと眦まなじりに皺しわを寄せて笑うものだから、はつきりとは分からなかった。

こうして、かけがえのない血の繋がりを持った妹に祝福された後も、この道は続いていく――。

――次に二人を迎えたのは、静が最も懇意こんいにしている友人達であり、何かと八幡とも接点が多い、静の中学生時代の同級生二人組、大磯おおいそ桜さくらと秦野はだのつるこ鶴子つるこであった。

「結婚おめでとう、二人とも」

「結婚おめでとう！ 静とヒツキー……じゃもうダメなのか。じゃあ、ハッチーでいいかっ！」

「おお、ここにきて新しい渾名あだながついた。まあ、二人とも今日はありがとうな」

「ツルと桜、今日は来てくれてありがとう。二人には凄すごい助けられたし、これからも頼たのむこともあるだろうけど、よろしく頼たのんだぞ」

「は〜い、私たちに〜任せなさ〜い〜」

「……何か頼たのりねえな」

秦野のおっとりした口調で間延びしてしまった宣言に対して思わず漏れ出た八幡の言葉に、四人は揃そろって笑った。

「まあ、二人に向けて言うべきことっていうのは色々あるんだろうけど、この齡よわいにして独身の上、結婚の目処めどがまるで立たない私たちが言うべきことは――」

大磯と秦野は示し合わせたように頷くと、息を合わせて、

「リア充爆発しろっ！」

「ツルと桜の馬鹿者っ……！ この場でそういうことを言うんじゃないな

いっ！」

静のツツコミに満足したのか、二人は顔を見合わせて悪戯いたずらつぽく笑った。

「あははっ！ とにかく二人とも本当にお似合いだから、末永くお幸せにねっ！ 私たちからは以上っ——！」

「末永くお幸せに〜」

その言葉と同時に、締め括くくるように花の雨が散らされた。

こうして、静の同級生二人組に祝福されたもとい弄いじられた後も、この道は続いていく——。

「おっ、やつと来た！ しずねえ、はーにい！ 結婚おめでとうっ……！」

無邪気で底抜けに明るいのとは昔と変わらないが、声音は低く遅たくましくなって、背丈も八幡と並ぶほどに随分と大きくなった男子が恥はずかしげもなく白い歯を見せて、二人を祝福する。その男子の格好は、八幡が嘗かつて着ていた総武高校の制服姿であった。

そして、その隣には、初めて会った時はあれだけ小さく、まだ口も上手く回せていなかったはずであるのに、いつの間にか大きくなって、近い将来とびきりの別嬪べっぴんさんになるだろう可愛らしい顔貌がんぼうと愛嬌あいぎょうを振り撒まいている女子が、その男子に続いて、

「しずねえ、はーにい！ 結婚おめでとうっ！」

と、籠の中の花卉をめいっばい高く高く撒いて、祝福の言葉を口にした。二宮海斗にのみやかいとと二宮葉しじわりの兄妹の祝福を受けて、二人は以前と変わらず頬を緩ませた。そして随分久しぶりではあるが、自然と静は海斗の頭を、八幡は葉の頭に手を添えて、猫可愛がりするようにわしやわしやと撫で始めた。二人は最初は驚きながらも、途中から懐かしいその感触たんのうを堪能しているように、目を細めるのであった。

「海斗、しーちゃん、ありがとうっ！」

「ありがとな、二人とも」

その様子を微笑ましそうな目で見つめていたのは、二人の母親の二宮基子もとこであった。

「結婚おめでとう。静ちゃんと八幡くん」

「基子さん、ありがとうございます」

「ありがとうございます。私、基子さんに凄くお世話になったので、今日来て頂けて本当に嬉しいです」

「静ちゃんは私のもう一人の娘みたいなもの。当然参加させてもらわよ。招待されなくても無理やり参加するつもりだったし。そうだ、時に静ちゃん、もし弁当の事以外にも夫婦生活で困ったことあったらなんでも聞いていいからね。まあ、私のどうしようもない夫と違って、八幡くんだからそんな事ほとんどないと思うけど」

八幡は、謙遜気味に首を横に振った。

「いや、買い被りすぎですよ。俺だって静に迷惑かけてばかりですから」

「そんなことないわよ。だって、八幡くん、まず煙草とか吸わないでしょ」

「煙草は吸わないですね。まあでも、昔から格好良いとは思ってて、憧れが無い訳ではないんですよ。けど、やっぱ小っ恥ずかしいですけど、俺は静と過ごせる時間を一秒でも長く延ばしたいので、どうしても敬遠しちゃって」

「はっ、八幡……」

「恥ずかしがって俯く静の様子を見て、殊更恥ずかしくなって、少し伏し目になって八幡は襟足を掻いていた。」

「どうやらその言葉は、基子への受けが抜群に良かったようで、興奮気味に「素晴らしい、八幡くん、本当に素晴らしいっ！」と八幡を褒め称し始めたのだ。」

「——ああ、もう八幡くん、凄いわっ、本当に。ああ、もうどうして家の夫はあんななのかしら。静ちゃんが羨ましくて仕方ないわ。そもそもこんな大事な日に出張入れてくるのも意味分らないし……！」

「母ちゃん、やめろよ。二人の前でさ」

「本当にみっともないよ……」

「だって、あの人。結婚記念日も忘れてるのよ?! 普通に飲んで、ベロ

べ口に酔って帰ってきて、何なのっ?!

「母ちゃんさあ、今結婚式なんだから、もう少し場を弁えろよ……」

夫の努への愚痴が止まらなくなった基子を子供たちが必死に窘めている。それを見て、八幡と静は微笑を浮かべた。しかし、これがこの一家の日常茶飯事であるし、二人が二宮家を尋ねた時も、努の前で普通に言っていたことであって、夫婦仲が特別冷えている訳でもない。それどころか、努が稀に魅せる漢氣に基子は滅法弱く、だらしないほど頬を緩める姿を知っているから、微笑ましきの方が勝るのだ。このような夫婦が偕老同穴の夫婦なのだ。八幡は常々感じていた。

「二人とも、いつでもいいから、昔みたいに家に遊びに来てよっ!」
「私たちいつでも大歓迎だからっ!」

「ああ、分かった。暇な時出来たら行くから。あ、それと、次行く時は、もう一人客が増えてるかもしれないから、ちゃんと用意しておいてくれよ。な、静……?」

静の方を向くと、彼女は微笑を湛えて大きく頷いた。

「——ああ、八幡の言う通りだっ!」

「おうよっ、一人増えようが二人増えようが、どうってことないぜ、しずねえ、はーにいつ!」

心強い言葉を返した海斗は「だから!」と言って右手の小指を立てて、腕を二人の前に差し出した。それに倣って、栞も右手の小指を差し出す。

「絶対にまた遊びに来てよっ、約束だっ!」

「うし、じゃあ静も」

「勿論だ!」

一旦組んだ腕を解いて、二人も右手の小指を立てて、海斗と栞の小指と固く結ぶ。そして、「せーのっ!」と海斗が声がけをして、

「二」指切りげんまん嘘ついたら針千本のーますっ、指切った——
!」

こうして、一〇年来の交流が続く親しい二宮一家と再び約束を交わした後も、この道は続いてく——。

——次に迎えたのは、黒のジャケットが案の定はち切れそうになつてしまつている八幡の上司——足柄剛であつた。

「あつ、剛さん。来てくれてありがとうございます。そして、ご出産——」

「比企谷、その言葉は今言わなくていい」

「え……？」

「勿論ありがたいんだが、今日一日は比企谷と静ちゃんは祝う側じゃなくて、祝われる側だろ？ それを言うなら、また後日にして欲しい。とにかく、今日はここにいる人達の祝福をめいっぱい受けるんだ」

そして、剛は、その口元を朗らかに歪めて二人に向けて一言。

「結婚おめでとう。比企谷に静ちゃん。末永く幸せにな」

「はいっ、ありがとうございますっ——！」

——その後も深紅の道は続いた。

高校時代に静と良く引き合いに出されていた山王弘子さんのうひろこを初めとした総武高校の同級生。二人のそれぞれの大学生時代の友人。八幡の会社の同僚。静の学校の同僚。——関わつた全ての人々によつて、道は作られていく。そして絶え間なく舞い続ける花卉と、贈られる祝福の声。

天涯孤独てんがいの道を歩んでいたら、このような人々の温かさあふと幸せに溢れた道を歩くはずもなかった。

やはり、全て、腕を組んで八幡の隣で並んで歩いている静のおかげなのであつた——。



——この道の終着点は、中央に噴水があり、周りが建物に囲まれたパティオと呼ばれる様式の薄緑の芝生が生い茂る中庭であつた。その一角にあるこじんまりとした乳白色の大理石の舞台ステージの上に、二人は導かれたのだ。

「私、重くない——？」

静は周りに聞かれなやいような小さな声で囁く。八幡の首周りには

静のしなやかな腕が回されていて、彼は彼女の背中と足に腕を回して抱き上げていた。それはまさしくお姫様抱っこというものであった。たった今、写真撮影ということ、このポーズを取っているのだった。

「ああ、めっちゃ重いわ」

「はあっ……?! デリカシーがないっ! もう一度殴るっ……!」

「最初から一択じゃねえか。さすがにギャラリーの前ではシャレにならねえから勘弁してくれ。って言うか今も現在進行形で撮られてるんだし」

「愛ゆえの拳だ」

「愛ってつけければ、なんでもオーケーにはならないからね……?!」

写真で撮られていることを忘れて、静は柳眉りゆうびを逆立てて、八幡を睨ねめ付けている。しかし、八幡は気にもせず飄々ひょうひょうとした様子で口を開いた。

「——はっ、そりや重いに決まってるだろ。だって、静の愛も将来も人生も全部背負ってるからな。これは愛ゆえの重さだ」

八幡による思いもよらぬ美言びげんに大層感心したように頷くと、静は少し微笑んで、今度は濡れ石のように艶やかつやかで柔らかな眼差しを向けた。

「——ふふっ、ああ、そうだな。私の全部八幡に預けたからな!」

静は、より身体を預けるように、その回す腕の力を強めて、顔を寄せて、八幡の頬に優しく暖かな口付けをした。

彼の身には、頬の一点から、そして、柔らかく華奢な身体全身から感じる温もりが滯ることなく伝わっている。そして、それが彼に途轍もない幸福を与え続けるのだ。この幸福の伸び代は広大無辺こうだいむへんとしていて、まるで終わりが見えない。

だから八幡は、静が絶えず与えてくれるその気持ちのお返しとして、途切れることなく、日に日に強く大きくなってい彼女に対する確かな想いを、この一言に込めて、伝えるのであった。

「——静、愛してる。これから先、絶対に幸せにするから、末永くよろしく頼む」

「——うんっ！ 私も八幡のこと、愛してるっ！ ずっと、ずっとよろしく頼んだぞっ……！」

静は一呼吸置いて、八幡に向かって、告げる。

「——ねっ、八幡——」

「なんだ、静？」

「生きてきた中で、今が一番、——幸せだっ……！」

満開に咲き誇った静の笑顔は、裏表もなくて、何の穢れも汚れなくて、何よりも輝いていて、何よりも澄んでいて、何よりも可愛らしくて、何よりも美しく、何よりも愛しくて、そして、何よりも今まで見た中で一番の笑顔であった。

だが、まだこれが終わりではない。これから先も、世界で一番愛しいこの人を幸せにし、一番の笑顔を隣で見続けることこそが、八幡の生きる意味なのだから——。

——程なくして抱えていた静を丁寧に下ろした時であった。

「さあすがだあ最強カップルウウ！ お姫様抱っこも、最高だったぜ——！ では早速……、レディイースエエンドジエントルメエエン——！ お待ちたせしたツツツ——！ 私の名前は、長生きと九十九里の申し子っ、ミスターナインティナインだツ——！」

舞台の脇から何の前触れも無く登場して高らかに叫び出したので、二人揃って腰を抜かすほど喫驚^{びつくりきょうてん}仰天したが、見覚えのある奇抜な格好を一目見て、聞き覚えのある声を耳にすると、すぐに疑^{うたぐ}るように互いの顔を見合った。

「え、何だこれは……。八幡が呼んだのか……？」

「いや、俺も知らん。静が呼んだんじゃないかねえのか、どういうことだ」

「二人とも驚いてくれてるなツツツ——！！ これはツ、何度もカツプルコンテストで優勝し、更にカップルコンテストでプロポーズして、永遠の愛を誓った真正正銘の最強カップルへの長生村からの細^{さいき}やかなサプライズだツ——！！」

サプライズゲストの登場に今日一番の盛り上がりを見せる会場。どうやら列席者はこの事を事前に知っていたらしいのだ。ところが

二人は本当に突然のことであつたので、ミスターナインティナインに説明を受けても言葉を失つたままであつた。

そこから幾許いくばくもなく、呆然としてゐる二人の元にスタッツフが静に忍び足で近寄つて、ある物を手渡した。

静はそれを受け取ると、途端、実に感慨深そうに目を細めた。

それは、真紅と深青の薔薇の花束——ブーケであつたのだ——。



清々しいほど晴れ渡り雲ひとつ無い快晴の昼下がり、二人の女子高校生たちは、黒のブレザーとスカートの制服姿で、歩道を慣れない革靴で走つてゐた。周りは田圃たんぼと宅地が交互に訪れるような場所で、人も車の通りも少なく、いかにも郊外と田舎の狭間はざまの町であつた。

途中交差点に差し掛かり、数少ない赤信号に妨さまたげられ、致し方なく止まつてゐる。

一人の少女は、今この場所がどこかであるか、そして、目的地にはどのような行けば着くかということ、スマートフォンスマートフォンのマップアプリを開いて、その玲瓏れいろうとした双眸で睨みを利かせて確認してゐた。

もう一人の少女もスマートフォンを見ていたが、彼女は画面を見つめながら「うわあ、最悪だあ」と分かりやすく落ち込んだ様子で嘆いてゐた。

「ねえ、ゆきのん、もう先生の挙式終わっちゃつたつて。先に行つてる二ノつちがメールで教えてくれた……」

眉をしゅんと下げ、その大きく円つぶらな瞳を落胆の色に染めた少女――

——由比ヶ浜結衣は、スマートフォン画面を、もう一人の麗しき少女
——雪ノ下雪乃に見せつけていた。

「まあ、講習があったのだし、先生にも招待する代わりに、必ず講習の方を優先して欲しいと頼まれたのだから仕方ないわ。それに披露宴に出席すれば、先生の晴れ姿を見ることはできるのだから」

雪乃は冷静沈着に結衣を諭すように告げる。

二人は総武高校の生徒であり、静が顧問をする部活——奉仕部の部員であり、今日挙行されている静の結婚式に招待されていた。

「そうだけどさあー、式見てみたかったなあー。それに誓いのキ、キキキスとかも！ きゃあくっ！ 想像するだけで熱出てきそうっ！」

「……出席しなくて正解だったわね。あなたが出席したら一生に一度の神聖な式が一週間に一度のコンパニオン程度の安っぽい式になっちゃってしまっていたわ……」

「うんうん、だよねっ！ ……って、何、ゆきのん、今バカにしてなかった?!」

「あら、逆にしない訳ないじゃない」

雪乃に鼻であしらわれた結衣は、その柔らかそうな餅肌の頬を破裂しそうなほどぱんぱんに膨らませる。

「も〜！ ゆきのんのすけこましい！」

「はあ、完全に間違っている気がするのだけれど。今は訂正する時間が惜しいわ。とりあえず早く行きましょう、会場はもうそう遠くはないわ」

「ああ、待つてよ！ ゆきのん〜ん！」

二人は青信号になった横断歩道を走って渡る。

その後、結衣は小走りをしながらも、いつも通り犬が飼い主に甘えるような調子で雪乃に喋りかけていた。

「ねえねえ〜、ゆきのーん」

「……どうしたの？」

「二ノつち以外にも総武高の生徒いるかなー？」

「他の生徒は居ないはずよ。生徒を呼ぶのは公私混同だと仰おっしゃっつていたもの。とりわけ交流の深い二宮さんと部活動で深く関わってきた

私たちが特例なのよ」

「あ、そうだったっけ！ そっか、私たち特別なんだっ！ ……でも、皆来たかっただろうなあ。先生って、面白いし、カッコイイし可愛いし、オシヤレだし。まさしく憧れの大人って感じで、そんな先生の結婚式、皆も見たいよね」

「ええ、そうね。慕したわれている先生だものね」

結衣は「いいなあ」「私もあなりたいなあ」とぶつぶつ独り言を呟いていた。そして暫くすると、また何か話題が浮かび上がってきたようで、突拍子もなく雪乃に話しかけ始めた。

「そうだ、ゆきのん。クラス違うし二ノつちのことよく知らないでしょ？ せっかく今日会うんだから、どんな人か教えてあげるよ！」

そう言つて、結衣は海斗に関することを機嫌よく話し始めた。

「——学校でもよく先生のことしずねえつて言つてゲンコツくらつたり、先生と彼氏さんのラブラブっぷりを皆に披露してゲンコツくらつてたりしたんだあ。平塚先生のガラケーのバッテリーの蓋の裏に、初々しいプリクラが貼つてあつたとか暴露してたな——」

「へえ……」

さらに、数分間喋り続けた後、ようやく紹介が終わった。

「——こんな人なんだー、二ノつちつて」

「……ふーん」

先程から感情が爪の垢あかほども籠かこつてない雪乃の冷めた反応に、結衣も目を見開いて、「ゆきのん、反応薄なすぎっ！」と詰なった。

「二宮くんとは別のクラスなのだし、別に仲良くもないし、特別、興味があるわけでもないのだから、いくら詳しく教えられてもこのような反応に落ち着くのは当然でしょ？」

「それ、酷くないっ?! 二ノつち可哀想……」

「そうかしら、由比ヶ浜さんだつて私の貴重な時間を割きいて勉強を教える時、いくら丁寧に説明しても、反応が大層薄いのと同じよ。貴方にとっての勉強が、私にとっては仲良くない同級生だけだわ」

「う”っ……、それは……」

物の見事に急所を突かれた結衣は、そこからは電源が切られた人形

のように黙りこくつてしまい、ただ目的地へと向かって両脚を必死に動かしていた。

——雪乃と結衣は、豪勢な門が構える結婚式場に辿り着いた。その奥にはまるで雪で粧よそおったかのような真つ白な建造物も見えた。そこから、二人は近くにいた式場のスタッフに話しかけて、事情を説明し、招待状を見せると、式場の中へと案内された。

「どうぞ、こちらです」

「ありがとうございますっ……！」

「ありがとうございます」

案内されたのは、中央に噴水があり、芝生や背丈の低い木が生い茂る広々とした中庭であった。そこには既に参列者による人集りだかができていて、やはり婚礼用こんれいの正装を着ている参列者の中で、彼女達の制服姿は中々に浮いていた。

二人の目の前の人集りは、やけに若い女性が多いように見えた。辺りを見回すと、年配の女性や男性は脇の方に捌はけているのが分かった。

「今から何始めるんだろう。大丈夫かなあ、披露宴に間に合ったのかなあ……」

「これは恐らく……」

雪乃が大方の検討をつけて、気遣わしそうにしている結衣に伝えようとした。しかし何かに気が付いた結衣は「あっ！」と大きな声を出して、その人集りの向こう側を興奮気味に指差し、すっかり気遣わしさは彼女の顔から消散していた。

「ゆきのん見てっ！ 先生だ!! しかも喋ってるよ！ 新郎さんも隣にいるっ！ 後っ……、何あれ……」

その指の先には、純白のウエディングドレス姿の静がいたのだ。隣に並んでいるのは、タキシード姿の新郎であろう。そして静にマイクを向けるのは、英国紳士がいかにも好みそうな黒のシルクハットを被って、その側面には巻貝らしきものが両側面に付けられていて、マントではなく地引き網じびを体に羽織きっている——明らかに場違いな奇天烈な格好をしている男であった。

信じ難いが、どうやら得体の知れないあの男が司会者であるらしかった。

『確かこれは、新婦が熱望したんだよなア?!』

『はい、そうなんです』

「おお、先生が喋ってる！ ゆきのん、やっぱすっごい綺麗だよ、先生！ ウエディングドレスめっちゃ似合ってるし！」

「ええ、そうね、たしかに綺麗だわ。それと、やはりこれから、ブーケトスが始まるのね」

「ああ、あの挿んだら幸せになれるってやつ？ あつ、ホントだ、先生ブーケ持ってる！ しかもちよつと青いの混ざってるじゃん。なんか珍しそうっ！」

「青い薔薇、確か、花言葉は……」

青い薔薇——ブルーローズは昔、自然界には存在しなかった。だから、青い薔薇は存在しないものの象徴とされていたが、一〇年前、人々の努力によって人工的に生み出され、この世に生命の根を下ろすことになったのだ。——という話を雪乃は聞いたことがあった。

そして、その時新しく付けられた花言葉があるのは覚えていたが、喚び起してみるも肝心要かなめのその言葉がどうにも臆気おぼろげになって、思い出せなかった。

『——私と同じような幸せを挿んでいただけたらと』

『素晴らしいっ、アメイジンググッツ!!』

雪乃が思い出そうと躍起やっきになっている内に、新郎新婦と司会者のやり取りは恙つつがな無く進んでいたようで、まもなくブーケトスが行われるようであった。

「由比ヶ浜さん、近寄ってみる？」

「ふうくん……」

雪乃がそう提案すると、結衣は腹立たしいにやけ面になって、雪乃の顔をじいっと見つめ始めた。

「な、何かしら……」

「ゆきのん、そういうの興味無いと思ってたけど、ちゃんとあるんだ、と思っ！」

「ちつ、違いわ。先生の姿をもう少し近くで見たいだけよ。別に私は、そんな迷信、信じていないし、第一まだ年齢的にも——」

雪乃が御託ごたくを並べ切る前に聞く耳を持つとうとしない結衣は、彼女の手を強引に握ってしまった。

「うんうん、分かった分かった！ 早く行こつ！ 始まつちゃうよ！」
「本当に分かつてるのかしら……」

雪乃は結衣にぐいぐいと手を引かれて、若い女の人達が集まっている輪の中に入っていた。

『——まあ、俺はやめたほうがいいって言ったんですけどね。だって、完全に煽りじゃないですか、これ』

『オーマイガッツツ！ 何て事を言うんだい、新郎ツ！』

『こら、八幡つ！ 余計なこと言うんじゃない！』

十中八九相応ふさわしくない言葉を発した新郎に静は眉を顰しかめて御冠おかんむりを曲げていた。当然、会場全体から総好かんを食らい、結衣もぐにやりと眉を曲げて難色を示していた。

「うげつ……、なんか旦那さん捻ひねくれてない……？」

「確かに場にそぐわないとんでもない失言ね。でも——」

雪乃は堪こらえきれずに失笑してしまった。

「ふふつ、少し面白いわ」

「ええ、そうかなあ……」

『冗談だ。冗談。ごめん静、愛してるぞー』

『かつ、軽々しく……。もうつ、八幡の馬鹿つ、私も愛してるっ！』

静はその手に持った深紅の薔薇と同じように頬ほる頬ほを赤らめて、ぷいと顔を背ける。微笑ましい二人の姿に会場からは大きな笑い声が生まれ、茶化すような野次が飛びかっていた。

「うっわ、すっごい惚気のろけ。あんな顔するんだね、先生って」

「ええ、普段の姿からは想像できないわね、本当に」

「でもやつぱ、間近で見るとほんとに先生綺麗！ いいなあ！ いいなあ……！ 旦那さんもちゃんとしてるとかつこいいしく。いかに

もラブラブな夫婦って感じ！ 憧れる——」

「由比ヶ浜さん興奮しすぎよ」

雪乃はそう結衣を諫めるが、思っていることは結衣と同じであった。彼女の目に映る二人の姿は、正しく比翼連理と称えられる夫婦そのものであった。

「——ええ、でも、そうね、とても綺麗だわ」

近付いて改めて見ると、ウエディングドレスは、どこまでも透き通るほど真っ白であった。そして、そのドレスに身を包む静は、盈盈としていて、憧憬に値するほど綺麗であった。その姿は宛ら御伽噺の中の姫君のようで、そこから飛び出してきたような非現実さすらさえもあつた。明眸皓齒、羞月閉花の美人とは、誠にこの事を言うのだから、と雪乃はつくづく思った。

『では、新郎新婦の微笑ましいやり取りも見れたところで、お待ちかねッ——！ ブーケトスを行うぞオオ！』

そのように司会者が宣言した瞬間、歓声が響き、指笛が鳴り、拍手が沸き起こる。

『三から始めるから、皆も合わせてくれッ！ では、カウントダウンッ——！ セーのッ——！』

「「「三つ……！」」」

会場の全員が一斉に、声高に数字を叫ぶ。

隣の結衣も微笑みを浮かべて、腹の底からのめいっばいの声で叫んでいた。

しかし、雪乃は声高に叫ぶことなく、ただ静の方を見ていた。そして、容易く掻き消されてしまう微かな声で独り言ちる。

「それに」

——私も……

「「「三つ……！」」」

「とても」

——私も、いつか……

「「「三つ……！」」」

「とても、幸せそうね……」

——あんな風に笑える日が来るのかしら……

「○○っ………！」

世界中の誰から見ても分かるほど、眩しく幸せに満ち満ちた笑みを咲かせている静は、くるりと背中を向けて、その綺麗な薔薇のブーケを青々と、どこまでも澄み渡った空に向けて、放った——。

《left》花束が宙を舞う。《left》

高く高くあがったそれを、周りの人はみな見ている。

透き通るほどの淡い青色を背にした、赤はやけに映えている。そして、その中でより濃い青色は消えゆくことなく鮮明にその姿を映し出していた。

そして、その綺麗な放物線は、今確かに誰かの元へと迫ってきている。

さて、誰の元に届いて、幸せをもたらすのでしょうか——。

—
F
i
n
—